明治卅三年十二月廿五日(第三種郵便物認可) 明治四十五年五月廿三日印刷納本 (毎月一回廿三日印刷納本)



六月一日發行

女學世界

第十二巻第八號

博文館

六月一日より

中形浴衣地新柄陳列會

を相開き候を機とし、ありとあらゆる夏季の必要品を陳列販賣仕候間、御さそひあはされ御來觀被下樣奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店



女學世界第十二巻第八號目次







表紙＝五月雨（寺澤幸太郎畫）
口繪＝粧ひ（原色版）　朝　（河崎蘭香畫）　水際　北野恒富畫）　蘭の花（彩色石版）　おもたか（毛筵畫）
名流婦人（大谷伯爵夫人朝子、石井大使夫人たま子）令孃かゞみ（木澤婉子、鈴木綿子、橋本みれ子、
中村きち子、瀧川峰子、今井さだ子、鵜飼貞子、久野久子）新婚の人（高木法學士夫人靜子、山口勝藏
氏夫人兼子）、山旅以上寫眞版



クラブ新聞

禁轉載

クラブあらいこ
クラブおしろい
クラブはみがき
クラブ美身クリーム
錬香油クラブ美髪用ポマード

本店新案

蛙の聲

仙　子



妹「姉さん、蛙が鳴いてゝよ、好い聲ですわね。」
姉「何といつて鳴いてるか分つて？。」
妹「分らないわ。」
姉「クラブ、クラブ、クラブつて鳴くのよ。」
妹「クラブ、クラブつて？何故そんなこと云つて鳴くのでせう。」
姉「それはねかうなのよ。蛙は大層、顔容の醜いものでせう。ですからクラブ洗粉やら、クラブ美身クリームやら、クラブ白粉やらで、綺麗にクラブ化粧がして見たい〳〵と、一心にそればかり祈つて居るので、夫で始終あんなに　クラブ　クラブつて鳴いてるのです。」

●毒蟲に刺された時●●●●●●●

これからの時期は毒蟲がだん〳〵出て來ますから御用心を爲さらなければなりません大事の顔を刺されて夫が爲めに其あとが腫物に成つて汚點が出來て困る方がよくありますが蟲に刺された時は乾柿五箇を酢一合の割合に漬けて其柿が溶ろまで蓄へて置きそれを附けるとすぐ痛も除れて快くなる相ですが其のあとへクラブ化粧水を附ける事を忘れてはいけません。

●最上の化粧品

クラブあらいこ
クラブはみがき
クラブおしろい
クラブ水白粉
クラブ粉白粉
クラブ美髪用
ポマート
クラブ美身
クリーーム



クラブ占ひ

●汽車の中でクラブ歯磨を使つてる人を見ますと御馳走を受けることがあります。
●髭を剃つてる時にクラブ美身クリームを薦められると儲け仕事が出來ます。
●電車の中でクラブの廣告を讀んでる人を見ると願ひ事が叶ひます。
●クラブ洗粉で髪を洗つた日に近親から手紙が來れば好い話を聞く前兆です。
●往來でクラブ化粧水を買つて歸る友人に出會ふと縁喜の好い事があります。
●クラブ美髪用ポマードを買つた日に思はずクラブの廣告を見ると目上の人から引立てられます。
●クラブ白粉を進物に使つた人から禮状が來れば簪か半襟を買ふことがあります。
●夢にクラブ化粧水を附けたと見れば二三日中に屹度好い事があります。
●湯屋の門口でクラブ洗粉を持つた人に出會ふ時は人から褒められる事があります。

高島平三郎先生著

新刊

家庭及び家庭教育

昔の詩人は『婦人は泣かざる可らず男子は働かざる可らず』といふた。又更に『女は弱し然れども母は強し』というた。この二つの語は矛盾して居るやうであるが實はさうでない。婦人は泣く間に無限の力を有して居る。男子が働くも婦人の泣く力に勵まされる爲めである。婦人は弱い處が即ち強いのである。併しその弱くして強い婦人が母となれば一層強くなる。實に婦人の眞の光明、眞の莊嚴は母としてのみ現はれる。冀くは我國の婦人が淺薄なるノライズムなどに惑はされず麗はしき犧牲の精神を以て家庭を通じ兒女を通じて人生と國家とに充分なる寄與をなすに至らんことを……………（序文の一節）

菊版總クロース
裝幀優美
定價九拾五錢
送料八錢

五版

教育に應用したる兒童研究

菊版六百五十頁餘
總クロース天金
箱入
定價二圓八拾錢
送料拾貳錢

我國兒童心理學の泰斗高島先生空前の大著『應用兒童研究』出づ所說頗る明快幽玄の學理も極めて平易何人も親しく先生の講演に接する感あり、教育者は固より苟くも兒童を有する家庭は之れに由りて一大寶典を得たり、各種專門學校中師範高等女學校小學校等教育實際家の好羅針就中玩具、童話、幼稚園の研究の如きは眞に斯界の珍にして特に前人未發の卓見に饒めり。

女（いの一）

發行所　東京麹町二丁目二番地　振替東京二〇一九一四番　洛陽堂

第三回新學期開始入會の最好期は今なり■此際入會者に限り種々の特典を與ふ

通信教授科目

梅の花、忘れな草、八重櫻、つゝぢ、藤の花、桔梗、朝顏、すみれ、南天、庚申ばら、菊、撫子、百合、牡丹、スウヰトピー、チユーリツプ、葡萄二種、其他和洋花簪數種、材料の製法等本會獨特の技術は近來更に歐米の通信教授法を參酌して改良を加へ其上器械、材料見本まで取添へてありますから誰でも容易に出來ます

女(いの二)

會員募集

美術造花通信教授

製品見本並に規則書は郵券十錢送れは送呈す

本講義の特色

花瓣の裁ち方、造り方、葉の造り方、花簪の組立方等總て造花に要する染色法並に器械の使用法に至るまで一々圖解を施したる新工夫の説明がしてありますから直接教師から習ふと同一であります全く素人の方でも前記器械を以て形を造り見本と比べて組立つる時は至つて容易に熟達します。

速成二ヶ月卒業會費全學期分金三圓也■東京神田西小川町一ノ一振替口座東京九一四八番

美術造花講習會

美術造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五一番

振替口座東京一一六四二番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ事

第十四回

新學期開講

通信教授

產婆看護

講習生募集

會長陸軍二等軍醫正　正六位勳四等ドクトル　渡邊鼎

產婆科六ヶ月卒業

看護科四ヶ月卒業

規則要郵劵三錢

東京四谷區內藤町一

東京產婆看護婦講習會

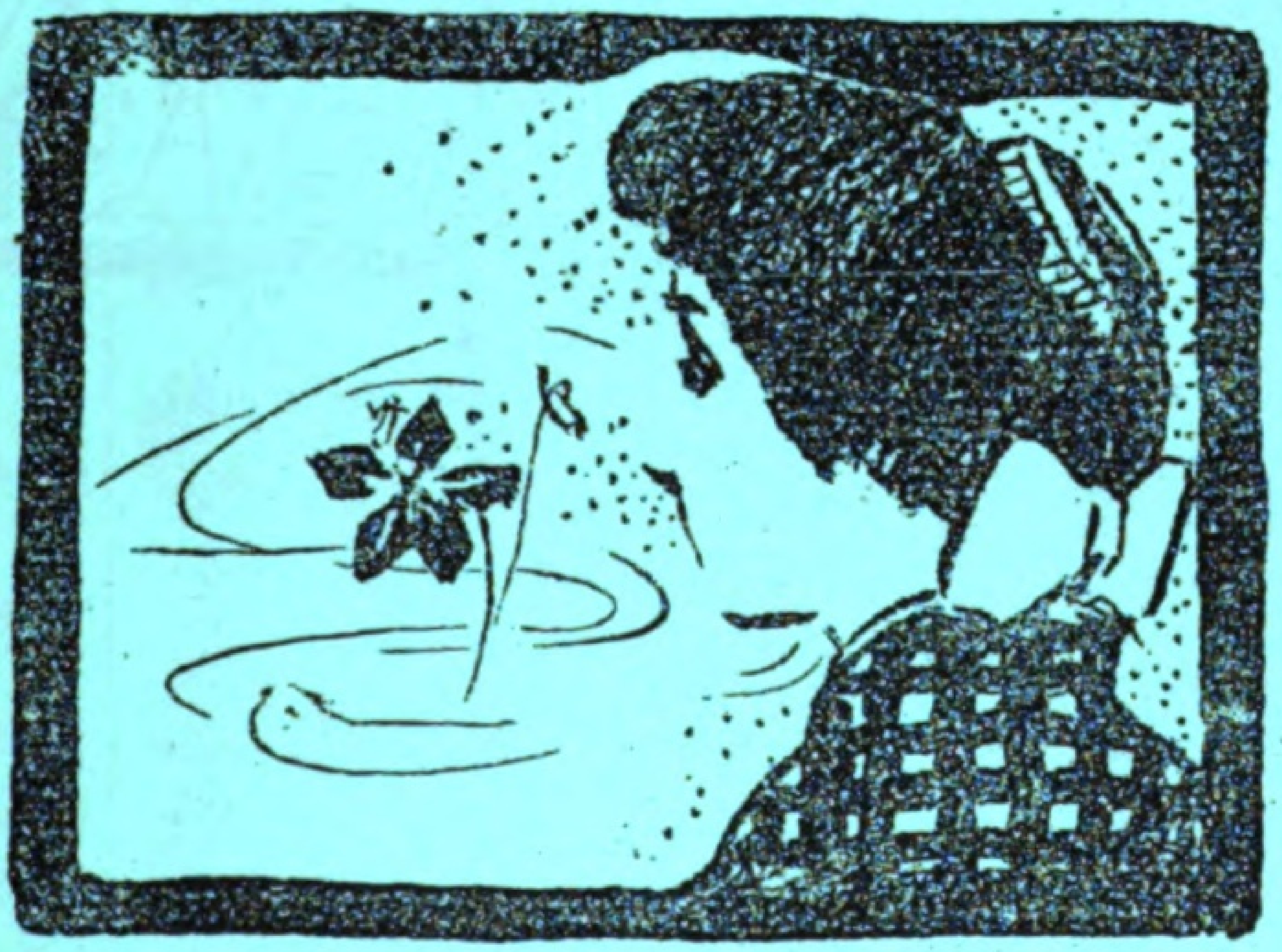


スミレ香水

匂が好くて本當に
長く保ちます

定價
小 三十錢　中 七十五錢　大 一圓四十錢

金スミレ香水
高雅な馨は天下一品
（一組七十錢）
故に紳士令孃向に適す



金スミレ香水
優美なる香水フキを添ゆ
（一組七十錢）
故に便利にして進物用に適す

パール煉香油
スミレ黒香油

本舗
平尾銑也商店

電話浪花百十番　振替東京百十番

女（いの四）

粧ひ



田中製版所三色版



最上醤油
元祖
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

（ろの一）

女(ろの二)


千代田香油
美髪は
人生の最大幸福なり
毛髪を養ひ癖毛をなほし
芳香の永く薫る
千代田香油を
お召し遊ばせ
有名なる和洋小間物店薬店に販賣す
定價
七十錢
三十五錢
廿五錢
十七錢
CHIYO
東京……馬喰町
大阪……鹽町
輸入元
スワン浮石鹼
山岸三之助
振替口座東京二〇五〇〇番

女(ろの四)

朝



河崎蘭香筆

最見易き琴の譜本

井上胡蝶著

生田流 箏曲新譜

四版卷一定價壹圓參拾錢送料六錢　卷貳卷三定價各金壹圓拾錢宛送料各金六錢　代金引換各金拾六錢增

曲譜目次

卷壹　四季の花　門松　鶴の聲　黑髮　六段　亂八段　金剛石　夕顔　新高砂　越後獅子　千鳥　茶音度　春の曲　小督の曲

卷貳　春日影　朝外出　六段　前歌　難波獅子　末の契　松竹梅　殘月　秋風　八重衣　冬の曲

卷三　松盡　萬歲　八千代獅子　雪　九段　巖上の松　新雪　月花　凱旋喇叭の曲　四季の詠め　夏の曲　秋の曲

新譜　生田流　山田流

箏曲之栞　第一輯

定價金壹圓送料六錢代金引換十六錢增

曲譜　門松　ことぶき　春雨　六段　七草　瀧盡し　御製の曲　水は器　千鳥　菊水　那須野　御國の譽　外數曲

山田流譜本

江の島　住吉

初若菜　松上の鶴

定價各三十五錢宛

那須野　櫻狩

定價各四十錢宛

ほとゝぎす　菊水

定價各三十錢宛

四季の艶

今様朝妻船

二曲合本三十五錢

送料各貳錢宛何れも說明附の頗る美本なり

此分に限り郵劵代用を諾す但し二冊以上は小爲替送金の事

本書の特色と購求者の便利

一　以上各種の譜本は何れも調子の合せ方や音符休止符左右手の法其他彈琴に必要の事は悉く平易明瞭に記載しあれば直接師に就きて習ふ通りであります

一　此譜本は西洋樂譜の心得無き人でも直ちに了解せられ且つ言葉記號を附記しあれば音符を知らぬ人も之に依りて彈奏せらるる事を得べく自然の間に完全なる樂則を覺え給ふに至るべし

一　本書の購求者は曲中の不詳は返信料添へ質義あれば無料之が說明敎授をなすべし苟も琴を習はんと欲して師を得給ふに難きか或は一度習ひて忘れたりとて歎かせ給ふこと勿れ本書は是等の人々に多大の滿足を與へ得べしと信ずればなり

琴調子笛　特製貳圓並一圓半

送料各八錢代金引換十四錢增

發行所　福岡縣福岡市外馬出　東公園博多座横　箏曲通信教授所

女(はの一)

直輸入芳香料

香水ノ部

ホワイトローズ　リリー
ヘリオトロープ　バイオレット
ホワイトバイオレット　ヂヤスミン
ニウモンヘー　ベーラム

各二十五グラム 金五十五錢送料九錢

果實エスセンスノ部

エップリコット（杏）　ストコーベリー（苺）
ピーチ（桃）　メロン（甜瓜）
グレープ（葡萄）　パインアップル（鳳梨）
レモン（枸櫞）　オレンヂ（香橙）

右各二十五グラム 金三十錢送料九錢

東京市本郷區根津宮永町十二番地
振替口座東京九貳貳六番
芳香堂

音聲どもる人

に不思議に美音となり如何なるどもる人にても再發せざる保證藥を敎示す貳錢郵券送れ詳報す

東京市牛込區
赤城元町三三
好生藥院

產科婦人科專門大醫　大和田宗順先生方劑
帝國大學藥學專攻藥劑士　玉應勝海謹製

月やく下し

快月丸は子宮を痛めずいか程長き月經とまりも容易に流下す二三ヶ月滯りは一劑又は二劑にてすぐ下る半年以上のとまり又は血塊には特製を服用せば快く下る請合なり又子宮病血之道を治し血液を增加す

定價一劑六拾五錢　二劑壹圓貳拾錢　特製貳圓

東京市小石川大塚辻町十七番地
天信堂藥局

色黒人
ニキビ



ソバカスにて困難の士女は佛國名優サラベルナード孃秘傳最新

白色劑ホーム水を

使用して全治の幸福を得られよ⊙定價半月分八拾錢一月分一圓五拾錢郵券代用壹割增⊙注文の有無に不拘郵券四錢封入申込あれば最新美容のしるべと云ふ白色術を親切に述べたる白色秘法書送呈

東京下谷
中根岸四
愛隣堂

日本女子大學教授　笹木幸子著

年中行事 家庭儀式料理

本書は著者の深き學識と實地教授の經驗とを基礎として季節により現代行はるゝ儀式料理の献立及材料の撰擇に至るまで一々摘記し直ちに應用し得らるゝ樣詳述しあれば是非家庭に備ふべき良書也

菊判全一冊
定價金一圓
郵稅金八錢

東京本町
博文館
振替東京二四〇番

女（はの二）

わきが ラピヨン

腋臭とは汗腺の最も大なる腋間より排泄する汗内に含有する遊離脂胞酸の悪臭を放つものにして本劑を塗擦すれば其主成分の力に依り痛を感ずる事なくして其組織を破砕して**悪臭を起す原因**たる遊離脂胞酸の分泌を止むる作用を保有する特種の製劑なるが故に**如何程頑固劇烈の難重症**も甲價特別製を用よ必奏効す本劑の力に依り病因を根治得るも決して他病に變ずる等の恐れなし速に用て苦惱を脱せよ●丙價七拾錢乙價壹圓卅錢特別頑固症用貳圓五拾錢

通經新劑 月やく下し 藥名 メリルピン

本劑は子宮を痛めず如何ほど長き月經とまりも必通經す二三ヶ月位のは壹劑も用ゆれば効を奏す二三ヶ月以上のとまり又は**血塊**には特製を用ひよ極安全に**流經**す本劑は効能極て**強きも毫も**子宮身體に害なくた安く通經す月經不順より起る子宮病血の道を全治し古血を一掃す近頃怪き類似藥續々顯る用藥者館名に注意を乞●半劑六拾五錢壹劑壹圓卅錢特別製貳圓卅錢參圓五拾錢

ぢを治す

蓮痔脱肛又は痔瘻の初期等痔病一切に對して偉大なる効顯を奏す價半劑八拾錢壹劑壹圓五拾錢特別製貳圓八拾錢

從來迂遠なる内服藥に治績を委れ適切なる治方を講ずる者少し本劑は近世醫學界の貴重なる新藥を以て座藥に調製し之を肛門内に挿入する**疼痛を覺え**ず體温の爲めに徐々適切に溶解し直接病患部に作用しも少しも**穴痔いぼ痔烈痔**

にきびそばかす

男女青春の時期に多く發生し羞花の美貌も影なく醜貌に歎かしむるニキビソバカス吹出物に對し從來の姑息療法たる外用藥に依らず**内服藥の力を以**て皮膚間の組織に及ぼし原因的療法を講ずる獨逸皮膚病學博士ウンナ氏の學説に基き調製したる新劑にして内服三四日にして効顯れ輕きは一劑重きも特製にて奏効す本劑は**色を白く**する効著しければ速に用ひて天賦の**美貌**を全ふせよ●半劑五拾錢●壹劑壹圓●特製貳圓

注意一 各藥共に小包料拾貳錢と●ラピヨン●ハンドコロン●ベクネス●ニキビ藥●ぢの藥を御注文の方は外に小包費三錢と都合拾五錢藥價の外に拂込下され度▲爲替は神田猿樂町局振宛

色の白くなる ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴紳淑女粋士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし**本劑の力**に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ**漂白性**あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に**白色艶美**となる價A印並製壹圓 印特製壹圓五拾錢

毛のはへる 原名ベグネス 毛髪生養液

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髪を生ず又本劑は拔毛を止むる効能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ價並製壹圓卅錢特別製貳圓

りん病 キーロン

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病ぜうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分悪性慢性には特製を用よ速に奏効す本劑を内服すれば強度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を驅逐し人知れず治療を全せよ輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

梅毒(はいどく) キーネル

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小便にとり**如何なる劇烈の**梅毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うづき其他如何なる悪性の梅毒にも大効あり輕症は半劑悪性重症は二劑用よ誓て奏効す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

らい病 ダーピーの發見

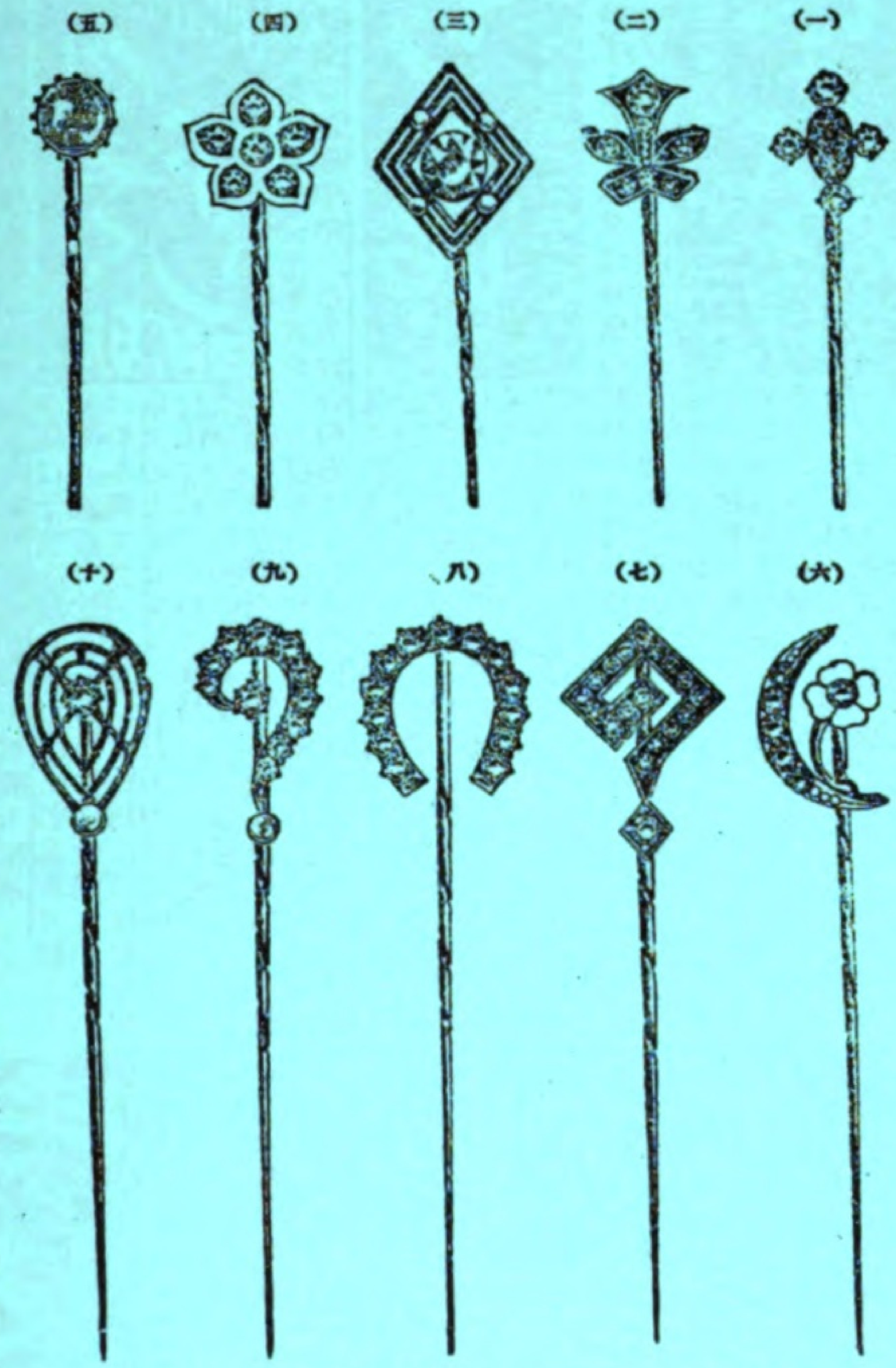
本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服用し得る樣幣館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者**確實**なる本劑に優る者なしにして其有効し試に一劑分丈け用ゐよ直に**大効**あり一劑廿日分三圓二十見四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ説明書進呈す

専賣 東京神田區小川町四十 **オリエンタル藥館**

女(はの三)

最新式の留針

男子ネクタイ用及御婦人のスカーフ用として、最新の形に精巧なる人造寳石を鏤め、何れも九金製の實用品に御座候。



(一)	九金新ダイヤ及ルビ入	四圓八十錢
(二)	九金新ダイヤ七個入	三圓九十錢
(三)	九金新ダイヤ及眞珠入	五圓
(四)	九金新ダイヤ六個入	四圓五十錢
(五)	九金人造眞珠入	一圓八十錢
(六)	九金新ダイヤ六個入	四圓五十錢
(七)	九金新ダイヤ十八個入	五圓八十錢
(八)	九金新ダイヤ馬蹄形	四圓九十錢
(九)	九金新ダイヤ及眞珠入	五圓
(十)	九金新ダイヤ及眞珠入	四圓五十錢

送料實費、内地は十二錢、臺灣朝鮮清國は三十錢申受け候

よそほひ第六卷發行
新流行掲載御申越次第送呈仕り候但シ本誌名必ズ御記入ノヿ

東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

電話京橋三十番、三十一番
振替口座東京九二九三番


北野恒富筆

成功の捷徑は

會員募集

只今速に入會するにあり

■現代の婦女界に偉大の信用を有する理想的通信講義

女子手藝講義録

毎月一日一回發行

貴婦人、令孃、技藝科教員の安心して信賴し得る家庭の顧問

◎講義課目◎

▲裁縫科 和洋各種
▲裁縫小物科 各種
▲袋物科 各種
▲編物科 各種
▲組糸科 各種
▲刺繡科 各種
▲結繡科 各種
▲造花科 花卉果實
▲細工物科 各種
▲割烹科 和洋支那
▲手藝圖畫科 各種

■普通科 學科壹ケ年修了
■高等科

▲入會規定内容見本進呈▼

普通科……は初めより順序を立てゝ親切叮嚀に講義す
高等科……は普通科より繁雜なる各科目を講義す

■講師……本會の講師は東都に於ける有名なる各學校優秀なる講師と都下有數の技藝家擔任す

會費
●普通科……▲半ケ年分金一圓七十錢 ▲一ケ年分金三圓二十四錢
●高等科……▲半ケ年分金一圓九十九錢 ▲一ケ年分金三圓七十八錢

賞品 ▲會員の製作品は審査批評の上賞品を授與す▼

■講義法嶄新なれば複雜せるものと雖も容易く理解し得るは本會の特色なり

發行所 大倉書店 振替貯金東京二三八番
入會申込所 東京日本橋區角
申込支部 各地書店

女(にの一)

THE LADY'S GRAPHIC

婦人畫報

六月一日發行　六月卷　一冊廿五錢　郵稅二錢五厘　三冊八十錢　六冊一圓五十三錢　十二冊二圓九十四錢

畫報

◎ひとへ衣（附錄）石川寅治氏筆二頁大パステル畫

◎令孃鑑

⊙愛國婦人茶話會樓上の阿部伯、濱尾男、關男三夫人　⊙いけ花席化生の式

◎初夏の御庭に於る梨本宮方子規子女王殿下

⊙二令孃の踊、竹柏會大會……⊙渡歐する與謝野晶子女史の盛裝と筆蹟

◎朝香宮紀久子女王殿下

◎お嫁入姿いろ〳〵

⊙女子大學卒業式　⊙觀光生蕃と婦人　⊙愛國婦人會總會

◎保科子と武子の方

◎三輪田棚橋兩女史祝賀會

⊙金子子爵邸の和洋の客間　⊙サッチャー夫人歡迎會　⊙數名家の新郎新婦

◎跡見、山脇、美術、成女、女學館、京華各校の遠足

◎小舟に棹す侯爵夫人

⊙めづらしき髮形のいろ〳〵　⊙戊申婦人くらぶ大會……其他

讀物

▼婦人の新道德……浮田博士

▼理想の妻君……高橋義雄

▼婦人の理想……遠藤博士

▼子供の兄弟喧嘩……岸邊福雄

▼女の運……榊博士

▼育兒の栞……加藤博士

▼女學生ばかりの罪ならず……關根博士

▼古今の女歌人……佐々本博士

▼川柳に現はれたる嫁と姑……久保頁英

▼ある婦人に與ふる手紙（小說）……島崎藤村

▼輕便な生活法……井上秀子

▼マグダ　文藝協會公演「故鄉」を見よ……富田修

◎住居と夜具……金子子爵、加藤夫人、倉橋惣三、棚橋女史、横手博士、佐藤功一

▼都女と夏姿……巖谷小波

▼この頃の料理……吉村里子

▼母たるに必要な知識……今井政吉

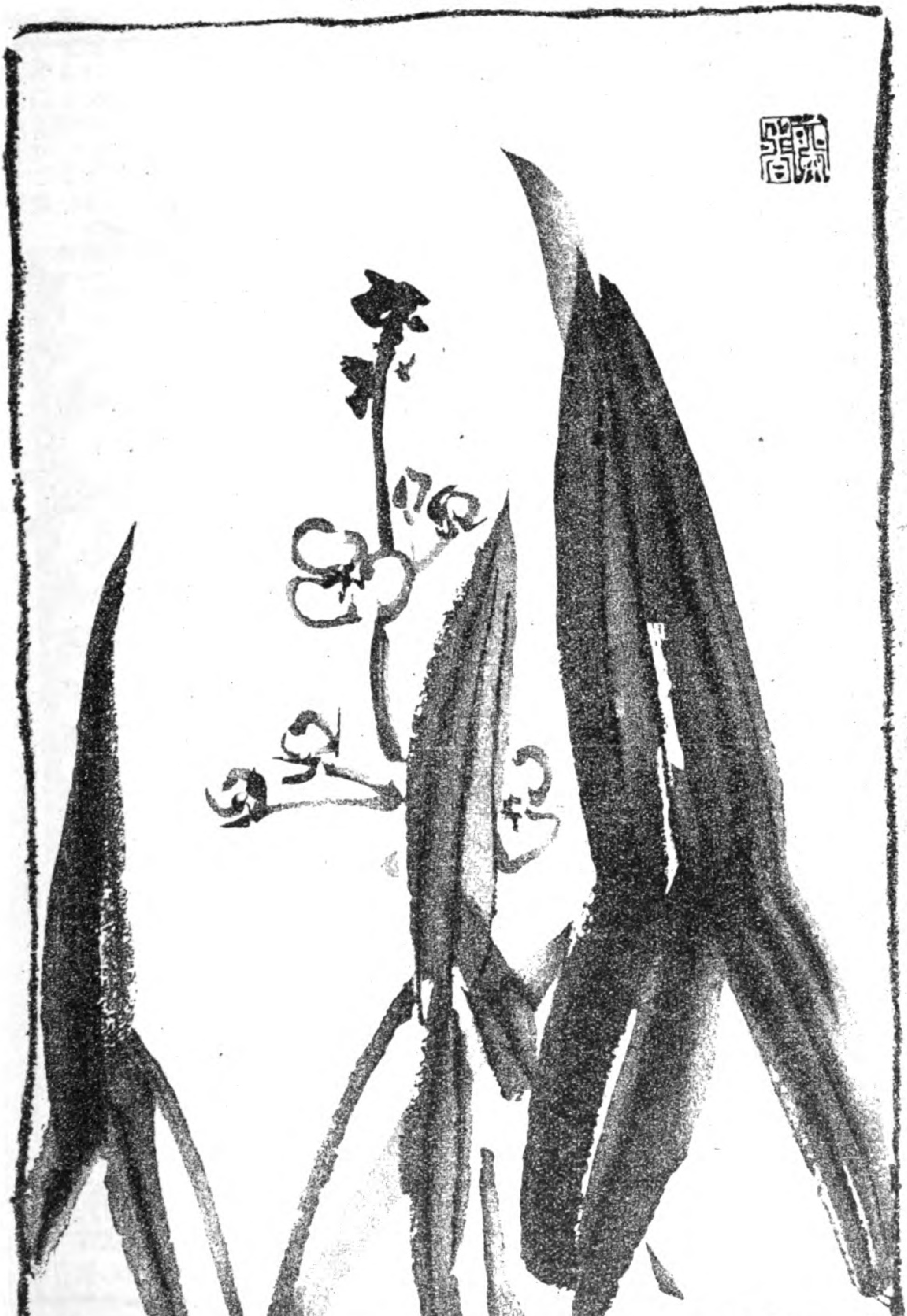
東京麴町區飯田町四ノ四　東京社　電話番町二三三九　振替東京一一八一八　（全國書店に販賣す）

女（にの二）

蘭の花



おもだか



上手な方は一生の德

筆蹟の美は容貌の美にまさると云ふて居りますが如くどんなに立派で、どんなに學問が出來ても、筆蹟の拙いために品性を誤解されたり又侮辱されたり、直接間接に受くる損失は實に莫大であります。斯かる方は評判高き特許速成習字練習帖にて練習なされば性來どんな惡筆にても短日月と僅少の費用にて頗る能筆家に

字の

成られます。書者は有名な小野鵞堂先生です。試みに先づ見本を御覽なさい。東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會(電話下谷三二一〇番)へ『ハガキ』にて申込みあれば見本附會則を直ぐ送つて來ます。

下手な方は生涯の損



(ほの一)

女(ほの三)


Sweet summer and white Lily
白百合の花よりも美しき
大學白粉の化粧振
白百合の花よりも芳しき
ツバメ香水のかほり

東本願寺新法主大谷光演師裏方章子の方

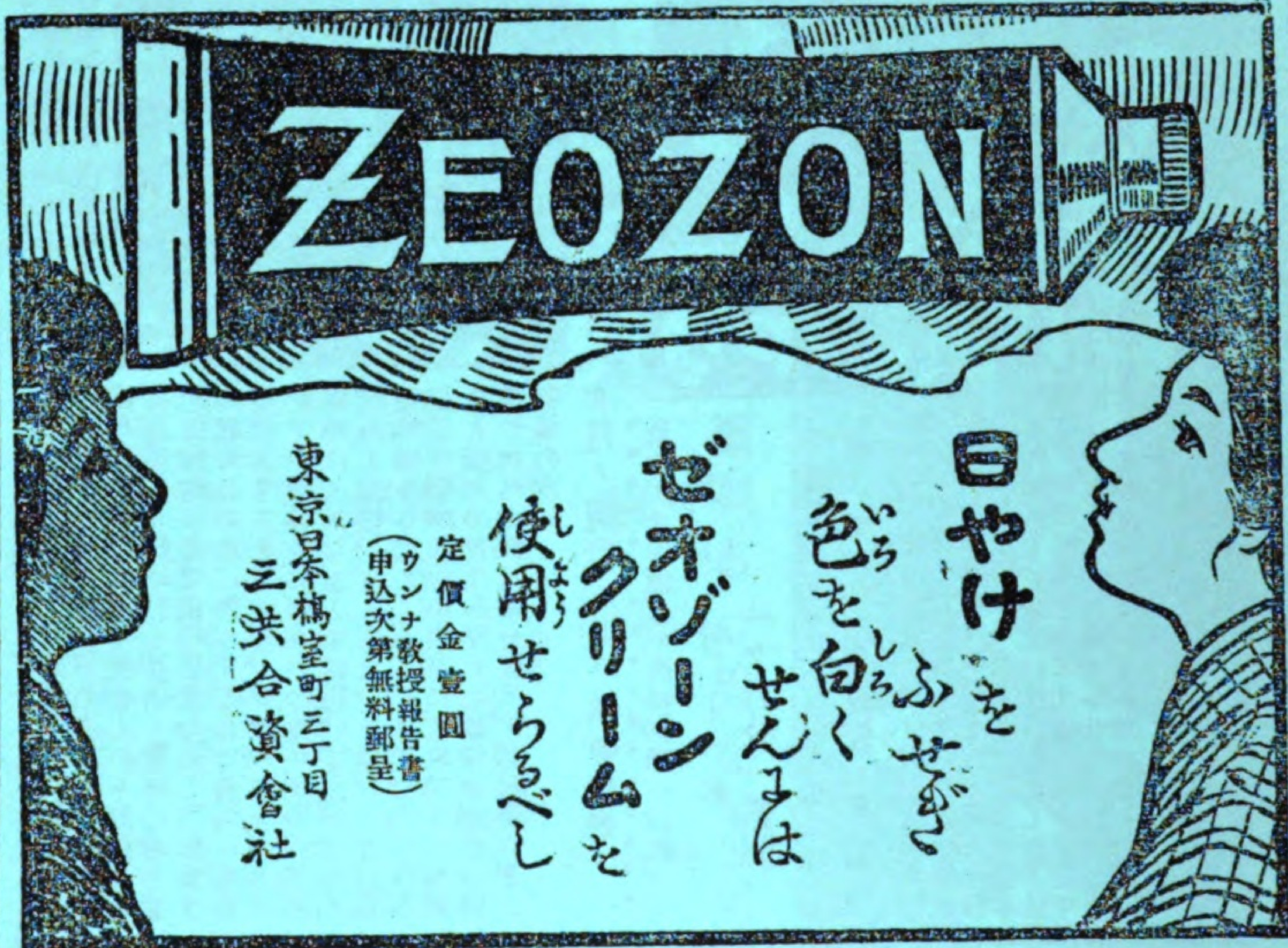
（公爵三條公美氏令妹）



名流婦人



駐佛大使男爵石井菊次郎氏夫人たま子


ZEOZON
日やけをふせぎ
色を白くせんとは
ゼオゾーンクリームを
使用せらるべし
定價金壹圓
（ウンナ教授報告書
申込次第無料郵呈）
東京日本橋室町三丁目
三共合資會社


ODOL
毎朝楊枝を使ふとき
食後及寝に就くとき
小児の口中を拭ふとき
オドールは
口中を
清潔にし
歯牙を
保護す
定價 大瓶金壹圓拾錢
小瓶金六拾五錢
本品數滴を水に落加して
使用て御覧なさい
東京日本橋室町三丁目
三共合資會社

女（への一）

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる奇薬を専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力薬を配合したる妙薬なれば世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣薬品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早むる事請合薬價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵劵代用二割增の事

●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●

取次所ナキ地方ハ直接本舖へ註文アレ

らい病

ヂノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ヂノサール　一ヶ月分　參圓

此らい病薬は有名なる癩病治療薬を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力薬なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴かしむる妙薬なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる薬品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする賣薬主義の賣薬に非ず

本舖　三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹

電話　刈谷參拾貳番

醫科大學卒業藥劑士　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町　廿八淺草橋通　瓦町停留場横

中央醫院

ぢ病　諸毒梅毒　横根下疳　全身梅毒等　りん病　消渇

子宮病　血の道　月やく　とまりたる病　子なき婦人

生殖器諸病　神經衰弱症

記憶力減衰　思考力症等　生殖器病　萎縮　遺精　早漏　夢精　發育不充分症等

わきが　色の黑き人　にきび　そばかす　ふきでもの

あれ性　皮膚諸疾患　いんきんたむし等　症

▲病狀記し郵劵四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區　瓦町廿八番地　淺草橋通瓦町　電車停留場横

中央藥院

女（への一）

婦人之友

六月號

夫婦かゞみ

- 結婚の權利ある男女なき男女
- 私どもの夫婦觀
- 夫婦喧嘩の言分
- 妻として要求
- 夫に對する若き妻の心
- 新しい姑の心
- 姑に可愛がられる秘訣
- 嫁と姑の間に立つ夫の態度
- 大酒の夫に事へて苦勞した思ひ出
- 子供を殘して再婚した私の悔恨
- かくして遂に夫を棄てました
- 嫁入支度と持參金
- 子供のない夫婦の寂しい生活
- 再縁したる女の心

◎現代的の女性　三宅雪嶺

◎夫婦調和論　羽仁もと子

◎男を勵す女の力……　久留島武彦

◎主家の火災に奮闘したる下婢　山根夫人

◎子供に勤勞を敎へん爲めの我家の養蠶　海老名牧師夫人

◎女中の躾け方……　加藤夫人

◎帯の仕立方……　齋藤春代

◎一日卅五錢家族五人一週間の献立　懸賞披露

一冊金十八錢郵稅一錢五厘　半年分郵稅共一圓八錢

婦人之友社

東京市小石川雜司ヶ谷町　振替東京一一六〇〇番

女(への三)

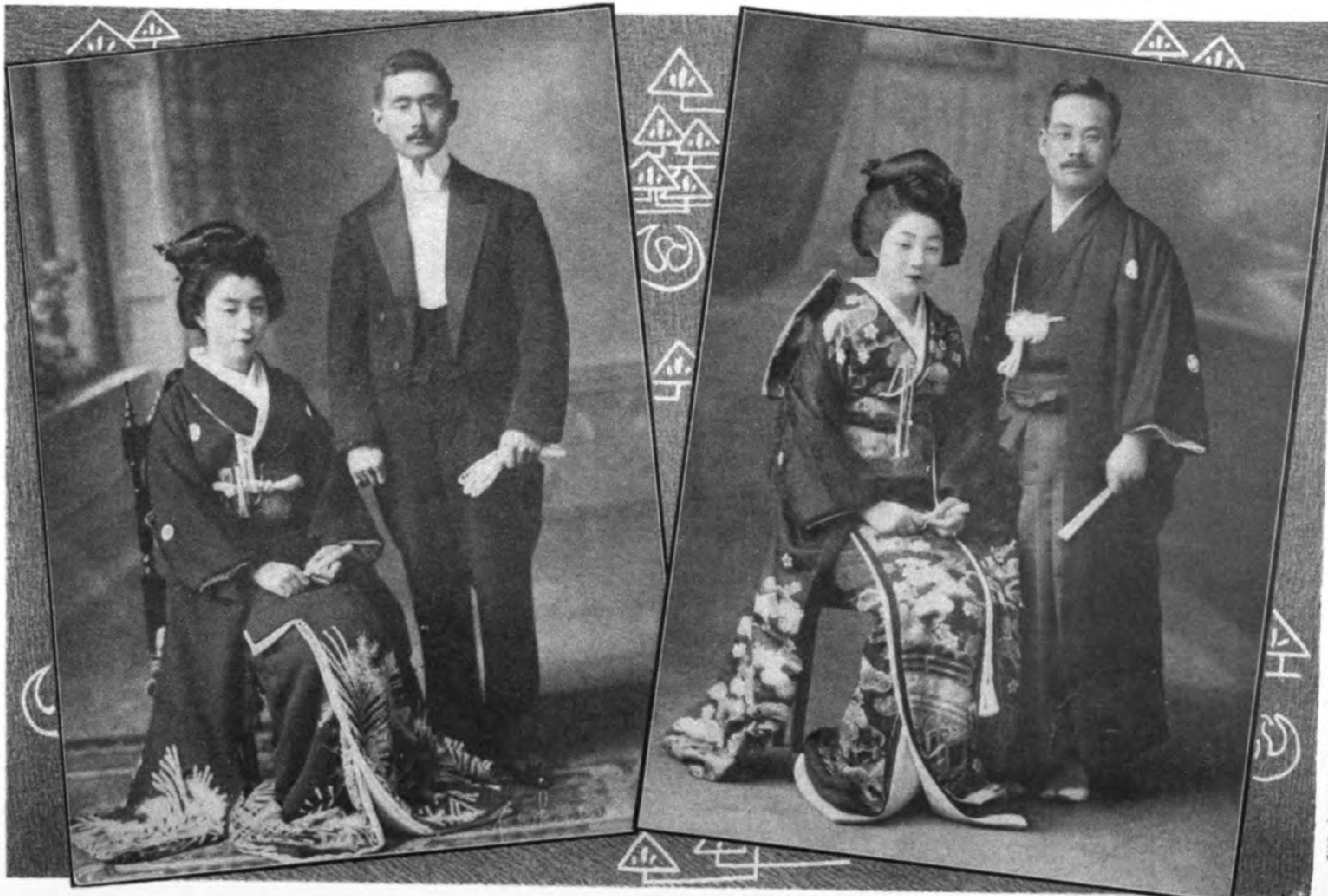
女（への四）

令嬢かゞみ



右木澤病院長木澤敏氏令嬢婉子（雙葉高等女學校在學）、左紳商大木宗保氏令嬢錦子

新婚の人



右法學士高木健吉氏と新夫人靜子、左實業家山口勝藏氏と新夫人兼子（肝付男爵令孃）.

女子技藝研究會長 梶山彬先生が畢生の大著述たる

「女子技藝叢書は漸く大成せり」

和洋おさいく物新書

本書は女子技藝中高尚にして實用向なる、琴爪入、名刺入、銀貨入、巾着、守り袋、小楊枝入、提げ袋、針差及び西洋前掛、シャツ、ヅボン下、猿股、カラ、カウス其他西洋小物等にて新形のもの七十五種を選び、材料の選擇より積り方裁ち方縫ひ方まで最も叮嚀親切に說き、難解の所には精密なる說明圖二百五十餘を附して作り方を容易ならしめたれば高等女學校生徒諸姉及獨習者には絶好の指南車なり。

大和綴 頗美本
正價金五拾錢
送料八錢

本叢書は

「在來の技藝書中優良のものとて各高等女學校技藝學校の參考書に指定せらる。是れ何人にも解り易く說きたるによる。」

女子技藝叢書

編物新書 改訂十七版● 圖按及說明圖百二十個入
裁縫新書 改訂十五版● 積り方仕上方圖百三十入
袋物製作新書 增訂十二版● 說明圖及雛形百五十個入
刺繡術新書 改訂十七版● 圖按及說明圖百四十個入
造花術新書 增訂十七版● 切形及說明圖二百餘個入
摘み製作新書 好評十五版● 切形及配置圖百三十個入
花たば新書 好評三版● 束ね方及說明圖百十個入
しみぬき染色洗濯法新書 好評十二版● 總ふり假名二百十餘頁

大和綴 各一冊
正價 五拾錢
送料各 八錢

和洋裁縫研究會長 松江みさ子先生著

子供西洋服の拵へ方

好評嘖々 最新版 クロース綴頗美本 菊判全一冊 正價壹圓貳拾錢送料八錢
……コロタイプ寫眞版數葉、積り方裁方縫方說明圖五百個入

女(その一)

發兌 東京市京橋南槇町十八番地 振替東京四六八四 電話京橋二四六三 廣文堂書店

新學期開講

今！今!! 今!!! 入學の時は今也

日本女子商業學校學監
嘉悅孝子先生監輯
日本女子商業學校
各科專門諸先生執筆

女子商業講義

卷頭には每號に婦人の修養に資すべき名流諸大家の談話を掲げ特に時代の趨勢に後れざらしめんが爲に婦人に關係ある時事問題を詳說してありますこれは他の講義錄に見えない特色です

教科目

修身、國語、漢文、算術、習字、帳面の附方、商事、家事、割烹、商業地理、商業歷史、裁縫、商用文、通俗衛生、外雜纂等

新學期第一號は六月一日發行
雜纂には福田博士、森村翁、三輪田、棚橋兩刀自の趣味ある談話や時事解說が賑やかであります
講習料一ケ月金三拾錢入學金五拾錢
此際入學者に限り入學金免除

一日遲るれば一日の損あり

見本付規則書郵券二錢送れば進呈す

東京麴町區土手三番町
日本女子商業學校出版部
電話番町二一二七番　振替口座東京一七〇七七番

女(との二)

六月の巻發行

定價 一册貳拾八錢 郵稅貳錢五厘
六册前金郵稅共壹圓七拾錢

新婦人

國色天下第一人

五月雨や或夜竊かに松の月の情緒纏綿として凄婉の氣磅礴たる實寫眞……本誌の爲に特に鏡玉の前に立ちたるもの

還城樂 嚴島社頭の珍政所寄進の國寶描き來つて面貌生けるが如し（油繪極彩色）……川村清雄筆

梅雨晴 氤氳たる溫氣の裡肉聲喃喃耳朶に囁く（石版極彩色）……鹽崎逸陵筆

隻手の聲（伊澤夫人）洋服でないと身に合はぬ（モルガン雪子）唯置のくもか（大倉君子）

女の一生は戀文（小島女）女の沈默（北原末子）江戸の女の氣性（根本吐芳）麵麭の聲（巽女）

憐れむべき男子の人格（尾上浪子）女學生は大嫌い（上村松園）奇警なる氣焔十數章……

淑德は日本が第一（田中敎諭）言葉遣ひ（高津正嗣）繼母と寡婦の子（新井敎諭）女子と書道（加藤しげ子）

女藝人と呂昇（兒玉花外）解剖されたるモデル（宮崎きく女）梅雨の研究（近藤蕉雨）

縁結びの神（雨六）女天下（陽炎）嫉妬叢談（田毎）米國の子供（橋戸）

結婚媒介所見聞記（卯女）

看護婦の境遇（內藤美喜子）其他十數章

卷末附錄 **家庭日誌**

每號附錄 **美人史蹟**

閑院宮茂子女王殿下●松岡前農相夫人●近藤男爵嗣子夫人●河村少將令孃●北里博士令孃●高安梅孃●南天棒會下大倉きみ子孃●モルガン雪子●服部清子孃●帝劇●宇治龍子孃●横濱平沼亮三氏夫人其他數十葉……

六月分 溫度表晴雨表獻立表來客控●九星舊曆添

新婦人見本 郵券卅錢 賣捌所は全國著名の書林雜誌店

女（ハとの三）

發行所 東京市本鄕區龍岡町 振替東京三〇五八 **聚精堂** 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番

●帶下ある婦人

素人の中にはこしけと言へば婦人には附物で成人の婦人には誰にでも有物の樣に心得て居る人が有升が之は大なる間違で、元來健康の婦人には經血時の外は如何なる場合にも決して下物は無いもので有升。換言すれば、月經期に當つて時々薄い水樣の分泌物の伴ふ事が有升が、其量極めて少く且つ大抵經血も共に下る所から、殆んど本人自身にも氣附かれぬ位で有升。

▲病的の白帶下　之に反して月經期又は月經の前後に卵の白味の樣な濃い粘ある分泌物があつたり、月經でない時にも下物があつたり、其下物に厭な惡臭があつたりするのは、言ふ迄もなく病的のこしけで、子宮其他の生殖器に病のある證據で有升。一體此白帶下は慢性婦人病の特徴で、殊に子宮內膜炎、子宮肉腫、子宮癌腫抔には頗る多量にあつて、病の進むに從ひ黃色な鼻汁の樣な粘液に變り、强度の酸性を帶び而して何とも言へぬ惡臭を放つものです。

▲白帶下と頭痛　それから斯樣な白帶下のある婦人は一般に逆上強く、頭痛持癇癪持で、神經過般であるのは爭はれぬ事實で有升。又多く冷性で常に足腰が冷え勝であるのも既に皆樣の御存じの事でありませう。之を其儘に打捨て置くと常に局部の周圍が不潔で惡臭を發し、膣腔糜爛し痛痒く交接不能となる事も有升。事茲に到れば勿論婦人病は餘程嵩じて居るから治療愈々困難となり、一朝一夕に根治する事は當抵六ヶ敷くなり升。

▲不姙症と帶下　前にも述べた通り、婦人が一旦子宮其他の生殖器病に罹ると分泌の量は著しく增加して所謂白帶下となり、分泌物には異常の臭氣を伴ひ强さ酸性を伴ふ樣になり升。精蟲は極弱い酸性には耐へ得るも痳疾又は子宮病から來る白帶下の强き酸性に出逢つては、直に死滅し、又偶々死滅せずして卵子と接合しても其勢力の大半を奪ひ去られて居るから、迚も姙娠の原因となる事は出來ませぬ。猶此白帶下に就ては種々御話致したい事も有升が、紙面に限が有升から詳しい事柄は北島、佐藤兩先生の御書になつた『子宮病自宅療法』と云ふ書本で御承知を願ひ升。

注意　兩先生の治療書は一般患者救濟の目的で希望者には無代送本せらるゝ由なれば婦人病者は速にハガキにて東京築地新榮町笹岡藥房宛女學世界にて見し旨御申添へ照會あれ。

女(との四)

令嬢かゞみ

上圖、中村きち子（小石川）
下圖、瀧川峰子（麹町）



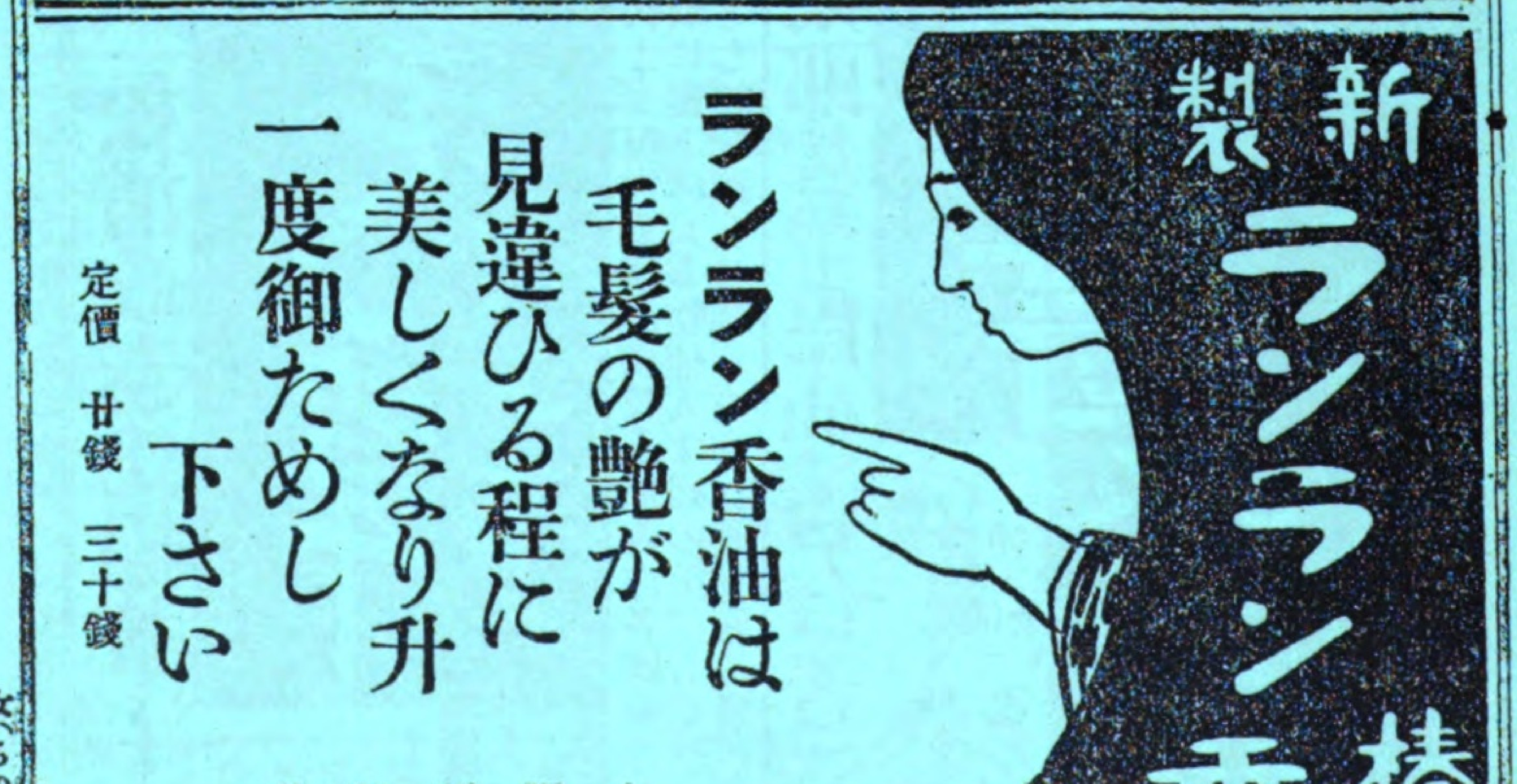
上圖、今井さた子（赤坂）
下圖、久野久子（本郷）
中央、鵜飼貞子（千駄ヶ谷）

千家表流茶會



圖は千家表流茶道教授酒井李喜子女史と社中の人々にて、左より二番目に立たるゝが酒井女史なり、場所は駿河臺兒玉ドクトルの邸


チエリー香水
高等煉香油チエリー
高等香油チエリーオイル
フエス白粉
CHERRY-POMMADE
CHERRY
PARFUM CONCRE
H TAKAHASHI
TOKYO
チエリー香水
價（大八十錢 並二十五錢）
高等香油チエリーオイル
價（大八十五錢 中四十五錢 小二十五錢）
高等煉香油チエリー
價三十錢
フエス白粉
價（三十五錢 二十五錢）
發賣本舖
東京日本橋本町
高橋初次郎
特電話本局四一三


新製
ランラン香油
椿製
ランラン香油は
毛髪の艶が
見違ひる程に
美しくなり升
一度御ためし
下さい
定價 廿錢 三十錢
大阪新町三
福田源次郎
東京馬喰町三

女（ちの一）

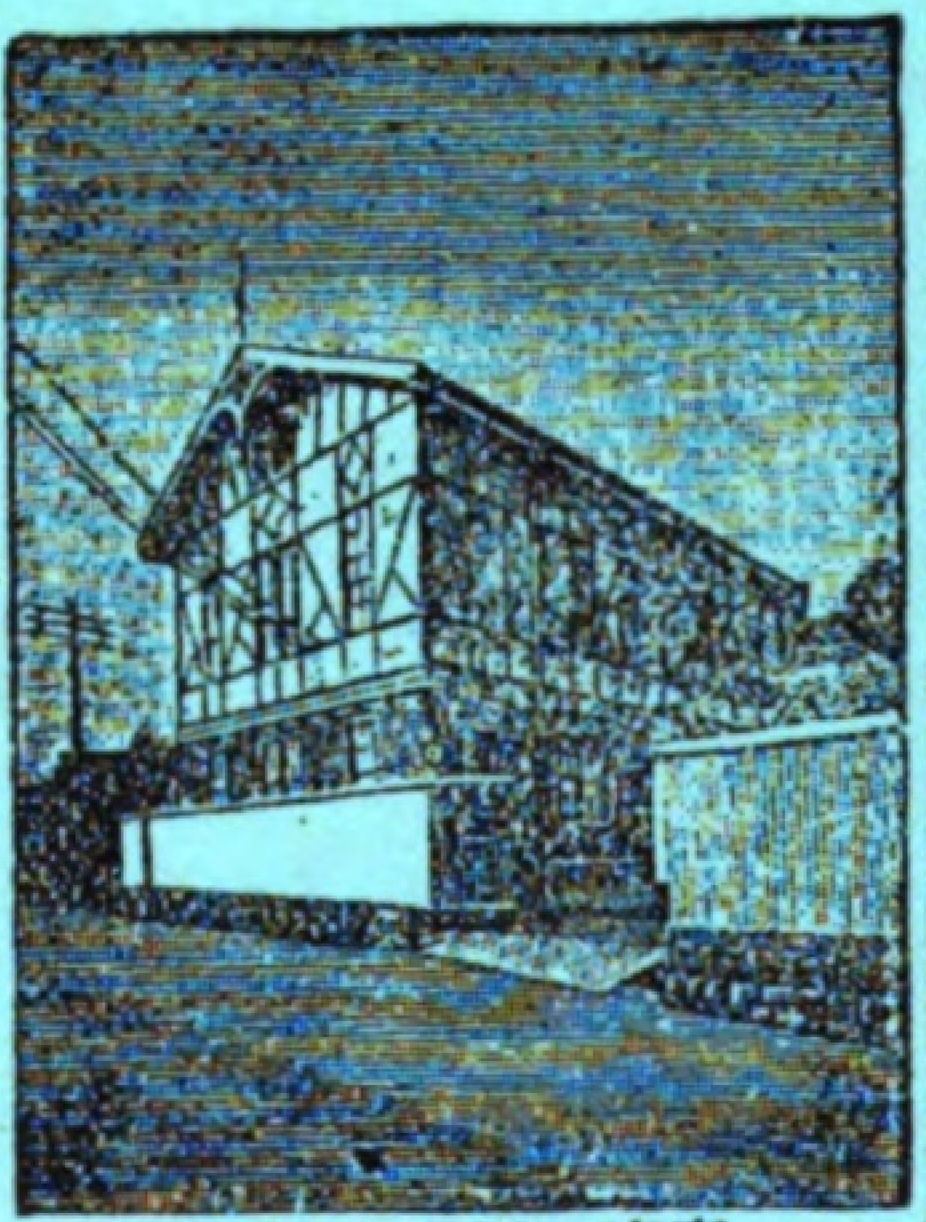
隆鼻術（はなたかくするほう）

東京市九段下神田今川小路二丁目十一番地

午後夜間

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

電話本局三八五四番

生徒募集

○本校及東京音樂學校入學受驗科及特別科は何時にても入學することを得

○學科目……唱歌、ピアノ、バイオリン、オルガン、音樂理論、其他管絃樂（オーケストラ）に關する諸樂器等

男女 ちゞれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も自然に矯正黒化良き艶の出る最新發見專賣特許奇液を郵券封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

岩阪澄子

東京千駄ケ谷五九五

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓半●送料十錢

美齡散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價（一週）七十錢（三週）二圓（五週）三圓二十錢●送費十錢



◀御注意ありどり物せに▶

リウマチス根治劑

驚く可き天下唯一の保證

藥禮狀山の如し

方名パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして其効驗の確實なる實に神の如し如何なる難病のリウマチも此藥二劑にて奏効す證明禮狀寫希望の方申込あれ送呈

七日分三十五錢
半劑七十錢
一劑一圓三十錢
二劑二圓四十錢
送料八錢

新宮藥館

全快禮狀店内に保存す

東京本郷三丁目
振替東京一二五八四

電話下谷五一四六番

女（ちの三）

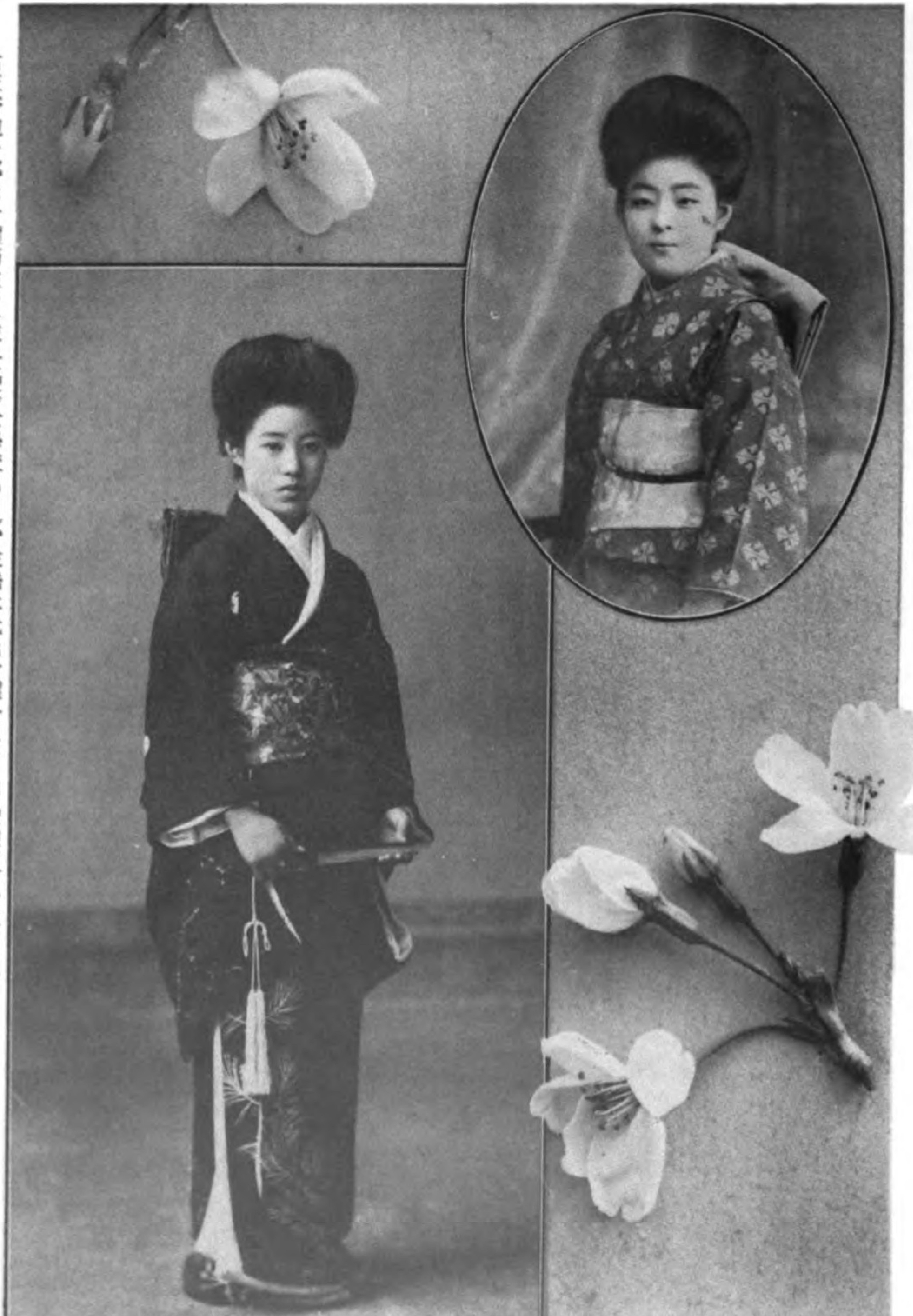
美容術最新白色法及
脫毛術を行ふ

神田駿河臺袋町九
東京美容院
電本一七七一番

院主北原十三男美容術視察の爲
渡歐不在中の處今般歸朝從前通業務に從事

藥品部發賣品
完全なる脫毛材料漂白化粧料に
きびそばかす藥　隆鼻器隆鼻劑有力
なる毛生劑等美顏毛髮に關する新式
器具藥品一切說明書郵劵三錢を要す

令嬢かゞみ



右天野純一郎氏令嬢菊枝子（岐阜高等女學校出身）、左橋本武氏令嬢みれ子（山脇高等女學校出身）

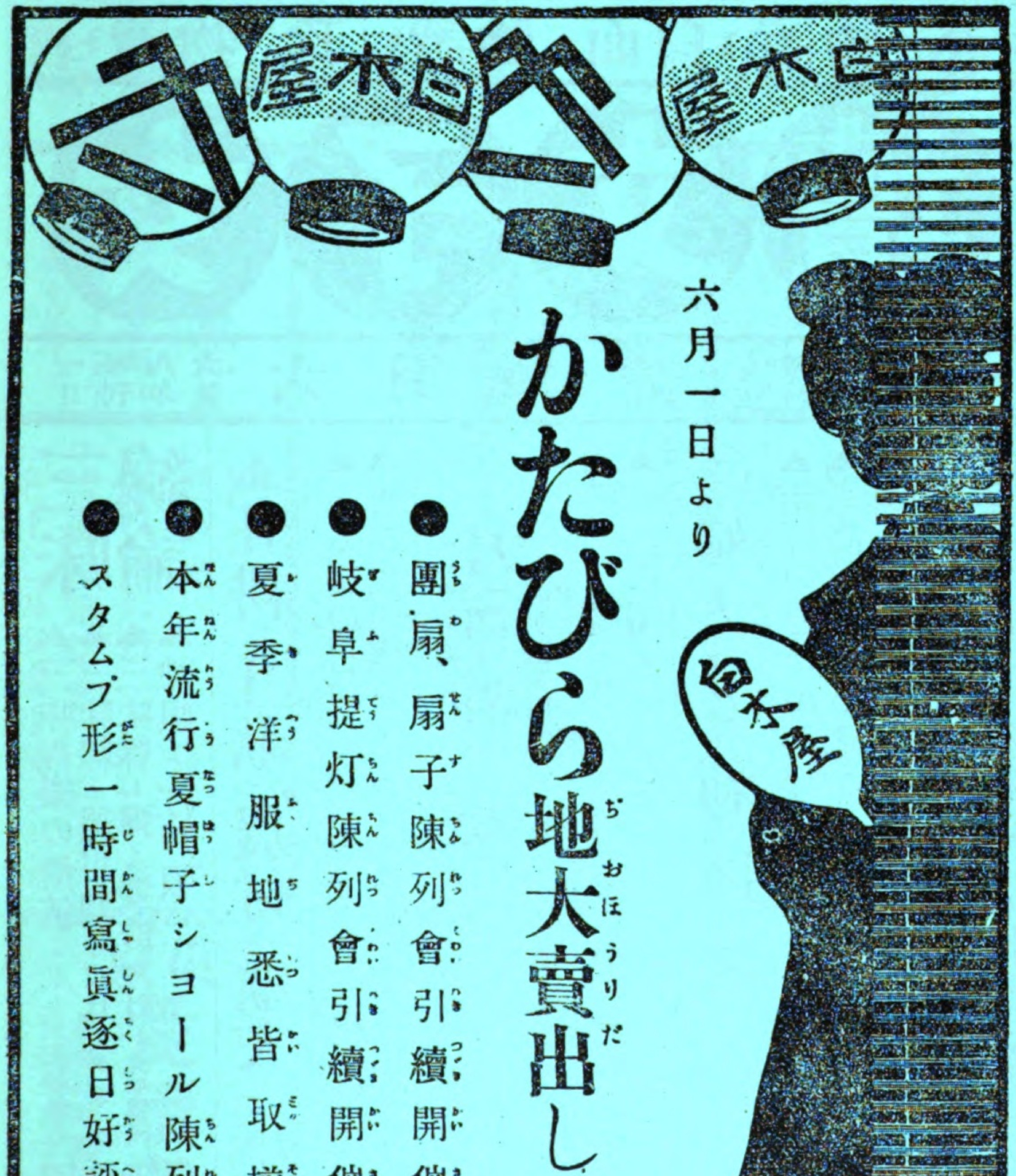
山旅



鳥歌ふやパラソルの蔭、青嵐おろすや袂の振、げに面白き夏の山ぶみ。

女（りの一）

女（りの二）


白木屋
白木屋
六月一日より
かたびら地大賣出し
●團扇、扇子陳列會引續開催
●岐阜提灯陳列會引續開催
●夏季洋服地悉皆取揃
●本年流行夏帽子ショール陳列
●スタムプ形一時間寫眞逐日好評
白木屋


女學世界
第拾二卷第八號





足引のやま下水に人しれぬ
月はやとりて水鷄なくなり　（直好）

新女大學

濱千鳥

○

某と云はゞ、直ぐそれと知らるゝ硬骨の前代議士、人の懐中數へ參らするには有らねども、永の御浪人に、させる收入の途おはす由も聞かず、さるを社交に、内政に、切つて廻さるゝ夫人の御腕前、其の切味の鮮かさ、誰賞めぬ人ぞなかりける。

此夫人、密に囁き給ひて曰く、

まあ一月平均七十圓内外の處で、是丈けの家内を切盛して參らなければ爲らないので御座いますもの、何うして皆樣の御宅の樣に、何圓々々米炭薪代、何圓副食物費、

何圓交際費、被服費、醫藥費、なんど〻、それ〴〵項目を分けて居つた日には到底豫算は算盤珠ではぢき出せたものでは御座いませぬ。只もう其七十圓と云ふものを風車の樣に振廻して、際限の無い費途を雛ぎ立て〻參るので御座いますよ、でも其振り廻し方一つで、他家樣の百圓以上の御生活よりも、樂にやつて參れます。と、算盤珠以外の經濟！

噫、是なる哉。

羨まし、我も左いに活氣に漲る生活を戀ふ、父と二人足らすしも有らず、餘るにも有らぬ、小指の先にてくね廻し得る程、小財政、よしや如何程風車の如く振り廻せばとて、虻の羽風程にも、呻吟は生せざるなり。



姬百合や日本の女丈夫し（千穂）

但し此の風車、徒らに自信も無くして振廻さば、火の車ともなりぬべし。只其人の腕如何にこそよるべかりけれ。

○

一週間宛のお献立表作り置く事、當節の流行物の樣なり。

定評ある某々の學校など、皆その方針をば家庭に勸め給ふ處を見れば、必しも惡しき事には有らざるなる可し。去り乍ら我には一向感心出來す、若し是がお店か何ぞの、番頭小僧多く召使ふ御家にては、或は宜しかるべく、されど人數は多くとも、普通の家庭にては如何とぞ覺ゆる。

只、適宜に配味せる食物を、胃の腑に投げ入れてのみ事足る世なりせば此お献立表なるもの、至極都合よかるべけれ共、假に思ひ見よ、もし他家より不意にお萩餅などおこせ給へる時、其夕食のお献立見れば、天ぷらなどゝ有らば如何に。

跳ね出でん許りに、脊は紺碧の色鮮らしう匂ひたる大鰯を見ながら、表に照燒と有る時は、身些白けかゝり居ても猶鰆をば求め給ふや。

散歩など過して、殊の外空腹覺ゆる折は餘りに風味輕きものよりも、豆のきんとん、汁氣の物などをこそ。又は雨終日に降り暮して、せん樣もなく籠り居たる日。美味なる重くるしき品よりも、淡泊と腹にたまらぬをこそ望ましけれ。

さる折には、お献立臨機に變替へてよしとのたまふや。

さあらば、始めよりさせる無用のもの、作り置かざるには如じ。

○

さらば如何なる男を好み給ふや、と、眞面目に人に問ひつめられたる時、我は只にや／＼と笑つて、語錄を避けぬ。

一寸の蟲にも五分の魂とぞ云ふめる。此世の風に吹かれ來て廿年、未來へかけて迄も賴るべき良人とする人、かくも有れかしと、時に心中書き見ぬにしも有らず。



さはれ、如何に厚顔しければとて、思ひし儘をずば／＼と云ひて除けんには「女」てふ弱き名にも拘束せられたり。片端を云ひ出でんか、先方は、己が都合よき方に解釋つけて、獨合點したる、又始末惡るし。

爰に於てか、金と呼ばるゝ沈默を守りて、人前しほらしく裝なせば、内氣なりとぞ人は云ふめる、内氣か、内氣か。

をかし、をかし。

何處が内氣ぞや、只、



撫子や小石の中に
折れて咲く　（杉枝）

女てふ名に憚りたるのみなるを。人には憚りぬべし、さはれ思ひける儘の獨言を紙に向ひて書いつけもて行かんに、紙物云はねば論ひも爲じ、さらば大膽に心中打思ふ片片、書いとめても見む哉。

第一には貧富、職業を問はず、只常識に富める男らしき男を戀ふ。性、磊落に竹を割りたる如き、人に對して邊幅を飾らず、清濁合せ呑む度量有る人。常に青雲の志を持して、假令如何なる地位に進みても、猶向上心

失はぬ、但し事の成否は不關。常に逆境を行くもよし。

身に薄く、人に厚うして高士の交にも除外されず、されぱとて、絃歌湧く酒間にもつきなからぬ、然し大酒家は眞平なり。自身手を下さぬ迄も、文學美術音樂等を、相應に見聞く丈けの趣味をもてる人

時は疾風迅雷を起して、鐵拳のお見舞を頂戴する事ありとも　我に非の有る時ならば悦んで受くべく、さりながら何日迄も根に持ちたらず、迅雷去つて光風霽月とこそ有らま欲しけれ。

兎角言行伴はず、ともすれば我儘の芽出ださんとする我を、よく鞭打ち、よく訓へ、よく導き吳るゝ人、

是先づ理想もて作り上げたる人物、若し兼備する人有らば、御面相など人四化六迄は、喜んで從ふべし。其の人にはジユリエツトの愛を捧げ身を愼めばとて、鶴臺の妻の如く夫君に窮屈なる思ひさせず　アービングの書ける妻の如く、如何なる時にも常にその慰





京紅の色を一重や野撫子　（紫陽花）

籍者となり、よく明石の上の謙譲を持し、時に些い、紫の上と妬く事も爲む。



おく露も誰か拂はん獨のみいぬる朝けの常夏の花（東樹）

筆を擱きて一讀、獨り其の勝手に吹いたる熱を笑ふ。

○

へボ理窟を好くと申さば、人は眉を顰め給ふらん。さはれ中々に捨て難き味の有るこそをかしけれ。眞の理窟は、我等のよく云ひ得可き處ならず、只、是は云ふにも心使はず、徒然なる折心等き友と云ひ合ひたるなど、此上なう慰むめり。時には問ひつめられて逃げ言葉構ふる程ふと、眞理に云ひ當る事もあり、又我が知らぬ書教へらるゝ事も有り、兎に角人の噂など、こちたく評しあふよりも、罪なくして遥に勝れたるべし。

但し、其へボ理窟こね廻すべくは、よく打對ひたる人柄に、心せずばいと惡しかるものと知るべし。第一に御年召したる方には、露許りも打出す可からず、長上にも殊に愼む可し。心隔て有る友には云はぬを可しとす、自ら言とり過ちて、思はぬ中違をも生ずべし。又、幼き人の在る前にては、必ずこねる可からず、善惡の辨へ無き兒は　知らず〳〵にさる事を覺えて、人の見界も無く云ひ出づる事あるものなり、



大阪の女學生

夕陽丘高等女學校長　伊賀駒吉郎

△大阪女學生の服裝

東京の女學生を見た眼で大阪の女學生を見ると、先づ其の服裝の質素なのに驚かされる。京阪の地は由來着倒れの名ある所とて、嘸美服を着飾つて居るだらうとは、東京の女子教育者などは誰れでも想像してゐるが實地に來て見ると、全く豫想に反してゐるのである。頭には一片のリボンもなく、矢絣の銘仙どころか着物は木綿の筒袖、袴もセルやカシミヤなどの上等でなく安物の色の燻んだなるべく目立たぬ色、何う見ても青春の綺羅を飾るべき服裝ではない。尤も私の學校(夕陽丘)だけは大阪女學校中第一のハイカラださうで、時々お小言を頂戴するが何んな點がハイカラかと云ふに一、リボンが許してあること　二、必ずしも絹服を禁じてないことである。が私の考へでは、リボンなどは決して禁ずるに及ばない。世間では然う小さな時分からリボンなどを付けてお洒落の癖が付くと長じてからは始末に負へぬと言ふが、事實は決して然うではない。リボンなどは好奇心の強い紅い布などが欲しい時分の子供の時だけで、決してお粧しと云ふ程のものではない。從て長ずると共に次第に止めて了ふ。現に放任してある私の學校でも、一年生二年生にこそ紅い大きなリボンを付けたのが澤山居るが、三年四年になると既う滅多に付けて居ない。リボンなどのことは決して八釜しく云ふに當らぬのである。又着物でも何も嚴しく綿服と定むるには及ばぬ。筒袖のことであるから、絹物を拵へろと言つたところで、決してお召や何ぞの新しいのをムザ〳〵筒袖にして來るものはない。着古しの最早や晴着にならぬものでなければ、長

くも着られぬ筒袖などに仕立てはしない、其點は勘定高い大阪人のことだから、決して心配に及ばぬ。だから大阪女學校中のハイカラと云はるゝ夕陽丘の生徒でも、木綿の筒袖に、質素な古代紫の色の濃い袴を穿いて髪も油氣のない至極質素なものである。洋裝の如きも全校中唯一人しかない位だから東京に比べるとハイカラと云つても知れたものである。



米國の女子大學生

△家庭的で內治的

さらば性格はと言ふと、東京を社交的とすると、大阪は非社交的——好く云へば家庭的である。東京の女學生は開放的で、如何にも打解けて話相手として面白く、一見舊知の感があるが、大阪の女學生は非開放的で、愼しやかで、惡く言ふと含羞やで一向埒が開かぬ。が暗愚な田舍者と云ふ程ではなく、さりとて東京婦人

ほど時代精神と共に進んでも居ない。まあ田舍と東京の中間位のところではあるまいか。その代り堅實な點に於ては東京人の及ぶ所ではあるまいと思ふ。外國人の例を取ると、東京は佛蘭西、大阪は英吉利とするも敢て不當ではない。

社交的手腕に至ては大阪婦人は到底東京婦人に及ばないが一家を巧く持つて行く、辛抱強い、雇人を好く使ふ内治的の手腕に於ては、東京に優ること數段である、元來大阪は内外の別が極めて劃然と付いた所で、夫は外に在つて商業に從事し、妻は内に在つて家事を治めるといふ事にちやんと定まつてゐる。そして妻が夫の事業に口出しせぬ代りに、夫も亦内政には一切容喙せぬ。だから妻は責任を以て家事を治め、事に當つても夫の助言を俟たずしてテキパキと行つて退ける。雇人の使用權の如きも、亦概ね妻の手に收められて居る有樣である。



日落ちて東に負なり靈の峰　（畫梧桐）

△大阪は女尊男卑

此の風習は一面に於て幾分女尊男卑的の傾向があると見られぬでもない。元來大阪の地は古來商業の都で、武家の跋扈した江戸の地とは自ら趣の違つたものがある。即ち東京を武士氣質とすると、大阪は商人氣質で、武士氣質は男尊女卑であるが、商人氣質は女尊男卑に稍接近して居る。大阪　此女尊男卑的の傾向の實例は澤山にある。家庭で男の子を疎かにし女の兒を大事がるのもそれで

あらうし、比較的冷淡な教育でも男の方は小學だけで止めさせても女の方は是非高等女學校迄行かせることなども、姉を下女同樣に使ひながら弟を中學に入れる東京とは全然反對である。其の證據には、大阪には府立の中學が四校高女が四校、しかも生徒數は兩者殆ど同一である。他市では二對一の差で女子の方が少いが普通だが、大阪では同數なるのみならず、私立高女には相愛、金蘭、信愛ウヰルミナ、プールの五校があるに、私立中學は僅に桃山の一校があるに過ぎぬ之を見ても如何に女子が男子に比して重く視られて居るかゞ判る。從て家内に於ける妻君の權力も亦東京人の想像し得ざる程强大なものがある。尤もそれには大阪の男子は概して不品行で或は藝者買ひ或は妾圍ひ等の道樂があり弱點がある爲め妻君に頭が上らぬと云ふ原因もあらうが、其以外に、家内の事は妻でなくては分らぬ　即ち一家になくてはならぬもの　妻が居なくなると家は暗闇、と云ふ風の程度迄萬事を一任してあるから、自然妻を尊敬するといふ事になるのであらうと思はれる。



紺花の早朝顔の鉢の露（紅花）

△女子商業學校のない譯

右の樣な次第で、大阪の婦人は頗る主婦的に出來上つて居るが、然し家内の事ばかりに一身を委ねて居るから、商業上の智識などは格別有して居ない。商業地たる大阪の婦人だから如何にも商人的でありさうなものだが然うでない所に

大阪婦人の本分があり、眞面目が發見せられる。大阪の婦人は唯家事にのみ專心であるから、夫が如何なる商業的手段を試み、如何なる計畫を爲しつゝあるやは毫も知つては居ない。男子の商業學校は澤山あるのに女子商業學校が一つも無いとは、大阪にも似合はぬとは何人も思ふ所だが、如上の『大阪婦人の地位』を知ると此の不審の當らないことが自ら判つて來る。然し近年に至つて中等社會の主婦たるべきものは簿記位は心得、店の監督位出來るやうでなくてはと、商業教育の必要が次第に認められて來たから、漸次此の種の特殊學校も設立さるゝに相違ない。

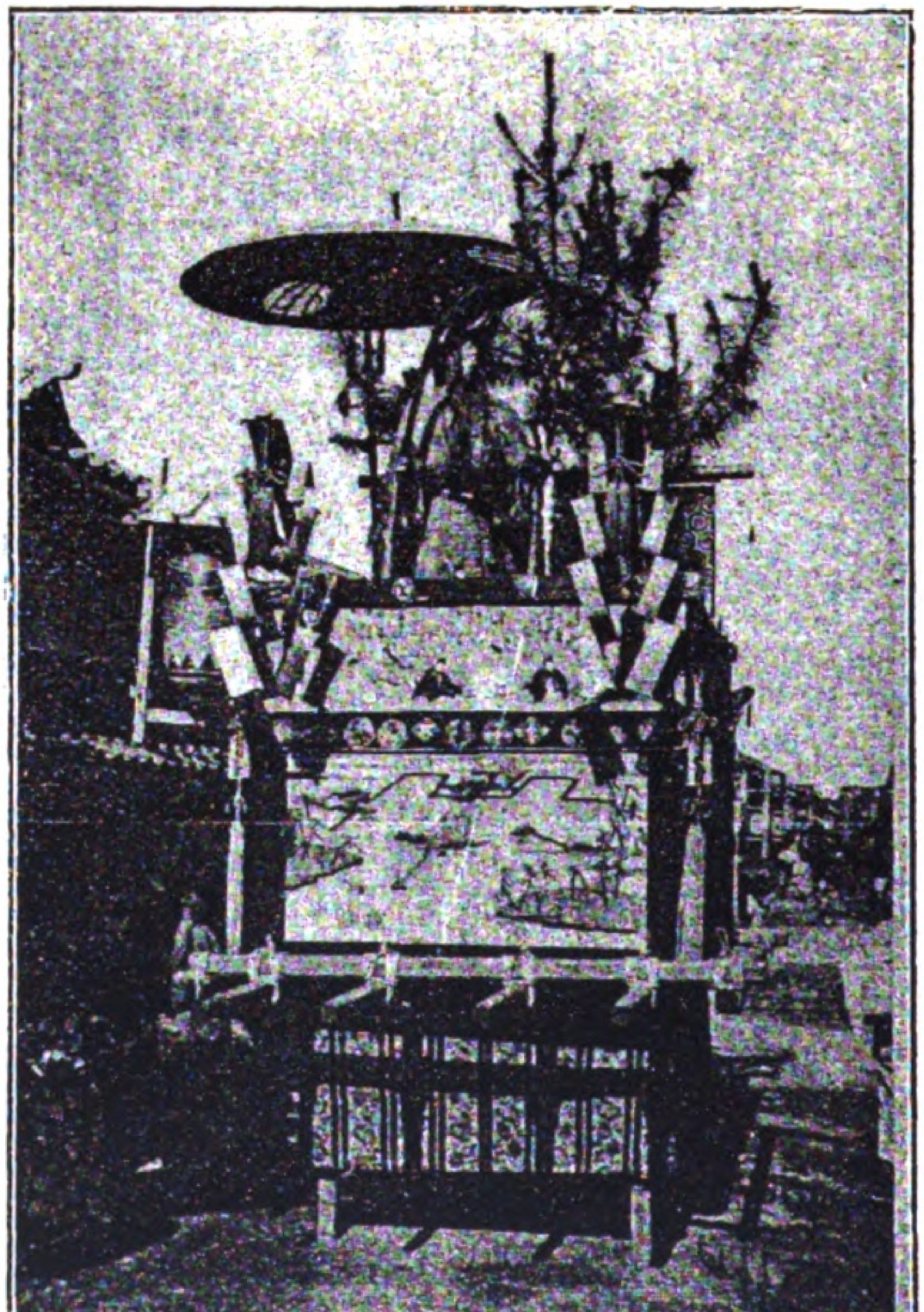
△多望なる大阪の女子教育

女學校數も多いし、生徒數も中學生に匹敵するし、如何にも女子教育に熱心のやうではあるが、それに近年のことで、以前は嫁に貰ふのに女學校の卒業生は御免を蒙るといつたものである。此頃でこそ高女卒業は結婚資格の一になつて居るが、以前は然うではなかつた。否現今でも大家の令孃で猶女學校に出すのを厭ひ古風な諸藝を仕込むだけで止めて置く舊式な親御が少くない。元來大阪には老舗主義とも云ふべき風習があつて、音曲なり茶道なり又裁縫なり何れも代々お出入りのお師匠さんがあつて、お母さんが那の人に教はつたからお前も彼處へお出でとか、姉さんが斯うだつたからお前も恁うお仕とか云ふ風に、凡てが保守的守舊的である。大阪に裁縫學校の無いのも矢張り恁う云ふ原因に基づくのである。其の代り一旦學校に入れて了ふと、全く學校に一任して了ふ。商業が忙しくつて東京のやうに理窟を捏ねて居られぬ爲か、冷淡の致す處か、何等の干涉もせねば注文もなく、全く任せ切つて居る。寧ろ任せ過ぎて却て困つて了ふ位である。其の代り教育の任に當る者は、思ふさま自己の抱負を行ふを得て、非常に都合が好い。東京のやうに、閑な豪い元老大官連が多く居て盛んに干涉し注文し、右で拵へて左で毀すやうな目に遭つては、折角の計畫も水泡に歸する外はないが、其處へ行くと大阪は勢力家の數が

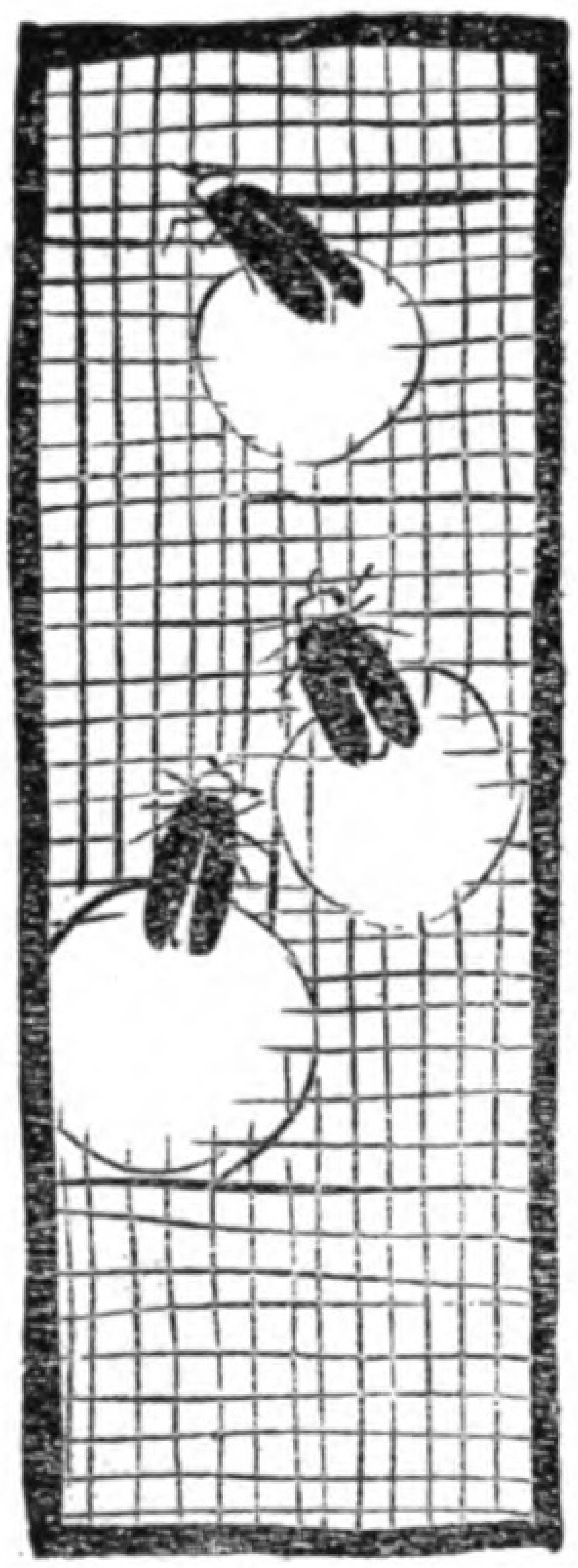
少く、而も纏つて居るから今後非常な發展を遂ぐる際にも、極めて順調に極めて穩かに短を棄て長を取り至極自然的に完全な發達を遂げられやうと思ふ。況してや此頃の大阪は次第に東京を凌駕せんとし、昔の東京を崇拜した時代と違つて、大阪自身にプライドを持つやうになつたのだから、今後の女子の發達は大に見るべきものがあらう。

△東京婦人に學ぶべき點

餘りに大阪を賞め過ぎたから、終に大阪婦人の東京婦人に學ぶべき點を言つて見ると、先づ第一には活々した所を學んで貰ひ度い。東京婦人は如何にも活々として心持が好いが、大阪の婦人は毫も活氣がない。平平凡々、何等の精彩がない、敎育者の言としては些と異様に聞ゆるかも知れぬが、東京の婦人は若き男子をチヤームする力があるが、大阪には夫が無い。表情の如きも西洋人と日本人、藝者と娘程違ふ。社交的でないことも先に言つた通りである。今後は恁ういふ點も餘程心掛けぬと、溫順で堅實であるとしても猶時世に遲るゝの誹を免れぬかも知れぬ夫から自分の意志を發表することも今少し熟練の必要があらう。今のやうに自分の意志を自由に且つ充分に發表し難いやうなことでは、今後の時世に遲れて了ふ恐れがある。



京都祇園祭（黒川翠山氏撮影）



母の勝利

青年會寄宿舍舍監　安部清藏

▲世界を股にかける女

近頃女の勝利と云ふことを題目にして、小説や脚本を書くのが流行しますが、その多數は、男に壓へつけられて自棄を起し、操を捨てゝ魔力をふるひ、男を手玉に取る下等社會の婦人をモデルに爲てあるやうです。これは昔から何國にもよくある事實ですが、殊に近頃は一般に著しく現はれて來たと思ひます。女が世界を股にかけて男を征服するのは、人世の眞相で、これが婦人解放の道であると論じた文士もあると聞きました。

甚だ申しにくいが、日本ではこの類の勝利婦人が海外に發展して、各國至らぬ隈なく男を手玉に取る勢は凄じいものであります。かやうに男が女に征服されるのは、つまり男が女を壓制した報ひで、現に海外に發展した婦人連は、内地で壓迫された結果であります。

▲今に屹度推寄せて來る

敎育が普及するにつれて、體力、容色の續く間の果敢ない勝利を望む女は少なくなるとしても、これに代る女權擴張問題の勝利問題がおし寄せて來ます。御承知の通り英國では政治運動をやつて石を投げ、窓を壞はし、人家に暴れこむ婦人連が出來るし、米國ではランドセルを脊負ひ、劍を提げて調練をする娘子軍も出來て、男を凌がうと敎圉いて居ますが、恐らく心身の發達した近代の婦人が、實力からも理論からも男女同權を主張するのは止むを得ぬ現象でありませう。この主張の可否は俄かに定められますまいが、遠からず日本へもこの意氣込が渡つて來るに相違ありません。女子

教育が盛んになれば、智力體力が追々男子と同じやうになるし社會にも女の權利に力を添へるやうになる。現に帝都の眞中で、良人を捨てゝ家出をするノラを劇に演じ、看客の多くがノラに同情を注いだところを見ると、もう向河岸の火事ではなさゝうです。女の順性の用を代へて逆性の用を爲すの語が愈々實現されるやうになれば、爭ふ女と共に居るより雨漏の家に居るに勝れりと歎息して、獨身生活を好む男が殖えるのは必定。社會のために一大事であるし、女性自身も決して幸ひではありません。

▲母としての勝利



梅雨の水顔にうつらふ綠かな（撮影）

佐藤紅綠氏が書下して帝國劇場で演じた母も婦人の勝利問題ですが、あれは御承知の通り、良人の不身持に苦しめられた女が二人の子を教育するために苦心した結果、息子は父親の不品行を見て神經過敏となり遂に投身したので、父は悔ひ改めたと云ふ筋です、母として男に勝つこのやり口は前のよりズッと道德的で、今の教育家が主張するところも此處にあるのでせう。一般に父は往々無茶をやつて子のことを考へぬが、母は一生懸命に子に盡す傾きがあるので、近來は母に心を傾ける青年が多く、地位ある家庭でも、青年が父を輕んずる風が見えます。子を武器として男の暴力に勝つのは、先づ日本婦人の將來における屈強の立場であ

りませう。

▲子供本位の結果はどうか

妻君が子供を武器として「郎君子供のためですから御酒は止て下さい。お遊びもお控へ下さい」と迫れば、放蕩な良人も自然勤愼家になつて段々善くなる家庭は近來多くなりました。併しかく子供本位の家庭は子にどんな感化を與へるかを考へて見なければならぬ。母は寢ないでも、父は禁酒禁慾さては冒險をやつてまでも子供のために盡すのは結構で、子は父母の愛を深く感ずるでせうが、その反面には、親は自分のためにはどんなことでも爲てくれると云ふ依頼心が養はれ、人は自分のために存在するものと定めこんで利己心が増長するものです。それで弱虫となり神經過敏となつて男の兒が母親そつくりの女々しい性格になる。近來の所謂良家庭から出る青年の多くは、一見スラリと伸びては居るが、心から態度、言葉つきまで、女らしく涙もろい。それで居て獻身的ではなく意志の弱いくせに却却利己心が盛んです。私は多くの青年に接して居るから實驗上よく知つて居ますが、優しい青年の心の内を探つて見ると、不平たら〳〵で、家に居た時はこんなちやア無かつた。お母さんはいつでも注意して滋養物を食べさせてくれた。寄宿舍や下宿の飯なんか酷いものだ。寢る時も起る時も、お母さんのやうに氣を付てくれる者はなし、殘酷な人達ばかりだと我儘な怨を懷いて居る者が多いのです。地位財産があつて子供の敎育に力を盡す立派な家庭から、弱虫で、泣虫で、それがどうかすると自殺を企てるやうな青年が出る毎に、實に同情に堪へませんが、つまり壓つけもたゝきもせずに子供本位にして守育て、室咲の花を拵へたのですから、外の風に當ると直にぐにやりとなり、悲觀に陷るのは尤のことであります。

▲父親の强い家庭

昔風の男尊女卑主義で、主人が怒鳴り廻はす家庭から、案外確乎とした立派な子が出るものです。子供の

自然を壓抑して無理な制裁を加へるのは、有害の點もありませうが、子供の意志を強くするには大にこれも必要であると思ひます。私なぞも親に思ふさま叱責られた事などが利益となつて居ることを切に感じます。放蕩をやりながら威張るのは勿論宜しくないが何か確乎とした主義を本位として、妻も子も眼中にない嚴格な父親が『何んだ貴樣達が知つた事か』と、妻子に一喝を喰はせて、妻子を縮み上らせるところに、子供の我儘を壓へつけ、子供の忍耐を養ふ力が充分あると思ひます。

▲武士の家庭の强味

主君を本位とした日本武士の家庭は、實に強い權威の下によく治まつたものであつた。そんな心得で主君に仕へることが出來るかと良人は妻を制し、郎君それでは上樣に申譯がございますまいと妻は良人を諫めたこの主君と云ふ一言は夫妻の力を強くする武器となつて、立派な子を養成したので、女の安心もそこにありました。武家の妻は實に重々しい力があつたもので、良人も家來に向つて、それは奥方に伺へと云ふ風に敬意を表はしたものです。今でも何々夫人と云へば浮華を連想するが、奥方と云へばどつしりと耳に響くやうな心地がいたします。

▲家庭以上のものを戴くべし

男を手玉にとる勝利、ふてゝ嚇かす勝利、權利を振廻す勝利は、やがて敗北を取る勝利で、眞の勝利は母の勝利に歸するのですが、前申す通り子供本位では目的を過ちますから、武士の妻のやうに、家庭以上のものを戴くことが肝要で、國家とか道義とか乃至神佛とかを本位として、妻たり母たる務を盡せばゆるがぬ勝利を占めることが出來ます。（明治母の會）



都會人の知らぬ和樂

文學博士　建部遯吾

△地方に却て西洋風あり

私はチョイ〳〵郷里に歸ります。今度も二三日前歸京したばかりですが、同じ郷里に歸つて、同じ村の人に接し、同じ村の家庭を見るのであるから、さして珍らしい事もなく、また興味もなさゝうなものですが、それでも歸るたんびに何か新らしい事を味つて來ます。

私の郷里では、普通細君の事を奥様とは申しません。奥様と云ふのは寺の内室ばかりで、普通上流の家では、若い細君の事を御新造様と云ひ、年をとるとおかみ様と云ひます。今度歸つてこれ等の婦人の應待振を見てつく〳〵思つた事があります。即ち東京の婦人は西洋的でなく、却つて田舍の婦人の方が西洋と共通の點がある事であります。

いつぞや外國の觀光團が來た時に、小花博士の一家が、その團員の或ものを、自分の家庭を開いて、奥様も子供も皆しておもてなしをした。ところが外國人は非常に喜んだと云ふ話ですが、外國では皆そんな風なんだから、喜ぶ筈です。吾々が彼地に居た時なんかも、度々招かれて行つた事があるが、どの家でも細君も出て來れば、子供も出て、家族總がゝりで歡待してくれました。尤も外國人だからどんな顏をしてるかと珍らしがつて出て來るのだと云へばそれ迄ですが、これは實際彼地の美風なのであります。

△家庭の接待と社會の應接

東京では何うであるかと云ふと、主人公を訪問しても、女中が取次に出て應接間で主客相對するばかり

で、お茶も別室で調へて小間使が運んで來ます。この場合、せめて妻君がお茶を運ぶだけでもして呉れるといゝのだが、餘程親しい仲でないと顏を出しません。吾々大學の教授間では、大抵家族とも知り合つて居るから、細君も出て來ますが、お役人となると、モウ奥樣の顏は見られません。有名な某博士のお宅にも度々行くが、十年ばかり以前に、かるた會に招かれて行つて會つたまゝ、奥樣の姿は一向に見た事がない。居られるのだか、居られないのだか分りません。まづ早く云へば、



吹送るけしきの杜の朝風も青葉が上は音なかりけり。（昇[illegible]）

學校の研究室や會社の應接室で面會するのと同じで只給仕が女中に變ると云ふまでの事です。

かう云ふ風で、家族と親しむ機會がない爲に、特別に家族會などの必要が出來て來るのです。その家族會などでも、誰それは妾腹の女だからと云と、肩身がせまくて出られない。すると樂しみを外に求めなければならないので、芝居なんかに行きたくなる。それも一人では詰らないから、書齋で一生懸命書見をしてる主人に泣きついて、ねえあなた、芝居に行きたいから貴郎も一緒に

行らして下さいなどゝ引張り出されるので、主人こそ迷惑至極です。

△茶の間の妙用

私は交際も狹いしよくは知らないが、恐らくこんな事は東京の家庭及び婦人一般の風習だらうと思ふ。だから私は田舍の婦人の方が西洋的であり、また田舍の家庭の方が理想に近いものだと思ふのです。

先づ私の郷里などでは、どんな家にも茶の間と云ふのがあつて、こゝに主人も居れば細君も居る 老人も居れば子供もゐる。そして客があるとこゝに通して、家族皆で歡待します。お茶を入れるにしても、細君自ら寒いとか暑いとかの話をし乍ら注いで出すといふ風で、主婦自身客をもてなす事は普通の事となりて居ります。殊に一番よく外務次官の役を務めて居るのは寺の奧樣であります。郷里の眞宗寺では、少くて百五十、多くて七百ばかりの檀家を持つて居ますが、それ等の家から交る交る參詣をする、それを巧みにもてなして行く外交術と云ふものは、とても都の人の及ぶところでありません。あれに外國語を敎へたら外務大臣の夜會に突出しても恥しくないと思ふやうな婦人はいくらもあります。


六月の陽炎高し百合の花　（露石）

田舍の茶の間は、只客を待遇するばかりに用ゐられるのではありません、小作人が來れば、それともそこで要談をし、村會議員が來ればまたその茶の間に上げてこれと村治を談じ、子供が惡るい事をすればやはり茶の間に呼んで說諭をする。モットひどくなると茶の間が裁判所にもなるのです　斯くの如く田舍の茶の間なるものは、政治、敎育外交あらゆるものゝ所謂政所となり、問注所となり、また家族の娯樂の場所ともなるのであります。



山吹の花色衣ぬきかへて白きひとへも珍らしきかな（梨冲）

△都人士の知らぬ樂み

東京などでは隨分女でさへ外に娯樂の場所を求める人があるが、田舍の人はすべて家庭を以て娯樂の中心として居ります。社會の進むと否とは、この娯樂を家庭の内に求めると外に求めるとに依つて別れるので、田舍はこの點から云つて、はるかに上流に位するものだと思ひます。

日本の習慣として父子の同居と云ふ事が例となつて居る。特に田舍はさうの樣です。

これは家庭の和樂のために大に都合がよいと思ひます。先づ一軒の家には大抵二夫婦がある。少くとも一夫婦半はゐる。現に活動してる夫婦と、モウ隱居に近い老人とがあつて、主人が外で働けば、老人は多く盆栽をいぢるとか、草花を植ゑるとか、さう云ふ方から家庭を樂しくし、また或は家根の破れて雨の漏るやうになつた其の繕ひ迄も心づけてくれる。天氣の好い日には釣竿をかついで釣魚に出かける。そして其の釣つた鮮魚を嫁が調理して一家團欒の夕餉の膳にのぼすなど、都人士の知る事の出來ない和樂があります。

とも角も全體の調子がこんな風であるから、田舍の人は特別に家族會を開いたり、交際の機關を設けたり、芝居に行つたりしなくとも、淋しいとも思はねば、物足りない感もしないのであります。

東京の家には應接間、寢室、勝手、書齋など云ふものはあるが、あのなつかしい田舍の茶の間と云ふものはない。强て云ふならば、仲働が八百屋や魚屋と交涉する臺所の次の室がそれでせうか。若し新に家を建てるなら、此の茶の間は是非つくりたいと思ひます。

△梅雨期の注意

梅雨に入ると氣候が不順勝ちで俄かに蒸し暑くなつたり又た俄かに冷やかになつたりして平生健康な人でも、ひよつとすると風邪に罹るとになります其れに入梅の雨に濡れると惡寒を催ほす場合が多ほムりますから此の際には取敢へず普通水呑コップ（一合入れ位）に土生薑の卸ろしたのを入れて熱湯を注ぎ込み然る上に醬油をさし一寸箸にて掻廻はして其の儘飲むと大抵氣分が癒ります。子供などが夕方雨に濡れて學校から歸り其時は何共なくて夜中に入つてから惡寒を催ほすとがありますから斯る場合には先づ此生薑湯を與へて置き其れから醫師を招くとよろしいのです風邪に罹つた時は何方でも梅干湯を發汗劑とし用ゐます梅干と昆布とに水を加へて土瓶で以て水から充分に煮出しのたを何杯も〱飲みますと妙に發汗します

白いきもの



寺澤幸太郎畫



便秘に惱む婦人の福音

女醫　堀田千代子

吾々人間は普通一日に一回か、二日に一回は快き便通を見なければなりませぬ　然るに世間には四日、五日甚しいのは十日間以上も便通がなくなりて　其れが爲め頭が重くなつたり、頭痛がしたり、時には非常にねむくなつたり、又反對に夜分やすまれなくなつたり、甚しい時には惡心、嘔吐、胃部膨滿等を來し何となく氣分がわるくなつて其都度通じ藥か、灌腸の力によらなければ一寸便通の起らぬといふ、所謂便秘症に惱む人は甚だ多い樣ですから、大體其れに就て一般の心得をしるしたいと存じます。

(一)便秘は攝取する食物と大なる關係を以て居りますから便秘を起す樣な食物を避て、腸の蠕動を亢進する樣な食物を取る必要があります。　即此目的には茶、コーヒ、チヨコレート、赤酒等の飲料を廢して、之に代るに白湯か麥湯を用ふるがよろしい。水分を充分に攝取すると便通がよくなる關係からして、早朝空腹時に冷水を多量に服用するか蜜か、炭酸水か砂糖水を召上ると便通が起つてまゐります。此他便秘に惱む人達は、鹽からい漬物鹽いわしなどもよく御座います　肉食は便秘を起す傾がありますから、すき燒又は西洋料理を召あがつた時　新しき野菜、豆類の煮たもの又は林檎、蜜柑、桃等の熟したるものを召上ると調和はよくなります。麥飯よりは米飯の方は便通わるく尚軟く煮た米飯は便秘を起し易きものであります。脂肪に富む食物、即てんぷら　バタ、蜂蜜等は凡て便通をよく致します。

(二)平素煙草に慣れない方は　朝方起床の時、煙草を

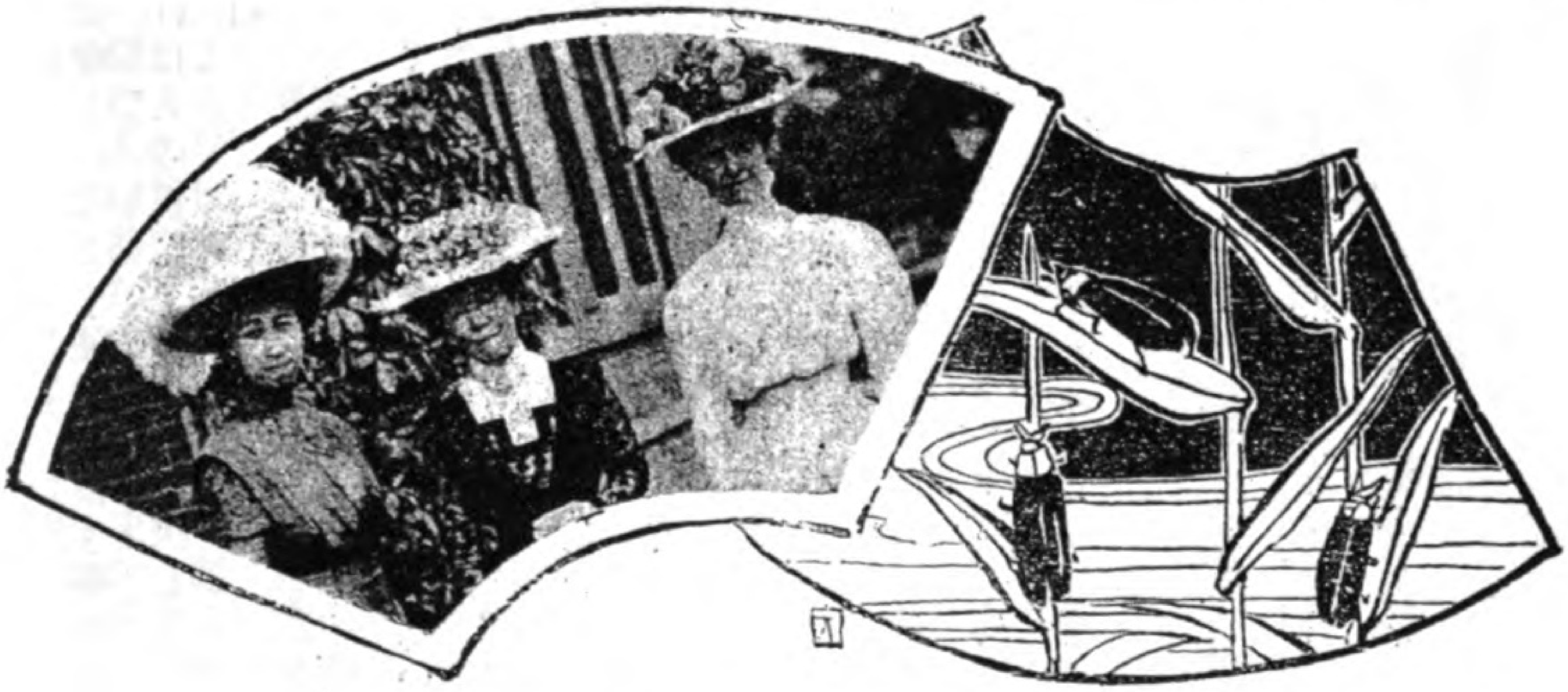
御喫しになると便通を催す事があると申しますが、これは人の質によりまして決して一般の例にはなりませぬ。

(三)氣分の沈んだ時即ち憂鬱の時は便秘に傾き之に反して爽快なる時は通じがよろしいと云ふ樣な精神的の關係がありますから、常に便秘に惱む人には便秘を心配しない樣に諭すがよろしいです。一般に習慣的に必ず毎朝一定時に厠に上りて便通を試みますと案外奏効のあるもので、いつの程にか此便秘の苦惱を忘れてしまふ事が出來ます。

(四)腸の蠕動を盛にする目的からして腹部を輕く適當に按摩する事を日々繰りかへしますと、數週數ヶ月にして永き間の便秘症を治する事の出來る一法となつて居ります。

(五)尙常に座業に從事する人、特に文筆に從事せらるる人、裁縫に熱心なる方々は自然其仕事に慾がついて便通を催しても仕事の終るまでおのばしになる事が多い結果。知らず知らず便秘に陷る事がありますから、之は日常便通を催しになると、時間をのばさずなるべく早く便所に行く習慣を作ておかるゝ必要があります、或は身體適度の運動をなし、時折の散歩又は體操的運動の樣なものを試みらるゝとよい成績を見る事があります

猶一言申上度い事は凡て便秘の時に藥品を御服用になる事を成る丈避けて頂きたいのであります。此事は全體何れの通じ藥にも大抵皆慣れといふ作用があつて初め少量で奏効しました藥品でも次第に其分量を多く御用ひにならぬと奏効はなくなるものでございますのと又此通じ藥の副作用として痛もなく何等の不快症狀なしに適當に通じのある、所謂理想的の便通催進藥は今日一寸見當り難い樣ですから、便秘の場合に通じ藥を用ふる事は成る丈御やめにならぬといけませぬ、日常便秘の場合に於て服藥灌腸等を試みらるゝ事あるも之は要するに以上申述た樣な方法を先づ試み終られた後唯最後の場合に限りて御用ゐになる樣の御心がけは必要かと存じます。



空高くのぼれば人のあふぐかな光りはおなじ螢なれども（正風）

常識教育

新鶉衣

化粧論

曙内侍

何人の負け惜みぞ　男は裸百貫とうたはるれども　湯屋の三助が天下を取りし例も聞かねば、臺灣の生蕃が樞府に入りしも聞かず。古往今來、人の上に立てるものは、縱しや寶冠玉履を飾らずとも、常に勿體ぶりて裝ふこと肝要ならめ。況して女の身にし生るれば、日髮日化粧の嗜みは言はずもがな、懷中工合のゆるす限りは、朝たに三越白木屋にしたしみ、夕べに大西香取屋になじまむも、更に妨ぐることあるなし。これを古への例に徵するに、脂粉を嫌ひし虢國夫人は、君寵終に厚化粧の楊貴妃に及ばず。淡粧を誇りし江戸藝妓何時しか跡を絕ちて、今は唯だ紅紫爛爛たる華美づくりのみぞ世に榮えたる。されば、君なくばなぞ身粧はむと歌ひし奈良朝の舊式を捨て、女子は良人の爲めに裝ふ狹理に囚へられず　すでに嫁げる人も、未だ嫁がぬ人も　唯だ美しく粧ひぞ凝して、萬人の眼を聳たしむるこそ此上なく目出度けれ。彼の絕代の史家司馬遷さへ、誇者は權に死すと云ひければ、婦人の化粧に耽るゝは、いかで口惜くあるべき。子路は難に赴きて冠を整へ、重成は兜に蘭麝を薰き

こめ、共に芳名を千載に傳へぬ。今われ世の婦人に宣す。髪は蓬々として雀の巣たらしむるなかれ。着物は寛く結びて肌を開くことなかれ。物學ぶ暇は無くとも、必ず鏡臺に向ふ時間を作れ。雜用の費えは節しても、必ず美服を調ふるを忘るゝなかれ。婦道を踏みて甃るとも、俯仰天地に恥づること無けむ。

蝙蝠の解

川添ひ柳、水に垂れて、夏の夕ぐれ蝙蝠の飛びかへるは、實に言ふばかりなく趣きあり。さりながらつら〳〵惟んみるに此のもの、元と禽にもあらず、獸類にもあらねば、彼の經讀まぬ沙門の僧俗いづれを分ちがたきに等しく、人のこれを憎むこと大方ならず。さるが上に、晝は潜伏れて夜に出づるが故、何やらむ、品行正しからぬものにも似たり。己が身の倒しまに懸れるを知らずしてなか〳〵に人の倒しまに歩むを笑ふは、これぞ智慧足らぬ下司女に似て、滑稽至極の沙汰にぞ有なる。されば和泉式部は鳥なき島の蝙蝠を詠みて、ひとへに數ならぬ身に比喩へにけり。さあれ、蝙蝠の狀態のいと面白ければ、婦人の持てるパラソルにさへ、專らその形を型りぬ。あはれパラソルの陰の人よ。蝙蝠の行動にまでは眞似せずにもがな。



百合畑に入日の光遠きかな　（禾水）

縁日の賦

一社の祭禮に江戸時代の俤をあらはしたるは、早や何日しかの昔となりて、今は唯だ縁日に舊りにし時の影ぞ宿れる。見ずや大路は電燈の光いと眩ゆきに、爰許小田原提灯ブラ下れる薄暗き門を入れば、毒々しき火焔のかをり鼻を衝いて、見世物の銅羅の音耳を聾しぬ。人は



黒山の如く推しつ推されつして歩けば、兩側の露肆も眼に入ること甚と稀れなり。されば縁日は此上なく俗なりとて、紳士淑女の踵を向くるもの少けれど、

蛬子に戀古りにけり宿の妻　（室夢）

春は植木棚に梅花の匂ひ床しき頃、夏は酸漿店に涼しげに水打ちたる頃、秋は蟲賣の籠に松蟲鈴蟲さては轡蟲の偏へに野邊を慕ひて鳴きすだく頃、冬は殘菊霜を帶びて色漸く紫にならんとして、常磐木の緑色に並べる頃、是れ亦た一種の趣味なきにしもあらざれば、相思の人のそゞろ歩きに、樂しき夢を語らむとするは、あはれお葉純之助が果敢なき戀のさゝめきのみにはあらざるぞかし。

舌の説

口は禍の門、舌は禍の根と云つれば、冠木門に枝垂柳の風情はなけれど、世に禍を轉じて福となすの俚諺あれば、あながち禍の根と言ひけなして、一概に排斥すべきにもあらざらんめり。夫れ、春の日永の舌足らずには臺所の煮物も酸ゆべけれど、師走の忙しき長廣舌には蜂谷に頭痛膏の用意肝腎なるべけれど、緩急その度に中りて甚と爽やかなるものには、誰れか恍惚として耳を傾けざらむ。されば此のもの一枚を資本に、蘇秦は六國の宰相を贏ち得、酈生は齊の七十餘城を降しぬ。更に近頃の議員運動を見るに、理想選擧とやらむ言ひて、黄白の貴きをも後へに瞠若たらしむるは、

偏へに此のもの丶力なりけり。その偉大なること、唯だ舌を巻きて驚くの他なし。莫遮、折に觸れて多々ます〳〵辯ずる二枚舌、三枚舌を使ふことあらば、忽ち閻王の爲めに恐しき目を。

蝸牛の箴

蝸牛々々、汝は如何にして然は遲きぞ。天かけりゆく飛行機を見よや、大地馳りゆく自働車を見よや。一刻の價千金の忙はしき、世に生れいでゝ、何とて斯くは一文錢を拾ふやうに辿々しく這へるぞ。

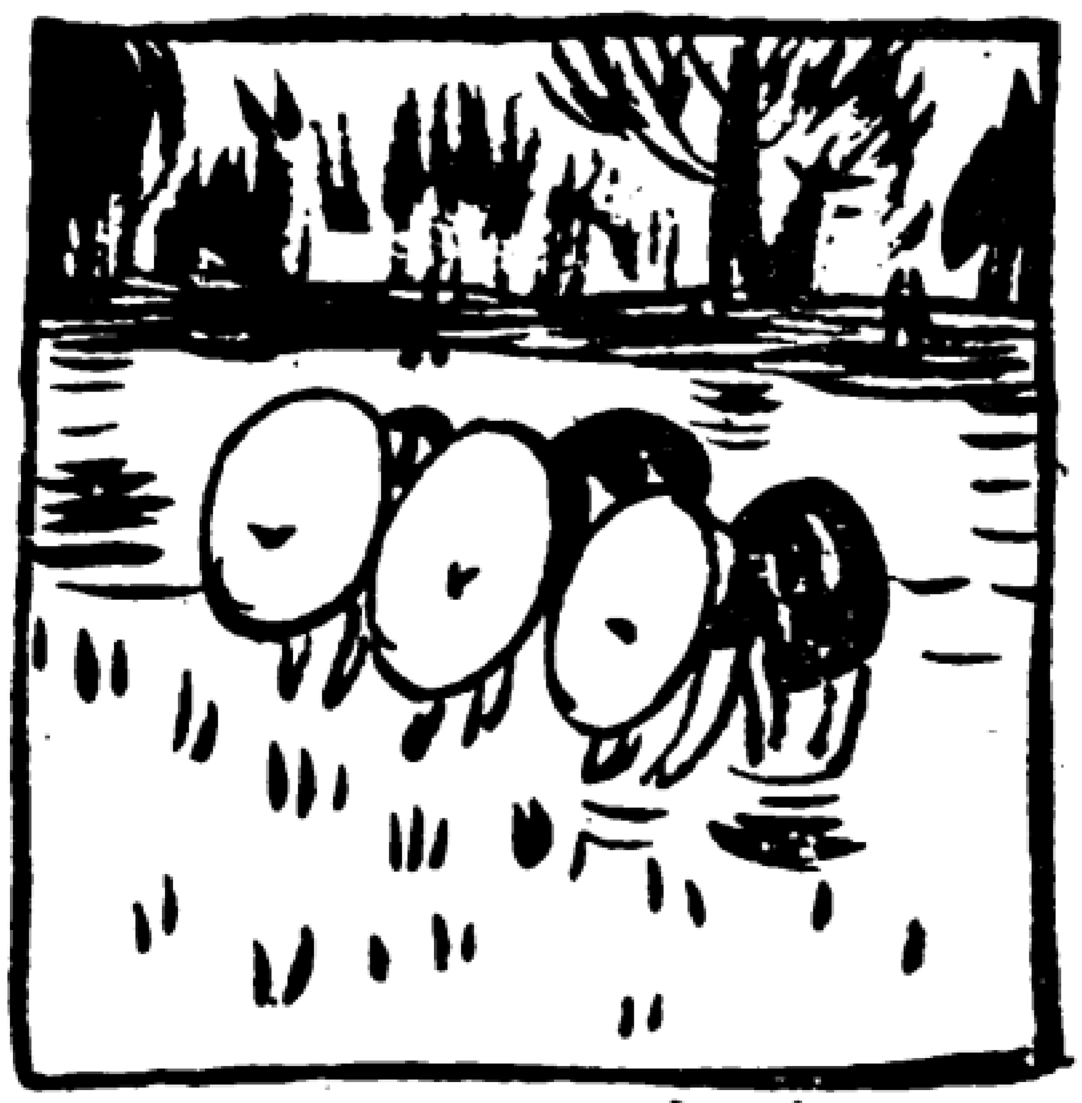
蝸牛々々、汝は如何にして然は意氣地なきぞ。雄々しき角を振りたてながら、物に脅ゆれば忽ちに恐縮す。生存競爭烈しき世に生れいでゝ、何とて斯くは鬪ひを避くるぞ。

蝸牛々々、汝は如何にして家を負ひながら歩むぞ。文明の緊は軈て簡易生活を喜ばんとするに、何とて斯くは行く先き〳〵迄重き苦痛を荷なはんとはするぞ。



遲鈍にして臆病なる、且つは文明の趨勢に逆らはんとする、いづれか滅亡の素地にあらざるはなけむ。汝の角上に二大王國ありなど丶、途方もなき囈言を吐けるは、莊子が例の駄法螺として取る可からず。牛の仔に踏まるなと注意せし寂蓮が言葉こそ、返す〴〵も肝に銘じて忘るゝことなかれ。

葉書だより



○

御手紙嬉しく拜見　承る丈けでも面白さ像想せらるゝ御會合、花の如き御集りの中へ、濱のお奉行樣然と罷り出で候事　些、後めたからぬにしも候はねど、今更ぶつたとて、振り甲斐も無い程何も彼も御存しの方のみなれば、是非御末席を汚し申す可く候、只今是よりお風呂にでも入り、顔も剃つて、明日は三番位の汽車にて、濱邊の木曾殿都入致す可く、萬は御目もじにと、うれしく、かしく。

○

乍例厚き御待遇深く御禮申上候、過日の遊び勞れで電車の中も夢か現か、危く土橋を乘り越す處にて候ひき、停車場にて、新橋迄三等一枚と口すべらし、出丸掛に茲は新橋ですよと叱られたる、我作ら振つた不覺に感心致候、にやあ適はない等と牛耳る事御無用、云はれぬ先に人を制し置き候、是より面白く樂しく賑やかなりし夢でも見可申候不取敢御禮迄、皆樣に宜敷く願上候、かしこ。



孤燈孤影を映す窓下にて　りう

○

畫中、麥藁帽に籠下げたるは私、帶いかめしう洋傘かざし給へるにKの君に候、此頃の汐干、海岸にて馬鹿貝の獲物有りと聞き、殊更ぐきやかなろ籠下げてK君誘ひ出だしたろにて候、來て見れば何處やらで、馬鹿釣つた馬鹿つつた、といふ聲の聞ゆる心地して半日の涉獵即ち空籠下げて歸り申候、かしこ

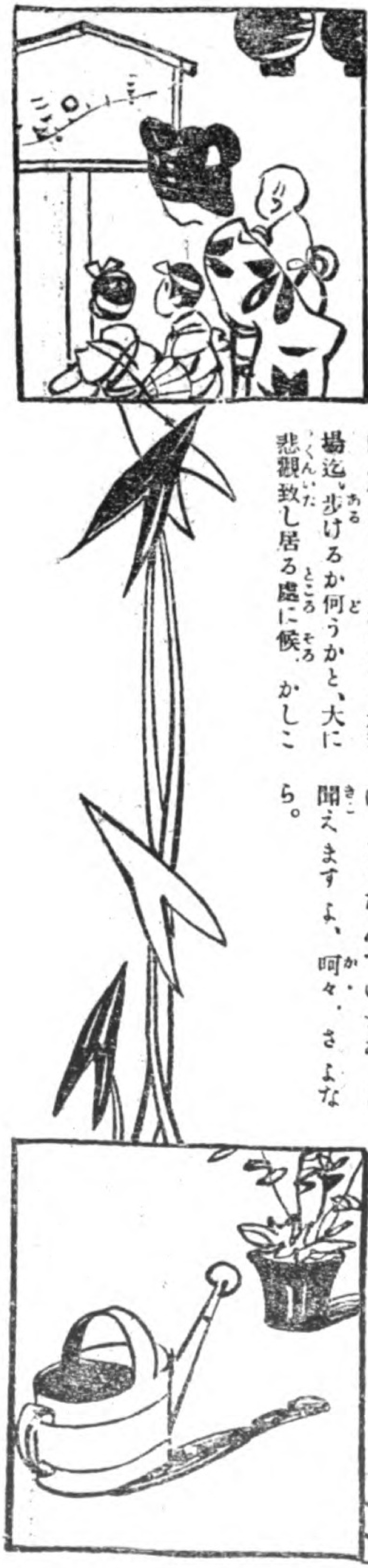
○

今日は舊曆上巳のお節句、人より貰ひたる連翹だけ、心許りに雛の手向と致し、些のお重詰、一瓶のお白酒、あはれに昔の春を偲び出で申候、母なき宿はお雛樣も何も無く面淋しげに見え候は、もてはやす心からにや候はんか、御庭は早や青葉に候べし、かしこ

○

今日、近き山を分け廻りて、ゆくりかに新綠中一株の遲櫻を見出申候、爛漫と咲亂居候處、他の散りなん後や咲か





濱千鳥

まし、との顔付き心有らん人に見せばやと存候、盛裝せる老若、趣向を凝せる狂態等を、お景物に添へて見たそ都の花は如何にも陽氣なものに候へ共、かゝる處かゝる折の一本は、形容の辭に苦しみ候程、清楚、優美、閑雅、などでは中々云ひ盡されず候、厭世的ならずして最樂觀的に花の下にて脊死なんと申したく相成候、御許樣ならば此の心地御了解相成る事と存候、兩三日中に上京致度くと存候、皆樣に宜敷。

○

今日當地金澤へ牡丹見に參り候、徒歩にて山道より致し候處、暫くの寢足中々に苦しく慘澹たる有樣にて辿りつき候、只、色の紅や靑や展げられたる中を、無意識に歩き廻りてやつと東屋樓上に腰落付けたる處、只今此繪葉書に向ひ候へば、成程こんな花も咲いてたか位に思ひ出し候、大分風立ち波も荒き樣ながら、歸途は船便によらんと婢に賴み候が、直ぐ樓前なる舟着場迄、歩けるか何うかと、大に悲觀致し居る處に候、かしこ

○

此の繪、銀箭篠を衝いて落下し來る處、小さな洋傘へ頭突き入れて　前のめりに小刻む人　是は私に候　今日初夏の心地よき日光をあびて外出致し候處、歸途は迅雷の中を此の始末に候、恰度御許樣御歸校の時刻、東京も如斯風雨御座候ひしや、歸宅すればもう氣が大きくなり

五月雲轟き破ゝはたゝ神、などゝ駄句り候處、忽然雲散り雨晴れて、けろりとしたる上天氣と相成候、正しく此名句に、天の感應ましましたる事と已惚れる丈け、未だ可愛い處か殘り居り候、呵々。

○

唸り始めましたよ、風が　今日から。

麥が穗を拔いた初夏の生暖い風にのして、グワーン、グワーンと鳴る處、何となく田舍の悠長さが現はれて居ますお正月、耳の斷れさうな寒風に、ピン〳〵と鳴る二枚半が江戸つ子のベランメイ口調とすれば、正に逗子のうなりは、さうだんべいなあ、と聞えますよ、呵々、さよなら。

六月



日　5. 12. 19. 23.

月　5. 12. 19. 26.

火　6. 13. 20. 27.

水　1. 8. 15. 22. 29.

木　2. 9. 16. 23. 30.

金　3. 10. 1 24. 31.

土　4. 11. 18. 25

幾日にもわたりて降りのみつゞく皐月の雨の　ものうき中をあやめの花の人なぐさめ顔に咲き出でたるは、床しくもしはらしく、雲の絶間をひそかにもるゝ月の影。闇をつらぬく時鳥の聲、若竹の葉裏に夜をこがるゝ螢火のひかりは、いづれもとり〴〵物思ふ人に、歌よめ句つくれとてにや

人柱ありし昔や五月雨

少女小説

母のおもかげ

口繪＝宮川春汀君畫　裝釘＝高村眞夫君畫

全一册洋裝
四六判並製
美裝紙數
二百四十餘頁
正價四十五錢
郵税六錢

河崎醉雨君著

親と云ふ者に因縁淺さ二人の少女を捉へ來つて其の哀れなる運命を著者獨特の同情ある筆致もて書き列ねたるもの也二少女は元來同胞にあらずして義姉妹なるが二人共其の母人を懷しむの情極めて切なるものあり悲劇交々起れど相互に協力一致して能く萬難を排し遂に立身出世して地下の母人の靈を慰するてふ物語也されば父母に緣薄き不幸なる少女達は一讀萬斛の涙を濺いで奮起するなるべく又父母に幸福なる少女達は今更の如く其の鴻恩に感泣して愈報謝の念を鞏固にするなるべく何れにしても滿天下の少女達の讀了せしならば必ずや精神修養上の一助たるべきは疑なく實に純潔無垢如何なる家庭に提供しても敢て憚らざる近來の好著也

東京本町
博文館
振替貯金口座
東京二四〇番

女(四の二)

すぐ試みよ

○眉毛口ひげ髪の毛うすき人○梅毒其他病氣にてぬけ毛した人
○御婦人はいぎわのあしき人○御婦人出産後に髪の毛ぬけた人
○やけど切きづの跡毛なき人○ぬけ毛を止め毛を多くしたき人
○皮膚病でき物の跡毛なき人○其他あるべき所に毛無人薄き人

毛はえ藥の大王 ドンリ

本劑は毛髪專門家醫學博士リンド先生の苦心發明せし新藥にして未だ我國に廣く行はれずと雖世界に於ける毛生藥中の大王にして他藥を用ひて無効失望せる者にもよく偉効を奏す。本劑を患部に塗布する時は忽ち偉大なる効能を表はし皮下に至りて毛根を刺戟し以て毛髪の發育を旺盛にす婦人のはえぎわの悪しきを直し毛髪眉毛の薄きを濃くし、ぬけ毛を止め新毛を發するには並瓶を用ゐ、ハゲ無毛等には特瓶を使用せよ、完全なる毛髪を發生し其苦惱を去り幸福の身となるべし。此の如く藥効偉大なるも劇毒藥を含まず、皮膚を損せず、毛の發生すべき所なれば本藥にて發毛すべし御安心の上一日も早く此新藥を用ゐ蘇生の喜びを得よ●藥價送料共並瓶一圓十錢●特瓶二圓十錢●注意藥價の高きは世にありふれたる無効の藥品と相違し原料高價なればなり。



御婦人方の御顔を汚くする二ッの病氣

其れは第一がソバカスとて顔一面に小さき黒ずみたる點々が百も千も出來るものである。之をあとをも殘さず奇麗に拭ふが如く治する妙藥あり。其れから又顔一面に小さき吹出物ボツボツと出て指で摘むと中から白い脂肪の固り出づるもの之をニキビと云ひ治療せずに打捨て置けば慢性となり自然に治しても顔に穴が殘り見苦しくなるソバカスもニキビも下記の妙藥にて全治せし事は多くの實驗禮狀等によりて明かなり

ソバカス取藥 藥價送料共一圓九十錢

ニキビ取り藥 藥價送料共金七十四錢

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

東雲堂藥房

ほくろ

月に村雲、玉にきず、如何なる絶世の美人にても、お顔の中に大きなホクロなどあらば實に見苦しきものならずや。ホクロ取りの藥は色々あれど多くは無効にして用をなさず、又時によく取れる藥あれば劇藥にてホクロは取れても見苦しき跡が殘り、安心して用ゐられず、然るに本店にて發賣するホクロ取りは決して少しの危險もなく其効亦偉大なり、速に試みよ、藥價送料共六十四錢、切手一割増

あざ

アザ取藥にも色々あれどこれ又多くは無効にして有効なるもの殆んどなし　然れども本店發賣のアザ取り藥は効能顯著にして、たとへ顔面にてもアトを殘す事なく又夕方塗布して明朝は洗ひ落し置くものなれば人知れず用ゐる事を得べし、

あざの大きさ二錢銅貨位より小さければ小劑を用ゐ、二寸四方以内なれば中劑を用ゐ、其れより大なれば大劑を用ゐらるべし、藥價送料共小劑一圓六十錢、中劑二圓六十錢、大劑三圓六十錢、切手一割増

わきが

わきがの臭ひは他人には甚だしく同室に堪へず、故に甚だしく人に嫌はれ、交際上の親密を欠き立身出世の妨げともなる、故に一日も早く之を全治せしめざるべからず。本店發賣のワキガの妙藥は最近の學理と幾多の實驗とにより研究發見せられたる理想的新藥にして効能最も顯著なれば他藥にて無効の方も失望落膽する事なく速に本劑を用ゐて其苦惱を脱せよ●藥價送料共一圓十錢慢性用二圓十錢切手代用一割増

・やせ藥・



男にても女にてもでぶ〳〵とふとりたる者は肥胖病といひて**甚危險**なる病症にて時に**生命を失**ふ事ありまして婦人の肥滿せるは殊に見苦しきものの故速に全治せしめざる可らず、郵券二錢封入申込の方には**醫學博士筒井先生**の學説肥滿病自宅療法及其良藥を詳報すこれによりて療養せば少しの害もなく程よくやせて速に美容強壯の身とならるべし。

東京神田錦町三丁目
電話本局四五六七番
振替東京八六四二番

東雲堂藥房

女(めの三)

巖谷小波先生全快紀念出版　六作家合著

お伽パーク

洋装四六判
總クロース上製
紙數三百六十餘頁
口繪 石版彩色刷六枚 寫眞版一枚
正價七十錢
郵税八錢

●變化椿…西村渚山君作
●命の箱…沼田笠峰君作
●笑ひ藥…竹貫佳水君作
●不思議の水…武田櫻桃君作
●裸八郎…黒田湖山君作
●黄金の城…木村小舟君作

小波巖谷先生の御病氣が御全快になつたお祝の紀念として出たのが、此お伽パークでありきす。筆者はお伽噺に多年の經驗と、多大の名聲とを有する例の六人で、いづれも皆平常小波先生御指導の下に、これが研究に從事して居る人々だけ、他のかいなでのお伽噺作家とは自づから其撰を異にして居るのは勿論、このお伽パークは小波先生御病氣の御全快と共に、いづれも勇み喜んで執筆したものでありますから、其力の籠つて居ることゝ、其お噺の面白いことは、こゝに申すまでもありません、これまで澤山世の中へ出たお伽噺中での面白いお伽噺なのであります。小波先生の御全快を喜んで下さる方々は更なり、何人も出ましたら是非讀んで戴きたいものです、何しろお伽界の記錄を破つた此大快擧は、皆樣がまた大々的に歡迎して下さる事と信じます。

東京日本橋本町　博文館　振替東京二四〇

女（ぬの四）

祝博文館創業二十

博通社の品物は善くて安くて確かで早く届く

アイスクリーム製造器

もう旦那様御歸りになる時分故博通社から買つた器械でアイスクリームを拵つて御待申さう夏の御客様には手輕に十分間で、上等なアイスクームが出來ます

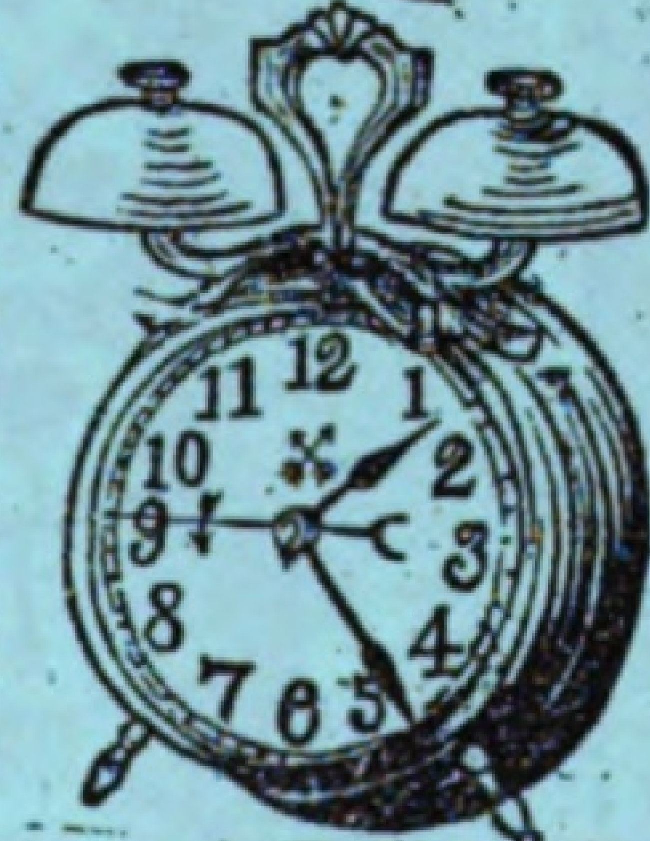


（製法付）特價二圓四十五錢

送料 内地卅錢 海外五十錢

優美高尚

皆さま毎朝お母樣に起こされずに起きて、遲れない樣に學校へ行かれるには此の時計がいります



優美で高尚亦實用的な目覺時計美人で亦學問のある令孃と同樣

特價 四圓五十錢

送料 内地 十二錢 海外 卅錢



東洋唯一

メールオーダービヂネス

博文館代理部

博通社

東京市日本橋區本町

電話本局六百十四番

振替口座東京五十番

●皆さまが既に善く御承知の通り博通社は何んでも●

●皆さまの御入用品を他店より御安くし差上るので●

電話電鈴界の革命

御屋敷内に、説明書の架設圖さへ見れば誰方にでも架設の出來る電話離座敷と母屋と應接室と居間との間階上と階下などに架設して實に便利な電話、瑣の設備なしで三ヶ所で御話が出來ます

門や玄關に架設して來客の用に供し盜賊の要心になる電鈴安くて架設簡易なり

電話壹臺 金八圓五十錢

電鈴 甲種一圓六十五錢 乙種一圓十五錢

電池一箇金八十錢

架設簡易取扱安全

（説明書無代進呈）

（取次御望の方は御相談に應ず）

アタス ■萬年筆■

ホソクかけるので好評嘖々たるスター萬年筆

■二圓六十五錢■

十四金ペン先丈夫で安くて永久使用が出來る

送料内地 十二錢 海外 卅錢

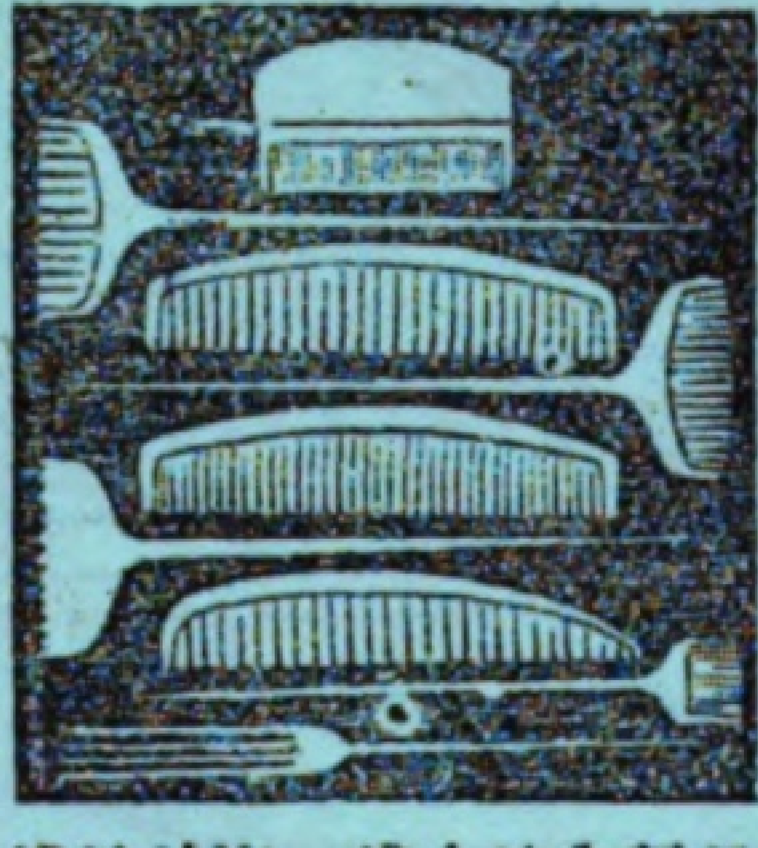
■萬年筆■ アタス

女(ぬの六)

五周年紀念特賣品

●皆さまの間には博通社の御評判は非常に善いのです●
●皆さまの御家庭で必要な家具料理の器具及材料又は●
●皆さまの日用品着物時計指環ブローチ書籍文房具又●
●皆さまが御望になる細工物とか彫刻とか其他色々な●
●皆さまの御要求は充分な責任を以て屹度御用辨致し●
●皆さまの御満足なさる様廉價と誠實とを以て盡し升●

ツゲ製櫛一組



ツゲ材は上等細工亦精妙
是非一組買て御使下さい

特價壹圓廿五錢

送料内地十錢　海外廿錢

寝冷あらず

愈々夏、坊ちゃん孃ちゃん方が下痢をやられるのは夜中裸體になられる故です其所で此



二歳用特價金參拾五錢
三歳用同　四拾錢
四歳用同　四拾五錢
五六歳用同　五拾錢
七八歳用同　六拾錢
十歳用同　六拾五錢

送料　内地五錢　海外五錢

■サイホンと夏期■

行水使つて汗を流した後家庭の團欒には無くてならぬサイホン器械主婦の嗜としても夏期に於ける御客來に無くてならぬサイホン器械



サイホン器械（製法付）特價二圓八十五錢
發生瓦斯一打には特價一圓

■家庭とサイホン■

■キング萬年筆■

特別の装置がしてあるので御使用に際してはインキを叩き出す必要無スラ〳〵と書けます

■四圓五十錢■

■キング萬年筆■

送料　内地十二錢　海外廿錢

説明書は無代進呈

奥さまも御孃さまも博通社を利用なさいまし

女(ぬの七)



腦病神經衰弱の良劑

レーベン

レーベンの特色と効能

レーベンは常持醫學士の發見に係るものにして米食人たる東洋人種に適合すべく和漢洋法を折衷して得たる植物性の藥物にして「リンサン」の多量に加味せる絶好の良劑なる事は醫學博士岡田、森戸山腦病院長、等の證明による明白なる事實なり。

醫治効用 は回性、興奮、鎮痙の三作用を兼備せる最新式の錠劑なれば腦、神經衰弱、頭痛、眩暈、逆上、便秘、不眠ヒステリー等を治癒し心神爽快元氣旺盛ならしめ殊に陰萎遺精、早漏夢精、生殖器神經衰弱等にて交接不能となり人生の快樂を奪はれて長へに悲歎憂愁の泪に暮るゝの人は皆何れも腦神經衰弱其婦人にありてはヒステリー患者なればなり故に以上記載の其一を患ふる人は最後の試藥として

レーベン百錠乃至二百錠を試みよ其効神速に顯はれて平靜和樂の健康體となり、得も云はれぬ愉快に其日を送る事を得べし・夫の大黄の下劑を主とせる粗藥にあらず、論より證據今直に試みよ

●本病患者には腦神經衰弱自然療法と精神療法とを發行所へ「ハガキ」にて申込次第進上す

定價			
三十錠	三十錢	二百錠	一圓六十錢
五十五錠	五十錢	四百錠	三圓
百錠	八十五錢	八百錠	五圓五十錢

各藥店にあり無ば發行所へ
全國送料無料信用なき藥店にて他藥を賣付んとす注意

發行所 東京銀座弓町二二 電話京橋三〇八
弘濟藥院 中南定太郎
貯金口座東京七七七七番

女子大學寄宿舍生活の懷古

友近里子



◎十年一と昔—當時の才媛

目白臺上赤煉瓦の大建築、東洋一の女子大學も生れてより、茲に十星霜、乞食の子も三年すれば三つに成る諺の如く、第一回卒業生中には、希望の如く洋行歸りの教授として、母校に教鞭を取る者さへ出來て居る。此の日本女子大學校の生命であり凡ての中堅である現今の寄宿舍に、朝に學びの林を分け、夕に清き思想の海に棹す幾多の才媛諸氏も、十年以前の寄宿舍の草分け時代は御存じないでせう。

明治卅四年四月廿日が開校の當日で、私共は其日に先立つ事五日の午後上京して、手織木綿式の田舍娘で、行李と夜具を車に積んで、女學校時代から仲よしの松波孃と二人で校門を初めて潜つた。其頃は今の料理室や化學館は隣家の竹藪で、大きな栗の樹が二本あつたのを覺えて居る。松波さんは家政科志願で、希望の科は違つても二人一緒の寮に入り度いものと、東海道の旅の汽車の內でもそればつかり云ひ合つて樂しんだのも水の泡、事務所で與へられた紙片には、A寮とB寮とに分けられてしまつた。八字ひげいかめしく眼鏡掛けた人は先生かと思つてろく〳〵答へもし得ない場所なれぬ其頃の私、まして寮舍の小言など云ひ得る筈もなく、左の柱に栗色に塗つた小さい箱の懸つてチリン〳〵と音がして居るのは理化で學んだ電話の實物だと思つて見てゐた程だから、何事もたゞ默つてお受けした。

△寮舍の初印象

幾何的に區劃されたガーデンを左に見て、だら／＼坂を下りたところに二階建の寄宿舍が並んで居る。オリーブ色の袴をはいた三十餘りの方で、先生とも生徒ともつかぬ方に敎へられて、まだ木の香のするＡ寮へ御免なさいと訪づれると返事と共に白前掛をした女中が取次に出た、私が其の紙片を渡すと、左側の寮監室といふのへ通された、まだ若い先生はにこやかに初對面の挨拶をして、今迄は未だ入寮者も小數であつた故皆一緒に居たけれ共、開校の日も迫つて來るし、續々と地方からの入寮者も御出になるので、今日から兎も角も各寮舍へ別居する事にした、別に規則といふ樣なものは無いが、良校風は寄宿舍が中心となつて作る可きであるから、お互に注意して立派な寮風を作り出さねばならぬ云々、と短かく話して、二階の六疊の部屋を與へられた、此の部屋の一方は壁で隣室との區劃が出來て、一間の押入に下は抽斗しが六個あつて一寸簞笥の樣になつて居る。入口は障子で廊下を隔てゝ杉の立木が淋しく立つて居る。先づ机と本箱を壁によせて置き、夜具は押入に入れたけれども、何だか落着ぬ樣で行李をとく氣になれぬ。松波さんはどんなにして居るかなどゝ離れたのが悲しい樣にも思はれた。校庭を見れば自分と同じ樣に荷物と一緒に送られて來る人が三々伍々。中には御兩親に連られた方もある。紅葉と櫻を衿に染め出した印袢纏を着た小使が、忙がしさうに右往左往して居る。井の蛙の私は、袴は海老茶とばかり思つて居たのに、オリーブ、黑、焦げ茶などいろとり／＼の袴をはいた人も見える、右も左りも見知らぬ人ばつかし年なども私などが一番の年少らしく、二十四五から三十餘、もう一ぱしの家持盛りの樣な人も多かつた。

△各縣人の集合

其頃の私は實に意氣地なしの田舍者であつたから、求めて人に口を利きもし得ないで、丁度盲者が質に取られた樣な有樣、手持無沙汰に控へて居る所に、お氣の毒樣ですが少々お手傳ひ下さいませんか、と女中が

上つて來た。ハイと返事も口の内で其後から下りて行つたのは臺所、一間の戸棚が左手にあつて、水道も初めて見る。床板の下から炭が出たり薪が出たりするのが物珍らしい。五六人の方は襷掛で薬づとから茶椀や皿を取出して數へて居られる。大きな釜には湯が沸き立つて居て、戸棚の内には醤油注や土瓶などがきちんと並べられて居る。お皿を數へて居た色の白い方が、「まあいやらしお皿が二枚破れてまんがなし」と大阪辯、絣の羽織を着て大きな黒子のある方が、「だんないわあてらのしらん事やさかい」と合槌を打つ。如何にも親しさうな物の云ひ振り。大阪の女學校の卒業生で、希望通り二人一緒に入寮が出來た幸福な方といふ事が分つた。



「アリャーノ小使が持つて來る時に破つたのでガンヒヨーデ」とは廣島出身の方らしい。「ほんとに皆樣お國がお違ひ遊ばすので、側で伺つてもおもしろう御座いますよ」。と東京辯の女中が云ふ、何といつてよいかわからぬから、啞にしかずと私は默つて居る。事務所から歸つて來られた寮監は、「皆さん食堂へ行きませう、どうも御苦勞樣」と挨拶をなさる、食堂は臺所の隣の十二疊敷、半間四方の卓が五脚、雪白の布をかけて、一輪ざしには木蓮が香つて居る。粗末な竹製ながら、茶棚樣のものもあるし、西洋風景の油繪も揭げてある樣子は、國の女學校の寄宿舍の何等の裝飾もない沒趣味なのと大變の差異である。慰勞とあつて煎餅とお茶とが出る。その時に、一寮の家族を約三十名として、大學生の內から主婦を二名選む事、各室には成る可く高等女學校生徒と大學生とを交せて、成るべくは家庭に於ける姉妹の關係を保つ樣にそして、人數の揃ひ次第にそれ〴〵の役割を定めるつもりだとのお話しがあつた。そして最後に新らしき姉妹の一人として私を紹介された。たゞ何となく大學生といはれる言葉のひゞきが、新らしい一種のプライドを感ぜしめる樣に思つた。

瓦斯の輝やく下に書見する果報いみじき今の人々は、其昔釣ランプの下に數脚の机を並べて勉強した一回生の昔は御存じないでせう。

△寮舍生活の一端

米は事務所指定の越後屋といふ米屋が持ち込む。八百屋、洗濯屋、酒屋、菓子屋、何れも朝早く臺所へ用聞きに來る。主婦一々出張して買物をする、湯は每日立つけれ共、校內のは寮舍が半分づゝの入浴で隔日である。何しろ今迄は雜木林であつたのを伐開いたのであるから、金氣澤山の水で、白い肌襦袢やおろしたての手拭は、すぐに赤くなつてしまふ。いつも洋裝をして居る色の淺黑い眼鼻立のキリツとした附屬の生徒は、西園寺侯爵の姬樣で、いつも其頃流行した風通の着物に縮緬の羽織なんぞをぞろ〳〵と着て居られたの

で、特に目立つて居た。澁川龜子さんは松方侯の五郎さんに、矢島良子さんは鐵道院營業課長の木下氏に中途で結婚された、今の教授の井上秀子さんは、其頃寮監傍ら家政科の學生。日本少年寮の設營者たる奧宮海軍少將の令妹加壽子さんは、寮婢迄して苦學して居られた。其他玉石混交の生徒の內には、色々樣々毛色の變つた人が多く、內で手織木綿式の私なんぞは、氣焰更に上らぬ村夫子で、鳴かず飛ばずに三年間を、恐ろしい抱負の高い皆さんに伍して送つた。

間もなく自分の部屋も、家政科の方と附屬の方とが



來られたので、家族は揃つた。買物は水曜と土曜の午後と、豐河堂といふ雜貨店と牛込の本屋が、校內の運動場に店を開くので、別に不自由は感じなかつた。其頃其本屋の主人の佛頂面と、豐河堂の菊目石のおばさんの御べんちやらとの對照が面白かつた。

△開校當時の感想

開校當日の前日迄は、每日唱歌の練習があつた。先生はたしか納所辨次郎さん。白頭の戸川殘花翁の如才ない素振りが今も眼前にちら

つく。前夜は雨降りであつたので、開校式の當日は天幕から雫がぽたり〳〵。松波さんは一張羅のお召の袖にしみが出來たとこぼして居た。朝野の貴顯紳士貴婦人などは、今迄は、雜誌の口繪だけで見て居たのに、實物を見上げて感心し、自分も何だかその方々に近づいて偉くなつた樣な氣がした。此頃ちよい〳〵寫眞で見る岡部子の三令孃なども、其時はまだ極々おちひさいお稚子の姫樣であつた。其日は寮舍を放開して來賓は自由に參觀された内に某伯夫人は無遠慮にも押入を開けられたので、私は粗末な木綿縞の汚ない夜具に赤面した事は、未だに忘れられぬ。扨其日も過ぎて櫻も青葉になり、一雨毎に新樹の緑が深くなつて來る頃には、もう夏休みが一日〳〵と待ち遠しく、柱に懸けたキヤレンダーを一枚づゝちぎり捨てるのが唯一の樂しみであつた。

△土曜日の夜

私共の寮舍も家族は三十名。内には未亡人もあつたし、師範の義務年限終了といふ大した肩書付の方もあつたので、いつでも子供扱ひにされた。初めの間は土曜日の晩毎に食堂に集まつて遊んだもので、各部屋から活人畵や對話、其他の餘興が一つ宛必ず出るので、ずゐ分とにぎやかだつた。工夫上手のAさんはいつも道具係りで、米上ザルが虚無僧の笠になつたり、皆の襦袢の袖を重ねて速座に官女の十二單衣が出來たり、隨分振つた。通學の方に賴んで、男の袴を借り出して、寮監から叱られたこともあつた。こんな事で土曜の晩が待遠しく思つて居たが、然し勉強は皆よくした。それも追々には修養會といつた樣になつて、馬鹿騷ぎは最終の土曜日と極つた。時には教授の御家族同伴を願つて餘興を御覽に入れた。鹽井教授なども御出になつて、御自作の新體詩を朗吟された事もあつた。又各寮相互の交際會もあつて、夕食に招いたり招がれたりした事もあり、或は知名の婦人方を御招待した事もある。廣岡淺子刀自などはよく御見えになつた。水曜と土曜にはおやつが出るので、附屬の子供のみならず、

大學部の大供迄が待ちまうけて居た。「今度のおやつはお芋を出して頂戴」とか、私し達はお汁粉を望みます」などと御注文もあつた。皆の生れた日には赤の御飯を炊く事もあるし、出來るだけ自分共の家庭と離れぬ樣にしたものでした。時には放課後に家族總出で晉羽の森や高田の馬場邊り迄郊外散歩に出た。夕食後は校内で運動。勉強時間の鐘から九時の就床の鐘迄は一心に勉強をした、就眠前には一同食堂で十分間デルサート式の體操をして御機嫌ようと別れたものです。今はどうかしらぬが、何れも熱心に無邪氣であつただけに、粗暴といつた樣な事も少しはあつた。其内松波さんなどは大分ハイカラになつて、自轉車なんぞを乘り廻すのみならず、時々一緒に散歩などしても、もうすつかり東京かぶれて、國の學校の惡口ばつかしいふのが、私は飽き足らぬといつも思つて居た。



△目白スタイル

兎も角も三年の星霜を經て卒業と共に地方に歸り我家の人となつて既に十年、久方振りでなつかしい母校を尋ねて見れば、花紅葉の芽生へはいよ〱成長して、更に多くの枝をさし交し、其頃附屬のやんちやつ子であつた百子さんは、既に大學部卒業、肩上も取れ、振肩の上品な寮監となつてゐらつしやる。廣かつた運動場の狹い程立派な教室や講堂が建てられて、顔見知つて居る小使は二人切り、文科の勉强家弘田雪子さんは母校の先生、其他若い先生達が袴の裾長う空氣草履ですつ〱と運歩を運び給ふ。これが所謂目白スタイルか。「あらまあお懷しい事、十年振りですのね」、と手にすがつた方も五六人はあつたけれ共、其内にはまあ何處の田舍者が迷ひ込んで來たのだらう、といつた風でながし目ににらんだ人があつたと思つたのは私のひが目か。櫻楓館の内には實業部の賣店もある、銀行部も出來て居る。製菓部には白い前掛した方が大きなストーブで甘さうなお菓子を燒いて居られる。養鷄部からは玉子が供給されるし、牧畜部からは交せ物なしの新鮮な牛乳も取れる。園藝部からは野菜や花卉が供給される。實に發達してゐるが、茲に學び給ふ才媛諸氏が、他日眞の社會生活を開始し給ふ時果して〱其理想が遺憾なく實現さるゝや否や。

モスリンの流行

モスリンは單衣地にも、帶地にも、帶揚げにも、袴地にも宜しう御座います、廉くてパサ〱してゐて凉き心地の宜いのはモスリンが一番でせう▲帶側になりますと地は白でそれに桔梗色を染分け、白と鼠の亂筋を置き其中へ曾我模樣を現はしましたものなどは二十歳位の婦人の平常用に宜しう御座います▲帶揚には白地に藤と鼠の染分けに竹と光琳の椿を染めましたものなどは至極高尚ですし又白地に藤鼠で横筋を取り其上へ奴模樣をきかせたのなどは意氣向として迎へられて居ります、白地に紅の源氏香と蝶の模樣なども華かです、又十四五歳位の令孃の帶側として新峯織と云ふのがあります、黒地に淺黄の厚司を染出したもので地色と模樣の配色が最も妙な柄です、其外新部縮緬と云ふのが御座います藍鼠地に茶で杢目風に松葉を出し其上に光琳の鶴を添へたものなどは高尚なもので二十五六歳の御婦人に宜敷う御座いませう。

柏の意匠


丸鬼かしわ


柏つる


析柏


三枚柏


三ツ重ね柏


だき柏


柏桐


五ツ柏

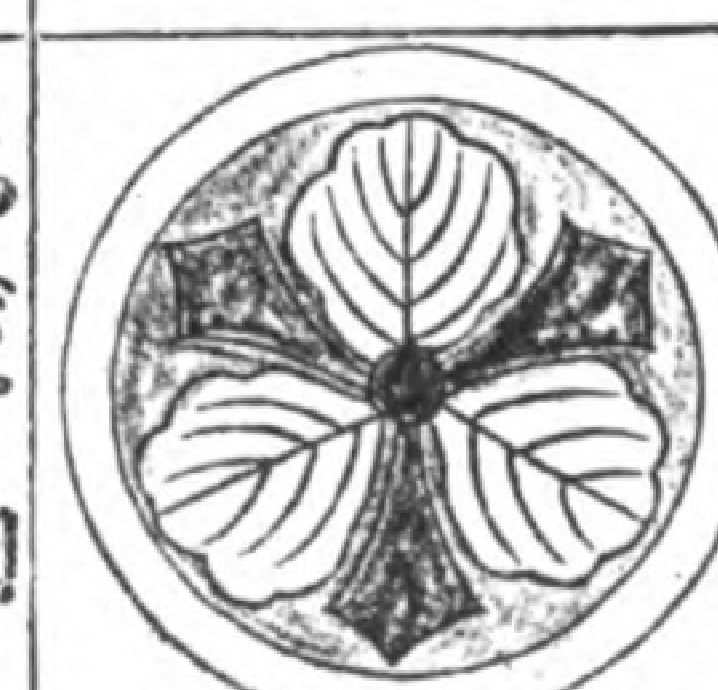

柏七宝


二ゑぶ柏


むすび柏


三ツゑぶ柏


三ツをひ柏


丸けん三ツ柏


ゑだ柏


柏枝丸


つる柏


丸枝柏

心と言葉の微妙なる關係

文學博士　福來友吉

△知つて居て思ひ出せない

心の中にある思想は、言葉となつて現はれることは云ふまでもなく、顏つきにも現はれ、文章、繪畫、詩歌、彫刻等にもなつて現はれ、左もなければ病氣になつて現はれるとか、何れ何かの形となつて現はるべきものである。其中に言葉となつて現はれるのが一番に多い。

處で其言葉になつて現はるべき思想、つまり言はんと欲する心を抑へつけて、言葉にも其他の方法にも現はさなければ、何うなるであらうといふと、其時には一種の不快を感じて、遂には身體にも異狀を呈するやうなことになる。

お互ひに何か話をして居ると、先方の話からして、フト何か思ひ付くことがある、併し何であつたか判然しないけれども、兎に角思ひつくことがあるので、それを話さうと思ふけれども、何うも話せない、又話し得るやうなことをフト思ひ付いても、話さうと思ふ間に、それが消えて無くなることがある、すると其時には、一種何だか物足らないやうな感じがしてならないことがある。

又電車の中などで、あの人は何處かで見たことがあるやうだと思つて、ハテ何處であつたか知らんと、いろ〳〵と考へるけれども、何うしてもわからないことがある。其人を何處で見やうと、何といふ人であらうと、よしやそれが分つたところで何の爲めにもならないことであるけれども、それが分らないとすると何となく物足らないやうに思はれて、只だ何とはなしにどうかして思ひ出して見たいものだと思ふ。要するに我々は、何でも精神の中にあることは、どうしても其儘に放棄して置くことは出來得ないものである。

我々は精神の中にあることは悉く云つて了ひたい、

左もなければ何等かの形に於て現はして了ひたいといふ要求は必ずするものである。只其要求は人によつて強いのもあれば又弱いのもあるけれども兎に角必ずあるものだ。處で其云つて了ひたい現はして了ひたいといふ要求があると同時に、その要求を抑へつけるところの心の働きもあるのである。此抑制し得る精神作用によつて、思ふことは存分に言ひもせず現はしもせずに居るのであるが、其精神作用にも亦强弱があるので、其力の弱い人は、比較的思つたことを多く言ふ人である。



△秘密を話したい人

世間には隨分思つたことを何でもかでも言つて了ひたい人がある、今朝は何のおかずで御飯を食べたとか、雨が降つたとか風が吹くとか、人の皆分つて居ることを饒舌る人がある。よくおしやべり婆さんなどといつて下らないことを、まア聴いて下さい〳〵と、人をつかまいては無闇としやべる婆アさんなどがある、捉まつた人こそ飛んだ迷惑だが、中には相手無しで獨りで饒舌つて

居る人もある。何かクド〳〵言つて居るから誰と話をして居るか知らんと思つて覗いて見ると外に誰も居ない、只一人でしやべつて居る。そんな人もある。

けれどもそんな人のしやべるのは、默つてハイと聽いて居ればそれでよいのであるから別段害にもならないけれども、中には秘密の思想を話したがる人がある。こんなことは決して話しては可けないのだけれども。實は斯樣なんで他へは極內證だが君だけへ話をするんだが、他の人へは話さずに置いて呉れ玉へと許りに、秘密を皆話して了ふ。するとそれを聽いた人は又外の人へ、斯樣々々のことを聞いたが、是は秘密で君だけに話すのだから外の人へは話さずに呉れ、こんな風に君だけといつて話された人は、外の人へ君だけといつて話し、其君だけが段々甲から乙、乙から丙と傳つて其秘密な話が八方へ擴がることがある。

△言は無ければ病氣になる人

兎に角我々は話すべき性質を持つて居る、けれどもそれは抑へる精神作用もあつて平生は其云ひたいのを抑へつけて居るのであるが中には自分の思つたことは何うしても云つて了はなければならない、どんな妨害を排除しても云つて了ばなければならない性質の人もある、その人が若し其言ひたいのを無理に抑へつけると一種變體の不思議なる精神狀態になる。

或寺の奥さんで此人は人と何か面白くないことがあると忽ち心に思つて居ることの有たけは殘らず皆言つて了はなければ可けない。それで思ふ存分何でも彼でも言つて了はせると、其あとは雷が鳴つて雨が降つてそれが霽れあがつたやうにからりと機嫌が直つて非常に好い心持ちさうになるが、若しそれがどうかして言へないやうなことになると、精神がポンやりと妙に鬱いで二日も三日も寢て、全で病人同樣になつて了ふ、其時に其思つて居ることは皆云はせて了へば、其病人が忽ち全快して了ふ。

△懺悔によつて以前の性質に復す

フランスの或婦人は無邪氣な快活な好い人であつたが、何かの間違ひで、フト夫のある身としてあるまじき不品行なことがあつた、あとで非常に後悔をしたけれども最早追着かない、と云つて自分の過ちを打明けて人に云ふ譯にも行かないから、此事は何んなことがあつても口外しないと決心をした。處が今迄快活で無邪氣であつた人が、忽ち一變して陰鬱な、何でもかでも包みかくすやうな妙なねじけた人になつたので、交際をして居る人達は皆な、どうしてあんな妙な人になつたのであらうと怪んだ。處が他の方面からして曾てあつた不品行事件が露はれてそれが良人の耳にも入つたので、良人は頻に其婦人の不心得を責めた。斯く露顯して了つた以上は今更止むを得ないから、良人の前で其事實を少しも包まず懺悔して頻に其罪を謝した。幸ひに其良人たる人は寛大な人であつたから、將來を戒めて婦人の罪を宥した。すると忽ち又以前の性質に復して快活な無邪氣な婦人になつたといふことを本で讀んだことがある。



△盗賊と間違へて妻を斬る

それから、曾て心に思うたことが、何かの場合に突然現はれることがある。或裁判所の檢事は、正當防衞ならば人を殺しても罪にならないのだから、若し强盗でも入つて自分に危害を加へやうとすることがあつたならば、其時には自身を正當に防衞する爲めに其盗賊を斬つてやらうと思つたことがあつた、するとそれから餘程後のことであるが、夜中に便所の方にガタガタする物音で眼を覺まし、いきなり枕元に置いてあつた護身用の刀を拔いて便所へ行くと暗いところに人が居るから、物をも言はずに斬り込んだら、「あなた何をなさいますか」といふ聲は正しく自分の女房だ、しまつたと思つて氣が附いたが、其時はモウ細君が頭部に重傷を負つて了つて居るといふ大變な事になつたのである。是などは豫て、「若しこんなことがあつたらば」と何氣なしに思つた心が、突然現はれたのである。

△頻りに人を睨めつける癖

或る婦人は突然左の頰が急に痛くなつて、其部分が赤くなつて居る、私はどうしてそんなになつたかと訊ねたが、自身にも其原因が分らないと云ふ、それから段々種々なことを訊ねて何か夢でも見たことが無いかといひますと、何時か其婦人の妹の子が、他の人に左の頰をつねられて、嘸痛かつたであらうと心で思つた夢を見たことがあると云つた。それから私は催眠術によつて暗示を與へたらば、忽ち其赤い色もなくなり、痛みも去つたことがある。是なども、曾つて痛からうと思つた心が、こんな變體になつて現はれたのである。

或學生は、頻に人を睨む癖がある、此人は自分で何も睨む氣は無いのであるけれども知らず識らず人さへ見れば睨むのである、何うしてさうなつたかと尋ねて見ると、此學生は曾て妙に人を睨む癖のある人と下宿に同室したことがあつた、其時には妙な癖のある人もあればあるものだと心に思つて居てあつたが、或時試驗の答案を書いて居る際に、フトあの人はこんな時にこんな眼付をして人を睨んであつたと思つて何氣なしに近くに居る人の顏を睨んだ、するとそれからと

いふものは、何を見ても睨むやうになつたので是は困つたものだと自身にも氣が附いたが、どうしても直すとが出來なくなつて人の顏さへ見れば知らず識らず睨みつけるやうになつたといふので是も暗示を與へて癒してやつたことがある。

是等は皆言葉となり、又は其他の形となつて現はれやうとする『言はんと欲する心』の變體に外ならないのである。

要するに言はうと思ふ心行はうと思ふ心を事情の爲めに無理に抑へつけて置くと、精神になり身體になり、必ず一種の變相を來すものである。

△夫婦喧嘩仲裁の秘傳

或ところに夫婦喧嘩の仲裁に非常に妙を得た人がある、何んな夫婦喧嘩でも此人が仲裁をすれば仲直りにならないことは無い、それで或人が其秘傳を訊ねたら、何でも双方で云分のあるところは、どんな下らないことでも殘らず云はせて了つてからでなければ仲が直るものでない『まア〱それはお前さんが云はなくつても十分分つて居る、まア〱そんなことを云はないで僕に任せて』とか何んとか先方の云はうとすることを押へつけると可けない、苦情のありたけ一日でも二日で、成程々々と云つて云ふだけのこと逆らはずに一々聞てやつてから氣長に仲裁をすれば屹度仲が直ると云つたといふことである



宗敎では懺悔をすれば罪障が消滅するといふのも、言はんと欲する心を殘らず現はして了ふから、自然心が清淨になるのである。（言はんと欲する心!!心理學會講演の大要）

若き男の眼に映じたる現代女性「マグダ」

生田蝶介

K子樣。

こゝに新綠の世界が開けました。最早徒らに紅い血を燃やしてゐる時ではありません。若い肌の中、柔かい皮膚の下を流れて居る溫かい血潮は、何かのポッチりした誘ひや、ほんの一寸した機會にも湧立たう〳〵として居ります。然し、今はそれを壓へて自分といふことを考へ始めなければならない時が來たのです。

さういふ期節に入つてから、私は最も複雜なる現代女性の代表者「マグダ」を見せられました。

あの黑い堀割を前にして靜かに建つて居る有樂座で前後三回まで見た女性。私の若い心に強い色々の意味の謎を投げてくれました。舞臺稽古の日と、第一日と第九日目と見えました。

始めて「マグダ」を見た日は私に何ういふ印象を與たか。それは藝術に醉ふ若い昂奮でした。若いこの一人の男性が、ある柔かい腕で、夢のやうな溫かさでこの胴を締めつけられるやうな懷かしい昂奮を感じました。その位ですから勿論何を考へる餘裕も持たなかつたのです。家に歸つて時を過すにつれて湧き立つてゐた血は靜まり。呼吸が平調になつてから少しばかり頭が輕くなつたやうな氣がして、何か切りに考へ始めました。

暫く經つた私は、この文藝協會の「マグダ」が、今年日本に於いて演ぜられた芝居のうちで最も面白かつた——また藝術的成功した芝居だといふことを知りました。と同時に過去に於いて文藝協會がした表面上の仕事のうちで最も大きい仕事だといふことも思はせられました。「ハムレット」を見た時も「人形の家」を見た時もこれ程の昂奮はなかつたのです。それは「人形の家」が演ぜられた時は、婦人問題といふ叫び聲を作りましたけれど、あれは單に「ノラ」そのものを傀

儡とするイプセンの思想を始めて舞臺で見せられた人が叫び始めたので、松井すま子さんが完全にこの『ノラ』を描き出したからではありませんでした。言を換へて云へば『ノラ』の時の松井すま子さんからは餘り感動も昂奮もしなかつたのです。それがまあ、こんどのこの胸の顫えはどうでせう。

何故こんなに胸が顫えるのでせう若い血潮が高鳴るのでせう。目の中に浮んで來る松井すま子さんの『マグダ』のあの黒眼勝ちの瞳と、腕輪の光る白い〳〵溶けさうなあの腕とを見つめて、何故私はこんなに感動したのだらうと呟いた。



二度目に見て始めてこの謎が解けました。それは見る目に少し餘裕がついたからだらうと思ひます。

K子樣、それは何であつたと思召す。

それは熱心なる研究と長時日の練習の結果が具體的に舞臺に現はれたに過ぎなかつたのです。それはどんな風に舞臺に現はれたか、今迄見たすべての芝居に見ることの出來なかつた程巧みに呼吸がピッタリと合ふことです。舞

臺上の人が一致して一つの仕事をすることです。そして洗練されたる表情が閃くことです。或者には非常な感動を與へ、ある者にはこれまでに例のない氣持好さを與へるのはこれがためであつた。

私の心はまだ〳〵了解といふことを欲した。然し私の三度目の見直しは原作者ズーデルマンに對して大きな缺點を發見せしめた。そして可なりの失望をもつて家に歸りました。

第一に、只二日間の出來事を何故四幕に分けなければならなかつたかといふことである。これは舞臺上の時間の都合だと云へばそれまでゝあるが、時間の都合ならば短かくする手段はいくらもある筈であると思ひます。

第二には人の出し入れが見て居て餘りに目まぐるしいことです。そしてそれが如何にも不手際です。私は第三度目の時臨席に居られた巖谷小波さんにそのことを話すと、

『えゝ、あれがズーデルマンの技巧癖で、あれで自然なるべき所が不自然になるのです。』と云つてゐられました。

第三に、これはズーデルマンの罪ではないと思ひますが十が九まで人物が這入つた部屋から出て來ずに、まるで違つた部屋の扉から出て來ることです。これはどうやら原作者の罪ではないやうに思ひます。それとも思ひ違ひかとも思ひますが、これがため尚更、人物の出這入りが目まぐるしくなるのぢやないかと思ひます。

K子樣、私は餘りに『マグダ』といふ劇について論じて居りました。すみません。私は『マグダ』といふ女性を語る筈でしたね。

『マグダ』は一體如何なる女性であつたか。

それを語る前に今一度この劇の根本を語らせて下さい。

『ノラ』は家庭から離れて行く個人でした。『マグダ』は家庭に囚はれて行く個人を描いたのです。同じく家庭と個人との爭です、新道德と舊道德の爭です。た

だ『ノラ』は夫といふ男性に對して、『マグダ』は父といふ男性に對しても最も爭ひました。これは世が進むにつれて、世が複雜になるにつれて永久に逃るゝことの出來ない爭ひでせう。

ズーデルマンはイプセンの感化を少なからず受けて居ると云ひます。成程さうした所が見えます。けれど、スカタンデネビヤで生れたイプセンの『ノラ』は近代女性にしても甚だ單純な強いけれども一本調子の所があります。そこにゆくとズーデルマンは獨逸だけに『マグダ』は複雜です。言ひ換へれば『ノラ』は直線的で、『マグダ』は曲線的です。



『マグダ』は獨逸のある小都會の嚴格なる中流の家庭に生れた。誰も一度はあるが如く始めは極く素直な小娘であつた。母親に早く別れ、新しい母と母方の叔母とが入込み、舊思想と舊道德の頑固な父によつて作られたる家庭は素直な小娘の『マグダ』をして服從とか犧牲とか媚るとかいふ方法を覺えさせたのです。長ずるにつれてこれに對する反感は一種の曲つた思想を生んだ。この反逆の思想は、父が牧師のヘフターデキングと命令的の結

婚をさせむとした時に於いて破裂したのです。最早この時の「マダム」は一個の人格であつた。「ノラ」が家庭を古衣のやうに棄てゝ走つたと同じやうに小娘の「マグダ」も父と具體化した家庭から自分といふものを求めて走つた。つまり父の世界では自分の世界が作れないために、自分の世界の作れる所に逃れ出たのです。

人は思想に生きれば生きる程我儘が強くなるものです。誇と微笑と寂しみとは必ず思想ある人格の周圍を纒ふものです。

「マグダ」の長い放浪の結果は、人格が高まるにつれて罪惡といふことを平氣で見るやうになつた。人を人とも思はなくなつた。悲しい時笑ふやうになつた。そして媚と云ふことゝ命令といふことゝが一致して來たこの廣い世界は自分の媚のために如何なる重大な犠牲でも拂つてくれるものだといふ自信まで作らした。同時に動作が空々しくなつたのです。

K子樣。

さうした「マグダ」がイタリヤ第一流のオペラ女優としての十二年の浮草の生活は如何に華やかであつたでせう。しかし一歩退いて考へて御覽なさい。夜更けて劇場から馬車に送られて宿に歸り、從者の多勢をさきに眠らせて、重い衣服をぬいで自分の寢臺に疲れた身體を棄てるやうに投げた時、彼女の眼を見たならば必ず電燈の光に、頷きながら流れる露を認めるでせう。自分から去つて行つた家は自分の世界とは相容れぬ頑固な父の世界である。疲れて歸つても兩手をひろげて迎へてくれる父も母もないのだ。そして自分の身の周圍を取巻いて賞讃と拍手とに彩つてくれる男は、自分のこの容貌と音聲との凋落と共に木の葉の散る如くやがては散じて行く浮いた氣の人だちばかりだ。この美しき兩手を、この美しき、切れば眞紅の血のほとばしる胸をなげかけて、心から心から泣くべき確かな男は一人とてもない。さうしたことを思ふと今に今に、暗い暗いどん底に落ちて行くやうな不安が胸にこみ上げてくる。いふべからざる寂しさに枕の乾く時はないことでせう。

『マグダ』は年重なるにつれてその思ひがつのつて行つたのです。

K子樣。

そして『マグダ』は故郷の父と、自分が不義をした時出來た子とのことをいつも思ひ詰めるのです。その時今一度思ひ直して、『負けてはいけない。負けてはいけない。』と身をもだえても、やはり新しくても、醒めて居ても女は何處までも女です。

ある複雜な不可思議の力を以た故郷――父――は、彼女を呼びもどしました。

これから『マグダ』の世界と、父の世界と家庭と、世間と、肉身の謎と宗教の力と、肉慾と過去の羈絆とが入り亂れて一つの家庭が滅茶々々に破壞され了つたのです。



これだけの難かしい役をあの松井すま子さんが演じて可成の思想に生きてゐる若い男が近來にない興奮するまでに見せたのですからいゝ出來と云はねばなりません。

K子樣。

すま子さんが『マグダ』そのものではないかとまで身につまされました。さうした花やかなバックを有してゐる女が、あゝしたジミな家に歸つて來たといふ心持が十分に出て居ました。あの父が死んでから再び廣漠たる世間に出て行く『マグダ』は如何なるのでせう。私一個人に取つては『ノラ』の行衛よりは『マグダ』の行衛の方が一層共鳴する所が多いやうです。また雨になりました。新しき『マグダ』の寂しみが益々思はれてなりませぬ。

湯上りの肌涼風に吹かれけり



子供本位の家庭生活

白百合

一家八人で中四人が奉公人です。子供は今年四歳の男兒に二歳の女兒女中、小間使、乳母の起きますのは五時半から六時までの間ですが、其時分女の子が必ず目を醒ますから、私は直に小間使に渡し眼と口中を洗はせ且衣服を更めさせます。男の子は乳母と一緒に子供の部屋に寢かしますが、矢張六時に起し眼と口中を洗はせます。此眼と口中を洗ふことは、生れて直ぐ慣らして置いて、一朝も缺かしません。子供を小間使に渡してから、とろッと致すこともあり、其儘眠らずに居ることもありますが、兎に角七時に床を離れます。主人も同時に起きます。七時半までに主人が毎日持て行く鞄なぞ整理してチヤント机の上に載せて置きます。

　七時半から八時までに朝食を濟ませます、朝食は茶室で、主人と私だけで給仕を使ひません。八時から三十分間、茶室で新聞を讀みます。七時半から下男兼代の車夫が參つて、庭の掃除や靴磨なぞを手傳ひ、八時半頃玄關に出勤の用意が出來ると主人は洋服に着更へます。子供も其音を聞くと見送る爲に玄關へ出て待つて居ります。

　主人を送り出してから脫ぎ捨てた日本服を疊みなぞして、それから十一時までを私の勉强時間と定めて居ります。十一時になると長男に食事をさせ、女兒に乳を飲ませます。牛乳は午前九時と午後六時（湯浴の後）に飲ませますだけで、夜中の二時と曉け方の五時に目を覺ました時、それからお晝の十一時と午後三時に私の乳を飲ませます。子供は兩人とも午後六時入浴させた後、牛乳を飲ませますが、牛乳を飲むと直ぐに床に入いることに定めてありますから、子供も直に寢付きまして二時までは目を醒しません。十三箇月の兒にしては珍らしく大人しい方であります。

　十二時には小間使、乳母、召使と一緒に食堂で晝飯を食べます。それから一時まで臺所見廻りを致し、一

時から四時まで雜用を執るのですが、其間には書物も讀んだり、子供と遊戯を致したり、針仕事も致したり種々の事を致します。四時半には歸宅する主人を待つ爲に、座敷を清潔に片付け、又夕飯の仕度に取掛ります。

五時から六時までは晩食の時間として、矢張茶室で主人と私だけで食べます。それで御客を呼ぶときは、此時間に招いて一緒に御飯を食べる事に致します。主人は交際の多い方で、度々御客を連れて參りますが、前以て知らせて置くこともあり、突然連れ歸るともありますので、何時も晩食には、御客膳を一つ備へて置きますから、遽かに狼狽くやうな事はありません。

六時から三十分間、近邊へ運動に出掛けます。大抵十町位な處で、買物なぞも其時に調へます。夜分の空氣は子供の爲に宜しくありませんから子供は連れない事に致します。七時から十時までは、家內一同の勉強時間と致して居ります。

睡眠時間は充分に取つた方が宜いので八時間は缺かしません。睡眠不足だと晝寢をしたり、又召使などは自然坐睡をしたり、種々弊害が起るので、この時間は長くして置きます。

月曜日から金曜日までは、右の通りの時間割に日を暮しますが、土曜日は半日大掃除で、ごた〳〵致しますが午後からは思ひ〳〵に樂み、日曜日が好天氣であれば、主人や小兒と郊外へ散步に參ります。それから食事ですが私の家では別に奢つた食物は拵へません。爾うして主從少しも違ひはございません、三度の副食は申すに及ばず、チョット瓜もみ一つ拵へても、召使達へも公平に分けて遣ります。魚の切身も私達のと大小のないやうに致します。但主人の晩食だけには、主人の好きな品を別に一皿拵へて膳に上せます。其外到來の菓子果物に至るまで、みんな平等に分けて、たとひ餅菓子一つでも同じ寸法に切り分けて皆んなで食べると云ふ風にきめてゐます。勿論そんなきちようめんな事を致しては奉公人が窮窟に思ふでせうが、他日一家を持つ樣になれば、何かにつけて有難く感じやうと

想ひます。能く世間では女中が摘み食ひをするのに困ると仰しやる方もございますが、私共では、決して其樣な事はございません。夜分子供が休みますと、女中部屋で一同種々の課目を勉强致します。御飯焚は昨年までいろはも解らぬ者でしたが、小間使に敎へて貰つて少しは解る樣になり、お伽噺の拾ひ讀みが出來るやうになつたといつて喜んで居ります。

子供を始終側へ置くと、用事が出來ないばかりでなく、子供も親の側でない方が大人しい樣でございます。偶に一緒に遊んで遣れば、喜ぶ事も餘計で、却つて親みが深いと思ひます。勿論注意は少しも忽せに出來ません。



△與謝野晶子女史の近詠

わが泣けば露西亞少女來て肩なでぬアリヨル號の白き船室

戀人に逢はむ日遠し故郷を見む日知らえずいかゞすべきぞ

船室の掛釘七つ七人の子によそへたる母の心に

甲板の靴音により寂さが俄に戀の心とかはる

敷島のやまと女あかつきを頼りなげにも歩む甲板

末の子が讃美歌うたふ節まはしあやにく立つる船端の波

遠く來て忘れかねつもはしきやし皐月五日の東京の町

浦潮の波止場に降りぬ水色のうすもの被き白き船より

春寒き浦じほに來と涙しぬ女王の如くおもへる人も



繪もの語　毒草

太田三郎

惡縁

一條院の御時、比叡山にとうめいと云ふ僧がありました。年は纔に十八の未だほんの小僧上りでしたけれど、才學は衆を拔いて居て其名は、當時廣く聞え渡つて居りました。

併し若い日の燃ゆる血潮の波動は到底法の道の力で、押へ附け得らるべきものではありません。渠は或る時内裏の初講を勤めました折なにがしの式部と云ふ三十路ばかりの艶な女房を、簾の隙からちらと見てはつと胸ときめかしたのが思ひの初め、總に激しい戀の渦巻の中に巻き込まれて了ひました。

さあもう立つても居ても居られません。晝靜かな僧房の圓い柱に凭たす體はともすれば、魂が果ても無く蕩けて行くやうな、又ともすれば一時に總身が緊張し盡すやうな、云ふに云はれぬ遣瀨なさに責められて、朝夕の看經にも、諳誦に慣れた其經の句までが途切れがちなのでありましたが、果てには或る大きな力にずる〳〵と引摺られて、山を脱け出て了ひました。而して憫しくも身を柑子賣に窶して内裏へ入り込みました。其人の住む局の邊を、絶えず徘徊つて居たならば、何時かは戀ひ侘ぶる美くしい姿を見る事も出來やうかと、果敢ない事をなほ懸命の望みとして、荷へも慣れぬ籠を脊に、肉に喰ひ入る負紐の苦痛を忍びながら、彼方で七つ此方で十五と心にも無い商をして歩いたのであります。

けれど悲しい事に、憧れる人の面影は、袙扇の端に匂ふ黒髮の一筋さへも見る事が出來ませんでした。渠はたゞ日毎々々、烈しい疲勞と要もない幾千の鳥目を



得るのみで、火焔のやうな其心は、徒らに燃え上るばかりでありました。

　ところが或る日の夕方、例のやうに一日を空しい努力に費して、落膽の憫い足を宿へ向けやうとして居りますと、不圖その人の局から召仕の女が出て來て、おあし二十ばかりで柑子を求めました。溺れた者は一條の藁しべにさへ縋るといふ、渠は思はずぱつと上氣して、滿面に溢れる歡喜を包み切る事が出來ませんでしたが、漸く涼しい透き徹るやうな聲で、

一つとや一人まろ寢の草枕、袂しぼらぬ曉もなし

二つとや二重屏風の中に寢て戀しき人を何時か見るべき。

三つとや見ても心のなぐさまでなど憂き人の戀しかるらん

と云つた調子に、柑子を一つ〱戀の歌に數へ上げて、

二十とや憎しと人の思ふらん我ならぬ身を人の戀ふれば

と二十顆を手に渡しました。南國の木の實の高い薫りと白銀の顫へるやうな聲音と、而して眉目清秀の若き人、召仕はもう目を丸くして、ぼんやり聞き恍れ見恍れて居りましたが、突然

『さうした體でお前さんどうして斯んな生業なんかしてるの

と不審を其儘口に出しました。男は少時躊躇つた後、終に思ひ切つて

『ふり〱して。』



と眞ッ赤になりました。昔の人が同じ思ひに詠んだ歌の、君戀ふる涙の雨に袖濡れて干さんとすれば又もふり／＼の意を仄めかしたのです。

すると其時、風も無いに彼方の簾が颯と搖いて、白い紅い色がちらと靑い簾を洩れました。が、男はつひ夫れに氣も附かず、軈て悄然として歸途につきました。而して少時の後、其局からあたふたと走り出た前の召仕が、見え隱れに渠の後をつけて行くのでしたけれど、それ亦少しも覺りませんでした。

其夜のことであります。渠は旅宿の灯の寂しい冷たい光を痩せ細つた脊に浴びながら、すゝり泣く何蟲かの聲に魂を引擦られるやうな心持で、さし俯首いて居りますと、ほと／＼と戸を叩く優しい掌の音に交つて

　出でゝ干せ今宵ばかりの月影にふり／＼濡らす戀の袂を

と忍びながらに云ふ艶めかしい聲が聞えます。で

　出でずともこゝろの有らば影さして闇をば照らせ有明の月

と戸を開けますと、こは夢か幻か、まづえならぬ晴薰の薰りが鼻を撲つて、其處に戀しい／＼其人が、面眩ゆ顔の柔かい曲線を、折しもの月光に匂はして居るのでありました。彼女は日毎に己が局近くさまよふ男の擧動に不審を懸けて居たところ、今日召仕へとの問答を洩れ聞いて、何れ由緒ある人とは直ぐ知れる物ごし

の、而も我ゆゑに嘗める苦痛を思つては其儘に過されないで、恁うして竊に尋ねて來たのであります。男はもう嬉しさ恥しさに總身が唯わな〳〵と顫へるばかり豫て若し其場合にと思ひ設けて居た言葉も、今は一言さへ口にし得られませんでした。

さうかうして居る中、戸の隙を洩れる朝の外光は、夢のやうな樂しみの噎せ返る空氣に、ほの白う流れ込んで來て、旣う後朝の袂を濡らす頃となりました。ややあつて女は漸く殘り惜しげに立ち上りましたが、途端に不圖目に入つたものがあります。それは男の持つた護り刀です。彼女は遽かに驚愕の色を見せて、

『どうして貴郎は、女の身の持つべき其品を持つてらつしやる？』

と言葉忙しく問ひ寄りました。男は一入打しめつて

『これには深い譯が有ること。』

と語り出した其譯といふのは恁うなんです。もとうめいは五條橋の上の憐れな棄兒でありました。それを町の人が拾ひ取つて比叡の山に上せたのであります。で、捨てられて居た其時に添へてあつたのが此護り刀、

『生れて未だ親の味を知らぬ薄倖な身は、せめて此品なりを母と見て、斯うして朝夕肌身を離さずに居りまする。』

と更に新らしい悲しさに優頰を濡らしました。するとこは如何に、女は呀と叫ぶ激しい聲もろとも後に摚と打倒れました、して水よ藥よの厚い介抱にやつと我に





返つたのは、小半時も經つてからの事でしたが、どうしたのか其眞心籠めての情の手を、怖れるやうに強て避けて、石のやうに固くなつて了ひました。而して男が泣いつ口說きつ、又宥めつ賺しつ其故を尋ねても、猶じつと面伏せた儘身動きさへしませんでした。

けれども、終には包み切り兼て、漸く涙ながらに物語つた。それが意外實に意外、彼女は男のまことの母であつたと云ふのです。女が未だ十三の蕾の花の頃、つひした事から橘なにがしと云ふ少年と、親避ける仲となつて、其情までも宿し、窃に產み落したは男の子、世間の聞えを憚つて人知れず五條の橋に打棄てた。其時に形見に添へて置いたのは、慥に見覺えの有る此護り刀だつたと云ふのです。乃ち紛れもない產みの母子は、今現に此處で獸の境に陷つたのであります。慚愧悔恨淺ましさ羞しさ、二人の體はもう呵責の鬼に旋風のやう狂ひ廻られて、一時もじつとしては居られません、水あらば溺らしめよ火あらば燒き盡せ、光といふ光すべて滅びよ、二たび母を見せるな子を見せるな、世の人々に二人を見せるな、と立つては悶え轉んでは悶え泣き叫ぶのでありましたが、終に女は其恥しい子の側に居堪らなくなつて、一散に戸外へ走り出でました。而して其儘足を西に、遙々播磨の國に下つて、書寫山で尼となつて了ひました。

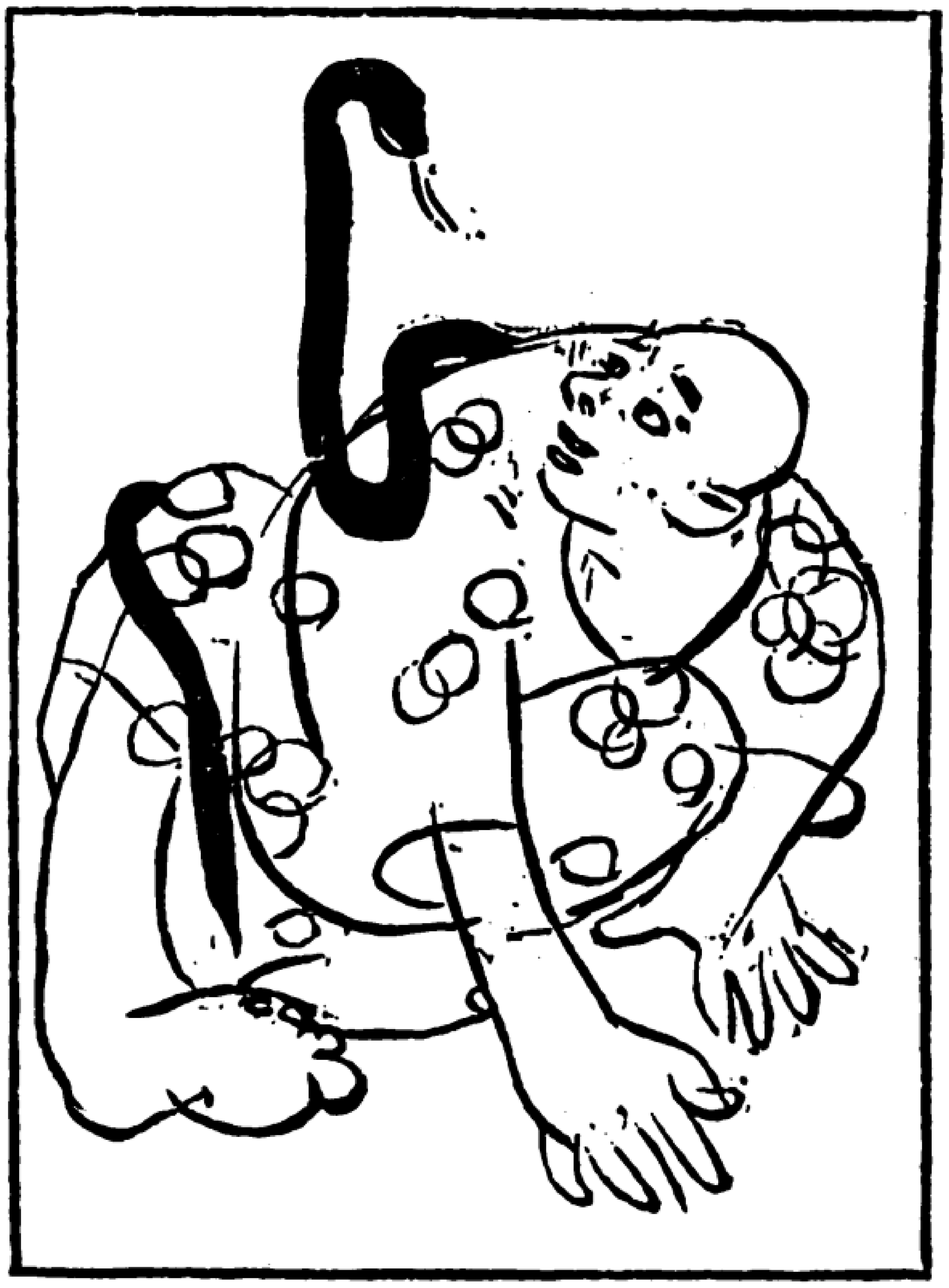
男は其後どうしたのか、比叡の山にも又京の町にも絕えて其姿を見せなかつたと云ふことであります。

嫉妬

一人の男がありました。立派な妻が有るにも拘らず、或る白拍子に深く迷ひ込んで、夜毎の大方は其女の許に明すのを例ひといたしました。ところが本妻は人にも増して嫉妬の念の深い方でしたから堪りません、錐のやうに尖つた神經は、些細な事にも鋭く戰慄して、狹い〳〵胸の中には、瞋恚の炎の消える間とてもありませんでした。ですから男は、猶いよ〳〵彼女を忌み避けて、其反動も交る強い愛を、益〻深く仇し女に注ぐのでありました。

すると建長六年二月二日の夜、男は又例の女の家に宿つて、妖艶な花の香にでも醉つたやうな心持で、偏に歡樂を恣にして居りましたが、不圖心附くと、どうしたのかそれが本妻のやうに感ぜられて仕樣がありません、審つて離れて見ますと、矢張慕はしい女なんですけれど、寄り添つては感覺がどうしても本妻のそれです。男は慄へ上らずには居られない、恐怖に波打つ胸をしかと押へて、少時は唯茫然として居りました。と、遽かに何處からか五六尺位の蛇が、する〳〵と這ひ寄つたと見る間も無く、發矢と男に喰ひ附きました。





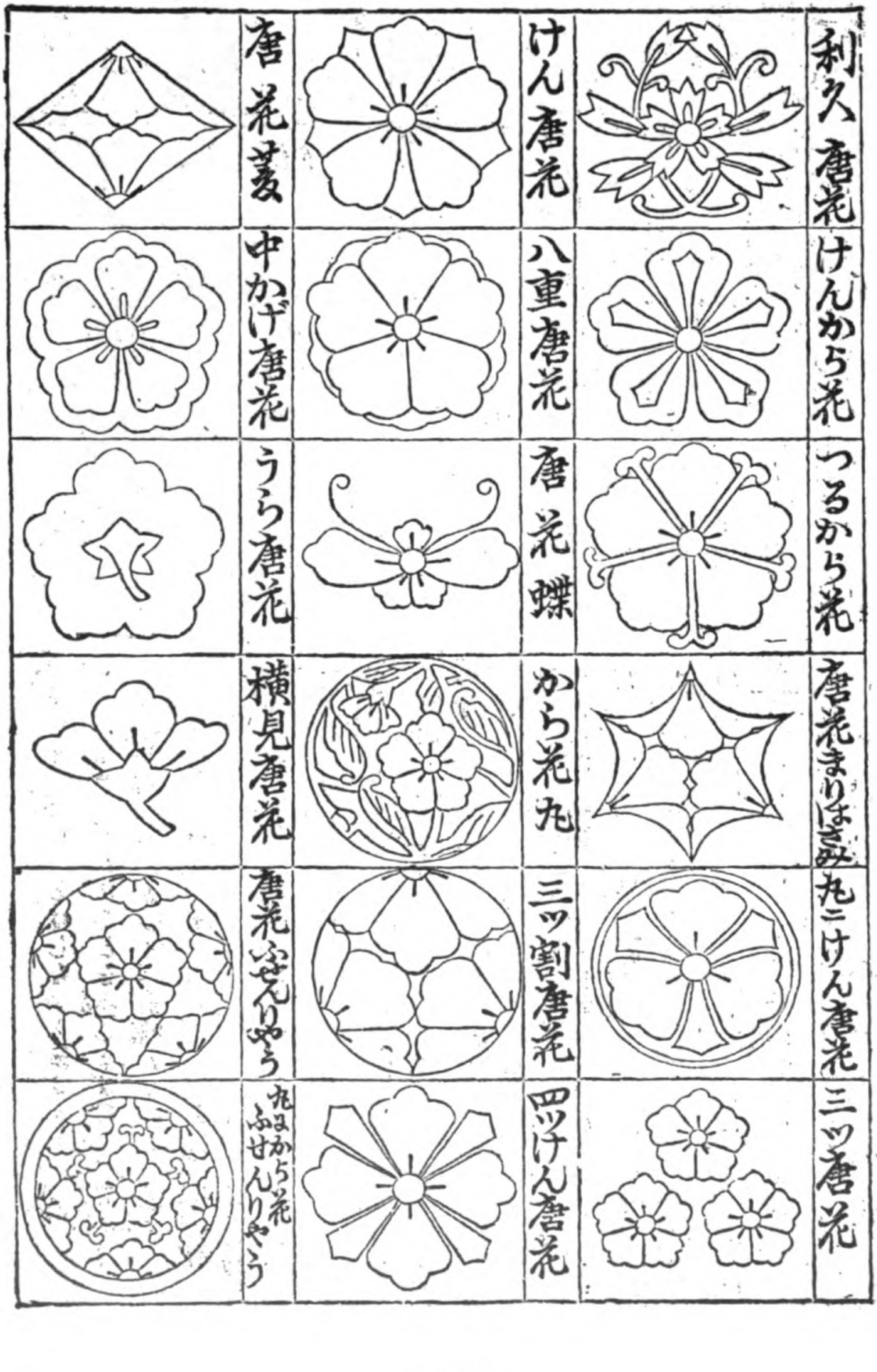
而して如何に力を加へて振り拂ふとしても、捩ぎ取らうとしても、猶いよ〳〵烈しく齒を刺すばかりで、少しも其效がありませんでした。で、男は巳むなく刀の鞘を拂ひました。有繁執拗な蛇も口を斬り裂かれては、今はもう喰ひ入る術がありません。ばたりと疊に墜れ落ちて、悶え死に死にしました。二人の顔は宛で陰濕の地の草のやうです。其夜一夜は唯ぶる〳〵と震へながらに明しました。

其翌る朝のこと、男は瘡口の疼痛を強て忍びながら、とぼ〳〵と我家に歸つて來ましたが、軈て一室に入らうとして、思はず呀とばかり其儘腰を拔して了ひました。其處に黒髪をおどろに亂した本妻が、口のあたりを唐紅にして息絶えて居たのであります。……後、男も亦其瘡の痛みが素で、幾月かを悶え苦しんだ末、終に果敢なくなつて了ひました。女の嫉妬ほど凄い怖ろしいものはありませんね。

⊙著述よりは襦袢縫ひ

獨逸の有名なる著述家フリードリヒ、シュレーゲルの夫人は、非常に聰明で、兼て文藝の道にも深い人でしたが、其人の死後は寡居して襦袢のみ縫つて居るので、或人が訪れて話の末に、『御身のやうに才學ある婦人は針よりはペンを執られた方が宜しいでせう』といふと夫人はほゝゑみ乍ら、『妾は世の中にもう要らない程澤山書物のあることを聞いてゐるが、まだ襦袢を有り餘る程つくる人はないやうです』と言つて相變らず襦袢を縫つて居たとは面白い話です。

唐花の意匠


利久唐花
けん唐花
唐花菱
けんから花
八重唐花
中かげ唐花
つるから花
唐花蝶
うら唐花
唐花まりばさみ
から花丸
横見唐花
丸ニけん唐花
三ツ割唐花
唐花ふせんりやう
三ツ唐花
四ツけん唐花
丸ニから花ふせんりやう

松の下風

小川直子



世にたぐひなき富人とて人皆に尊ばるゝ村井東望ぬしのなり所は、相模國の大磯の海邊にて、富人の住家には名もふさはしき長者林とて、色さへ常磐に彌榮ゆる老木若木の生ひ茂りたる松林の中にいとうるはしき館のあるなりけり、此人の母刀自は孝子とて、名に背かぬ親思ひの人なるが、夏の暑さをよきにとてものせられけるを、おのれもとより此刀自とは親み深う交はる中にしあれば、諸共に來給ひてんやといざなひ給へるまゝにとのしたりけり、そもく此館は此磯の東の方にあたりやゝ果ともおぼしくて、先づ門の造りやうは古ふりのかや屋根にていとしやびなり、めぐりには白くぬりたる木もて獅子垣めきたるをしわたしたり、奥深う入もてゆけば、這入のほどはいかめしうて、實に富人の住居とぞ見ゆめる、客人居のしつらひはたうるはしくてえもいはず好ましきに、端居してはながめやれば、松どもの女木男木ありて、さまぐなる中を吹過て來る沖つ汐風いとすゞしくて、あせあえたる衣手も秋のかよへる心ちせり、はた松の木のまよりは花水川の流の末廣う入江をなし、眞砂の中洲を一すぢへだてゝはるかに靑海原の見渡さるゝに、眞帆片帆のもも千のふ年ども行かふがいと面白う見ゆ、此なたの庭の面は芝生靑々と見るのみも涼しきに、右のかたには廣らかなる花園につくりて花の木草をとりぐにうつし植わたされたり、爰に下りたちつくぐ見れば、名もしらぬ外國の木草數しらず匂ひはたりてうつくしき

に、久子孃が思ふ事なげにはしりおりきなどせらるゝを見て、

花園の薫をしめて遊ぶ子が
　袖にはてふもむつれたはるゝ

など口ずさびけるに、妹のきみ子孃がよめる、

朝な／＼露のひぬまとゑみ初て
　われぞまつらん朝がほのはな

おのれまた、

外國の木草の花もとり／＼に
　ゑみこぼれたるそのゝ中かな

かく遊ぶほどに、はや黄昏に成にければ、おもと人出來て入り給へといふまゝに、入りてゆふげたうべぬ、いとも／＼ねもごろにあるじせられたり、さるは海山遠くへだゝれる名所よりとりあつめられたる珍らしきものどもさま／＼にてうじてすゝめらるゝは、極樂の百味もこれにはすぎじとおぼえけり、かくて暮はてければ今宵は闇なればとて庭にはかゞり火きら／＼しうたき立て、軒ばには美濃の國岐阜といふ所よりし出る提灯のうるはしきをあまたかゝげわたしてければ、すずしくてえもいはぬ氣色なり。

つとめては、おのれひとり起きいでつゝ先づ松かげに至りて四方を見やるに、袂すゞしき朝風の吹かよひたるに、涼み臺に腰打かけてやすらふほどに、やう／＼朝日のさしのぼり來て入江のあし、または、ほとりの畑にうゑなめたる唐もろこしといふ畑つものゝ白露の日影のうつろふがきら／＼しう打なびきたるは、こが年の玉のゆらぐかとあやまたるゝは、實に富人の家居なれば思ひなしならん、かゝる所にこそ鶴もすむならめとおぼえて、

濱松に朝日さすなりたづむらの
　つばさやすむる宿りなるらん

また、

世のうさをわすれてすゞむ松かげは
　はこやの山のこゝちこそすれ

これよりひと日ふた日は雨うちふりて、神などもとゞろぎわたりたれば、たれこめてのみ人皆も文机により

居けるが、折しも阿部優子刀自よりせうそこ文おこせ給へりけるは、孝子刀自とおのれとふたりの名あてなれば、喜びて開き見るに、此ほどの暑さのことなどこまやかにて、おくに、

海山をながめながらに唐大和
　ふみ見る友のやどりゆかしも

とありければ、返しに、

海山のけしきを見つゝ朝ゆふに
　きみがあれなどかたりあひけり

また、

いとまあらば君もとはなむ松かげに
　すゞみがてらやものがたりせむ

孝子刀自のかへし、

海山をながむるごとに君の事
　わするゝひまもなき我身かな

大磯のいほりにやどる師のきみの
　をしへのもとに暮すたのしさ

などいひやりて、夜にいりければ、かるた遊びなどせらるゝ少女だちに打まじりてざればみあへるも、またをかしかりけり、かくて過行ほどに、いつしか弓張月の頃ともなりぬれば、老も若きも庭にいでゝ遊べるに、花園の蓮池も水底すみてすゞしければ、孝子刀自が、

蓮池にやどれる月の影見えて
　いとゞすゞしき夏の夜半かな

きみ子娘が、

花園に秋まつむしの音をきゝて
　夜露をてらす月を見るかな

などよみいでられけるに、しばしありて村雲のたゞよひいでければ、おのれ、

沖つ風ふきはらはなんすゞみして
　ながむる月にかゝる村雲

かゝる事いひ／＼てあかし暮すほどに、孝子刀自の三女なる梅子のきみ、また竹垣よし子など、ふりはへて來給へり、けふの暑さの堪へがたさ、やらん方なしなどいひて汗のごひつゝ何くれの物がたりして喜びあへり、折しも西瓜をいだされたる、これはた平の都なる

槙の島といふ所よりとり寄せられたりとて、こき紅の珍らしき迄うるはしきを、眞白なる玉のうつは物にもりていだされければ、おのれとりあへず、

子が、

師のきみとかたらひつゝも大空に
すゞしくすめる月を見るかな



白玉のうつはにもりし紅の
うりは見るだにすゞしかりけり

かゝる遊びの盡せぬ樂しさなるに、日も夕暮のころと成りぬ、されば例のさま〴〵なるあるじまうけに飽きみちたる折から月はなやかにさしのぼりたれば、きみ

うの子刀自が、

うもほあむ人は歸れる大磯の
濱づたひしてすゞむ夜半かな

同じ刀自が五位鷺の鳴くを、
　夕月夜友よぶさぎの聲きゝて
　　すゞむ磯邊に秋風ぞふく
みぎりのまがきに尾花の穗にいでゝはつかに打なびく
を見て、孝子刀自が、
　名にしおふ秋のもなかの月影を
　　まちか年顏にまねく小薄
また、うの子刀自が、
　大磯の庭のすゝきの穗なみにも
　　秋のけしきの見え渡るかな
竹垣よし子が、
　絲すゝきかげやさしくもうつろひて
　　宵々ごとにすめる月かな
うめ子のきみが、
　しまなくも照月影にあくがれて
　　小夜更るまでかたりけるかな
　いざり火の影をちこちにほの見えて
　　月かげすゞし大磯のはま
孝子刀自が、
　晴わたる光すゞしき月かげを
　　青海原にうつしてぞ見る
おのれ、
　はてもなき青海原にてる月を
　　濱松が枝の葉ごしにぞみる

今宵は村井ぬしをはじめとして男のきみだちあまた居給へば、おのも／＼時にあひたる唐うたうたひ、をさなき兒子だちは唱歌などをもうたひ連て樂しめるほどに、夜もいたう更にければ、皆ふし戶に入りて枕につきぬ。

かく日每／＼にさま／＼の遊びをして暮すなる事にしあれば、外國ぶりのテニスとか、此外にもくさ／＼の遊びありて樂しめるが、又おのも／＼我好める方に心ひかれて、我は釣こそおもしろからめとて、釣絲くり出しつゝ入江をさしていづるもあれば、かたへは今日は汐も干がたに成りぬ、いざ／＼と淺瀨におりたち、貝ひらふもありて、しゞみよあさりよと我こそ多くひ

らはめといひてふくつけがるもあり、そが中におのれは老たればとて、渚の松が根に腰打かけて休らひつゝながむる程、よはひものぶる心ろして、樂しき事たとへむ方なし、暫しありて孝子刀自小川刀自も入りてひろひ給ひてんやとそゝのかさるゝに、さばとて水におりたち、諸共にきそひあひつひらふもいとをかし。



またひと日のあしたには、小舟に棹さゝせて入江にうかび、中洲に至り、海原遠く晴渡る沖つ汐あひを見渡せば、薄霧の絶え〜〜なる中より伊豆の大島それかあらぬかとおぼつかなく見え、左の方によりて江の島近く手にとる許に見ゆるとまた面白し、此日は沖つ汐風なぎはたりて、もゝ千のふねどもこぎ連て心ゆくさ

まなれば、おのれ、

　友ぶねのさして行らん港には
　　けふ〳〵とこそ妻のまつらめ

かくなぎわたれども、汀に寄する白波のひまなきさまもあはれにて、我いにしへのうかゝりける世をさへ思ひいで、

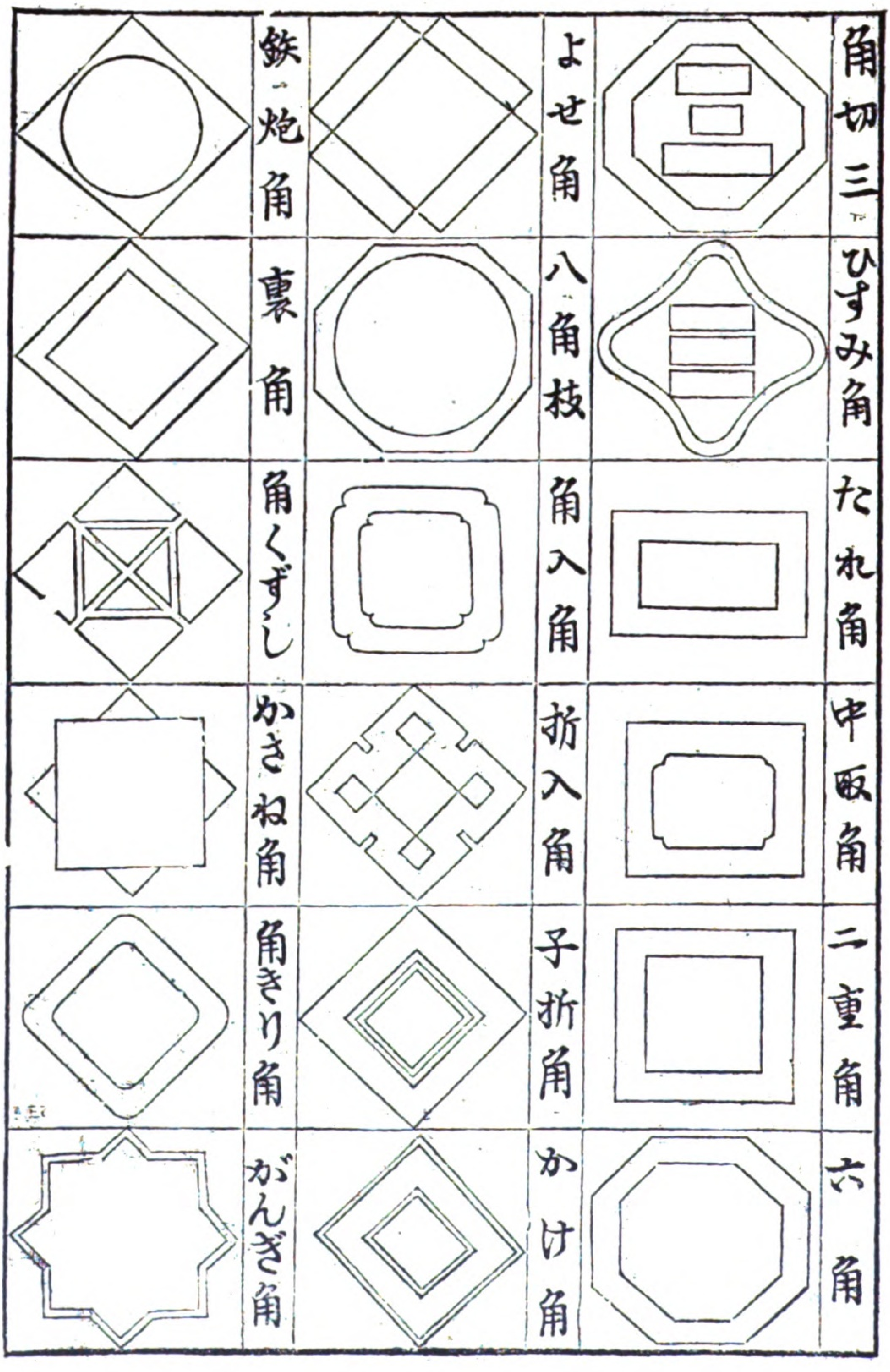
　吹きわたる風にもまれて寄せ歸る
　　なみのくだけにうき世おもほゆ

わがすくせやいかなりけんと、口をしらはづかしと思ひし折もありしはやと思ふにつけても、今のうつゝ世には、道を守りて德を積み、萬に情深うあらまほしとぞおもほゆる、かゝる事つく〳〵思ふにも、村井ぬしの貴とさこそめでたけれ、大方の人は寶を積みて山をなすに至ればいよ〳〵高くつまほしくていそしむほどに、我しらず吝嗇におち入るたぐひ尠からず、さいど此村井ぬしは溫和にして慈愛の心深く、素よりはらからの中らひ睦ましく、諸共に家業をいそしみ給ふさまいとめでたし、斯くうるはしき心なれば、おのづからみやび心もありて、うからどち敷島の道などにも心をこめてものせらるゝなりけり、さるからにかゝる住居もふさはしう一きは甲斐ありげに見ゆるこそいとめでたけれ。

結婚を急ぐ人

現今市内各女學校出身の婦人が結婚を急ぐ傾向あつて、而も從來の如く立派な媒介者を要せず市内の媒介所の手に依りて纏まる者多く。又夫れが却つて上中流の部に屬する人に多く行はるゝのだといふことで某結婚媒介所などでは一日平均婦人の結婚申込が十四五名、其内女學校出身者が十名位、其外郵便で依頼するものも二十名を下らない、此種の申込者に對して希望を聞くと、實業家工業家醫師の希望者が十中の七八で、實業家とても矢張り銀行會社の勤人を望むのと、尙條件としては舅のないのが第一、夫れに反し男の方は女學生上りよりは普通文字を解するもので奥深く育つた性質温順で體格の壯健なのを望む。此外男の方の條件としては長い顔より丸顔を好む傾きがある、一年を通じて十一二月が申込最も多く、七八月は稀れである、尙同所へ昨一ヶ年の申込數は男三百九十五人女二百三十名あつたさうだ。

角の意匠


角切三
ひずみ角
たれ角
中取角
二重角
六角
よせ角
八角枝
角入角
折入角
子折角
かけ角
鉄炮角
裏角
角くずし
かさね角
角きり角
がんぎ角

蛇の怪と女性美

物集梧水

▲蛇の衣更

六月は暑い月である、蛇さへ衣を脱ぐ月である、俳人曉臺が「くちなはの衣脱ぎかけし莢かな」と吟じたのは、まさに此時分の野原の景色を叙べたものである、殊に六月朔日は駒込の富士權現の祭禮で、麥藁で作つた蛇が澤山露店に飾られ、人々これを買つて歸ると、一年中の疫病を追拂ふといふので、誰れも彼れも其れを買つて歸る、抑もこれは江戸時代の寳永頃、その邊に住んでゐた喜八といふ百姓が不圖したことから考へついたのださうであるが、何にしても六月といふ月は蛇に緣故のある月である。

▲天上と玉の輿

古來蛇は女性の權化のやうに思はれてゐる、西洋では嫉妬の象兆、支那では陰險の象兆、日本では執着の象兆、いづれにしても皆な女性の特質を具備してゐる故、今更これを否定する譯にはゆかない、殊に面白いのは、婦人がよく變化する如く、蛇もまた能く變化することである、昔、伊豫國藤田の庄に美人があつた。其夫は少時城下へ行つてゐた留守中に一匹の蛇が夫の姿に化けて來て、終に蛇の子を生ませたのは、當時名高い話であつた、なほ此外、蛇が化けて養子になつたり、お嫁を貰つたりした傳説は數限りもなくある、恰度身分の卑しい婦人が、素性を胡魔化して立派な家へ嫁いだり、醜婦が自分の不容色を白粉や紅で塗りかくして、まんまと首尾よく美人となり了すのと能く似てゐる。殊に趣味のあるのは蛇が天上することである、天明の昔、赤坂邊に清左衛門といふ者が住んでゐた、生れつき大層蛇が好きで、立派な箱を拵へて其内に小蛇を飼つてゐた、ところが春も彌生の生温かい日に、急に空模樣が變つて、黒雲起り大風吹きおろし、雨は篠突くばかりに降りだすと思ふと、例の小蛇は緣側へ這ひだして頻りに黒雲の方を眺めてゐたが、見る〳〵

其姿が大きくなつて、咄嗟霹靂一聲と共に天上して了つたさうである。女氏なくして玉の輿に乗るは、蛇の雲を興して天上するのと餘程よく似通つてゐる、蛟龍終に池中の物にあらずなどは、英雄の比喩よりも、婦人の方が適當であらう。

▲甘き果實の蔭

支那では蛇を隱險のものとしてゐる、これは能く物に隱れ能く人を害するからである、昔韋皐といふ人があつた、冬の極月、庭に生つてゐる柑子を取つて喰べやうとすると、折から側に居た醫者が、柑子には何うかすると蛇が潜伏んでゐることがある、若し夫れを知らずに喰べやうものなら、屹度生命を墜すことになると云ひながら藥籠から針を出して、柑子の蔕を刺して見ると不思議や血のやうなものが滴る、それこそと云つて眞二つに小刀で割つて見ると、果せるかな兩頭の蛇が隱れてゐたといふ



日本にも是れと同じやうな話がある、彼の望月の歌で名高い道長が、或日陰陽師を呼んで卦を立てさせると、この陰陽師のいふのに、今日は不吉の日であるから、よく身を愼まねばなりませぬとのことである。乃で道長はその日

は故らに訪問客を謝絶して、只管門を閉ぢて謹愼してゐると、正午頃大和國から使者が來て、まことに立派な瓜を贈つて來た、道長は何心なく其瓜を取ると、例の陰陽師は手を揮つて、その瓜は決して召上がつてはなりませぬ、屹度なにか毒になるものが潛伏んでゐるに違ひありませぬと云ひながら、袂から針を出して瓜に突徹し、やがて二つに割つて見ると、果して瓜の中に一匹の毒蛇が潛伏んで居り、件の針はその眼を突透してゐたさうである、恐るべき毒舌を包む玉の脣、惧るべき企劃を隱す雪の肌、それは能くこの毒蛇をかくす甘き果實に似てゐる。

▲珠玉中心

人間に慾のないものは無い、さりながら眼前の慾は男子よりも却つて女子の方が甚しいやうである、ホンの些細ばかりの財產の爲めに、互ひに角眼立てゝ爭ふのは、動もすれば女性の弱點である、彼の蛇を見るのに、他の生物と違つて、よく金錢珠玉を爭ふやうである、昔近江國日野の庄の唯ある藪の中で、何十疋とない澤山の小蛇が相集つて、頻りに嚙合ひを始めた、暫時それを見てゐると、弱い者は或は死し或は逃げ去り次第々々に其數が減つて、一時間ばかりすると百疋ほどになり、又暫時すると僅か二三十疋ばかりになつた一體何の爭ひかと熟と視るとこは不思議、小さな黑い木欒子のやうな珠を奪ひあつてゐるのである、その中に一疋逃げ、二疋逃げして、最後に殘つた蛇が、その珠を咥へて徐ろに逃れやうとする、のを、杖を揮りあげて叩くと、蛇は驚いて例の珠を遺して逃げて行つて了つた、然し此事のあつた後五六日の間は、なほ時々蛇が來てはその珠を探してゐたとやら、これは正明寺の住職の話で、決して捏造談ではない、又昔東京の小石川にも、數十疋の蛇が桶のやうにとぐろを卷いてゐる間から、元祐通寶といふ古錢を發見した話がある、それか非ぬか、古來蛇の爭つてゐる處には必ず金銀珠玉があると言ひ傳へられてゐる、迷信に囚はれた婦人が、蛇に卷かれた夢を悅ぶのは無理はない。

一念岩をも徹す

蛇の執念深いことは、昔から常に言はれてゐる事であるが、爰に一例を述べて見るのに、江戸時代の昔、半藏御門の内に月光院尊尼の御守殿があつた時分、ある夏の夕べ、お庭に一疋の大きな蝦蟇が飛びだし、何か絶かに驚いた様に跳ねまはつてゐる、不圖見る叢の陰に四五尺ばかりの蛇が鎌首擡げて、今や一呑にと躍りかゝらうとしてゐる、尊尼はこれを見たまひて、アレヨ皆な〳〵來てたまへと呼はらせられると、女中共二三人ばた〳〵と急ぎまゐつ



たのであるが、さて俄かの事に如何して可いやら、手が附けられぬ、その中に氣轉の利いた女中があつて、矢庭に擂鉢を持つて行つて、蝦蟇の上へ押蓋せた、すると蛇は良あつて其擂鉢の側に遣て來たが、元より這入れないので、唯だ其周圍をグルグル廻りながらノタ打つばかりである、尊尼を初め女中共は其狀を見て、それ見な如何にして蝦蟇を呑むぞよと笑ひ罵るほどに、蛇はなほも擂鉢の周圍をノタ打ちながら廻り、果ては悶へ疲れて死んで了つたので、さらば蝦蟇を放ちやれよと擂鉢を撤去つて見ると、驚くべし、蛇は何時しか其中へ這

入つて蝦蟇を呑んで了つてゐたので、皆な〳〵顏色を失つて奧の間へ逃げ込んださうである。女の一念岩をも徹すとの諺もあるが、身を殺しても思ひを遂ぐるほど恐しい執着心はない。

▲罪惡の權化

蛇の罪業深い事に就ては、すでに創世記にも言つて居れば、又加藤左衛門尉繁氏の妻妾が碁盤に倚りかゝつて假睡した時、兩女の髮が蛇になつて、赤い舌を吐きながら相爭つたといふ、この二つの物語でも明かであるが、なほ念の爲めに今一つ附加へて置くが昔出羽に八郎といふ樵夫があつた、仲間の兩人と共に深山の奧に踏みこみ、例の如く樹を伐つてゐたが、やがて正午頃、八郎は澤邊に降りて魚を二三尾捕へ、三人で喰べやうと思ひながら其れを燒くと、匂ひが如何にも美味しさうなので、八郎は一尾喰べ、二尾喰べ、果ては仲間には與らずに自分一人で皆な食べて了つた、八郎は今更友達甲斐の無いのに後悔したのであるが、既う及ばない、其間に頻りに咽喉が乾くので、澤邊に跼んで水を飮んでゐると、何時か自分の顏は蛇に變り、呀と驚く中に咽喉も、胸も、腹部も、手も、足も、鱗が生えて、見る〳〵二十尋もある大蛇になつて了つた。此時、仲間の兩人も澤邊に降りて來たのであるが、此の有樣を見て大に愕くや否や、天地を覆すやうな大響がして山が崩れ、渺茫たる大きな湖水が出來あがつたとやら、是れが即ち羽後の八郎潟の由來である、譲與といふことを忘れやすい、狹い女心にも似た哀れな傳說である。

▲蛇身の女

俗に髮の長い美しい女は蛇の生れ變りだといふ、一體如何して斯う云ふ俚言が起つたかといふに、彼の淸姬の物語で名高い紀伊國は日高郡眞名古村といふ所は昔から蛇の子孫が繁殖したものとやらで、それ故他の村からは絕對的に結婚を謝絕されてゐる。此村の女は一般に色が白くて髮が長い、加之に昔から今に至るま

で一人宛は必ず蛇身の女が居るといふことである、最も蛇身と云つて、別に身體に鱗が生えてゐる譯ではない、唯だその容貌が千人に秀れて氣味の惡い程美しく、熟と視てゐると肌に粟が立つほど凄いやうな感じがする、髪は飽くまでも黒く、長く地に曳いてゐる、併し栗花が雨に腐れる梅雨時分になると、この美しい髪に粘りを有つて、迚も櫛の歯が透らない、梅雨が明けると、近所の川で洗ふと粘りが悉皆とれて了つて、さば／＼となる、これが即ち蛇身の女である、いくら美くしくても蛇身の女には一生涯婿になる者が無い。



省卿の薔薇

▲辨財天女

嫉妬、執着、怨恨、陰險、狹量、是等は皆な蛇の現はす象徴であると同時に、又女性特有の弱點である、さりながら嫉妬は戀愛の變形、執着は忍耐の強烈なるものであるから、蛇の轉じやう一つに依つては、蛇も、女性も、天晴れ崇拜すべきものとならぬとも限らない、見よ、辨財天女は女性の最も美しく、最も精練したものである、然もその額に冠らせられてゐる寳冠の中には白蛇が潜んでゐる、否、寳冠の中ばかり

ではない、辨財天女その者さへ白蛇の示現したものなのである、同じく是れ蛇と雖ども、白蛇は蛇中の粹である故に、嫉妬、執着などのことは決して無く、閑雅溫順などの品位を備へて、人を見ても少害することなく、食を求むるにも必ず猥りに貪ることを爲ない、さればこそ昔から白蛇が出れば、此上もない目出度い瑞祥として、盛んに酒宴を張つて祝はれたものであるが其の姿を現はすことが、まことに稀だつたのである、嫉妬、執着などに囚はれた婦人は幾千でもあるが、溫順、閑雅よく人生を祝福して呉れるやうな婦人は、やつぱり白蛇の出現のやうなものかも知れない。

紐育市の結婚局

此程米國紐育市に於ける有志の婦人等の發起で、結婚局の設置を見るに至つたが、同局の目的は、多くの不幸な結婚を禁止し忌むべき離婚の數を減ぜしめようと云ふのである。此の有益なる結婚局の設立者は、小說家にして脚本家であるマリー、オーストン夫人であるが、同夫人の語る所に依れば、同局は確かに必要なもので、古來幾多の人々を惱ましたる難問題をば解決して好結果を收める事が出來るやうである。

結婚局と云つても、決して青年のために善き妻女の世話をしてやり、若くは媛等のために生涯の苦樂を共にするに足る郎君を周旋してやると云ふ如な、媒介者的の仕事をする譯ではない。同局の事業は、唯男女青年の社交の準備及び監督をするまでの事で、舞踏會とか、園遊會とか、宴會とか、又は其他の交際界に於ける附添夫人となりて、能く彼等を監督し、交際界の高尙なる習慣と快樂とを發揮し、以て彼等青年男女が互に廣く且能く相知り合ひて、未來の良人なり又妻女なりを愼重に選擇せしむるの機會を與ふるにあるのである。此局に働く附添夫人は、公設の媒介者又は夫人の巡査の如なもので、一見識を備へた中年の婦人の職務としてはまことに結構なものである。

オーストン夫人の調査せる所に據ると、近代亞米利加に於ける結婚の殆ど四分の三は多少不幸なものである。如何にして此の不幸を來たすかと云ふに、選擇の範圍が狹いからである。又女は只其美貌を以て男子の歡心を獲るに勉むるのみで、決して互に相助けて幸福に一生を送くり得べき乎と云ふ問題には想到しないからである。又同夫人は「現代生活の傾向が、良人及び妻女の選擇範圍を狹めた事を考ふるならば、多くの結婚が技巧的で不幸であると云ふのは敢て怪しむに足らない。今日の如き都市生活の狀態では、男性間の友人は至つて尠なくなる。收入の多からざる人々の子女若くは銀行會社に出入する事は出來ない。試みに吾等の知れる男子及び女子を數へて見られよ。兩手の指で容易に數へ得られましよう。斯る狹き交友間に於て、如何にして充分に其選擇をする事が出來ましよう」と云つてをる。

（女るの一）

新時代の要求に應じて出でたる
婦女教訓の活文字!!!

堀内新泉君著

常識讀本 現代女大學

・花嫁の卷……

（紙數二百八十頁） 正價五十五錢 郵税八錢

和裝菊判
裝幀優美

◎他人の家庭に入り新時代の花嫁として成功せんと欲する滿天下の處女は先づ本書を讀め！

◎新時代の良妻を娶り内顧の憂ひを一掃し揮身業務の人と爲り一大奮闘を試みんと欲する滿天下の青年は先づ本書を讀め！

◎我が最愛の娘をして他人の家庭に賞讃すべき花嫁として大成功せしめんと欲する滿天下の父母は先づ本書を讀め！

◎我が子に良妻を娶り一家子孫の大繁榮を期せんと欲する滿天下の舅姑は先づ本書を讀め！

◎既に他人の家庭に入りて人の妻となり未だ家風に通ぜず家事に馴れず日夜徒らに煩悶せる滿天下の花嫁は特に直ちに本書を讀め！

在來の女大學は直ちに以て今日の時代に適用すべからず著者之を憂ひて茲に新時代の女大學を作る先づ婦女の本分より筆を起して花嫁生活、常識の應用、花嫁と心情、花嫁の品位、速に夫の家族と同化せよ、速に夫の家風に馴れよ、急進主義の花嫁、家庭と老人、夫に事へる道、舅姑に對する事へ方、小舅小姑に對する心得、親類並に世間の交際、心の持方、花嫁日常十則等總て是皆現代を表準として何れの家庭にも直ちに之を適用して其效果を收め得べき空前の活文字！若夫れ現代處女にして本書一冊を攜へんか如何なる複雜なる家庭に入るも新時代的花嫁として成功せん事疑ひ無し苟くも現代社會に婦女として大成せんと欲する者は須らく時勢に疎き死書を抛つて千山萬岳日の將に發せんとする如き此の一大活書を讀め!!!

■東京 博文館 本町■

女（その二）

東西のお伽噺を網羅せる最大お伽書成る



巖谷小波先生編

學校家庭 教訓お伽噺

洋装菊判極美本紙函入

發行元 東京本町 博文館

西洋の部

紙數五百六十餘頁 口繪三色版及石版彩色三葉木版插畵百貳拾餘個
正價壹圓三拾錢 送料拾貳錢

東洋の部

紙數五百三十餘頁 口繪三色版及石版彩色三葉木版插畵百二十餘頁
正價壹圓三十錢 送料拾貳錢

世界各國の著名なるお伽噺中に就きて短篇の妙味あるもの約三百篇を抜粹して、之を上下二巻に分載したるものを本書とす。學校講話の資、家庭團欒の材として、一日一話を語るも、優に一箇年の量を含む、されば本書一度世に出でて、群小お伽噺をして顔色なからしむること、恰も太陽出現して星光の消滅するに等しからん。殊に各編共百數十個の密畫を挿入して、興味を深からしむる等、あらゆる點に於て、實に理想的好お伽噺集なりと云ふべし。切に大方の家庭及び學校に備へ給はんことを希望す。

博文館創業廿五週年記念發行

文藝倶樂部 第十八號第九號 增刊……六月十五日發行

講談落語 廿五名家選

●紙數 定期號の 二倍●

本文紙數 六百四十頁
口繪木版、石版
寫眞版數十頁

本號限り
正價五十錢
郵稅五錢

口演者氏名

猫遊軒伯知
一龍齋貞山
錦城齋典山
桃川如燕
一立齋文車
清草舍英昌
細川風谷
實井馬琴

神田伯山
早川貞水
小金井蘆州
神田松鯉
蓁々齋桃葉
伊藤痴遊
富岳事 桃川燕林

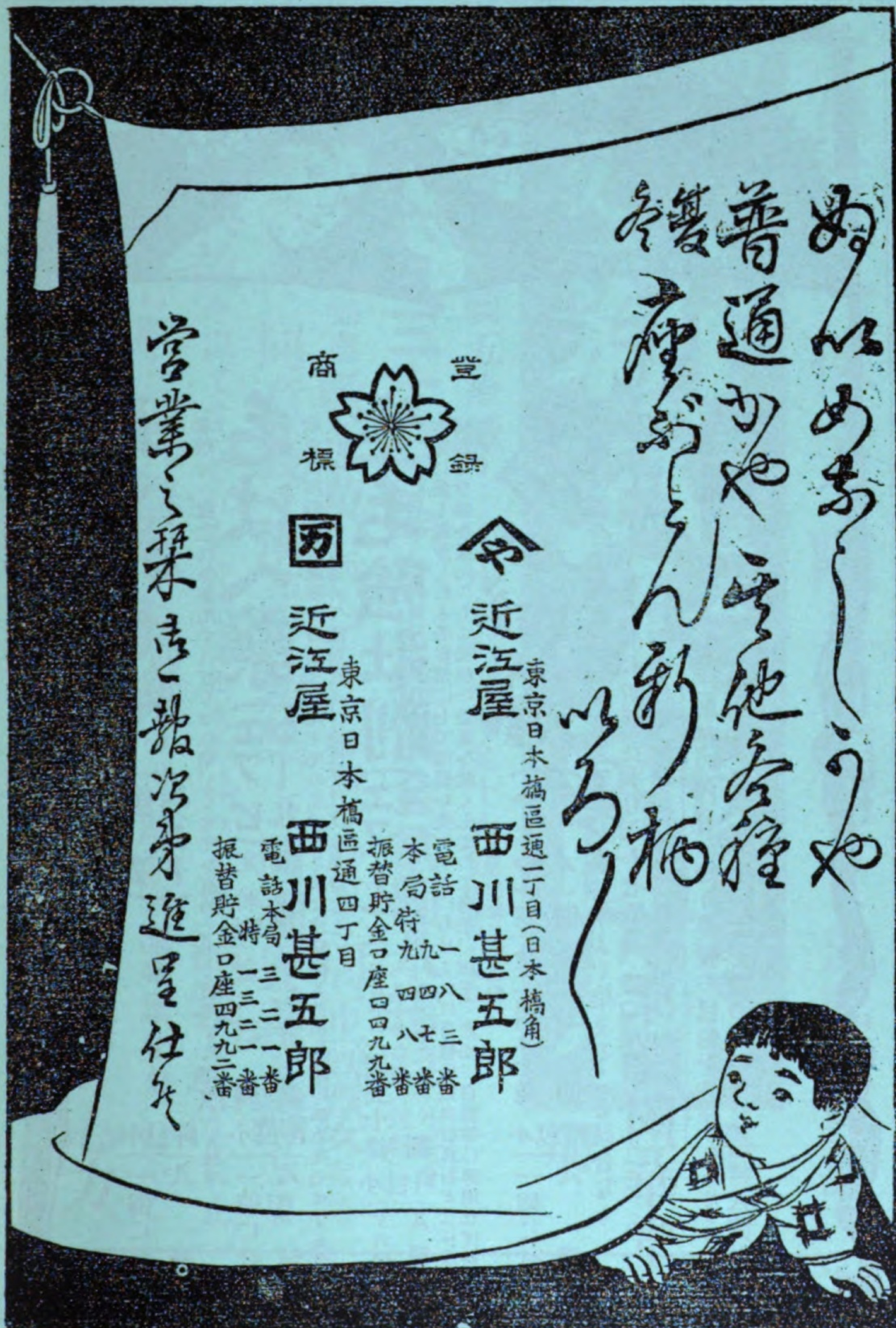
柳家小さん
柳亭燕枝
橘家圓藏
三遊亭圓喬
柳家小三治

三遊亭小圓朝
春風亭柳枝
三遊亭圓右
朝寢坊むらく
柳亭左樂

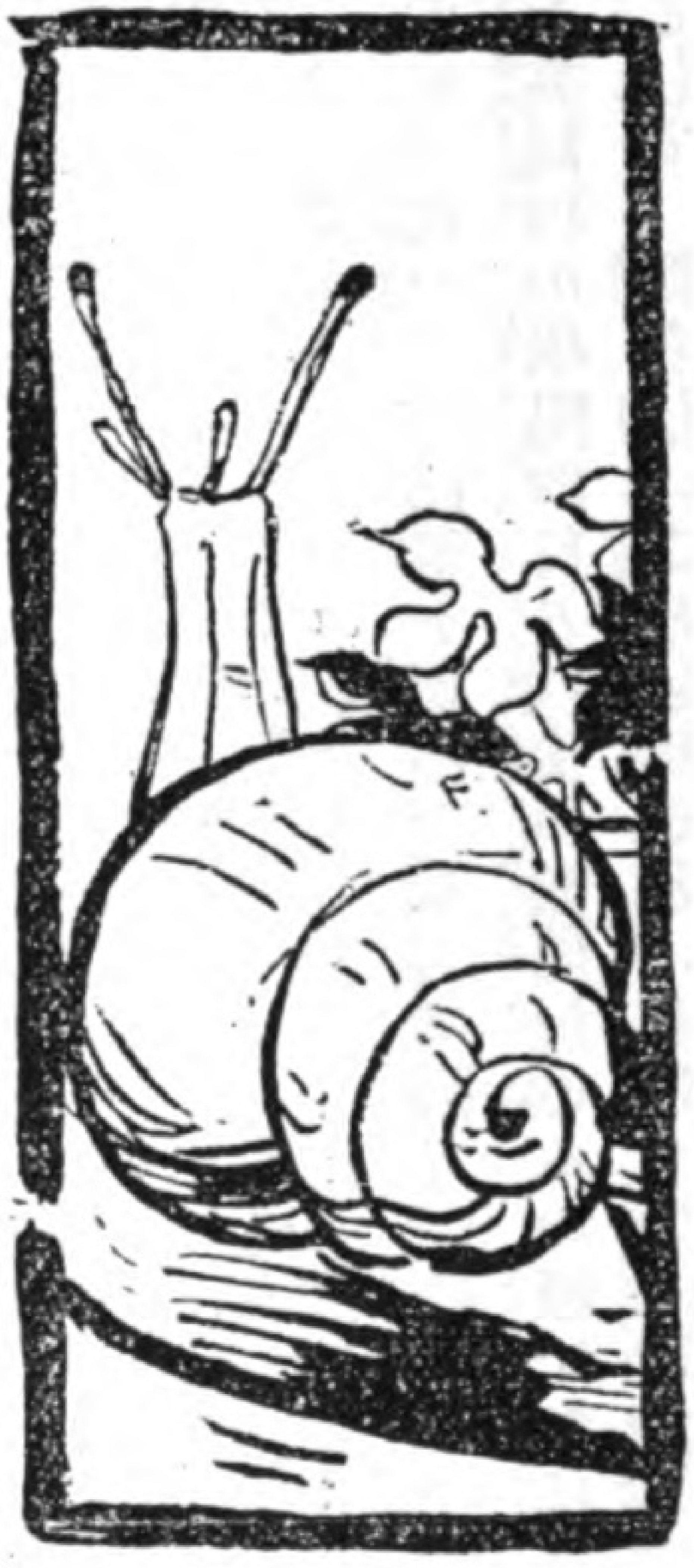
本誌は博文館創業二十五周年を記念する爲め讀者諸君の投票により上記廿五名の講談師落語家に就き各自得意の讀物を口演せしめ、紙數も普通號の二倍大とし、しかも口演者は斯道一流の大家なればその面白き事言はん方なかるべし。氏名は上記の如し。

東京本町 博文館




登録商標
近江屋
東京日本橋區通一丁目(日本橋角)
西川甚五郎
電話本局 一八三番 九四七番 特九四八番
振替貯金口座 四四九九番
近江屋
東京日本橋區通四丁目
西川甚五郎
電話本局 三二一番 特一三二一番
振替貯金口座 四九九二番

女(ゐの八)



婦人と地理の智識

西村萬壽

△學校で習つたことは忘れ易い

婦人は家庭の人となりますと女學校時代に學んだ事柄は片端から忘れて仕舞ふことが多い樣です。殊に地理なんかは臺所と餘り關係がありませんから綺麗に忘れて、何處に何といふ都會がある、又何といふ川は何處の國を流れて居るかといふことすら覺えがなくなりたま〳〵旅行などしなければならぬ場合には、小包か荷物の樣に停車場から停車場に送り届けて貰ひ、先に知人に出迎へられてやつと目的地に達するといふ有樣ですから、實に情けない話であります。尠なくも自分の旅行すべき道筋や、其土地の大體の有樣位は知つて居たいものです。

私は學校の生徒に地理を敎へる時には、何時までも頭に殘つて居てやくに立たせたいといふ考へから、旅行案内を見る樣にさせて居ります。よく須磨はいゝ處だの、明石はかうのと、名所舊跡の面白さは誰れも知つて居るけれども、どの線路を取つてどこで降りるのが一番便利だとか、又道筋には何といふ名所があるのとか、いふ樣な詳しい事まで調べて居る人は尠ない樣です。私はそれを覺えさせる爲に、生徒に旅行案内をもたせて、旅行すべき目的地を定めそこに行くに最も便利なる路を取り、有益に面白く旅行して來る案を作らせる樣にして居りますが、かうしますと地理に對する興味も出、又研究心も起つて覺えるといふ上についてもいゝ樣であります。

△日本の人は方角の觀念が薄い

又よく婦人が新聞を讀みますに下らない三面の記事や、小說は用を仕掛けても讀む樣ですが、新らしい世界の記事や、何かに目を通す人はまあ無いと云つてもい丶位です。兎に角日本の母として、妻として今後子女の教育にたづさはつて行く婦人が、外國の事情に眞暗では、子女の爲、國家の爲にこの上もない不幸ですから、たとへ其記事を讀む暇が無い人でも、せめて表題位は目を通して欲しいものであります。たとへば近頃ですと南極探檢といふ樣なことでも、少しく大きくなつた子供に時折り話して聞かせますと、子供も悅んで聞きますし、又それ丈け智識を與へるわけであります。

よく新聞上の地理的問題等に就いて時々尋ねて見ますが、其中で其記事を讀んでる人は尠ない樣です。最も其記事が學問的にどれ丈の價値があるか無いかは別として、新らしいことを知るといふ點については新聞が一番必要であります。又常識なども、地理によつて養はれるといふことも尠なくありません。一體に日本の男子も女子も根本の智識たる方角の觀念が至つて薄くあります。それに、日本人は物事に對して判りがよくて、手取早い方ですから、一寸物の寸法を定めるにも一目見て大概の處をあてることが上手ですから、西洋人見た樣に一々物の寸法を計つてからといふ樣な間遠いことは嫌ひます。だから道を聞かれても東、西の方角をいふよりも向ふの辻を右に曲つて、左に折れてその横町をどう行くといふ風に敎へる習慣がついて居ります。自分が歩いて居ながらどういふ方角に向つて居るか知らぬ人が多くあります。隨つて又距離といふ觀念も至つて少ない樣です。殊に東京の町といふものは德川時代にある一種の意味から町の屈曲を烈しくしましたので、尙更判りにくゝなつて居りますから、自然左右を使ふことが多くなりましたが、田舍に行けば方角を使ひます。方角の觀念を確かに入れて置かないと、京都はどの方面かと聞かれても返答に窮すること

があります。只それ丈けのことでなく、正確な秩序的な頭を作るには方角と距離を確かにするといふことは最も必要なことであります。

△地理の研究に趣味を持つ事

婦人が學生時代に學んだことは、家庭に這入つて家を治めて行くについてもその助けとなればいゝので、婦人が地理を修めるといふことも結局そこに歸するのであります。最も地理といふ方面に特別の趣味を有し、地理學を専門にやるといふ考へになると、なかなか容易いことではありません。第一婦人の服装から考へても、裾の長い歩き悪い衣服を引ずりて山河の實地研究も出來ないし、それかと云つて西洋婦人見た様に輕裝して鞄を肩に掛けて歩くといふ程日本の社會は進歩して居りませんから、旅行の不便といふことが第一婦人に適して居りません。男子でさへ探見旅行の爲に粗服を着て汚れた靴でもはいて旅館などに行きますと、他の客と同様に取り扱つて呉れませんのに、まして婦人がをかしな風でもして居たら、それこそ寄せ付けもしないでせう。ですから今日の處



自然の壓迫の爲め婦人が進んで地理學を研究しようといふ様なのは無い様であります。然し乍ら只旅行といふ點は、婦人は境を越えずといつた時代と比べますと著しい進歩であります。先年沖繩の女子師範が東京に修學旅行を試み、つゞいて宮崎縣の女學校もやつて來るといふ有様で、女學生の旅行は盛んになつて來ました。が、一般の家庭を見ますに經濟のゆるす人は避暑避寒の爲に一ケ月か二ケ月、箱根なり熱海に遊びそれも別莊か宿屋の二階に居て、湯にでも這入つて、歸りには箱根細工か繪葉書でも買つてくる位のもので、別に箱根の自然に對して特別の趣味が起るでもなく、尙更地勢等に對しての研究心などあるのではありません。



△地理的一般概念の必要

今日婦人が文藝に對して進歩して居る歌を、科學の方面にも向けて欲しいものだと思ひます。科學的に向くといふことは家庭向にいろ〳〵便宜なことで、理科が家庭に必要と認められて居ることは、一般の人がすでに承知して居ることでありますが、地理がどれだけ家庭に

必要かといふことは、まだ一般の人の頭には直接に感じられて居りません。

第一日本が世界的にどういふ位置にあるかといふことを考へて、自國の狀態を知り、そしてすべての人民が生活を續けて行くに最も必要なる米といふ様なものに就いても、年にどれ位出來るものか、又どの地方が最も善良なる米が出來るか位の一般的概念は、家庭の婦人として直接に必要なことであります。其他織物にしても、どの地方からはどんなものが出る位のことは知つてる必要があります。

それ等のことは家事に直接の關係を有することでありまして日本はどういふ產物が多くて外國に輸出すべきもの、輸入すべきものゝいかなるもの位心得て置くといふことは、自然子供を敎育して行く上にも必要なことであります。婦人が地理に興味をもつといふことは、色々の方面から大切なことでありまして、昔の人が可愛子には旅させろと言つた言葉もある通り、經濟のゆるす限りは子女に旅行をさせるといふことはいゝことであります。

すべて婦人は男子と違つて專門的でなく、大體に渡つて相當の知識を有して居るといふことが、家庭に立つ時に必要なことでありまして、理科であらうが、國語で有らうが、地理であらうが、すべて學校時代に學んだものを役に立たせると云ふことが、最も大切なことであります。

婦人と談話

話す人と聞く人

女子高等師範教授　岡田みつ子

△初對面の人との話

人と話を致す時に、ごく懇意なる間柄はさうでも御座いませんが、これから知己にならうとか、他人の紹介でお目にかゝる様な、すべて、初對面の場合等には、話し出す事柄が、見付からなかつたり、又如何なる話をして、よいものやら解らなかつたりして、兎角話がはずまぬがちになるもので、御座いますから、そんなことがなく、親しい方にも、疎ひ方にも、自然で嫌味がなくなだらかにお話が出來る様に致したいもので御座います。私が米國にまゐつて居りました頃、何より羨やましいと思ひましたのは、彼の國の婦人逹が、交際ぶりの上手なことで御座います。それに私などは人一倍の引込思案の方で御座いますのに、英語はよく出來ませず、知らぬ外國人の中に飛び込みましてさぞ困ることゝ存じましたのに、外國の方はこちらに手持無沙汰な不愉快な思ひ等させる様なことは少しも御座いませんので、其行き渡つた交際ぶりには、ほと〲感心致しました。

△不體裁な無言

そして交際致す方は、私の學校の先生や生徒方計りでは御座いません。奥さんも、娘さんも、お老人も、子供さんも、と種々な方面の方で御座いまして、茶の會とか、談話會とか、其他何ういふ集まりの席でも、其方々の態度が、かねて見知り合ひの方だから、お話をするとか、少しも知らない方だから、放つて置くのと、いふ様なことは、少しも御座いませんで、向ふから進んで私に對しても、興味を以てむかへられるのが、何となく愉快で御座いました。私どもが米國といふ國に就いて、知つて居る半も、日本といふものを、知ら

ぬ人達であるのに、有りつ丈けの日本に對する知識を絞り出して、色々の問ひを發しては、話の緒を引き出してくれます故に、知らぬ同志でありながらも顔見詰合つて、無言で居るといふ様な、不體裁なことがなく、自分も話し人にも話の材料が、出る様に、仕向けて、一座を白けさせない、其仕振等は眞似の出來にくいことで御座います。

　ですから、私等は、知らぬ方計りの中に立ち交るのはいやだと思ひながらも、會に出て見れば、却つて面白く、愉快に



時が過ぐされますので、後では行つてよかつたと必ず思ひました。

△話の種子のない人

處が、日本の婦人の會に出ますと、親しい、例へば同窓會などいふ會でも、十人居れば十人とも、打解けて、面白く、過ぐすといふ様なことは、一寸、出來ません。二人や三人は、ごく親密に、話が出來ましても、多くの方と上手に、談話をして、行くといふとは、我々は誠に下手で御座います。米國のかたの様に、致し度いと思ひましても、一人で

は出來ませず。又四五人が、其心で居ましても、五十人、百人といふ婦人の會になりましては、今の場合、到底出來ることでは御座いません。よく色々の會に出ましても懇意で無い方と席を隣り合つても、言葉も交へず、又何といふ方か、お名前も知らず、默まつて、別かれて、仕舞ふことはありがちで御座います。これは、一にはお互に、談話の種子を持つて居ないといふ處から、來るので御座います。

△話は出來ないことなし

兼ねて、知り合つてる方ですと、其方の一身上のことも、又色々の趣味等といふとも、わかつて居りますから、話がそれからそれへと、湧いてまゐりますが、さうでない、と、如何いふ向きの話を持ち出してよいか解らず、新聞などにある、時事問題でも、つかまへて、外國の戰爭の話でも初め樣かと思つても、それらに對しての興味は愚か智識も持たず、又婦人に相當した、衣服、料理の話なども、他人の批評に關しない、色彩の關係とか、地合織方等いふ樣なことには、口にする程の智識も持たず、料理といつても、如何云ふ風にした方が美味いかよく出來るかといふ丈の研究もしてなく、殊に又專門的の音樂とか、繪畫に立ち入つては、尚更話が出來ませんので、つい無言で仕舞ふ樣になりますが、然し、話の種子が無くても、自分を合手の人の位置に置き替へて見るといふ、思ひやりと想像力とがありましたら、話が出來ないことは御座いません。一寸した話の工合から、其人の趣味や、境遇が知れますと、話の材料は自然、出て來るもので御座います。

△話に興味を持つ態度

然し私ども、婦人の頭には、出過ぎるといふ事をわるいとし、すべて、控へ目にすべきものといふ癖がありますため、受身になりがちで御座いますが、人と對話する時に、向ふに計り話さして、自分は受身でのみ居るといふのは、いゝことでは御座いません。自分から、話に興味をもつ態度を見せねば話は決して進むも

のでは御座いません。

△談話術の格言

次に談話に關して、古人の申した言葉で、なるほどと感じましたものを數個條こゝに抜き出して申し上げませう。

一、一座の人が、一人でも、あゝいふことは云はないがよいにと思ふ樣なことは、口にしないがいゝ。

一、話が旨いといふことには、聞き方が旨いといふこ



とも大きに關係する。

一、智慧のある人は、少し話して、大に意味ある言を出すが、愚な人は、多く喋言つても、取る樣な意味は何にもない。

一、何事でも、人の言葉にすぐ、同意する人と話しては、面白くない、山彦を樂しむのと同じで、暫時はよいが、すぐ飽が來る。

一、人は、自分のことを話すのを、最も愉快とするものであるから、人と話する時には、自分の上にのみ渡らない

樣に注意すべきものである。

一、會話の眞の目的は、自分が何かに就いて人よりも智識のあるのを、見せびらかすのではなく、他人に接した爲、自分が持つてゐる材料を增大にし、自分の間違つた考へを改め、進步さして行くといふのである。

一、少しは遠慮があつて尊敬しなければならない人と語るのでなければ、自己は進步しない。

一、初對面の時に、氣に入つて、餘り大騷ぎをするのは、愼まねばならぬ、何故なれば、其心持は、何時までも續くものでないからである。

一、他人に對し、批評的態度になるのは、自分の考の範圍が狹いのをしめして居る。人は考の廣くなる程、眼界の廣くなるほど、益々人の缺點には眼を塞いで好い方を見て行くことが出來るやうになる。

一、修養を積んだ人の交際振は、お互に、恭謙の念があつて、たとへ輕蔑すべきことがあつても、それを露骨にしない。すべて、自分の權力といふ樣なことも隱くして見せず一人の人に計り注意を向けず、一座の人に注意を拂ひ、そして話し振りは、餘り熱誠に過ぎることもなく、又人の話を遮ることもなく、自分の話に勝利を得させ樣といふこともなく、自分は人にすぐれて居るといふ態度も、見せない。これ修養を積んだ人の談話法である。

談話についての所感の一ッ二ッは、以上の樣なことで御座います。

婦人ホームに救はれたる不幸の婦人

婦人の職業紹介事業

大阪婦人ホーム主任　林　依　子

大阪婦人ホームは大阪婦人矯風會の附屬事業で詳しく云ふと田舍出の婦人が惡漢の誘惑にかゝらぬやう良家の女中に世話してやるとか其外看護婦、會社銀行の事務員、乃至は家庭教師、行儀見習等に至る迄、間違のないやう親切に婦人の職業を紹介する所である。主任の林依子女史は奧田文子、小山光子の兩女史と共に創立時代から粒々辛苦して此ホームを今日の財團法人にまで仕上げた人、場所は大阪中之島六丁目、扱つた人數は二千に近く、東京にも類のない婦人職業紹介所に兼ねて婦人宿泊所である（記者）

△千態萬狀の走馬燈

ホーム創立以來取扱つた婦人の數は二千人近いことですから、私共は色々な性質、樣々な境遇の人に接しました、中には零落した一家を奧さんとの希望で遙々出て參つた健氣な少女があるかと思へば、亭主の留守中に衣類や有金を引つ浚つて逃げて來る不心得の妻さんもありますし、又未だ足腰が立たぬと云ふでもないからと我から進んで奉公口を求めに來る殊勝なお婆あさんもあれば、歷とした家の奧さんでありながら夫婦

喧嘩が亢じて、呑乳子までも捨て飛び込んで來る人もあり、それは〳〵種々樣々な喜劇悲劇の見通しでございます。

殊に大阪には惡所が多い爲か、御亭主が放蕩の爲め夫婦喧嘩の果に家出をして來るのが少くございません斯樣な人は今では大概私共の方へ參りますから未だ好いやうなものゝ迂つかり惡漢の手にでも落ちた日には大變なことになつて了ひませう、御婦人の無分別は無論惡いに相違ございませんが、御亭主の罪も亦決して輕いとは申されません。中には又子供がない爲め些少の爭論から家を飛出すやうになるのもあります。此處らは好く男子方の御勘考を煩はしたい處であります

△羽子板より石鹸箱が欲しい

一昨年の十一月に、雲州松江から參りました井上あや子と申します十三歲の少女がありました。家は小間物屋で、昔は相應にやつて居ましたさうですが、父が死んでから家運次第に傾き、加之に兄は精神病者で一室に檻禁されて居るといふ有樣ですから、母親の心痛一方でないのを見兼ねて、僅か十三のあや子が、お部といふ二十一になる姉を說き進めて連立つて奉公に出て來たのです、如何にも健氣な少女と思ひましたから私共で兩人共世話することゝし泊めて置きました。

すると丁度クリマスが參りましたので一同に贈物を遣ることになり、あや子は一番年少だからと羽子板を遣はしましたが少しも喜びません、そして未だ誰にもやつてない石鹸箱があるのを見まして「私は此れから奉公に行く身で羽子板などの用はありませんから、何卒その石鹸箱と換へて下さい、石鹸箱なら何れ入用でございますから」と申しましたので、何うも十三にしては長せた言を云ふ子だと思ひながら取換へてやりましたが、實は其時から私共は其人の擧動に目を付けて居たのでございます。

△興風會より表彰さる

其中に或ところへ奉公に出しましたが、奉公してか

る後の心掛といふものは誠に感心で、奉公先は堂島の林と申す私の親類に子守にやつたのでございますが、月々貰ひます給料の一圓五十錢と云ふのを一文も費はずに皆母親に送るのでございます、姉の方は三圓の中を一圓五十錢とつまり兩方で三圓宛送り、一圓は銀行に預け、殘る五十錢を二人の小使にする約束ですけれど、妹は一文も要らぬと云つて皆姉に返し、自分は折折貰ふお使賃で用を足して居るといふ有樣です、それでも子供は可愛がる、命令は好く聞く、萬事素直に働きますので、私共も悉皆感心しホームの友の會で皆さんにお話しましたのが新聞に載り、知事さんを總裁に戴いて居る興風會にも聞えまして、昨年十一月表彰せられて、五圓の賞與を貰ひましたのです、するとその五圓と貯金の十圓とを合せて十五圓を丁度其折兄が死にましたので葬式の費用にとて早速母へ送つてやりました、姉も感心ですが、年齒も行かないあや子の行ひには誰一人感心せぬものもございませんでした。今では國から母を呼び寄せ、三人別々に奉公はして居ますけれども、月々逢つては互に勵まし合ひ、一日も早く衰へた井上家を再興し度いと傍目も振らず働いて居ります。



△昔を忘れぬ優しい心掛

紀州の人で田中としと申します少女、是も亦た中々感心な心掛で私共に居りますうち、並通の人なら知らぬ振をするとか、さもなければ朋輩へ是れ見よがしにする門先の掃除などでも、成るべく人の目に付かぬうちに、毎朝人よりも早く起き上つては綺麗に箒目を付けて置くと云ふ殊勝な心掛の女でございました。此人は少しは教育もございましたし、如何にも着實な性質と見ましたから貝塚の郵便局の事務員に世話を致しました處、物事を眞面目にするのと、仕事に蔭日向のないと云ふのが局長の目に付き、相當の資産ある御親類の所へ、局長自身媒妁人となつて世話して下さいました。今では立派な奥様ですが月々のホームの友の會にも缺かさず出席し、其都度何かしら寄附をして參ります、昔を忘れぬ心掛が私共に取つては何より嬉しいので御座います。

阿部房子と申しますのも、十四の折に看護婦志願で上阪して參つたのを、當方で世話をして岡本といふお醫者さんのところへお頼みをして置きました處、是も先生の目に止り、看護婦學校に通はして貰ひ、卒業後は大阪病院に勤めて親切な看護婦さんとして患者間に尊敬されたものでしたが、今は縁あつて郷岡の方に嫁ぎ、子供も出來圓滿な家庭に暮して居るさうでございます、此の人などは今でも月々會費を送り、且つ昔を忘れぬやうにと、會費袋を肌身放さず携へて居るとのことでございます。

△無くてはならぬ人

岡田ふじと申しまして六十八になる老人がございました、此人は立派な息子もあり嫁もあり、樂に遊んで暮せるのに、未だ足腰も達者だからとて、伜夫婦が止めるのをも肯かずに世話して呉れと云うて參りましたので、眞鍋さんと申す御主人は會社員、奥さんは小學校の教師を勤めて居らつしやる家へ差上げましたところ、最初は這んな年寄の加之片目の老婆さんをと大變

な不平でございましたけれど、澁々ながら使つて御覧なすつた所が、此は亦意外に行屆いた婆やさんで、丁度奥様がお産でお困りの處を上の坊ちやんのお世話から奥さんの洗物迄手一つでして退けると云ふ働き方で御座います、それに最初は怖がるだらうなどゝ陰口のあつた坊ちやん迄が全然懐いて仕舞ひ、御両親の留守中も機嫌好く婆やと遊んで居るといふ有様、婆や



實にも盛せぬは花の種、色々なれや
くれなゐは、何れふかゆりふかみ草
夏の山路ぞうれしけれ

は又お子さん二人を抱へながら、御二人のお歸り迄にはちやんと夕飯の仕度をして置くなど、普通の若いものも及ばぬ程の忠實な奉公に、御主人夫婦も昔の不平も何處へやら今では兵鍋家に無くてはならぬ重寶な人に思つて居るさうでございます。

十三の少女でも、六十八の老人でも、或は又頼る所もない他國に出て來た人でも、相當な家庭に育つた人でも、其の年齢や境遇は何うでも虚榮の心

を去り、誠實に働きさへ致しましたら、自然と順境に到達するは疑のないことでございます。

△無邪氣な子供の力

是は前の人達と趣きが違ひますが、鳥取のものでございました。夫が酒ばかり飲んで少しも仕事をせぬのみか、酔うては何時も打ち打擲をすると云ふので六つになる女の兒を連れて賴つて參つたのでございました私共では夫のあるものは成るべく穩かに說き聞かして歸宅するやうにして居りますので、亭主へは手紙を出し、本人へは歸るやうに、いろ／＼と說き勸めましたけれども存外に決心が強くて中々歸らうとは申しませぬ、そのうち亭主が手紙に應じて迎へに參りましたので兎も角も私が立會ふから對面するやうにと勸めましたけれども一旦出て來た以上は何うあつても會はれないと言ひ張りまして面會を拒みますので私共も困り切つて居りました、ところが六つになる娘がヒヨコヒヨコと驅けて參りまして、母親の顏を覗き込みながら「父様がもう惡いことはしないと云ふから一遍歸つてお遣りいな」と長せたことを申しますので、私共までがつひ貰ひ泣きをしました、子供までがさう云ふのだから、兎も角も一遍は歸つてお遣りなさい、今後若し重ねて恁ういふことがあつたならば其時には必ず引受けるからと、樣々と賺かしますと、漸う納得して歸つて行きました、其後禮狀が來たきり今以て何とも云つて參りませんから、今では亭主の素行も修まつたのでせうと察して居ります。

△鼠一匹が旅費

是は可笑な話ですが、或時新しい行李と、大きな風呂敷包を持つた女房が世話を賴みに參りましたので型の如く泊めて置きますと、二三日經つて、一人の職人が怒鳴り込みました「何でも俺の嚊が隱してあるに違ひねえ、逢はして呉れ逢はして呉れなきや考がある」と非道い見幕です、唐突のことで吃驚しましたが、いづれ仔細があるだらうと樣子を訊いて見ると何うも[illegible]

に來たのは其職人の女房らしいので、鬼に角會はせてあげるが、手荒なことをしては可けないと固く申し置いて女を連れて來ますと、突如「これ己れは何と云ふ非道い奴ぢや、俺が尼ケ崎から歸つて見たら家は明けつ放し、着類着物から銀行の通帳まで持つて行き臭つて、加之に汚れた茶碗皿はバケツに漬けた儘、食ふ物も呑むものもありはしない、尼ケ崎の仕事場に歸らうにも電車賃もない、ところが天道樣は難有いものよ、手前見たいなふて臭れがあるかと思ふと又助けて臭れるものもある、大きな鼠が一匹鼠取に掛つて居たい、交番に持つて行つて七錢貰つてやつと尼ケ崎へ歸つて行たんだ、好うまア罰が當らなかつたな」言分が餘り可笑しいので吹出して仕舞ひましたが、それで大概樣子も解りましたので、偖は然うかと亭主を宥めて事情を聞きますと、如何にも女房が始末に負へぬ厄介者らしい樣子ゆゑ、それはお前さんが惡いと懇々言ひ聞かせますと女房も到頭我を折り、亭主に詫を言つて歸ることになりましたが、亭主は始めの勢ひ何處へやら非常な喜びです、夫では荷物もあり又不安心でもあるから確かな車夫に送らせやうと云ひますと、何あにこんなものは私が擔いで行きますと、行李を擔ぎ、お前はそれを持なと風呂敷包を女房に持たして、嬉々と歸つて行きました樣子の可笑しさは、宛でお茶番を見るやうでございました。何でも八年も連れ添ふのに子供が一人もないといふことです、子供でもあれば如何な女房でもそんな事はせぬのでございましたでせう、矢張り子供がありますと前の話のやうに別れる夫婦も別れずに濟むことになるのです。

△家出が源因で得意を殖す

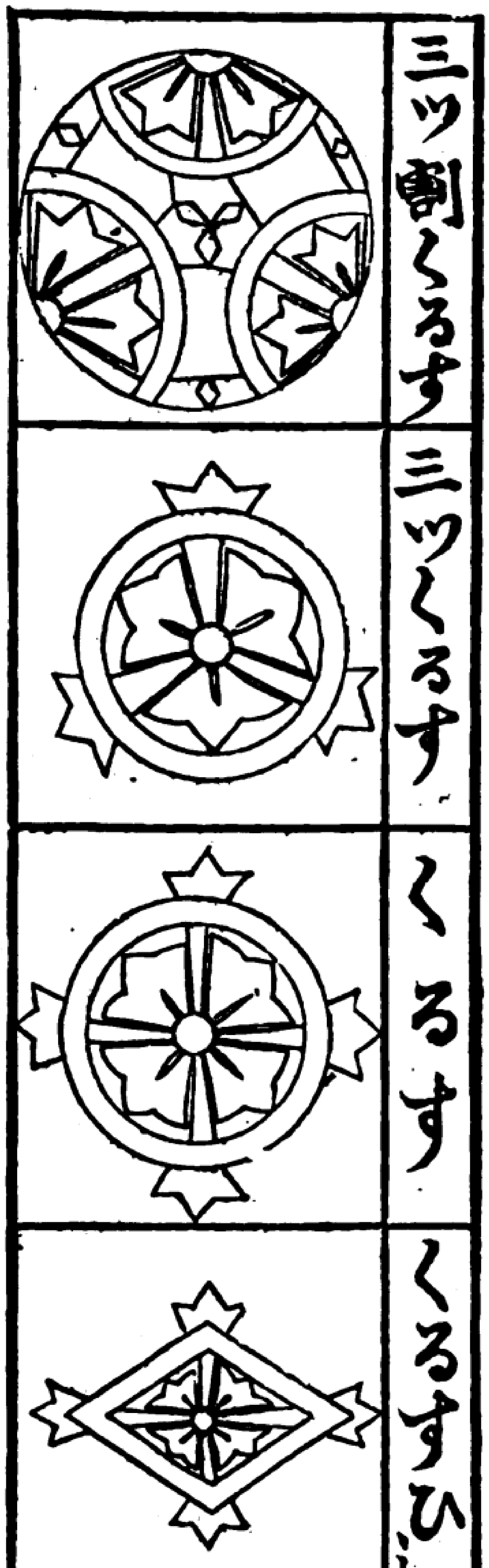
是は京都の染物屋の女房でございます、亭主は賭博を好んで、何うしても止めないのを苦に病んで逃げて來ましたから、此方から知らせてやりますと姑が參りまして、伜の惡い癖は私が身に換へても改めさせるから、何卒私に免じて歸つて呉れとの歎願、私共も共々勸めますと本人もやうやく納得して歸りましたが其後

母親の意見で亭主の悪癖も斷然止み、稼業大事と働くので、今では昔と見違へるやうな圓滿な家庭となり、且つホームに救はれたのが緣になり、其後女房は來阪の度にホームを定宿として、會員間を廻つて澤山な得意を作り、以前の悲みが變じて幸福な日を送つて居ります。

△呆れ果てた事の數々

其外立派な軍人の奥様が、夜更に見えまして、是非共奉公がし度いと仰しやる處へ、馬丁が馳けて參り、一先づ御歸宅をと諫めるのもあり、會社員の奥さんが乳吞子を置いたなり脱けて來られたのを、御主人が直接にお迎ひにお出でになり、名前を聞くのだけ許して呉れとお頼みになりますから、いろ〳〵と奥様を宥め賺かして車で送らせると、途中から決して無分別はせぬから此を證據に別條なく歸つたと傳へて呉れと刺繍した絹手巾を渡して車夫を返すのもあり、千態萬狀の人事の葛藤は應接に遑もない程で社會の裏面には如何なる活劇が行はれつゝあるかを推測し得らるゝのであります。

くるすの意匠



料理食品文盲手引（六）

小泉迂外

△水飯

衛生思想の幼稚な徳川時代には、夏季になりますと、種々危險な食品がさかんに行はれました。水飯なども慥かに其の一種に算へられる食品でございませう、之れはお若い方は御經驗もありますまいが、眞夏になると何を喰いても滋味くないので、普通の御飯へ掘抜き井戸の冷水をかけて喰くので、輪形の薄手茶碗に銀の箸を鳴らして、サラ〳〵と歯に沁むやうなのを掻き込む趣味は又格別でございます。

御馴染の「源氏物語」にも、

大みきまゐり、氷水めして、水飯などとり〴〵にさうどきつゝくふ（常夏）

人々の水飯などやうのものくはせ、君にも蓮の實などやうのもの出したれば（手習）

などゝございますから、此の風は隨分古くから行はれましたのでせう。

それで此水飯には副食物も、極く輕淡した野菜をよろこんだので、

水飯に乾かぬ瓜の雫かな　其角

水飯に淺漬ゆかし二日酔　樗良

の句の通り、不消化な生漬などは最も水飯趣味に適つたものです。と申上げたら、神經質の方は定めて眉をお顰めの事でせう。



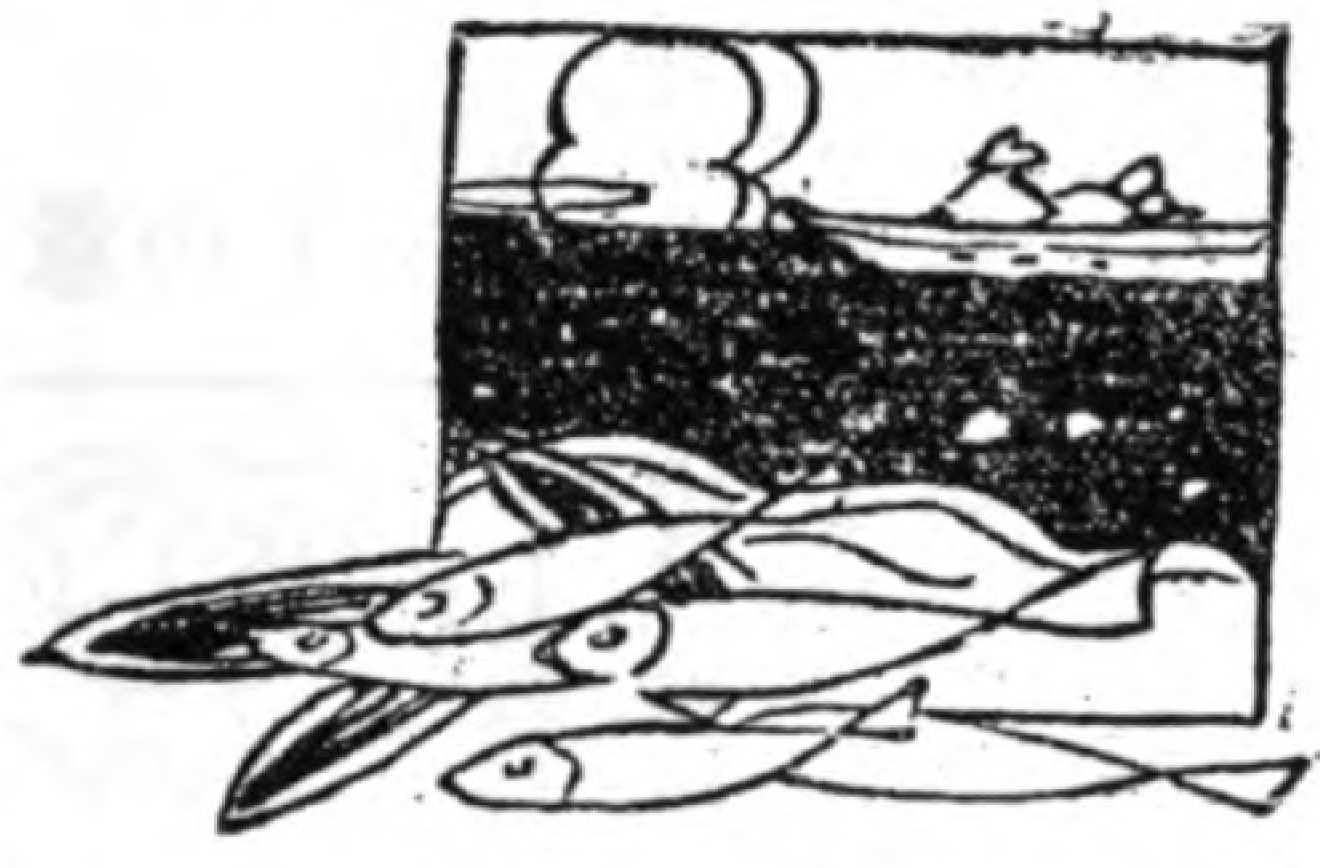
△鯵のいろ〳〵

魚の作り方や、味のつけ方はそれ〴〵學校で御會得でせうから避けますが、鯵の種類と、それによつて料理がいろいろに區別されるのだけを一寸摘んで申上げませう。

鯵には御承知の如く眞鯵、縞鯵、むろ鯵、めあち、黒鯵等といろ〳〵類があつて、何んの鯵でも佳い献立に用

ふといふわけではないので、むろ鯵、黒鯵などは價は安うございますが、味も形も劣りますから料理には向かないので、縞物が干物につくつて御惣菜より外仕方がござんすまい。

先づ一番調法なのが眞鯵で、之れには大鯵と小鯵の區別があつて、三寸位から上下で此大小が分かれます。大鯵は一體に脂が多いので酢の物には不可ませんが、



燒物としては無類でせう。又背切にして、茗荷か夕顔等をあしらうと面白い碗盛が作られます小鯵は脂が尠くないので一番酢の物に適して加減酢、蓼酢、黄味酢に存外庖刀の妙がつくされませう。又鮓に致すのも此種の鯵に限ります、前年私が三浦三崎に遊びました折、土地の人の好意で漁船に同乘して親しく鯵漁を目撃し、舟中で潑剌として躍上る小鯵を指を以てキユッと骨をはがし味を付けずに喰きましたが、其妙味は未だに舌端を去りません。此れが他の鯵では斯くまゐりませんが、全く小鯵には輕い特色があるからです。

縞鯵はあまり、素人方は御手掛になりますまいが、新鮮なものは頗る滋味で、夏季の刺身には此魚が第一位を占めませう。しかし此鯵は非常に腐敗し易いので、御仕入のせつによく善惡を鑑別してかゝりませんと、思はぬ失敗を演します。

△夏季の豆腐

豆腐は滋養に富むのと經濟的な食品といふのでちか頃大分家庭に歡迎されて居ります。なる程豆腐は蛋白質が多いので其の新鮮なものは滋養にはなりませうが、之れにもやはり季節のあるもので、夏季は少し時間が經つと直ぐ腐敗つてまゐり、肝要の蛋白質が化學的に分解するので、之れを喰くと消化器を害ねて腸胃加答兒などを起す事が屢々ございます。

通人がつた方などは、冷奴といつて、生の豆腐を冷

水に浮べて召上りますが、衛生上から申したら前の水飯と同じく危險な食品で、新時代の方にはお侑めは出來ません。別して梅雨期などは氣候が不順で、飲食物の最も腐敗が烈しうございますから、格別の御注意が



肝要で、若し豆腐を水に投れて浮いて居るやうなものは避ける方がよろしうございます。

何に致しても生の豆腐は胃腸を害ね易うございますから、若し夏召上るならば湯豆腐か煑奴がよいので、食味に精しい彼の抱一上人が句にも

五月雨や又湯豆腐も一もやう

といふ有名なのが遺つて居ります。

△麥　酒

夏季は日本酒よりもどうしても麥酒の方がよいやうに思はれます。夏座敷酔ふては舟に乗る心地とは故人紅葉さんが江の島での即興ですが、今でも御酒の弱い先生の面影が直ぐ浮びます。稲村ケ崎あたりに一刷毛薄墨を引いたやうな雲が湧き立ち、はたゝ神が遠近に鳴りわたるのを前景にして、貸浴衣を夕風に吹かせつつコップをとり擧る等は何うしても麥酒の天地です。

専門家の話に一貫目の上等な麥酒は牛乳百二十匁と同量の滋養分が含むで居るとも申します。しかし此麥酒も瓶に詰めてから餘り日數の經過したのは避けたいので、田舎などへまゐると、腐敗したのを平氣で飲んで、下痢をすると、麥酒は通じを能くする効があるといふ人を見かけますが注意すべき事と思ひます。

又麥酒は瓶の色でも分りますが日光をなるたけ避けたいので、之れが貯藏は暗い冷たい所を擇んで、倒して置くべきのですが、無智なる酒肆や料理屋などでは日の強い店頭や火に近い棚に平



氣で晒して立てゝあるなどは呑氣千萬だと思ひます。
又近頃では機械の栓が發明されまして、一旦開けた麥酒の殘餘を氣の拔けないやうに貯へる法が能きましたが、一般の家庭にはまだ／＼行渉らぬやうに思はれます。
麥酒の種類は種々ありますが東京ではヱビス、關西ではアサヒが歡迎されます、しかし麥酒通はキリンに限るとも申します。

△鯛の庖丁

昔時面彫の名人某の話に、面を刻んで眼を入れる際に、左右とも同じやうに寸法をちやんと當つて刀を下ろすと顏が死んで仕舞ふ、物差を當てず目分量で刀を下ろすと活き／＼とした顏が能きる、と申された事があります。
料理なども是れと同じで、幾匁と秤をかけて砂糖を加へたり、何合と桝を用ゐて水や醬油を入れるなどは極く素人方の行る事で黒人乃ち料理人の側では皆何んでも目分量で通して居ります。之れは極端な例ですが、昔八百善の先代が賣出す時分に、上手な職人を一人連れて京都見物にまゐり、名古屋の旅籠屋へ泊つた時、鯛の庖丁を所望されました。
しかし八百善も職人も江戸流だけに爾ういふ儀式張つた事は不得手ですから尠からず困りましたが、ナニ構ふものかと負けぬ氣の江戸氣質を出して職人に庖丁を執らせましたところ、此職人中々の氣轉者で四條流も生間流もなく、ヅカ／＼と進んで俎上の鯛をヤッと眞二つに切つて引下りました。



其無鐵砲さに滿座も毒氣を拔かれて、とみに詞も出でませんでしたが宿の亭主は如何にも不審の仕打と『ちやッと旦那はんへ、此庖丁は何と云やはりますか』と尋ねました。職人はさもあらんといふ顏付で『オイ爺さん、一寸秤を貸しねへ』と秤を取寄て

其處へ突出し『別に何んの庖丁ッて事アねェが、其鯛を半分づゝ量けて見て下せへ』と申すので、亭主は何が何やら一向解せませんけれど、いはるゝ儘に量つて見ると、頭の方も尾の方もキッチリ二百匁宛かゝりました。といふお話。

△梅　干

訪へば梅干してゐる内儀かなとは紅葉さんの句で、艶なる情緒がこぼれるやうです。

昔は梅雨に到りますと間もなく梅干の梅實を賣來る聲を市中に聴かれたさうですが現今ではあまり見かけません。

梅干は梅の實の能いのを二三時間水に浸して洗ひ、それに鹽と紫蘇の葉を見計つて漬けて壓を置いて二週間なり二十日なり經て日和のよい日を見定めてから簀へあげて筵に並らべて干すのですが、幾年も長い月日を貯へて置かうといふのには、一日干したら夜は梅酸に漬けて置き、又翌日干すので、斯うして三四日たち、夫から四五日干上げて壺に入れ置くと、梅干の艶も出て、味もよいさうです。



一體昔時は冬になると江戸は火事が多いので、すはといふ時の焚出しの握飯に梅干を添て送りますから、その準備として夏季に盛んに之を作つたのでした。

又元祿以前には温飩を侑める時には必ず梅干を添へた風があつたと見えて、

うどんものぶる繪筵の上
梅干のすゐさん乍ら交りて　（懐子集）

○

梅干喰ふた眞似は其儘
膳下り扨もうどんや飜ぼすらん　（宗因千句）

などと當時の付合につかはれて居ります。

關西で鮓に添へる紅生姜は、此梅酢の壺に入れて色をつけるので、東京では卑しいとして使はれません。

△夏季の鮓

現今では大方握り鮓になりましたので、春夏秋冬四時絶えず鮓の影をみとめられますが、大昔乃ち貞享時代に京阪から江戸へ傳はつてまゐつた頃には、皆押し鮓でございましたから、ほんの夏から秋へかけて賣る位でした。



元祿時代には山の手と深川に三四軒の店が在つたのみで他は行商で、丸い桶の薄いのに數日漬け込んだ古鮓を容れて明石傘の紙を蓋にして幾つも重ねてかたげ、鯵の鮓、鯛の鮓と呼んだので、其角が「五元集」に

　明石より雷晴れて鮓の蓋

とあるのは、之れを詠んだので、明石紙を明石の神鳴など〻洒落たところが當時の俳風でございませう。

さて夏季の鮓で滋味いのと申したら、鮎の容漬、鯖の卷鮓、鱒の押鮓、小鯛、鯵、鱚、鮑、海鰻等の握鮓で鮪等の醬油漬類や、海苔卷、鶏卵卷等は春や冬の鮓で、夏には向き兼ねます。又素人方は、夏の魚類は腐敗し易いと思はれて、贈答の鮓には、魚類を忌む風習がございますが鮓に用ふ魚類は大概長時間酢に浸してあるので酷暑の折でも一晝夜位は味が變らずに保ちます。最も早く味の變り易いのは海苔卷と鶏卵卷で、之れは玉子や加藥等に味淋や醬油が含んで居るので腐敗し易いので、殊に海苔の如きは、色艶まで忽ち變つて赤味を帶てまゐるので美觀を殺ぐ事が甚だしうございます。

△水菓子

薫よき茶に餅菓子を侑めるよりも、アイスクリームに水菓子の雫垂る〻許りのものを出す方が夏のおあいそとして來客もどんなに歡ぶか知れません。氣持のよい上から申しても暑い途に下女を走らして、蠅の群らがる菓子屋の晒し物を求むるよりも、手作りのイチゴや桃を摘んで侑めた方が、喰く方から申したら百の嘉

肴珍味にも勝りませう。

又來客ならずとも、午睡の眼にぶきを拭つた跡での水菓子などは又格別の趣味で、胸の底まで清爽りといたします。



甜瓜、西瓜の如き昔時は卑いものとして中流以上の家庭には見られぬものが、洋風の流行と共に今では一般に受けられます。三十年程以前に農商務省で西洋西瓜を作つて市場に上した際、切つて赤からぬため之れを賣買するものが絶て無かつたのが現今では大方西洋西瓜となつたのも不思議です。

丶丶丶イチゴの流行も近頃です、八百屋、水菓子屋の店頭に紅潤るばかりのイチゴが、箱に盛られてあるのは目さむるばかり快よいのです。イチゴにはいろ〳〵喰き方があるさうですが、私達は朝の摘みたてを皿に移し、牛乳と砂糖をかけて銀匙でつぶし、カステラ等をあしらつて喰くのが殊に妙味を覺えられます。

昔は水菓子屋の第一は蜜柑、次ぎは梨子、桃、柿といふ順に數へられましたが、今日では蜜柑の次ぎに林檎が位置を占めるやうになりました。之れは慥に水菓子趣味の普及された驗でございませう。

近着の英字新聞『ゼ、テーベル』にも英國の果物熱は年々に向上して、殊に林檎の米國より輸入される事が益多く、之れが爲め米國の果樹の過半は林檎であると申す事が記してございました。

日本では態々舶來物を仰がずとも北海道、奥州等で充分林檎が作られます。又一方の臺灣、小笠原島邊からは蕉實、鳳梨、レモン等を得られますから、果實は栽培次第で自由でございます。たゞ嗜好が進まなかつた爲め今日迄盛んでなかつたのですが、追々流行と共に、價も安くなり、新鮮なものが送られるやうになりませう。

最近女學生の傾向

澤田撫松

△眞面目な女學生

現代女學生の傾向を研究するに、先づ第一に注意せねばならぬ現象は、一般の女學生が眞面目になつたとである。四五年前までの女學生は兎角浮華に流れて、何等目的とするところもなく、只隣家の友達が高等女學校へ入つたから自分も入るとか、海老茶の袴を着けて歩くのが嬉しいので譯もなく女學生になるとか、頗る眞面目を缺いて居たが近來はさう言ふ淺薄な考を以て女學生となる者は殆と無くなつた、孰れも生存競爭の劇甚なる今日の社會に在ては、女と雖も相當の學識がなければ幸福なる生涯を送ることの出來ないと言ふことを意識して、眞面目に學問しやうと言ふ風になつて來た。されば女學生が自ら自覺せるのみでなく、父兄も眞面目に斯う言ふ考を起す樣になつたのである。

△實利的に傾く

斯の如く以前の樣な浮華な調子は無くなつたが、一面には又斯う言ふ傾向がある。從來は父兄にしても女學生にしても學問を裝飾品として居たが、今日では之を實用品とし、之に依つて現實に利益を得やうとする傾になつて來た。以前は娘が高等女學校に入つて居ると言ふことは、親に取つても娘自身に取つても一種の誇に過ぎなかつたが、斯う言ふ浮華な考は近頃はなくなつて、全く學問の必要を感じ、高等女學校を卒業して居なければ人らしい生活が出來ぬと言ふことが分つて眞面目に學問する樣になつた。『どうも此節は世の中が段段六ケ敷くなりまして、女でも普通學問がなくては世の中が渡れませぬ、殊に夫に先だゝれた場合に何か獨立で生活の出來るだけの事を習はして置きませぬと、末々が案じられます、それには何を習はして



置くが一番よいでせうか。」これは親が娘の高等女學校卒業真近くなると、必ず校長に持ちかける相談である。これを觀ても現代の女學生が如何に傾きつゝあるかゞ分る。



△夫を選ぶ準備

現代の女學生が實利的に傾ける結果として、卒業すれば直ちに收入の道のある技藝學校が繁昌する。又以前は高女を卒業すれば、大抵は皆それで學問を止めたが、近來は卒業しても尚ほ進んで醫學とか美術とか音樂とか言ふ方面の學校へ入る樣である。これ等は單純なりし女子の生活が漸次複雜になて行く證據であらう。思想が斯く實利的に傾いて來たので、夫を選む標準も以前と餘程變つて來た。假令貧乏な一個の書生さんでも、將來の出世を當にして結婚したのは數年前の事で、現代の女學生は却々そんな迂遠な策は採らぬ。手取早く、結婚すれば直ぐ貴婦人と呼ばれ、結婚式が濟めば自動車で新婚旅行の出來る樣な夫を持つのを理想として居る。されば夫の年齡なぞには重きを置かず、再婚も厭はない。二十も年齡の違ふ夫でも、二人も三人も先妻の子があつても、男に財產と地位があれば女の方では好んで嫁に行く。されば必ずしも女學生のみを指すのでなく、一般の女の傾向であるが、女學生も亦其の中に數へればならぬ。

△女學生の早熟

結婚のことを言へば、近頃の女學生は餘程結婚を急ぐ。それは女學生自身よりも親の方が急ぐのである。それは娘を老嬢として長く獨身にして置くことの危險なると親が心づいたのと、近來の女學生の成熟期が早くなつたからである。敎師の話に女學生は誰でも未だ少女時代の中は學科の成績がよいが、年頃になると忽ち成績が劣る。それが以前は大抵四年生までは成績が良くて、五年生になつて劣るのであつたが、近來は四年生になると成績が劣る。これは一般に少女期が短くなつて、成女に達するのが早くなつた爲めであると言つて居る。さう言ふ譯で女學生の結婚を親が急ぐ樣になつたが、然し一面には女子



に職業教育の必要を感じて來たので、早く高等女學校を卒業させて、其の上で專門の學問もさせ、そして早く結婚させようと言ふ却々無理な注文が起るので、影響を受けるのは五ヶ年程度の女學校である。以前は五ヶ年と四ヶ年の女學校は卒業生に對する資格を異にしたが、今日では同一に看做され、或種の試驗に於て受驗科目に多少の相違があるだけであるから、成業を急ぐ現代の女學生は、五ヶ年程度のよりも、四ヶ年程度の方へ赴くのである。

△地方から來る女學生

△女學生の多くなつたことは前に述べたが、これは地方から入込む女學生が多くなつたのかと言ふに、さうではない。東京に於ける女學生の増加したのは、東京に住居せる者の娘が就學するので、地方から入込む者は其の割に増加せぬ。其の譯は地方に漸次女學校が増えて行くのと、親の膝下を離れて誘惑多き東京へ單身遊學することの危險な爲で、地方から東京へ入込む女學生は割合に増加しない。從つて女學生の思想、態度、服裝に統一が就て來た。今日の女學生が數年前の女學生の如く、思想に於ても、態度に於ても、服裝に於ても不統一でなくなつたのは、確に地方出身の女學生が減少して、東京在住の女學生が増加した結果である。又近來學生中より不品行の者を出すことの少なくなつたのも、地方出身の學生が減少した結果である。何事に依らず珍らしいものには好奇心の向くもので、地方の草深い所に住んで居た若い女が、俄に東京の空氣に當ると、見るもの聞くもの心を迷はす種となり、遂に救ふべからざる深淵に落ち入るが、都會に住んで居る者には其の危險が少ないのである。

△華美の風

然し服裝が華美になつて行くことは爭ふべからざる事實である。二三の學校は、服裝に制限を加へて、華美なる服裝を禁じて居るが、着る物に派出な物を禁ずれば、派手な帶を締める。帶も派手な物を禁ずれば羽織を派手にする。それをも禁ずると、今度は襟とか空氣草履の

鼻緒とか、或は洋傘や風呂敷を派手にすると言ふ始末で、却々華美に流れるのを禁ずることは出來ない。學生の服裝に制限を加へて居る學校でさへこの有樣であるから、何等の制限も加へず、生徒の自由にまかして居る所では、女學生の華美に流れるのは言ふ迄もない事である。現代の女學生は單に服裝を華美にするのみでなく、化粧までも派手にする。以前は白色白粉のみを以て化粧して居たのが、近頃は白色白粉や肉色白粉や紅などを顏に塗りたてゝ、舞臺へ出る俳優の化粧と同じ樣な化粧をする。これは確に女優の感化もあらうと思ふが、要するに現代の女學生は外面は華美に流れて、稍眞率を缺くの嫌ひはあるが、思想に於ては漸次眞面目に而かも實利的になつて行くやうである。

職業に從事する東京の婦人

東京に於ける女の數は七十五萬三千餘人、其内職業に就き幾何かの金を得て居るものが約十九萬千人更らに其の中で副業を營なむものが二千人餘あつて、其の職業の種類は人力車夫、銅鐵などの鑄物業、軍事に關するものを除いては男子のなす總てに渉つて居る、就中、女中の五萬九千人、衣類其他の裁縫に從事するもの二萬六千餘人、物品販賣業に關係して居る者二萬四千二百人、宿屋飲食店其他娛樂場の營業に働いて居るもの約二萬人、敎員其他自由業に關して居る者一萬四千五百餘人を以て最多とし何れも汲々として其業務に服して居るのである、されば男子の就職者と比較すれば婦人の就職者は其三割强に當つて居る、而して就業者は矢張り未婚者若くは寡婦が其の過半數を占めて居る年齡に依り之を區別すると二十歲より二十五歲までの者二萬二千餘人次いで十五歲より二十歲迄のもの約二萬人で兎に角婦人の働く時は十五歲より四十五歲迄で五十以上になると年を考るに從つて減少し七十以上で尚ほ職業に從事して居るものは約千人ある、それで十五歲より二十歲までの者は飲食店又は製糸工場等に多數を占め、二十歲より二十五歲の者は宿屋飲食店物品販賣其他娛樂場に關した職業に就き、二十歲より三十歲迄も此順序で進んで居るが、三十九歲より十五歲までの人は被服等の裁縫に最多數の地位に立ち、五十歲前後の人は物品の販賣に最も多く從事して居る、六十歲以上の老婦になると洗濯又は裁縫のみに從事して居ると云つてもよい。



熱帶地方の婦人の生活狀態

來馬琢道

▲輕便な子供の抱方

シンガポールに上ると、マレー婦人が子供を腰抱にして歩くのが目につきます。これは左の腰へ當がつた子供を左の手で抱へるのですから、右の手が自由に使へますし、子供も兩足をひらいて腰の前後へからみ、上手に抱ついて居るので危氣がありません。この輕便な抱方は、マレー半島から暹羅、緬甸を通じて行はれて居る風習です。併し子守（アマと呼ぶ）が大人なら安全ですが、十や十二三の子守が、少し大きい兒を片手で腰抱にするのは、兒供の方も窮屈らしく、子守も蝦のやうに身體をまげて大儀さうに抱へて居るので、何だか不安心に見えます。

▲蜂の眞似をした支那ボーイ

シンガポールやマレーに在留する日本の奥さん方は、日本人を雇ふことが困難ですから、據ろなく土地の者を使ふのですが、困るのは言葉です。英語や支那語では土地の者に通せず、支那人を使つても、あの邊の支那人は主にマレー語を用ゐますから、一寸不都合です。私が泊つて居た家へ、或時支那ボーイがビール瓶を一本持つて來ましたが、このボーイも矢張マレー語をつかつて、英語と日本語は五つか六つしか知らないので、何んだか薩張口上が分らない。唯奥さんシユガー〳〵とばかり云ひますが、ビール瓶の中に砂糖のはいつて居るわけもなし、何だらうと皆が考へて居ると、ボーイもじれつたくなつたと見えて、兩手を動かし羽ばたきする眞似を爲ながら奥さんシユガー〳〵と繰返し[illegible]居りました。其内マレー語の出來る知人が歸つて來て、それは他家の奥さんからこの家へ送つた蜂蜜で、ボーイは蜂の形を爲て見せたと云ふことが分り

ましたが、支那ボーイが、甘いものは凡てシュガーと合點して居たものと見えます。

▲斬髪で赤い唾を吐く女

暹羅の女は御承知の通り男と同じの斬髪頭で、腰のところへ、パノンと云ふ切を三ヤール半ほど巻つけて居ます。宮中では七曜はパノンの色を違へるのださうです。男は凡てこのパノンだけで裸體ですが、女は、身分のいゝ者は乳掩ひの布とパホームと云ふベールのやうな薄絹を、肩から引掛て居ます。このパホームは一寸優美なもので、主に支那製を用ゐて居ますが、近頃日本からもポツ〳〵輸入するやうです。私が彼地で求めたのも矢張日本製のパホームでありました。



近來彼地の風俗も大分進化して、官位ある男はツメ襟の白服（ヅボンは用ゐず、パノンを用ゆ）です。以前は絹パノンを女がはくことを禁じられて居ましたが、近來女も絹パノンを着られるし、地位ある女は乳掩の代

りにシャツを用ゐ、斷髮を延して束髮に結ぶものも少しづゝ見えて來ました。齒は檳榔子を嚙むから今でも皆漆黑で、始終赤い唾を吐いて居ます。私も試みにこれを嚙んで見たが、檳榔子の實を粉末にして石灰を交せ、何かの葉へ小さく包んだもので、何の風味もありませんが、口中の粘りがしてスーッとするやうな氣がして矢張赤い唾が出ました彼等はこれを片時も離さずに、ギチ〳〵嚙んで居るのですから、可成多い內地の收穫だけでは供給不足で、他國から輸入するのださうです。

▲跣足の婆さんは侯爵夫人

暹羅で私の泊つて居た家の娘が、毎日私共の部屋へ用聞に來ましたが、パノンを腰へ卷いたまゝシャツ一枚で飄然と現はれるから、隱れぬ眼には上着なしの物騷な姿に見えましたが、これが貴人の前へ出ても差支へない服裝です。又或時、向ふの商店の前へ、斷髮した跣足のお婆さんがしやがみ込で、品物を見て居るから、裏店のお婆さんだらうと思つて居ると、軈て買物を終つて側にあつた自働車へ乗りこみ、歸つて往きました。聞けば跣足のお婆さんは其侯爵夫人であつたさうです。跣足は貴賤を通じた風俗であります。

▲妙な白粉のつけ方

家庭の內幕はどうだか知りませんが外面は男尊女卑で、宮中に於ても外國人列席の場所へあまり婦人を出しません。先皇帝の時から大分歐風がはいつては居ますが、今回の戴冠式場では婦人の顏は少々しか見受ませんでした。皇帝がポロヴオニウエー寺へ御參詣の折に、道端で拜觀して居た多勢の女は、戴冠式へ參列して私共を案內した大臣方と話を交へられる位な身分ある婦人連でしたが、それでもよそながら拜むだけでした。彼地婦人の白粉のつけ方は餘程妙で、顏全面へ塗らずに、米粒位のかたまりをポツ〳〵と二十粒ばかりくつゝけて居ます。顏立ですか、先づ一般に日本人によく似て居ます、左様、美人もあるに違ひないが、

博文館創業廿五週年記念發行

太陽 第十八卷第九號 増刊

六月十五日發行

（紙數定期號の二倍）

雄飛廿五年

最近皇室御尊影

●名家揮毫一百人

●和洋畫記念作品廿五名家（寫眞版四十九頁）

本號に限り
正價金六十錢
郵税六錢

評論二十五名士

●川上將軍……東條中將
●市川團十郎……坪内博士
●雲照律師……境野黄洋
●小村壽太郎侯……松井伯軒
●勝海舟伯……山路愛山
●新島襄……浮田博士
●谷干城子……曾我子爵
●黒田清隆伯……大隈伯爵
●福澤諭吉……鎌田榮吉
●伊藤博文公……朝比奈知泉
●三條實美公……土方伯爵
●陸奥宗光伯……岡崎邦輔
●兒玉將軍……石黒男爵
●森有禮子……木場博士
●井上毅子……金子子爵
●近衛篤麿公……二條公爵
●星亭……島田三郎
●岩崎彌之助……末延道成
●中江兆民……三宅博士
●雨宮敬次郎……安田善次郎
●櫻癡居士……塚原靖
●橋本雅邦……關如來
●尾崎紅葉……田山花袋
●西郷從道侯……
●中上川彦次郎……

□憲政小史……淺田江村

創作二十五篇

▼夜襲（小說）：塚原澁柿園
▼サイダー（喜劇）：嚴谷小波
▼南島記游……遲塚麗水
▼蚊（小說）……廣津柳浪
▼べらぼうの始（喜劇）：……岡本綺堂
▼藤棚（小說）……森鷗外
▼落文（小說）……三宅花圃
▼犧牲の女優（小說）江見水蔭
▼江戸文藝の復活……佐々醒雪
▼糸遊（小說）……泉鏡花
▼天下の浪人……笹川臨風
▼朝鮮の印象……德富蘇峰
▼海邊（小說）：田山花袋
▼古今和歌集賠佐佐木信綱
▼河井繼之助論：松井柏軒
▼紀行……大町桂月
▼小說……正宗白鳥
▼小說……島崎藤村
▼脚本……島村抱月
▼史論……山路愛山
▼隨筆……幸田露伴
▼漫筆……内田魯庵
▼小品……高濱虚子
▼紀行……坪谷水哉
▼小品……姉崎嘲風

□漢詩……落合東郭選

□和歌……佐佐木信綱選

□俳句……内藤鳴雪選

博文館（東京日本橋本町三丁目）（振替東京二百四十番）

讀め庭園 趣味を有する士に
花卉 嗜好を有する士に

近藤正一君著・**名園五十種**
菊判横綴寫眞版五十枚外に本文
九拾五錢 郵税十錢

近藤正一君著・**庭園圖說**
菊二倍判頗美裝
壹圓五拾錢 郵税十二錢

前田曙山君著・**花卉應用裝飾法**
菊判特製三百頁
正價壹圓 郵税十錢

作間與三郎君校閲
梅邑右源治君著・**毛氈花壇**
菊判特製密圖入
八拾五錢 郵税六錢

北村東紅君著・**花と庭**
四六判二八五頁
六拾五錢 郵税六錢

内山正如君著・**家屋と庭園**
菊判和裝上綴
四拾五錢 郵税八錢

東京市日本橋區本町 ▷▶ **博文館** ◀◁ 振替東京二百四十番

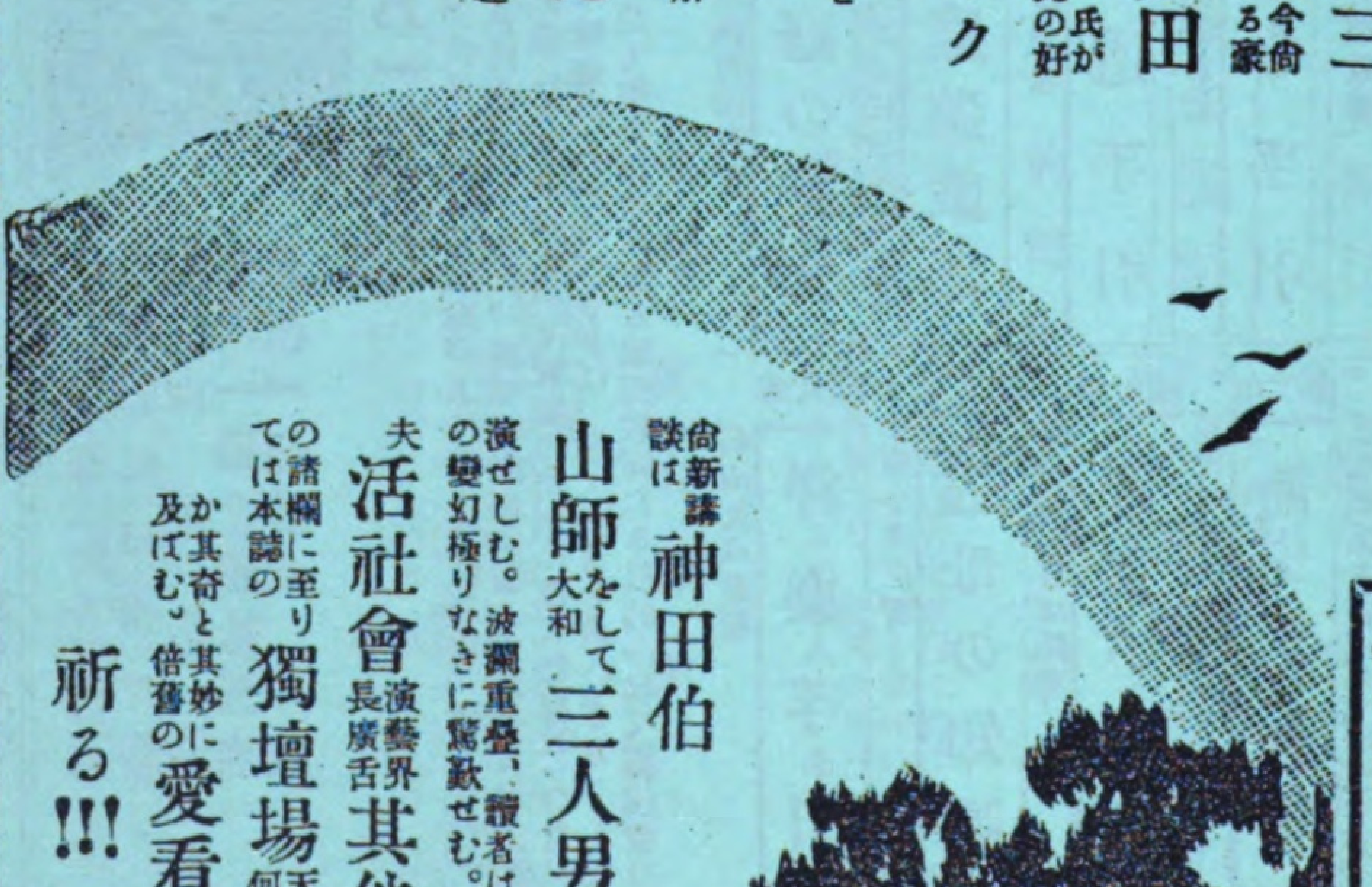
第十八卷第八號　六月一日發行

文藝倶樂部

尙は目に青葉山杜鵑初松魚の好時節となりぬ本誌は初松魚の潑剌たる活氣を發揮せんものと先づ卷頭に宮崎三昧氏の史劇「惡源太」を載す。是れ今尙人口に膾炙する豪雄鬼源太義平の武者振を活躍せしむ。讀みて骨鳴り血湧くの感あらむ。次に田村松魚氏の小說「天幕」を收む。氏が外遊は此の好箇の土產を齎らしぬ。新趣掬すべきものあらむ。第三にマークトワインの傑作「賭け蛙」を「いたづら小僧の日記」にて忽ち其の文名を高めたる佐々木邦子譯す。滑稽の眞味に頤を解かざるものなけむ。第四に三津木春影子の小說「牛乳屋の妻」を收む。津々たる詩趣は讀者の酌むに任さむ。

○菊判本文紙數三百廿頁○原色寫眞版一枚○寫眞版光澤紙刷八頁、普通四枚、二色刷光澤紙二頁○木版彩色數十度刷錦繪一枚

正價廿五錢　郵稅二錢半



尙新講談は神田伯山師をして大和三人男を口演せしむ。波瀾重疊、讀者は其の變幻極りなきに驚歎せむ。尙夫活社會演藝界長廣舌其他の諸欄に至りては本誌の獨壇場天下何物か其奇と其妙に及ばむ。倍舊の愛看を祈る!!!

東京日本橋本町
博文館
振替東京二四〇

女(その五)

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村良策君・朝爽孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 佐方鎭子女史著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史共著

第十八編 **子女の敎養** 棚橋絢子女史著

第廿五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿六編 **室內裝飾法** 近藤正一君著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第卅七編 偉人の妻

前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多くは皆內助の功に待たざるはなし、本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大敎育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗敎家の妻、あらゆる階級の婦人を收む、貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の良婦あり、交際場裡の女王あり、糟糠の妻あり、賢夫人あり、尙附錄には偉人を惱ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ、苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとするの婦人は、必ず一本を購ひ以て範を本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず

第卅八編 家庭日常 公けの心得

小西眞雄君著

●公に於ける一人前の人と一人前ならぬ人（二節）●婚姻と離婚とに就ての心得（八節）●法律上の親子といふことに就ての心得（二節）●親の權利と戸主の義務に就ての心得（三節）●隱居と養子とに就ての心得（六節）●親族と家族とに就ての心得（三節）●親族會と後見とに就ての心得（七節）●養料扶助の義務に就ての心得（四節）●相續上の心得（一節）●戸籍上の手續に就ての心得（三節）●貸借に就ての心得（四節）●賣物と抵當とに就ての心得（二節）●贈與と賣買とに關しての心得（五節）●法律に定められたる委託といふことに就ての心得（四節）●主人と雇人とに關しての心得（四節）●他人のものと自分のものとに就ての心得（四節）●住居及び身體の保全に就ての心得（五節）●隣同志の關係並に水と火とに就ての心得（七節）……………此外百〇九節

第卅九編 歐米 魚介新料理

赤堀峰吉君著

赤堀氏の割烹家として世に立つや久しく從つて日本料理界に於ける氏の名聲は嘖々たるものあり近頃歐米各國に遊んで諸國の料理法を研究し歸來和洋料理の革新を行はるゝもの少なからず本書は未だ一般割烹家の知らざるもの多き歐米最新式の魚介料理法を網羅したるものにて恰かも氏が敎場に立つの態度を以て丁寧親切に叙述されたれば何人と雖も一讀直ちに實習するを得べし讀者最も美にして珍なる新料理法を鹽梅して實庭の膳羞に供すべく試みられんことを乞ふ

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

何分ボツ〳〵の白粉顔で、いがぐり頭では鑑定がつきかねます。併し盤谷には餘程歐風が入りこんで、大分ハイカラな化粧品を賣る店がありますから、化粧法も追々進化するだらうと思ひます。

▲よく工夫した浮家

名にしおふ浮家を實見しましたが、實によく工夫したものだと感心しました。浮家のある所は、道路が川で、水に向つて商店を開いて居ますが、普通の建方では滿潮の時に水が家の内へはいるから、水の高低に從がひ何時も水面から床までが一尺五寸位の高さを保つて浮沈みする仕掛になつて居ますこの浮家は、舟の上へ組立て、或は筒の中の空氣を利用するために、竹たばの上へ建てるのです。而して土地の男女は、長五尺、幅一尺五寸位の亞鉛舟に棹して往來し、熱い時には傘を舟に縛りつけて買物や行商なぞを爲て居ますが、汽車のない時分は、この舟が盤谷との交通機關となつたのです。日本人は兎角この水上生活を野蠻風と見たがる癖があるやうですが、メナム河は靜かに流れて少しも危險がなく、彼の地理、氣候、習慣なぞから考へて見れ



ばよく適當した巧妙な方法だと思ひました。

▲緬甸の婦人

緬甸の女は容貌が一層日本婦人に似て、赤味がゝつた辨慶縞の幅廣いゆもじを腰に卷つけ、上部には騎兵服のやうな、胸に肋骨の紐のついた白い襦袢を着て居るところが、一寸裏店のお神さん式に見えます。頭は束髪風で、矢張始終檳榔子を噛んで居ます。處に依り女が汽車の赤帽を勉めて居るのを見ました。

▲顔を見せない印度女

印度の回々教婦人の外出する時には、五寸と二寸位の息出し穴が前の方に空いて居るだけで、四方を締切つて輿に乗り、汽車に乗る時にも輿から車室へ幕を張つてのり移る。汽車は素よりウーマンヲンリーで、窓へは幕が張めぐらしてあり、回教の寺にも婦人だけの室があるし、後家は火事頭巾形の白い物を被つて、マントへ垂れ下て居る。こんな風で、女の方からは外が見えても、此方からは丸で正體を窺ふことが出來ません。この風俗は回教の勢力地に多く見られます。

孟買の近邊に、パーシーと云ふ波斯の拜火教徒が四萬六千人ばかり居ますが、男女とも一定した帽を被り、一定した衣裳を着て居ます。顔の色は眞白ではありません。鼻が高くてきめが細かく、容貌が切々氣が利いて居る。パーシイ婦人が縁取の切を身體に卷つけて歩く姿は、如何にも粋で、少し言ひ過かも知れぬが、歐洲婦人より寧ろ人好がするやうに思はれます。

印度教徒は、ガンヂス河の畔で屍を燒く風習があるのですが、以前は良人に死別れた女が、良人の屍を燒く火中へ飛こんで殉死したさうです。近來これはなくなりましたが、寡婦になると、淋しくて家に居られぬと云ふので、ガンヂス河畔の寺院に入り、朝から晩まで花を手向け、水を注ぐのを嫁業にして、極質素な生活を爲て居ます。併しこの寡婦の中には、いかゞはしい噂の立つ者もあると聞きました。



婦女服裝の變遷

根本吐芳

婦女の粧ひは時代の花であると共に、其時代に於ける人心の歸向や生活程度を知るに、最も鮮かな標識である。現代婦女の服裝が著しく華奢に傾いてゐるに就ては、各呉服店の誘惑的販賣法も、或は因由になつてをらうが、畢竟は物質的進歩に伴ふ生活の向上と、階級的社會制度の打破によつて拘束を免がれ、金力だにあれば普通人にして高貴の人と同じ服裝を用ゆるも、何等制裁を蒙ることなく。今一は幕末時代から明治初年へ掛けての質素な流行の反動と、歐米人等の色彩に富んだ華美な扮裝から受けた感化も尠からずあらうと思はれる。幕末時代の質素な流行も、近因は寛政と天保の兩度の勤儉令から生じたのであるが、遠因としては元祿享保の華美を受けて、所謂絢爛の極平易となつた、人間嗜好の變化とも見られる。歷史は繰返す、流行も廢りも幾回轉をするので、終局は到底窺はれるものではない。室町時代、桃山時代、それは餘り過去に屬するから、茲には專ら今日の社會に正しい系統を有つてゐる、江戸時代に於ける婦女服裝の變遷を、概括的に書いてみやう。

▲武家風の浸染

群雄割據の戰國時代から、豐臣秀吉によつて天下は一時小康を得たが、頓て關ケ原の合戰となり、斯くて家康日本の最大權勢家となつて、覇府を江戸に開いた。長い干戈に農町民は散々に疲弊し、未だ充分給養の間がなかつたので、今から二百八十餘年の昔、寛永の頃までは武家は格別、町人百姓は男女共に、衣服は

甚だ麁末なもので晴着にも郡内太織。常は木綿の紋附であつた。然るに四海靜謐のお蔭で、町人百姓は餘財を蓄へられるやうになる、一方は貧家の妻や娘が武家奉公に上り、段々立身して上つ方の衣服を拜領する、我家へ戻つてから嫁入にも其拜領物を着し、又祝儀の時とか物見遊山の際にまでひけらかして、世上の女子の眼を驚かした處から、有福な家の妻子等は、自費を投じて拜領物の如き衣服を造り、正保慶安の時代は此流行を趁つたのであるが、それでも下女だけは何んな身分の家であつても、四季ともに木綿の晴着であつた

▲町人の驕奢

そんな動機から寛文年間に入ると、男女共に追々衣服が奢つて來て、地白綸子などを用ひるやうになり、紺緋紫などの總鹿子即ち今の疋田鹿子の小袖が盛んに流行した。其時代如何に江戸町家の婦女が奢つたかといふ一例を擧げると、今の日本橋區小舟町一丁目に、石川六兵衛と云ふ金持があつて、其女房は常に紗綾縮緬や綸子の類を着用し、晴ケ間しい場所へは緞子繻子金入の衣裳で出掛けた。天和の初年五代將軍となつた綱吉公の始めて上野御成があつた、六兵衛の女房は此御成を拜見するに、黑門前に棧敷を構へ、翠簾を掛け幕を打たせ名香を焚いて、切禿二人に緋縮緬の大振袖を着せて左右に侍らせ、御通の節翠簾を捲かせて拜した、言語に絕せる華美のさまが、將軍綱吉の眼に止まつて、何れの大名の奥か、餘り結構なる容子なり、あれ尋ねよとの上意が下る、頓て町人の妻なりと言上に及ぶと、殊の外御不興を催されて、神君御他界後四十餘年、江戸大火に御城も燒失して間なく、三代の御代替り、或は正雪の徒、天草の亂、其他くさ〴〵の天災續き、下々町人等へは御政務行屆きかねるも尤もなれど、箇程まで上を恐れざる仕方心得ぬとは餘りなり、畢竟萬事につき身の分限を忘れ、放埒千萬なりとの御諚が下つたので、頓て町奉行吟味の上、六兵衛夫婦は遠島、家は闕所となつたが、其時檢分すると女房の衣服は金入の小袖ばかりであつたといふ。此事件があつ

てから町人百姓の衣服の制殊の外嚴重になつて、再び寛永時代の質素に戻り、此當時まで遊女も繻子緞子を用ひ、夜具も緋縮緬に金紋など繍はせたのが、忽ち廢止されて了つた。今の三越呉服店は、越後屋八郎兵衛と云つて、當時は本町の問屋仲間へ入ることの出來なかつた、呉服木綿店の小賣人であつたが、其時代に江戸人の嗜好に投じ大發展をしたのが、今日に續く家運隆盛の基となつたのである。

▲幕府の勤儉令

前項に町家の婦女が拜領物の衣服を用ひ、又拜領物に摸したる衣裳を造り、奢侈の一原因になつたことを記したが、其拜領物の衣服と云ふは箔小袖で、即ち種種の模樣を金銀にて摺箔したものである。寛文未年は男子の熨斗目と同じく女子の禮服として、衣服多く持たぬものも、必ず此箔小袖を貯へたものだが、延寶初年に渡つて普通箔小袖は廢り、それに金絲繍を加へることが流行した、然れば此縫箔小袖も奢侈品に算へられて禁制となつた、天和三年の官令に左の如くある。

金紗、縫、總鹿の子、右の品々向後女の衣服ニ禁之、總て珍しき織物新規に仕出し候無用たるべし小袖の表一つに付直ニ百目より高直に賣買仕まじき事、百姓町人の衣類絹紬木綿麻布此内を以て分限に應じ妻子ともに着用すべき事、舞々猿樂右同斷但役相勉候節は熨斗目不苦候事、總て下女端下女布木綿着用すべき事

之れ徳川氏治世に於ける初度の勤儉令である。奢侈に耽り華美に醉つた江戸市民には、咲いた花を暴風雨に吹散らされたやうな感があつたであらう。然れど此時江戸市民は、財力漸く豐になつて、生活的向上に伴ふ扮裝の嗜好力は熾んなものであつて、絶對無限の權力を備へた武斷政治を以てしても、容易に之れを壓迫することが能きなくつて、禁令も何つとなく次第に弛んで來て、元祿二年には憖んな官命が出るやうになつた。

女の衣類縫御禁制被ニ仰出候ㇾ得ども元來の儀に候間

向後縫結構に無レ之候やうに代銀二百五十目に限り縫の衣類賣買可レ仕候 尤もすぬひの類の美麗なる儀仕まじく候云々

制限をこそ附したれ、幕府は公然曩に發した勤倹令を解いたのである。而して價額は五百目の物を二百五十目といふても濟む、江戸士民は上下滔々として華美を競ひ、遂に所謂元祿時代なる、寛濶伊達の風俗を生じたのである。

▲御殿女中の服装

江戸時代に於て華美の中心點になつたものは、三百諸侯の奥向に使つた媵婢、俗にいふ御殿女中であつた御殿女中、元は女房の名稱であつたのが、女房は一般妻の稱呼となつて、御殿女中なる新名詞が起つたのである。其風俗は今も時代物の演劇や古錦繪に見られるが、頗る濃艶華美なものであつた。然し其華美も武家中興、即ち江戸市民が驕奢に陷つた時代から、殆ど競爭的に發展したものらしい。其反證として見られるは、徳川家康が隱居して後、武州忍の邊へ放鷹のため泊掛で出かけた時、家康は淺葱染の小袖に小倉織の木綿の袷羽織、薫具革の巾着と、黒い長門印籠に瓢簞を附けたのを腰下にして、御供の女中は花色染の立波に汐汲桶を裾から腰にかけ白くした茜染木綿の打掛を着て、淺葱染の三尺手拭を頭から頤に卷き、餘りを頭に搦げ、馬に乘つて居たといふ。大將軍の隱居にして小倉の袷羽織を着用し、侍女が木綿の裲で乘馬扈從したと云ふだけで、當時の幕府大奥の質素が想像せらるゝと共に、大小名の奥向が猶且質素であつたことは推察するに難からぬ。然るにそれより五十餘年を經た寛文末年になると、神君の着たといふ小倉の羽織は市井小民の用となつて、奥向の女中に木綿物を着るものなく、況や乘馬など云ふ雄々しい風はなくなつて、皆輿を用ひるやうになつたのである。武家奥向の服装を種類分にすると、總模樣、中模樣、腰模樣、裾模樣、紋附模樣なし、紋無腰模樣、紋無裾模樣等であつて、職により時に應じて差別もあり、又家々によつて定めの

制もあつたが、槪ね總模樣を上とし、中模樣を次とし裾模樣を其下位に置いたらしい。裡は必ず緋羽二重か紅絹を用ひ、表は綸子を上とし縮緬を次とした、但し無模樣にて紋のみつけたものには綸子を用ひず專ら縮緬であつて、染色は黑、紫、赤、ひわ茶等であつた。總模樣以下花鳥又は風景など顯はし、色彩の配合に金糸彩糸の繡を加へ、鹿の子又は文字など交えたのもある、此文字又は鹿の子を交えたのは內室、側室、年寄役等の上﨟にのみ用ゐられたが、文字入は野鄙なりとして大國大名の家には用ひず、小國大名の家に行はれたといふ。又夏服は專ら絽を用ひ染色は淺黃が多かつたが、或は御納戶茶、藤色等を用ひたのもある。別に茶屋染と云ふのがある、昔は蘆手摸と稱したさうで、「我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらん」の文字を書き、繪に住吉神社と松を顯はせる類にて、間々に鹿の子を染め交えたのもある。其他御殿女中は掛を用ひたが、染色繡等衣服と別に異ることなく、只衣服より長け五寸長く、身幅も之れに准じて廣かつたのである。下着は必ず白絹、袷にも白絹の下着を襲ぬ。槪ね元日は地黑の綸子、二三日は矢張綸子だが染色定まらず、四日後は帛紗縮緬と云ひて縮緬に染模樣を施せるもの、上巳は地赤、端午は染帷子、七夕と八朔は白、重陽は地白と云ふやうになつてゐて、掛のみは五節句共に定まる色がなかつたと云ふ。今は定紋つけたのを一般禮服とするが、其頃は無紋の模樣物が禮服であつた。又夏の略服には縞の數寄屋縮や下つて越後縮などが用ひられ、冬物には黃八丈が宛も武家女專用の如く着られた。帶は錦緞子の類、或は黑繻子に繡模樣をしたのもあつて、掛の下に用ふるのは幅五六寸黑繻子は梅椿菊の類を花一二葉三四を大さ五寸位の繡にて散せるを專用とし、袷及び帷子の時の禮服には附帶といふを用ゆ、一名を下帶とも云ふ、錦の芯なし平くけにて、兩端の結び餘つた所に厚紙の心を入れて筒にし、掛を着ぬ時に締めたのである。以上の說明によつて、武家奧向の風俗の甚だしく華麗であつた一般が知られるであらう。これ軈て大名財政窮乏の一原因と

なつたので、元祿より三十餘年の享保には、時の爲政者に其弊を認められ、同六年左の如き官命があつた。

女の衣類自今以後小袖表一つに付御用の物は其代銀五百目を限り萬石以上の者は四百目を限り其餘は三百目を限り夫より高直の物一切賣買すべからず候事

但女帶の類其外何物に限らず此例に准じ云々

右の勤儉令は專ら武家奧向を目標としたもので、上下滔々として奢侈に走つた趨勢が察しられるではないか。

▲新しい江戸趣味

江戸市民が美服を競つたのは、一面より見れば社會の進歩である、然るに幕府は奢りの沙汰とのみ斷じて、屢々壓迫を加へたが、陽に抑へれば陰に廣がり、到底其効はなかつたのである。尤も天和の官令の如きは、寧ろ勤儉を勸めるよりは、町人にして大名以上の扮裝をなすのもある、無節制に陷つたのを、防止する目的であつたらしいが、享保の觸れに至つては純然たる勤儉令であつて、英主吉宗が時弊を看破つたからである。而して七十年後の寛政五年、彼の白河樂翁が大勤儉令を出したは、恰も凶歉相尋ぎ、士民共に困憊の場合ではあつたが、武家は市民より一層疲弊を重ね、大名は勿論旗本御家人の末々に至るまで、町人に借銀せぬ者はなかつた時代で、町人が富み武家が衰へたは、畢竟幕府が極端なる家族制度を設けたる爲め、武家には遊食のもの多くなりしに引替へ、町民の子弟は自由に職業に就き、經濟上既に優劣の分たれたるに、德川氏が治平の政策として、參覲交代其他兎角大名に失費を多からしめた結果によるも、一は積年奢侈の酬いもあれば、先づ其奢侈を抑ゆべく、それには町人の贅澤も禁せざれば効果なしと見て、上下に渉り大鐵槌を下したので、其目的は武家保護のためであつたは疑ひない、斯くの如くにして所謂寛政の御主意は布かれ、上は千代田の大奥より下は裏店に至るまで、御儉約の言は雷霆の如く響き、一般に華美贅澤を禁じ、各分限を定めたれば、富める町人にして其禁を犯し、處

刑を受けたものもあつた、其時の掟に、町人は儀式の外は絹布を用ひず、常は一切木綿と云ふのであつたから、華奢寛濶な姿は見ることが出來なくなつて、總てが質素になつて了つた。此時代は市民も既に華美に飽いてゐたから、今度は質素に發展して來た。目に立たぬ金の掛つた物を着て、同輩に誇り滿足し、且役人の注意を避けるやうになる、遂には之れが流行になつて、新しい江戸趣味を生じ、女子が唐棧や薩摩上布を用ひるやうになつたのも此頃である。其内さしも嚴しかつた法度も漸次崩れて來て、上下共に又もや贅澤を始めるやうになつたが、質素に傾いた新江戸趣味は、益〻其方面に發展して、華美な色合や光澤の強いものは野暮と誹られ、澁い色合の縞や小紋も細かいものが流行し、木綿の如くにして絹布以上の價格を有した古渡唐棧の如き粋中の粋とせられ、結城紬なども頗る歡迎された。天保十四年になつて水野越前守が、再び峻烈な大勤儉令を布いたが、此時は江戸繁昌の極點に達して居たので、徒に怨府となつて、遂に失敗に終り、市民は愈よ奢侈に耽つたが、江戸人の趣味は依然澁味に走り、以て明治初年に傳へたのであつた。

▲幕末の時世粧

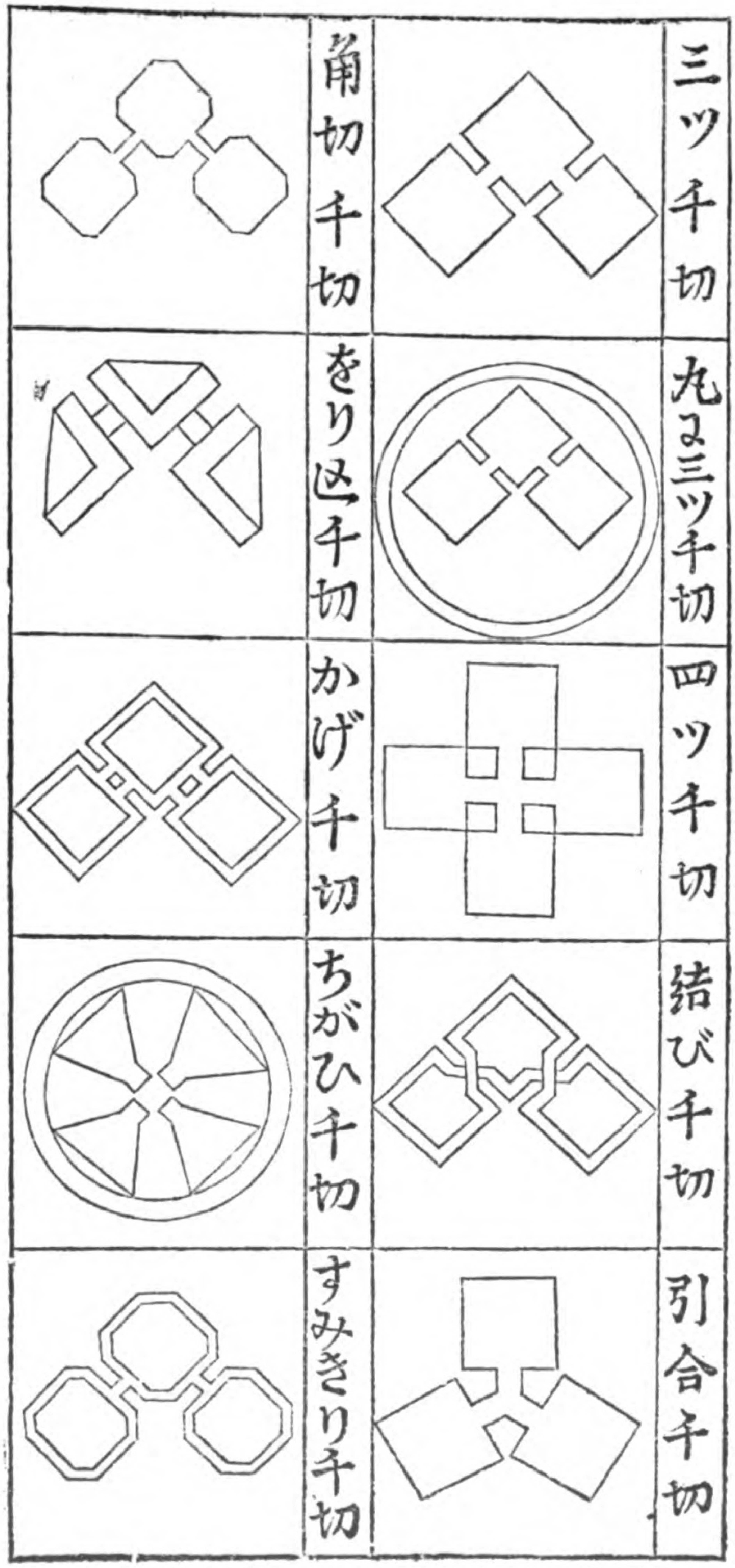
今茲に現時より六十餘年前の、嘉永年間に於ける江戸市民婦女服裝の一般を云はんに、禮には黑の定紋付晴には小紋、常は縞物を用ひ、紋付には裾模樣又は裏模樣も行はれたが、專ら若い女子の事にて、老婦は無模樣を用ひ、染色は黑が多かつたが他色もあつた。地は大概御召縮緬であつて、此御召縮緬は同時代より三十年程前になる文政年間に初めて流行したものである、無地紋付、裾模樣、小紋、縞ともに之れを專用した。又南部縮緬、結城縮緬などいふのも用ひられたが、南部及び結城は縮緬の種類ではあるが、光澤が無かつたので、男子も之れを着用した。次に龍紋羽二重浮織などが小紋に染めて用ひられたのである。裾模樣とも今日の如く華美にせず、低く細かく染めさせ、中には僅かに蹴返しや「フキ」のみに顯はしたのもあつ

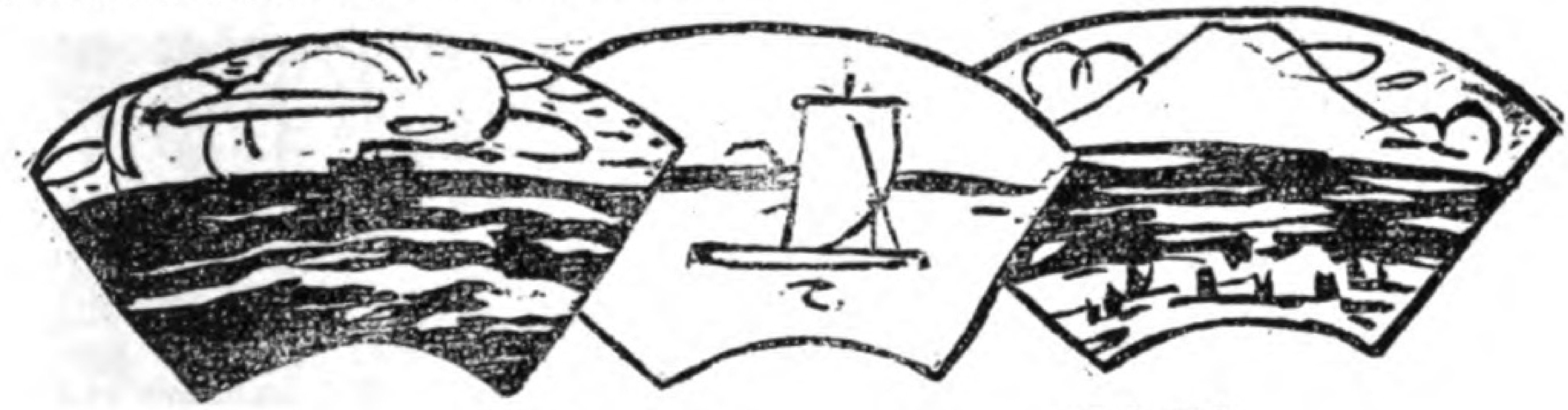
た。小紋は昔からある鮫小紋廢れて、重菊など頗る流行す。縮緬の縞は天保中黒地鼠地の『ヤタラ』縞大流行であつたが、當時は鼠地淺黄地等の淡色は廢れて、黒地紺地の變縞が大流行であつた。又嘉永二三年頃には味噌漉縞と云つて淺黄地に紺で味噌漉の底の竹編に似た縞柄が、縮緬紬共に流行したが、同六七年頃には淺黄と紺の千筋或は萬筋又は微塵が流行したのである。嘉永の末から安政に掛けて、右の紺淺黄の細微な縞に白蛇腹糸或は白しけ糸を以て五所又は三所に定紋を繡ふことが流行し、晴着にも平常着にも此繡紋のあるのを着用したものだ。安政に至り地紋並に紺の、俗に市松形と呼ばるゝ石疊形、或は方三分ばかりの碁盤縞の紋縮緬が流行つて衣服羽織に用ひ、白糸の繡紋をするのが流行した。紋縮緬は當時より四五十年前に一時流行したものであるが、其頃のは多く萠黄地に、紋形も唐草或は草花を顯したもので、其後久しく廢つてゐたのが、嘉永の末から再び流行となつた、但し色は必ず紺で、紋形も前記の如く縱横正列とし、或は紺地に縞に類する紋形もあつたが、堅縞は絕對は用ゐなかつた。安政五年には又此紋縮緬が廢れて、紺無地或は紺縞の絹縮みが流行し、價格は縮緬に劣らず、當時の相場で一兩一分位であつた。天保年中琉球紬が女の上着に用ひられ、男は上着にも下着にもした。鼠地に紺の粗い縞のみで、千筋萬筋の細密なものはなかつた、特に意氣を喜び粹を尊ぶ社會に用ひられたので、同時に玉紬と云ふ木綿に近いものが一般的に行はれ、之れには千筋萬筋變縞もあつた。其後銘仙も流行し、茶地紺縞紺地茶鼠等いろ〳〵あつて、男女共に着たのである、夏の服裝定紋付には初夏初秋は袷、盛暑には晒縮等の麻布を用ひ、次は紺飛白の薩摩上布、紺上布、更に下つて薩摩紺地のかすり木綿、又銚子縮大に流行した。白地淺黄地又は絞りの大形中形の浴衣流行せしも此時代にて、多くは夜間に用ひたが、晝も船行納涼等には着たものである。又小袖の裏地は昔は萠黄であつたのが、寬延年間は黑、享保の初めは白茶、寳永頃は『すみる』茶、元文から御納戸となり、當時は一般に

縹色が流行した。長襦袢の胴に麻の葉、半襟に棗色の流行せるも此時分である。又天保中までは剃髮の老婦などが黑縮緬の紋付羽織を着るのみであつたのが、嘉永頃には老若を論せず婦女が羽織袢纏を着るやうになつた。又吳呂は安政年代に初めて輸入されたので、價格の點から贅澤品と目されたが、之れを羽織に着て伊達を示すものもあつた。

以上は只其概略である、之れを現代に比較するに、嘉永安政頃の流行も存續して居れば、又元祿寶永頃の流行も復活し、猶歐米風をさへ加味して、今後何う發展して行くか、頗る面白い時代であると思はれる。

千切の意匠





唐人髷

松平鏡子

敷居をまたぐと左側には、菰被が行儀よく並んでゐた、心地よい淡黄色な藁の肌に、思ひ切つて大きく菊正宗だの櫻正宗だの、極印がうつてあるのが、何となく他所とは違つた感じが與へられた。

酒樽の後は灰色の壁で、もう黄昏が薄黒いからだと、そろ〳〵と物蔭からにぢりよつてくる。酒の香の仄のりと漂ふ中に、少女の顔が白かつた。

この土間の向ふは廣い臺所になつてゐる。天井にはこゝらあたりに珍らしい、ガラスの空氣拔がこしらへてあるから、めつきりと明るく見えるけれど、油で波を書いた障子の紙は、もう程よく煤氣色に染まつて、「千歳亭」と書いた文字が、最初ほどに目立なくなつて來た。……はしご段をとん〳〵と拍子よく踏み乍ら、人の往交ふ音がしきりにする。帳場には千歳亭の番頭さんが、忙がはしげに算盤をはじいてゐる。

お幾久さんは總てのどよめきに左右されず、五色ガラスの障子の蔭に、つくねんと坐つてゐた。今ついた二十燭光の光に、白い面輪が浮いたやうにみえる。取立てゝ云ふ程な、美しい容色も持たないけれど、着物の着こなしが上手のと、垢拔けのした樣子とは、この町の娘らの中に立ち交つて、何處か人目を引くところがある。

障子の外には、町の灯がちら〳〵と輝やいてゐた。急行列車が轍をとゞめるやうに

なつた二三年前から、衰微した町の景氣が、少しは立て直つて來たけれど、それでも昔の俤はないと云はれてゐた。宿場であつた故遊女屋の多い割に、藝妓屋の數の少ない土地である。

淺黄の暖簾をかけた貸座敷は、町のはづれにこと〴〵しく並んでゐた。金糸を結んだ立兵庫の、襠褂姿は、仄暗い櫺子窓の隙間からしば〳〵みられたけれどきり〳〵と小褄を取つた、夏菊のやうな藝妓の影は、まれにしかみられなかつた。

藝妓屋の少ない土地だから、從つてお茶屋は少ない。支出屋や小料理屋の中にまじつて、一軒の茶屋の甍は高かつた。

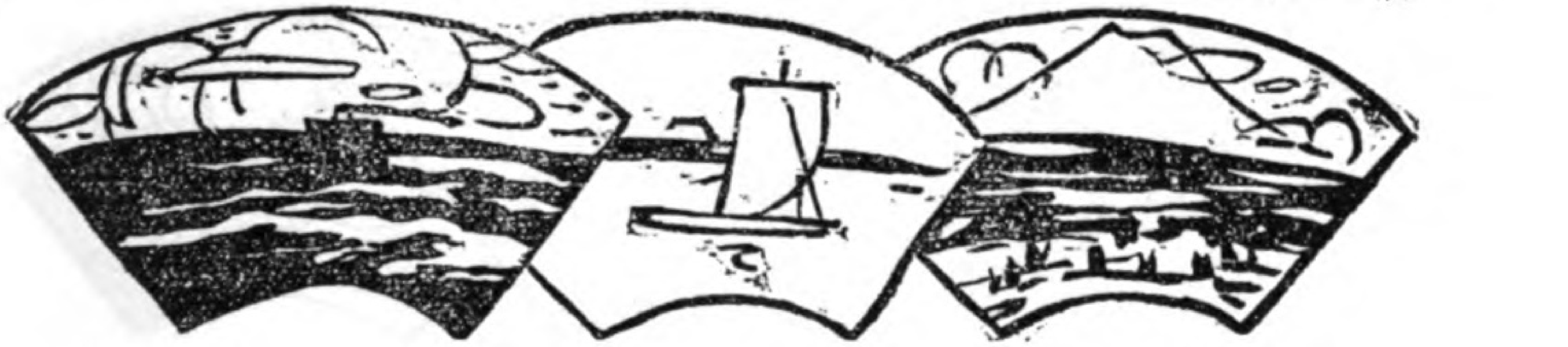
二軒といへば兎角競爭になり勝ちのが、各自門戸を張り綺羅を飾つて、おもひ〳〵な客を呼んだ。

火花を散らす決戰である。

少しの隙さへあれば、追ひ拔こう拔かれやうといふ大事の瀨戶傍に、ふとした事から千歲亭の根はゆらめき始めた。決死の勢であつたのが、よろめくともう相手の勝ち誇る姿をみて歯がみしたとて、たやすく盛返せることではない。千歲亭は凱歌を奏してゆく敵の後影を、さうした立場からぢいつと凝視てゐたのであつた。

かうなると、艶々した大黑柱の陰にも、暗い寂しさが漂よふてくる。飯場の陶器のかちあふ音にも、明るい晝の空氣の中にも、どこか呪ふやうな冷い聲がまとふてゐた。

もうこの節は、小買の酒にまで菰被の口を拔くやうになつて了つた。



お幾久さんはかうした空中の中に、生れてそして育つて來た、家の衰へを知つた廿歳の年から、もう今で三年もたつ。小さい時から、藝事は何くれとなく仕込まれて、まだ前髪を切下げてゐた頃から、踊は天稟といはれてゐた。三つ勝りの姉と打ち連れ立つて、白地にもつかうを大きく染めた浴衣を着ては、町の出はづれまで常盤津の稽古に通つたこともあつた。學校は十二ばかりのとき、尋常だけで退いて了つたけれど、三味線は今でも師匠のとこへゆく。

見やうまね樣に忙がしい時には、お座敷に出ゝお酌もすれば、所望によつては踊の一手も見せるやうになつた、かうして昔からの、かうした娘達の踏んで來た放膽な路を、お幾久さんは一歩一歩とあゆんで來たのであつた。

衰微た家の暗さは、呼ぶ藝妓にさへ氣兼をする樣な弱味であつた。お幾久さんはいらへした心を持ち乍らも、それに向つて何等の努力をしようでもなく自分は自分の快樂を他方に向つて求めた。

お幾久さんが赤兒を生んだのは、それから二年もした十九の秋であつた。よく似て圓顏の女の子は、男の方の子として屆けられたが、世間をはゞかつてすぐ里親の手に渡された。

妻もある男と深間になつて、子まで設けたといふことが、お幾久さんにとつてはどんなに厭はれたことであつたかしれない。町の人等の眼の輝やきにも恐れて憤つて、もうどうかして東京へ行かう、東京へ行かう、お幾久さんは、自分一人の心の中で、繰返しへ幾度となくさう思つた。

お幾久さんは寄り懸つてゐた障子際から身を起して、そこらに散らばつた新聞の一



枚を手に取つて、小さな聲して雜報を讀みはじめた。二枚重ねた銘仙の着物の上に、新大島の絣の羽織を無雜作に引つかけたのだがごむ玉の赤い根懸をかけた根の低い銀杏返と、面白い對照をしみえる。

襖の蔭から紅い襟をした雛妓が、小手招をした。お幾久さんは新聞に身を入れてゐるのではないから、この妓がこの薄暗いかげに隱れたのもよくわかつてゐた。

「姐さん！」

呼ばれたのを機會にすつくりたつと、またしても二階から起るさゞめき！ 笑聲。隣家の靜けさに引きかへて、自分の家のこの賑はしさを、お幾久さんは 想像してゐたやうな、胸の空く心地好さも思はれなかつた。

雛妓の桃代は、こゝら邊に惜いほどの可愛い子であつた。十五の年よりずうッと幼なくつて、前髪切り下げた唐人髷に、緫の長い藥玉の簪が、何とも云へずよく似合つて、そして美くしかつた。

「どうしたの？」

「姐さん、みんなお酒に醉つちやつて厭になつた！」

白い小さい齒並を見せて甘へるやうに云ふのを、反かれた人の中に、たゞ一人の味方を見出したやうに平常になく嬉しさに泪ぐまれた。

お幾久さんは、程經て座に戻り乍ら、桃代が先刻別れ際に、投げて呉れた小さいハンカチーフの包を、片膝立てた上に載せて解くと、幼ない妓の手すさびらしい、紫紺地に純白と鶸色と淡桃色の菊を散らした、友禪縮緬の紙入が入つてゐた。お幾久さんは廣げた儘、ちいつとそれらを凝視てゐると、事新らしく泪が湧いた。

千代能



△忽然大悟す

千代能姫は秋田城介義景の女にて金澤越後守實時の妻となりしが、夫實時世を早うせしかば心を佛道に歸し、佛光禪師の弟子となりて名を無外禪尼と改め世の騷がしきを避けて柴の扉に心を澄し、きよらに精舍を構へて自ら閼伽の水を汲みしに、或時桶の箍切れて底破れ水いだゝきにかゝりしかば忽ち夢の覺めたる如くに大悟して此歌を詠めり、師の禪師も其さとりを賞して法衣並に頂相の書を贈り矩則をゆるす、人々其德を慕ひて淸き食財を贈り之を助けしとぞ。

△孤島の宮仕へ

龜菊は白拍子なれども後鳥羽の帝御寵愛のあまりに津の國長江椋橋の庄をたまはりしを、鎌倉武士之を横領せし故、龜菊へ返すべき由鎌倉へ申させたまへども綸言空しくなりしより事起り、承久の亂となり聖運ましまさず、隱岐が島根へうつらせたまふ折から、龜菊も御供仕り、播磨の國を過ぎさせ給ふ時此處はいづくぞと御尋ねありけるに 明石の浦と御答へ申上ければ、其時御製に『都をばくらやみにして出でしかど月はあかしの浦にきにけり』龜菊御そばにありて此歌を返し奉り猶も御側を離れず、隱岐の國にいたり長く仕へ奉る、輕き身にして心を變せず身を惜まざるは賞すべきことなり。

龜ぎく



柴田小谷の方



△山ほとゝぎす

柴田勝家賤ケ岳に破れ越前の北の庄に籠り、今は是迄と覺悟を極め、内室に向ひ御身は信長公の妹なれば人もおろそかにはせまじ、落のびて何れへなりとも身を寄せたまへと云へば小谷の方涙を流し、わらは女なりとも弓矢の家に生れ、かゝる時驚くべきにあらず同じ道に赴き申さんとて悠々と酒宴を催し、折から時鳥の鳴きしかば此歌を詠ず、勝家も打笑ひて『夏の夜の夢路はかなきあとの名を雲井にあげよ山時鳥』中村文荷齋も『思ふどち打つれつゝも行道のしるべや死出の山ほとゝぎす』酒宴終つて後男女三十餘人一ト間に並び火をかけて自殺す。

△男勝りの自害

彌生は公方家の臣奈良左近が妹なり、容美はしければ、定光といふもの見染めて緣を求むれども、定光は心よからぬ者なればとて左近是を許さず。然るに三好の一族義昭に背き御所へ打寄せければ、奈良左近激しく戰ひて之を防ぐ、定光三好方にありて戀の邪魔なる左近を討落し、彌生打とけたるさまに心をゆるさせ、母の方へ文を認め其奥に此歌を書き使ひを出し落着き居たるに、定光たはふれかゝるを彌生透さず刀を奪ひて定光を刺殺し返す刀に腹かき切つて果けるに女の切腹珍らしくとて世其勇猛に感じけり。

奈良義成妹彌生



苗村りん女



△露の月影

りん女は近江の國八幡の里、苗村道益といふ醫師の妻なり、性質利發にして文雅の道を好み、若かりし時より師にもよらずして歌をよくよみたり、夫におくれて後尼となり、號を貞信といへり、長命して八十餘歳の時かしこくもやごとなき御方より齡の高きを祝ひ『もゝちとせ行末あかき春日かな』此時貞信深くよろこびて『かしこしな交野の草の露をしももらさで月のかげやとすとは』八十餘歳にて身まからんとする時『あま小舟やその湊をこぎ過て彼きし近くなるぞうれしき』

△孝心天に通ず

九重は都五條の產れなるが故あつて江戸に來り遊君となる、天性至孝にして身は東にあれども絶えず故郷の父母の安否をとひ衣類などを調へては度々送りける、親に離れて遠く住むことを歎き此歌を詠ぜしに、其孝心神に通じてや、遊女の身にして斯かる名歌をよみしこと上聞に達し、勤の身を御免ありて不思議にも苦界を遁れけること偏に和歌の德なりけり、實にや尊からずして高位に交り、卑しからずして知音と契るといへり、されば白龍子も之を賞して『なべて世に君の惠を敷しまやこの川竹のながれくむ身も』かく詠ぜられ、世に知らるゝに至れり。

九重



伊勢の犬女



△志賀の濱松

いぬ女は伊勢の國の武士某の女なり、幼けなき時より和歌をよくよみ、後朝の戀といへる題にて此歌を詠む、元祿十年の秋、重き病にかゝり、自ら存命の叶ひ難きを知りしかば、僧を招きて後世のいとなみをたのみ、又我戒名は松雲と號けてたまはれと賴む。是は過ぎにし此松の雲の題にて『さゝ浪や志賀の濱松いつよりも今ひとしほの雲のあけぼの』とよみしに因めり。斯くて十念を乞ひ、合掌稱名して『諸共に朽ちなばくちよながらへて殘るもつらしあだし浮名の』とよみ十五歲にて身まかりしとかや、才名大内に聞え詠草の內より五首の歌をかきとめさせたまひけるとなん。

△夫婦の參禪

蜷川新右衛門親當は足利義敎の近臣にて武勇の譽れ高き人なり、或時夜中鳥邊野へ行きしに、死人を火葬せる火に向ひて一人の女座禪し居たり、蜷川其後に立つて見るに其女振向きもせず、落着きて物怯ぢせぬを不審して蜷川とがめけるに『夏ぜみのもぬけはてぬる身となれば何かのこりて物おぢをせん』とありしに蜷川感じ入り、女さへも悟れば斯の如しとて是より禪法に歸依し一休禪師の弟子となる、妻も夫とひとしく禪に歸して悟道を得此歌をよみけり、有無の二つとは現世未來にて糸の如くもつれたる此頃の世の中をはやくのがれたしとの悟り歌なり。

蜷川親當の妻



いもりつく王の秘メ事窺ひけり



樋口一葉の手紙

馬場蝴蝶

一

昨年の十二月であつたと思ふが、讀賣新聞に、樋口一葉君から半井桃水君に送つた手紙が公にされたが、その中に、

「此ほどは思ひもよらぬ賜もののありがたく折ふし不在にてしげ樣に御目にもかゝらず、御前さま御近狀をくはしくは承り得ざりしこといとも〳〵殘念にてことに鎌倉へ御旅行とか伺ふはもし御病氣にてはなきやと御案じ申候ひしかど憚る處なきにしもあらで心ならずも日を送り申候。

今日しもめづらしき御玉章、久々にて御目もじせし心地、うれしきにも又お恨みの御詞がうらめしく候、私し愚どんの身人樣をしるなどゝ申すことかけても及ばねど、師の君なり兄君なりと思ふお前樣のこと誰人が何と申傳へ候とも夫を誠と聞く道理も無くもとよりこしらへごとゝは存じ候故別して御耳にも入れざりしに候、我さへしらぬ事をしる世の中、聞かぬことを聞くかと申す仰さしてあやしきことにもある間敷御捨置き遊ばし候とも消ゆる時にはきえ候はんかし。

かく計らぬ事より御目通りの叶はぬ樣に成しもやむを得ぬことゝ私しはあきらめ居候、今更人の口に耳も立す只身一つをつゝしみ申居候。

さりながら其源は何方くにもあらず、みな私しより起りしにて此一事のみにも非ずひまあれかし落しいれんのおとしあな設けられし身、いかにのがれ候とも何の罪かきせられずにも居る間敷と悲しき決心をきはめ居候。

唯々先日野々宮さまにおことづて願ひしとほりお前樣御高恩のほどはみな〳〵身にしみて有難く日夜申暮し候もの、其御親切仇にして御名前をけがし候こと何よりも心苦しく愁らきはたゞ是のみに候、申上度こといと多けれど、さのみはとて御返しばかりをなむ、猶

猶願ひ參らするは何方へ御轉住相成候とも何とぞ御住所御しらせ置きたまはり度、又折ふしは一片の御便りもと夫れのみ苦中のたのしみに待渡りまゐらせかしく。折しもあれ初秋風の吹きそめたるに、蟲の音の時しりがほなるなど、月にもやみにも夜こそものはおもはれ候へ、露けき秋とはつね〴〵申ふるせし詞ながら、袖の上におく今日此頃ぞ誠にしかとは思ひしられ候。世の中の心細さ限りなく私しこそ長かるまじき命かと存じられ候、先頃より腦病にて自宅に歸り居候を又さる人々のあしさまに言ひならすとか兎にも角にも誠うき世はいやに御座候

なつ子

八月十日夜

御兄上樣御前」

といふのがあつて、それに『私しこそ長かるまじき命かと存じられ候』とあるを見ては何人か淚なからん女史は實に此年の秋廿六歳を一期として逝かれたるなり、眞に悲慘の極みならずや』といふ評語が付けてあつた。此評語を付けた人は前記の手紙を二十九年の八月十日の夜に書かれたものと臆測されたものらしい。所が、私どもは此手紙は二十五年八月十日の夜に書かれたものと斷せざるを得無いのだ。

今やがて發售せらるべき一葉全集中の『日記』に依ると、半井君と一葉君との間に世間の疑が生じて居るといふことを一葉君自身が明に耳にしたのは、二十五年の六月十四日の夜、中島歌子刀自の許であつて、中島氏の忠告によつて、一葉君は半井君と一時交際を絕つことになつて、同月の十五日に半井君を訪ふて、『中島家が人少なであるから、手傳ひの爲に暫時中島家に行つて居らなければならぬ、就ては小說を書く暇も無からうから』といふやうなことを云つて、半井君との交際を絕つ前提を設けて置て、同二十二日までは、一葉君は中島家に宿つた。同日になつて、再び半井君を訪ふて、事情を殘らず打ち明けた。それから七月十四日に中元の禮に半井君を訪ふた。『君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る』とあるのだ。それからは二十五年十一月十一日に至るま

では、半井君と一葉君との面會の期は無かつたやうだ。二十九年八月頃には半井君と一葉君との間に物疑ひを入れるやうな人は殆ど無かつたやうだから、半井君と一葉君との間に、前記のやうな文面の手紙をやり取りすべき何等の事情も無かつたやうだ。『日記』中の前記の部分だけで見ても、手紙の二十五年八月十日夜のものであることは明らかなのだが『日記』には未だもう少し確なことが書いてある。七月卅一日の所には『午前より野々宮君來る、終日詠歌す、半井君の事種々ものがたる』とあり、八月六日『此日半井君より重太君を使者として茶一筒おくらる』とあり、同七日『野々宮君來訪、終日歌をよむ、半井君を訪給ひしよし、我事に付ての談話ありしやに聞く』とあり、同十日『半井君より長文の手紙來る、返事したゝむ』とあるのだ。



一葉君は二十九年十一月二十三日年二十五で死んだ。在來の一葉全集の卷頭の文の中に書いてある明治五年三月二十五日といふ一葉君生年月は間違つては居無いさうだ。

二

一葉君は、半井君に宛てた手紙でも知れる通り、手紙の文句の實に旨い人であつた。私は二十八年八月の末から三十年一月へかけて

地方に居たので、文學界の連中のなかでは、一葉君から割合に多く手紙を貰らつて居るのだが、皆旨い文章なのだ。一葉君の作物は今度出る一葉全集で大抵まとまる譯だが、未だ詠歌だけが殆ど全部殘つて居る。併し、それは、一葉君の十五位の時分から歿年までの分が皆集まつて居て、非常の數なので、歌集の出版は歌の選拔になか〳〵骨が折れやうと思はれる。私は一葉書簡集を出して見度い。樋口家でも其の希望があるものと見えて、故人の知友諸君に賴んで手紙を借り集めて居る。

試みに左に一葉君が私に呉れた手紙を寫して出さう郵便局の消印のある封筒も共に保存してあるのだから、手紙の年月日に間違ひは無い。

私に取つて面白く思はれることは、半井君宛の手紙で公にされた分は何れも一葉君の小說家として未だ名を成さなかつた時代のものであるに拘らず、文章は矢張り旨いことであるのだ。『日記』で見ても解ることだが、一葉君は初から文才の表はれた人なることは確かである。

＊　＊　＊　＊　＊

『こゝろのほかの御不沙汰に打過ぎいかやうの御しかりをうけ候ともたゞ〳〵恐れ入り候ほかもなけれどさりとて一通りの申わけはゆるし給へ、はじめの御手紙たまはり候ころより中島の師こと酒匂へ遊びに參り留守のこと何くれとたのまれ候まゝ大かた日ごとの用事おほく家に居るはまれなるやうにくらし居りおもひながらも思ふにもまかせねば、此方より御恨み申上べき筈をあべこべに相成候、さりとてはくやしきことなれど此度は御詫び申上置べく候。

俄にきのふ今日秋風のたちておどろかるゝやうに候へども、御地は如何、このほどのお文の御樣子にてはいよ〳〵御盛んの御勢ひこゝなる人々いか斗うら山しういらせられんかとそかしく候、むらさきの矢がすりを見過したるの、曾根崎あたりかけぬけ給ひしのと少しあやしき御事どもたやすくは受とりがたき御話しなれど、御氣まぎらしといふわけならば御尤樣とてうな

づき申べく、それはみをつくしの床しかりし御方さま空しき烟と成給ひしよし承り及べばに御座候、湖水の月に打むかふてそゞろにものを思しめすお前樣のお姿こゝにも見えるやうに御座候、哀れ成し人の爲、かつは御身の罪ほろぼしがてらみをつくしの後日といふもの是非かかせ給はねばかなはぬ事と存じられ候、箱根にてはじめてその便りを聞得給ひし時御愁傷どのやう成しかまだどなたにも御目にかゝらず候まゝ御樣子承ることかなはず、唯大方に御悔み申上置候學校はもはや御始まりの事なるべく、さのみ御面倒といふものあればこそなれど、百里といふは大方の事



もなきやうに承り候が、交はり給ふ御方々はいかやうにや、お癇癪にさはるやうの事ありてはと夫れのみ御案じ申され候、御からだも其樣に御丈夫ならず、お健には入らせらるべけれどお弱きやうに存じられて兎に角に御こころのやましからぬやうにと祈られ候、常に御目通りのかなひ候ころはたゞ事なし打過ぎ候へども、かく御遠方にはなれ參らせたることゝ存じ候へば俄にさびしくこゝろ細く候て此ほどの月のよなどは打寄りて御うはさのみ申居候ひし、汽車の事

かは山もあり川もあり・俄におもひ立て何を申すもかなはぬに候へば空のみながめらるゝなどゝいふ人事をさへ思ひ合せられ候。

此ほどの御末文かたじけなく拜し候、勉强せよと仰せ下さる御方は私の爲の守り本尊なるべく、そのやうに仰せ下さるをたのみにはかなき文をも作り出で可申笑ひ給はで御敎へを願はれ候やうこれは見かけての御願ひに御座候、此月は文學界にての拜見かなふまじくや、其あたりの御模樣さぞかしとこゝろ樂しみに候、申度ことゝいと多けれど筆がまわらず候まゝ此次にとて。

このほどは伯母と仰せ下され候あれは返上致し置べく候、我身の老いを嘆くといふ譯にはこれなく勿體なき事なれば恐入りこの返上に御座候、何も此度はあらあら、何れ不日又々御邪魔いたすべく御目をおかし下さるべく候。

草々　かしこ

なつ

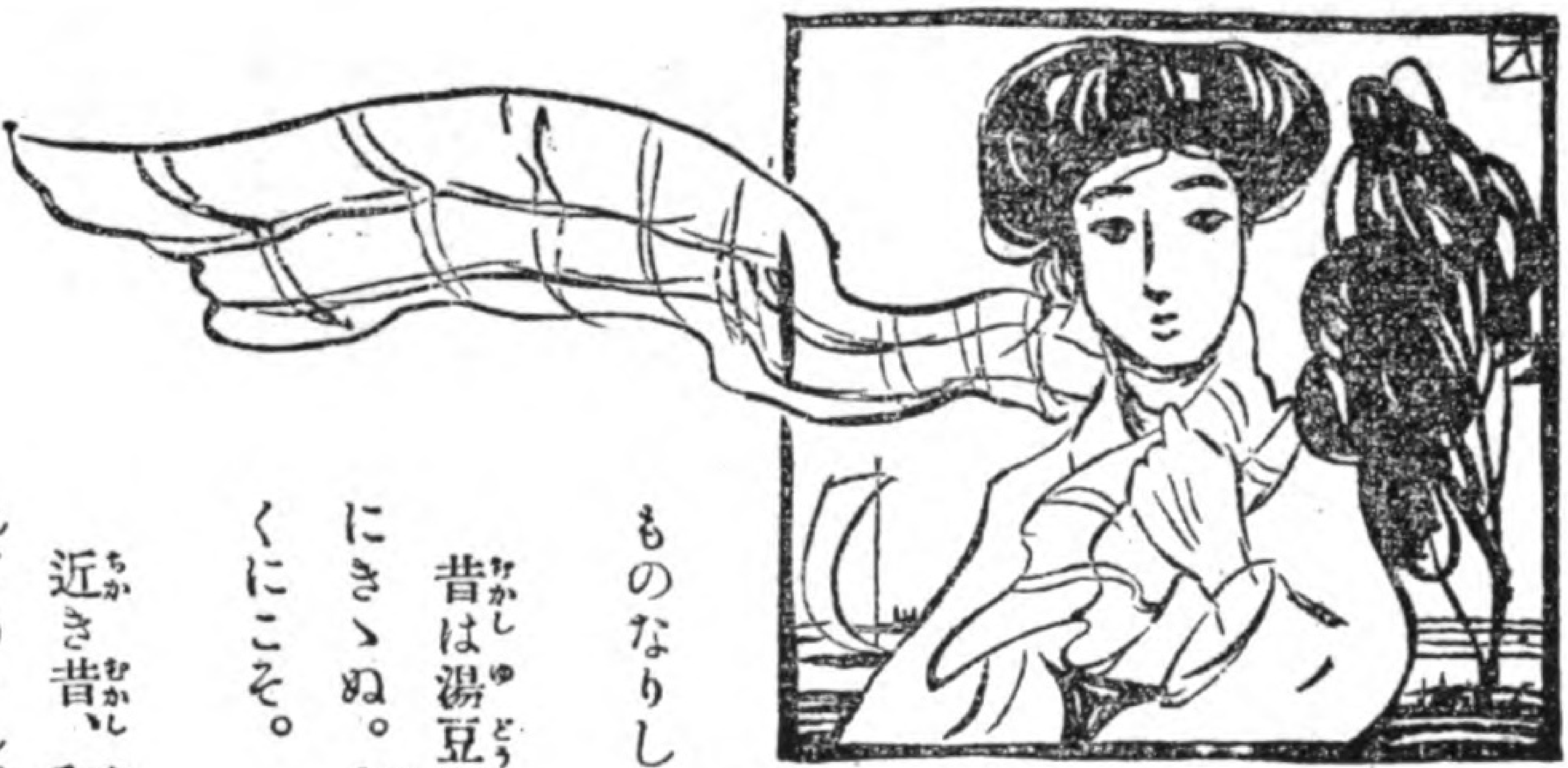
十七日夜

馬場樣御前

母よりも妹よりも何卒よろしく申上くれと返すぐく申出に御座候」

これは、二十八年九月十七日の手紙だ、私が彥根から大阪へ一寸と行つてから、便りを爲たので、その返事のやうによこしたものだ。『紫の矢がすり』と云ふのは、京都の或る町を歩いて居た舞妓か何かのことを書いてやつたのだと思ふ。曾根崎は實際車で驅過つたのみであつた『みをつくし』の女といふのは、箱根の溫泉宿の女中で、米神といふ村から來た確かおくらとか云つた女であつた。一寸と器量の好い女であつたので何の氣無しに賛めた所が、同人間の噂に上ぼつて、一葉君にまで斯の如くヒヤカサれるに至つた譯なのだ。

たれまきしわかなでしこの花ざかり
いく朝露のおきて見つらん
修理太夫顯季



御馳走のお話し

草の馨

○

我が父の育ち給ふ頃、夕餉のみは磁器のお茶碗お皿にて召しけれど、朝と晝とは常にお椀にてなりしとぞ。さらばいつも御平にはてり燒、かまぼこ、椎茸、長芋、靑味、などお壺は何々、お猪口は何と、定めし御馳走づくめなりし事と羨ましく思ひしに、何か式日のみはそれながら、常にはお平に油揚盛らるゝ事もあり、お壺からお煮豆の出る事もありそれは〳〵至て質素なるものなりしとぞ。

○

昔は湯豆腐も生醤油つけて食うべしものとかや、篁村翁の人に物語られしてふを、又聞にきゝぬ。今は奴豆腐の付汁さへ鰹節お味淋などゝ加味すめる、次第々々に奢になづみ行くにこそ。

○

近き昔、和宮様關東御下向の砌、本陣にて仕うまつりし御献立の表、先頃何かに載せられてありし。素より名ある庖丁の、謹みて調じ參らせけん程は、推量らるれど、是ぞとの

品も見當らず、下樣にて常に眼馴れし、いと省ぎたるものなりき。

○

彼の徒然草に、ものせられし誰殿のあるじ振り、一献打鮑、二こん蝦、三献かい餅にてやみぬとぞある、かかる際の人、猶しかぞ在せし。

○

遠く上りし世、まして如何は有りけん、若菜のあつもの參るといへば、優にやさしく打聞きいと風流けど今の人の口にしも是が雲の上人の聞こし召けんそれかとてこそ、驚かれぬべけれ。

○

昔、さる殿樣在しけり。茶道をば甚く好み給ひて、雪の曉時雨る宵など、お會席のお催に、親しき君達と樂しうし給ひけり。茲にお出入りの町人に、此道に志深く常御招伴に召さるゝ老人有りけり。殿樣、或る時此老人に向はせられ、そちは常々我が方に參りていつも馳走にのみ預り行くなる、偶には、我をも招けかしとの給はするに、老人打かしこまりて、そは難有き御諚、僕等がいやしき埴生の小屋に入らせ給はらんとするめん目には、心盡して御あるじ催けの事用意仕候べし、何卒一月が程御猶豫願ひ奉ると、御請申けり。其内にいつしかと日數も經ちて、明日ばかりが程にとて、老人より案内まゐらせけり、殿樣興ある事に思しさすが、心惡き爺の、如何なる待遇やすらんと、好奇の御心に忍びやつして入らせ在しぬ。身豐かにはあらねど、茶室ばかりはよしありて、清らなるをもたりけり、次第かたの如く有りて頓てお膳進め參らせける時、殿樣如何なる珍味の出るやらんと、樂しみ蓋とりて御覽ずるに、若菜の羹、菜飯、菜の浸もの、其他お香々も何も不殘菜づくめなり。殿樣俄に御けしき變りて、物ものたまはせずつと立たせられ、直に館に歸り入らせ給ひける。

引違へて入來れる御使者は、爺に即刻罷り出でよ、片時の猶豫あるべからずと嚴重に云ひ渡しぬ。

老人は如何なる仰言の有るやらんと心も心ならず、

居所の羊のそれの如く、恐る〳〵罷り出づれば、殿様御聲も常ならず、偖々不屆至極の奴かな、そち、常々の眷顧をしも思はゞ、身分に相應じたるもてなしをも致すべきに、さは無くて身を嘲弄致したるな、一月の間何をか心構へたる、以來乾度出入を差とむるとなり、早や立てと、荒々しく御意なさるゝ、老人只管に畏れ入りて、仰かへさひ申さんとには露候はねども、殿様の御恩知らぬと御意遊ばす悲しさに只一言申を許させ給へ君の御館、三葉四葉に榮えさせ給へば、諸國の珍味招かずして集まり、今は御口に何の珍らしきものも無し、僕身分に生中の上品奉らんとよりも、心籠めたる下品をこそと存じ、仰承りたる日、直樣罷りて、



日頃些作り集めたる草木を皆他所に移し、手づからと申許りに畠をしつらひ、七種の菜種子を蒔きつけ侍りぬ。發芽する迄、してよりの心配り、漸く一月が間に摘むべき宜き程となりて候ひければ、心をこめて調理仕り、すなはち七種の菜の味分け、御賞美に預らばやと存じ候ひつるゆめ、おろそかには存上げぬ赤心、些なりとも御認め下され候はば、御勘氣は蒙るとも露怨み奉らじ、只々御心に逆ひし罪、幾重にも恐入奉るとぞひれ伏しける。殿樣熟々聞こし召し、我過ちたり、丹精の品とも知らず輕忽に腹立ちける、斯道執心の事我が及ぶところ

に非ず、とて、引出物數多たまはり、御覺え增りけるとぞ。

○

春を惜しむ花の御宴とかや、某の大臣、くれがしの朝臣など、衣の色綾打目などなべてならず殊更に、引きつくろひて、花よりもけに裝ときつゝ集ひ在さうする、御さかなゆゑ有る樣に差出でたり、大みき數多度ずむ流れて、詩に和歌に興じ給ふ程、更たくるも知らず、中には若公達の、空醉なやましげに作り逃れ出でて高欄に押かゝりつ催馬樂口すさみ給ふなどもありぬべし、朧月夜に散る花の、ゑぼうしの邊そよめきたる畫にも增して艶めきたらんな。

こは、昔の宴の樣なり。

○

電燈照々、光り眩き樓上に、杯盤漸く狼藉たらんとして、髯の君、鍋冠りの君、フロックの殿、羽織袴の御前など、玉山將に頽れんとする鼻先へ、ちよいと、もう一つお重ねなさいな、と猪口突付けられて、否、婆だれなら御免蒙る、綺麗な處なら何一ッが十でもよし、假令命に係りたりとも、君故ならばと、節あやしう舌こそもつれ在したれ、まあ非道いよ、まつちやんちよいと、此の御前へね、あい‥‥お酌う‥‥と、黃ろき聲にすり寄られ、他愛もなう眼を細め給ふ殿もおはしけり。

○

三好に仕へし料理人の、主家滅亡後信長の求めによりて、己が腕振ひて調じける品參らせけるに、信長の口に應はず却その怒に遇ひけるとかや、心中にはさぞな田舍武士がと侮みけん、人、安逸をむさぼり驕奢に馴るれば口隨つて淡泊の味を解し是を好む。是に反してよく活動する人は濃味をよろこぶ。

信長、單に田舍より出でしと云ふ許りでなく是迄常に武に暇なくして、心は絕えず其方にのみ向ひ居ぬ、食味の嗜好進み居らざりしこそ當然なりけれ。

○

あなかしこ、食物に眼止むるなる、下司のわざとや賤められん、それもよしや、人のいはずとも何れは下司の範圍をいでぬ我なれば今更そしらはしげにの給はん人にこそ、野暮の名は參らせめ。

家庭談叢

娘を持つ親の苦心

女の子は男の兒よりも一段と家庭教育が必要で、大部分は此に依つて育上げなければならないから、却々難かしい。私の經驗では、家庭に於ける兩親が總ての手本を示す事が必要だと思ふ。處が此れが又た言ふべくして行はれ難い。殊に女の子は貰物である。他日は是非とも他家に入られればならないものだが、扨て自分の嫁は將來如何なる家庭に入るかと云ふ事は豫め計り知れない。或は外交官の家内にもならう、或は學者の嫁にもならう、或は實業家に貰はれやう、其が子供の時から決まつて居る譯ではないから、親としては何れの家庭にも向く丈けの教育を授けて置かなければならぬ。此が娘を持つ親の義務だ。殊に日本現社會は家族制度であるから、嫁に行つた曉には夫許りでなくて舅姑小姑等と云ふ者に對する仕へ方の心得も要る。一方は家庭の主婦として、一方は家庭の新入生として、上下に接する要領迄を呑込ませればならない。

行儀作法許りぢやない、學藝も皆此の標準に依らればならぬ。早い話が據ら作風が流行ると云つた處でピアノ許りを覺えさせたのでは足りない。琴の必要もあらうし、三味線を知つて居なくては困る場合も生ずる。從て例令ば謠句や辭句等に面白からぬ節はあつても、宜い程に選擇して敎へて置く必要も起る。又擬ら溫州しいのが善い、社會に惡風があると云つた處で、全くの世間見ずでは困る。例を擧げると彼の芝居の如きも、惡弊があるからとて見物させないと云ふのも考へ物だ。私は矢張常識の養成と云ふ點から芝居にも連れて行く。只機會に觸れて彼はあゝだからいけない、此は斯うだから惡るいと、一々芝居其ものなり、又は見物の人々なりに就いて注意を與へて居る。一利一害は物の免れないものだから、害の處は此を善用して訓戒の材料にしたいと思ふ。

元來女子は優美に出來て居る。夫れを又優美に育て上げればならない。併し此點は一歩を誤れば華美と云ふ弊害に陷り易い。私は此點に於て流行と云ふものは斷じて退け度い。髮飾りでも衣類でも極く穴釜しく言つて、學校や友達などの流行風を裝はせない。併し此には矢張り親たるものが豫め選擇して夫相應の事をしてやらればならない。要するに、男の兒は大體に放任主義でよい。延びる丈けは延びさせて只弊害のある點丈けを押へて行く位がいゝと思ふが、女の子の教育は何處迄も兩親で型を作つて其の型に入る樣に仕付けて行かねばならない。此點から考へても女の子の教育は實に至難しい事だと思つて居る。（阪谷男爵）

酪乳の効能

酪乳は未だ廣く行はれて居らぬけれども第一腸を傷ふて居る人に効驗が最も著しいので、私も二三年前から試用して居ます。始めの中は少し下痢をするやうな氣味であるが、段々慣れるに從つて、腹の工合も宜くなります。今では每日三回宛飲んで居ります。藥でない藥と云ふべ

きもので、大抵の腹部の病氣は治療が出來ますので、友人などにも勸めて飲まして居ります。糖尿病の患者が之を飲んでから、追々全快に赴いた例もあります。非常に羸弱な體質の人が矢張り腸を傷つて、便通に粘液を混じたやうな物を排泄して居りましたが、服藥を廢して專らバタミルクを飲用する樣になつてから、漸次全癒に近づいて、便通も充分あるやうになりました。

バタミルクは強い殺菌力を有して居る常習便秘の者が之を用ふれば、自然に寛解して來るやうになる、それと同時に下痢にも効驗があります。又バタミルクに少量の砂糖を入れると、一層美味になり、レモンのやうな香料を混ぜたいと思つたならば、柔かな豆腐のやうに完全に出來上つた上で、餘り酒精の強くない香料を摘んで混ぜるとよろしい。其の香料の酒精が强いと肝腎の乳腐菌を殺して仕舞ふ憂ひがある。之は豫め注意すべき事であります。

小兒に一番多い病氣は胃腸病であります。父母は之が爲めに、少なからず憂慮します。併し普通の護謨管で飲ませる器には行きませぬから匙で飲ませます、尤も四時間位經過した牛乳位の物を飲ましても効顯は同じ事で、之れならば護謨管で吸はせることが出來ます。(ドクトル千秋雄雌耶氏)

食物と腸の病

昔から日本人は坐る習慣を持つてゐるが是が我々の身體の小さい原因である。我々が正坐すると膝關係と股關節とを折曲げるのだから下肢の靜脈を壓迫して血行を害する、殊に婦人は終日正坐してゐて下肢を用ふる事が稀であるから發育を阻害せられる恐れがある。衣食住と身體に大なる關係のある事は勿論だが、日本人の正座法程身體を障害するものはあるまい、だから幼少から坐ることを敎へられた我々は歐米人に較べて慘めな程小さいものとなつて了つた、小さい中にも殊に更女が小さいのは、女が男よりも多く坐つてゐるからである。正座は下肢の發育に害あるのみならず痔核を誘引する大なる原因となる、正座ばかりで無く、胡座も疾病を誘發すること正座と同じで、日本人は居住法を改更せぬ限り、肛門病から遁れる事は出來なからう。肛門病の最も重なるものは痔核であるが、痔核は遺傳的に素因があつて、それが種々の原因で誘發されるのである。日本人の正座法は脫肛の誘因となり、胡坐法は肛門を開いて直接に疊なり板敷なりの冷氣を感ずるから、少しでも素因のある者には危險な事勿論である、第一これからの氣候に向つて注意を要するに、便秘である。便秘の爲めに腸が擴張して、下腹部鬱血を惹起する、下腹部鬱血即ち痔核と云つても差支へはない。それで、下腹部鬱血を防ぐには腸加答兒に用心せなければならぬ腸加答兒の原因は重に食物であるが、胃腸を刺戟する物を避けなければならぬ。日本酒は酒精分を二十プロセント以上含有してゐるから是れ程腸に害のあるものはない、麥酒は獨逸のは大抵三乃至四プロセント位であるから先づ無害であるが、英國のは六乃至七プロセントも含有してゐるから宜敷くない。日本人が日本酒を廢して無酒精の白葡萄酒でも飲用する事になれば肛門病患

者の數も大に減少する事と思ふ。それから腸には、米が悪るいと云つて日本人が米を厭する事は絶對に不可能だが、米は粘氣があつて糞を固くするから食物としては甚だ面白くない。脚氣の人間に麥飯を喰べさせるのは麥には粘氣が無くて便通を容易にするからである。せめて米な麥位には變更したいものである。麥の外には便通を助ける食物は脂肪分、甘い物果物等である中にも葡萄の如きは最も適當である。（ドクトル佐々木惟朝氏）

譯もなく忙しい家庭

女中や男衆を大勢使つて在つしやるお宅の奥樣は毎日何をして暮して在つしやるのでせうか私は常に思つて居ります。世間は家族よりは召使の數の方が多いやうなお宅は寡く御座いません、私の知つてる方にも、四歳位の坊ちやんと當歳のお子のあるお宅で、乳母の外に女中を三人も使つてまだ手の足りないやうな事を云つて在つしやる方が御座います。いくら大勢の家内でも御飯炊は一人で充分ですし、其他の用事だつて夫婦に子供の二人位ではさう澤山あらうとも思はれませんのに、然う云ふ家庭に限つて終日皆が皆忙はし相にして居て、奥樣までが出る暇位ない事はないのですが、何だか忙がしくつてと仰有いますから不思議でなりません、尤もさう云ふ御身分の方は何れさまゞゝのお稽古事やら大きい家庭の指圖をなさるのにお忙しいのでせうか、之れは畢竟物事が不規律なからだと存じます、不規律なのが日本の特色か知りませんけれど、日々の家庭の仕事などは大凡極まつた事を繰返すのですから、最初に此者には何々を爲せ、彼の者には之を爲せると云ふ事を極めて置きましたなら、使はれる方でも、解り切つた仕事を一々尋ねないで、各自その分擔された仕事に責任を持つて一生懸命になるに極まつて居ります、一つ仕事に三人も掛つたり又は誰がするだらうと思つて大事な用事を棄てて置くと云ふやうな事もなくなるだらうと思ひます、些と一杯の水を取寄せるにも、上女中から中働女、中働女から更に下女中の手を経ると云ふやうな手數を掛けて居ては際限がありません、主人も召使ひも成るべく此手數と時間とを省いて、讀書の時間位を造り、少しでも心の修養に努めたら、どんなに幸福な事であらうかと存じます。（宮川經輝氏夫人）

雨の人體

霖雨が降り續くと何故鬱陶しいか。なぜ梅雨中は多く蒸暑くて身體が惰いか、雨に濡れて風邪を引くのはどういふ譯か。數へ來れば雨の人體に及ぼす影響は頗る大なるものである。

雨が降れば空氣が濕潤する。濕度が高くて濕氣が強いと、有機物＝糸狀菌の發生が盛んになる。即ち種々の物品に黴が生へて、其品質を害ふ。此黴菌は空氣中に飛散すれば、人間の肺にも這入る。又飲食物をも腐敗せしめる。

黴菌其者は縱令害にならないでも、其等の黴菌の繁殖する時には、種々の毒物を產出するから、其產出物の爲めに食物の中毒、俗にいふ食傷などが、夏は多いのである。消化器の病氣も多ければ流行病も多いのである。

右は濕氣に伴ふ有機物の醸す害であるが、濕

氣其者も大なる影響を人體に及ぼす、それは濕氣が強くて濕度の高い時には、吾人の皮膚から排泄さるべき蒸發氣が充分に出ることが出來ない。即ち排泄されず多少體內に蓄積する。

一般吾人の身體は、蒸發の爲め常に適度に冷えされて居るもので、言ひ換れば、蒸發に依つて絶えず空氣中に體温を與へて居るのである。然るに濕氣が多いと、其體温を與へる度が減ぜらるゝから（即ち充分蒸發しきれないから）蒸暑くも感じ、氣分も惡い。身體が何となく惰く、倦怠を覺ゆるのである。

芝居や寄席の如き、多人數集まつて居る室で蒸暑く感ずるのも、人々の肺や皮膚から蒸發する濕氣の爲め、空氣の濕度を増すからである。

又雨に濡れると、體温の爲めに着物や皮膚の水分は蒸發して乾く。それで體温は餘計失ふから、風邪を引いて、種々の病氣の誘因ともなる。

冬でも濕氣が強くて寒い時には、濕氣の強い空氣は蒸散熱を導くことが強いから、乾燥した空氣よりも寒さに堪へ難い。つまり濕氣が強いと、それが爲め體温を餘計奪はるゝから、一入寒さを感ずるのである

雨が直接人體に及ぼす影響はザット斯の如きものであるが、間接には、雨は地上に落ちて傾て地中に浸込み、池底水となるから、井戸などには種々の影響を及ぼす。其中には善い影響もあれば、惡い影響もある。

幾層の地表を透過して、清く濾された水量を井戸に増すのは善い影響で、地上の不潔物を井戸側の破れ口などより流し込むのは惡い影響である。

空氣中に浮游する塵埃其他の細菌は、降雨後著しく減少する。塵埃に滿てる大都會の市民は僅かに降雨後に於てのみ、清潔な空氣を呼吸し得るのである。（東京醫科大學教授醫學博士緒方正規氏）

お菓子と飲料

夏は菓子や氷水の代りに冷やした菓子や煮た果物を用ゐると衛生上によく又見た目にも大變美味さうである殊に子供は前後の考もなく氷水等を飲たがるから家庭の許す限り煮た果物を氷で冷してやつたり冷い菓子を拵へてやるのが安全である。

▲果物を煮付ける　には水一合に白砂糖一合を混ぜ其中へ果物を入れて形の崩れない迄に二十分間程煮て柔くなつた處で適宜に切り汁と共に外部から氷で冷やして食べる尤も杏の様に酸い物はこの分量でいゝが酸味の少い物は適宜に水を減らすがいゝ又

▲果物に添る菓子　卵の白味とコンスターチ店もろこしの澱粉）さへあれば即席に出來る輕便な菓子がある之は大匙一杯のコンスターチに同じ分量の白砂糖を入れ水一合を加へ火に掛けながら掻き混ぜると糊の様になるから其時に下ろして前以て拵へて置いた卵子一個の白味の攪拌したのを之れに混ぜて適宜の型に入れて冷でなやし型から抜き取つて果物の汁に浮べる若し之に香料をつけるなら卵子の白味を混ぜる時に少量のレモンを入れる然しレモンは一合の水に茶匙一杯以上も入れると却つて風味を害するものである又コンスターチは西洋食料品店で一斤十五錢位で買へるが和製品には間々混合物が

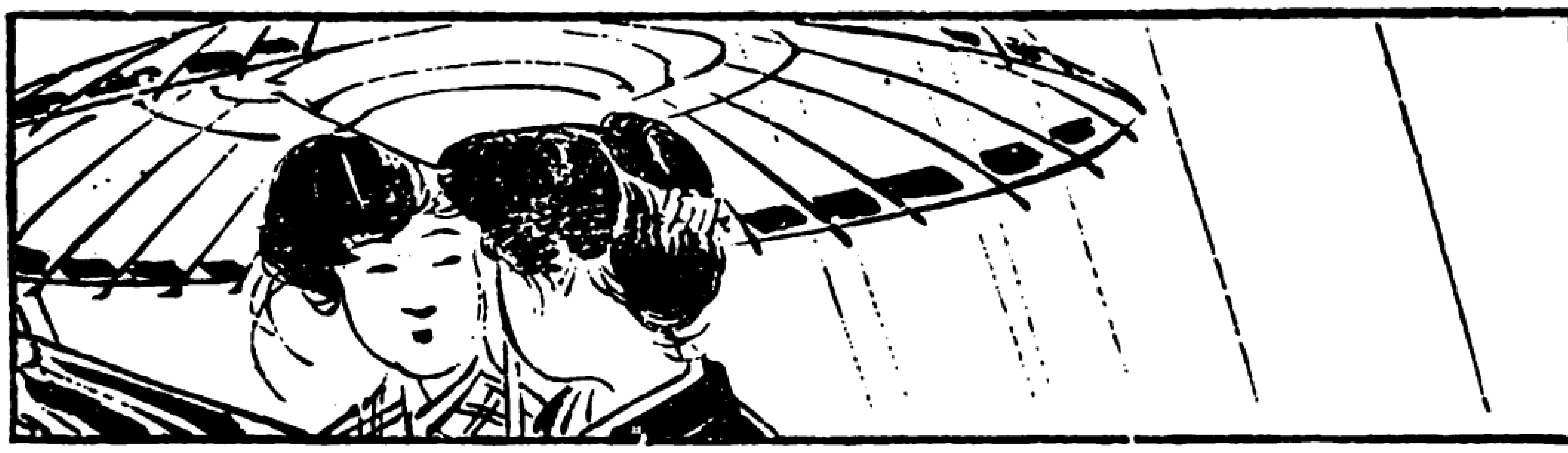
あるから和製を使ふならよく吟味しなければ可けない又コンスターチの代りにコンフロールを使つても宜い夫から

▲暑氣拂ひの飲料　としては卵子ブランデーなどが好い之は卵子一個に茶匙一杯の白砂糖と同じ分量のブランデーを入れ更に牛乳一合を加て攪拌するので暑氣拂としては之に越す者はあるまい。(櫻井女塾長櫻井ちか子談)

▲痲疹と百日咳

例年とも寒暑の交替期には小兒病が流行る、即ち暑くなりかけ、寒くなりかけ、丁度今頃が小兒病の多い年で今年も痲疹がなか／＼流行るやうである、而も痲疹の流行る前後にはイツも百日咳が附隨して流行る、世に子を持てる親達は大に注意を拂ふべき時期である、全體痲疹は一生涯中必ず一度は免かれない、疾病であるが手當さへ十分なれば夫程心配するほどの病氣でも無いから寧そ早く濟ませて免疫となつた方が宜い位のものである、近頃ろ世間には一年でも晩い方が宜い、即ち成るべく成長してからヤツた方が宜いといふ議論を爲ふる向もあるやうであるが、吾輩は全く之れと反對の意見を持する者で吾輩が多年の實驗によれば、痲疹は年の少ない者ほど輕くて濟む、一寸考へて見れば年が大きいほど體力が強い即ち病氣に抵抗力が強いから苦みが少ない譯のやうに思はるゝが事實は全くソーで無い、痲疹は赤ン坊ほど輕い現に誕生前の子供などは僅か一日の發疹でスグ熱が引いて直るものも多い、是は然るべき道理もあるので兎に角痲疹は一年でも小さい子供はど輕症で濟むものである、故に痲疹はドーセ一生涯に一度は免かれぬ病氣であるからソー逃げ廻はつたり怖がつたりするよりも寧その事手當を十分にして輕く濟ませるやうに仕た方が宜い位のものである。

併し百日咳は出來得る限り豫防して罹らぬやうにせればならぬ百日咳は古來滿二歳位より十二歳位までの小兒病としてあるが一年未滿の嬰兒などに感染したときは抵抗力が無いので頗ぶる危險に瀕することも多い、一體百日咳は第一期を加答兒期と稱し普通の氣管支加答兒のやうに咳が出て殊に夜間に多く出る第二期は痙攣期で此期が一番苦しむ時である、第三期は減退期と稱して次第に咳が遠くなる時期に入るのであるが古來百日咳は言ふ如く百日かゝらねば癒らぬものと感念して往々藥餌を與へぬ向きもあるが是は大間違である藥劑の効力に依りて少なくも病症を輕くし又疾病期間を短縮する事は出來るのである、百日かゝらねば癒らぬ者ぢやとか、ホツておいても百日經てば自然に癒るとか言ふて醫者に診て貰はぬのは大間違である、殊に百日咳は併發又は後發病を起し易い病氣であるから十分注意せればならぬ、抑々小兒病は親の見る目と醫者の診る眼とは往々に、して差ふ事がある、親達が一寸鼻風を引きましたといふて連れて來られた子兒に醫者の眼から診ると頗ぶる重患のが有るし又親達が大層心配して來る子供も醫者から見れば案外輕症のもある、要するに少し異狀があつたときは早く醫師の診察を受けるのが肝要である、時節柄世の子に親たる人は十分に注意せればならぬ。(小松小兒科院長小松眞介氏)

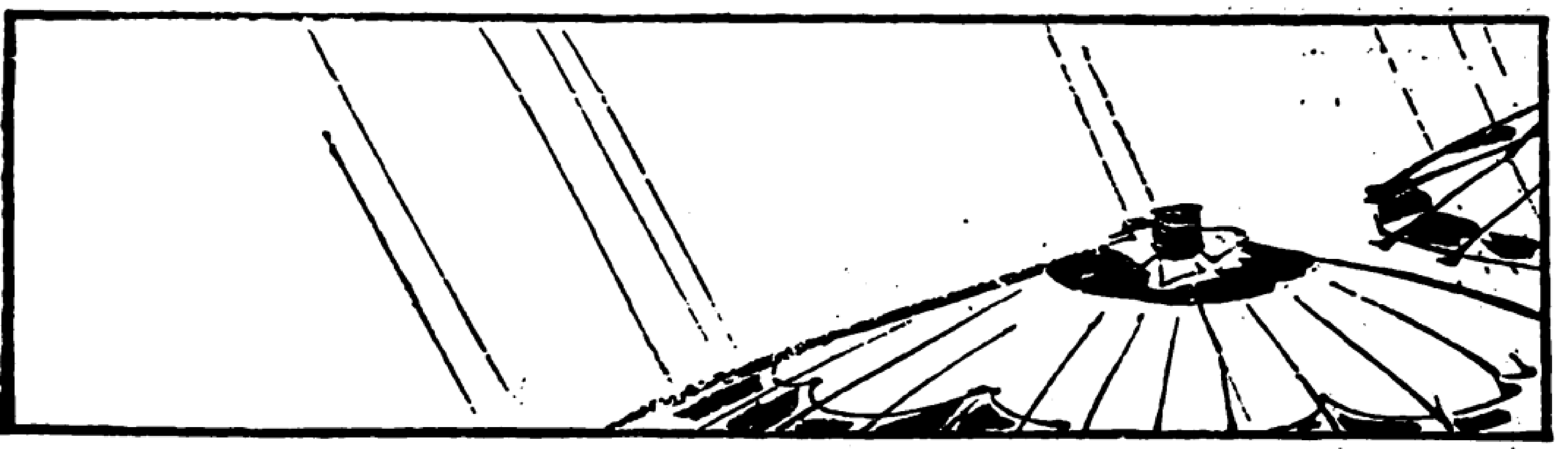


師の面影

みゆき

有名なさる博士の令夫人で、良人の草稿は、皆この夫人さまがお書き遊ばす。その外手紙の代筆、演説の草案、凡そ筆とる事の萬事萬端はこの夫人樣のお手一つ。それ故博士はつひぞ筆と云ふもの持たせられた例がお有りにならぬとか。いつやら博士が地方の學校で是非何かをと紙と筆とを突き付けられて、筆もつた事はないとも云はれず、やう／＼達磨樣に似たやうな畫をばかゝれてこれで堪辨して呉れと仰しやつたと、誰やらの噂でした。夫人樣は名にしおふ某刀自の高弟で、敷島の道には出藍の譽あり。その他美文でも隨筆でも何一つならぬと云ふ事のない筆達者。それ故筆執らうと云ふ希望の女學生の理想は、今や淸紫にあらず、一葉にあらず、一家庭の女王として、はた有力なる脊の君の良顧問として、あまたのお子樣達の慈み深きお母樣としてのこの女流文學者に集つてゐる。

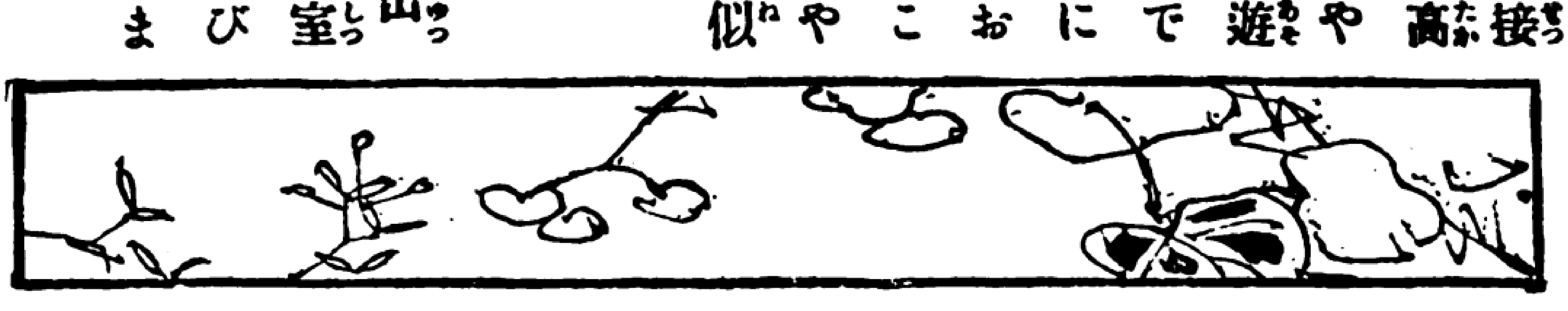
◎

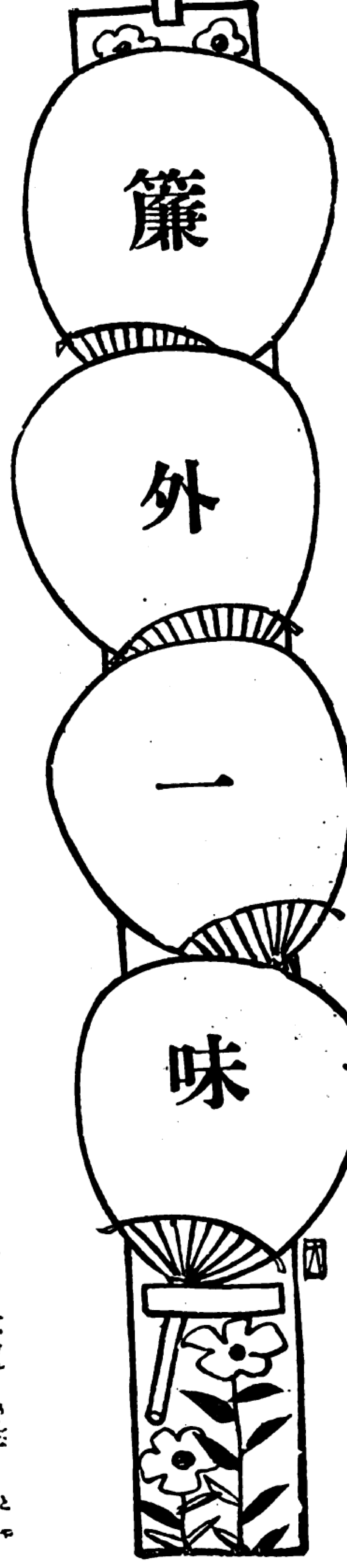


いつもにこ〳〵と御愉快さうなお面つき、三年間つひぞ一度曇つたお顔に接した事のないと云ふ圓滿な御性格は、お體迄もその通りで、お丈はあまりお高からねど、まる〳〵とお肥になつた御樣子は、何處に御病氣がおありになるやらと思はれる位。それでもあまり御丈夫では入らつしやらないで、時々お休み遊ばす。確か神經衰弱とやら。この先生の御長所は、たゞに文章やお歌ばかりでなく、家事經濟にさへ詳しくゐらしつて、それが又普通一般の人とはお違ひになる。家計簿などと云ふものは、一切お用ゐにならない主義で、小遣帳さへおつけにはならぬ、そして「一度拂つたものを二度とらうと云ふ人もなし、又こちらでも、買つた品や拂つた物を覺えて居られないで如何しませう」と仰しやる。併しこれは女史のやうな頭腦の方で初めてお出來になる事で、萬人が眞似る事は出來ない處だと思ひます。

◎

お小さいからお孃樣育ちで入らつしやる先生は、雨降りなどにも足駄で外出遊ばした事はおありなされぬさうで、稀に雨の日や雪の上りに職員室から教室迄の庭傳ひにさへ、歩み習ひのやうな覺束ない足どりで、やゝもすればお轉びになる。「これから少し穿き習はなくつちやあ」と起き上りながら仰しやられます。あまりころ〳〵肥えてゐらつしやる爲もあるのでせう。





◎片羽鳥の譬へ

ある人鶏を飼ひしに、牡鶏は勢すぐれて猛く鳥屋の中垣、三尺程なるを安々ととびこえて、隣なる菜畑を荒すにぞ、飼主は両方の翼を等しく短く截りとりたり、初め馴れざる中こそ勢衰へし樣なれ、やがて短きに馴るれば、依然として飛びこゆるに、飼主もほとほと困じ果てたる處に、來合ひたるは近きあたりの物知りの翁なり、翁そを聞きて、安きことなり片方にし給へといふ、片方とはと問ひ返へせば、片方の翼は長きまゝに、片方の翼のみ截れといふ、飼主實にもとその言葉に從ひしに、果してその後は平均を失ひ、鳥屋の外には出でずなりけり、これにつけても何事も均齊ひたるはめでたきものかな、下世話に云ふ雲に棧、霞に千鳥、提灯につりがね、つり合はぬは危し、身柄も境遇も知惠も容貌も大凡同じ程度の二人して良人とよび妻と云はれんが世に最も幸福ならむ、互に相倚り、相信じ外にいそしみ内を守り、君の爲めならば火にも水にもなけなくと云ふ、いとしき者の待つらむと、歸り路の靴自然といそがる可し、妻をば婢のごとく卑しむる人、また幼兒のことゝしあらはねばならぬ良人の君、良人を剋する妻等は、共に〳〵不幸の人なり、權

門の騎馬と呼ばるゝ秀才、玉の輿にのりし美人は、さほどに我羨しからずと云へば、ほゝゝゝ御安心遊ばせ、御心配には及びませぬ、みそこしさげさする人もむつかしう御座んすからと痛み入つたる御挨拶に、只さへ黒き顔の、なほ面黒う口惜しう思ひけりとは、我事にては侍らず。

◎甘い物は後から

往昔晉の顧愷之とやらん云ふ人は、甘蔗を食ふに常に尾より本に至る、或人これを怪しみて故を問へば漸く佳境に入ると答へし由、それに似し癖の我が幼き時にもありて、朝夕の膳に向ふ時、好めるものには絶えて箸をつけず、その儘になし置きて後にゆる／＼味ふなりけり。

ある日叔母の家に招待れて、從兄等と同じ食卓に向ひけるが、例の通り、最も好めるオムレツのつきしをたのしみにさら／＼と御飯をすまし、扨て取り置きの皿にかゝらんとする、この時遲し彼の時速し、おい美代ちやん、それは嫌なのかい、そんなら僕に呉れ給へと横より太き箸出したるは從兄なり、お使の歸途に豆腐を鳶にさらはれしお婢よりも驚きて、その場にては何とも云ひ得ざりし。

その後互みに脊丈のびて、從兄は海軍兵學校の生徒となりぬ、夏の休暇に銅色の顔に眼許り、光らせて歸り來り、おい美代ちやん、僕が遠洋航海に行つたら何をお土產に持つて來ようかと云ふ、ほゝゝゝ武さん私はお土產なんて別段入用りませんわ、でもね御卒業なすつたら、お祝にいつだかさらつてゐらつしつたと同じオムレツを、澤山と云ひ出でしには、意地張よとさすが笑ひてけり。

◎五十女にお產の守

この從兄至つて無邪氣に穩なる性質なりけり、或る時、學校より故鄕の御母へと文おこせたる中に一片のお守札をまきこめたり、それに添へて、僕が今度、關西地方に修學旅行に行きました時、紀州の淡島神社で

同級の者が、阿母さんや姉さんに賴まれて、安產のお守りをうけて居ましたから僕も、阿母さんの爲め、お產の時に、好いように受けました、と眞面目にしるされたる。これを讀みたる叔母も叔父も思はず噴飯しけり、それもさることよ、叔母はその時五十路を三つ四つ、嫗と呼ばるゝ部類に入りてありければこそ、御志の程うれし、わざ／＼御出でありし御札樣なればとそのまゝ神棚に供へまつり、安產ならぬ、我遠く行きし思ひ子の安全をぞ祈りける。

◎不用意の言葉

東京は茗溪のほとりの寄宿舍に二年ばかりを過しゝことあり、流石に全國より選拔されし女秀才の集合とて、常は謹愼よく、お國訛の聞き苦しきはつとめてかくしてけり。

夜獨習の二時間を終へて寢室にかへり、消燈の鐘鳴り渡る迄には、皆寢臺に這入りて、只一人當番のみ、お巡視の舍監の君に、お休み遊ばせと御挨拶聞え上ぐ可く起き居るさだめなりし、さりながらあるはお飯苔が身に入り過ぎ、さては始末の遲き等にて、まゝ舍監のお出でに間に合はず袴をつけしまゝ寢臺にくゞまり苦しき息を忍ぶことの敢て珍らしからず、或る夜もその室にては何かの興にすゞろ入りやし居たりけん、消燈のベルも聞えぬげに誰一人、寢ねしものなきに、舍監の君は早や間近なる彼方の室に影のすめる、お當番なりし君、驚きて度を失ひ、「すやんでに御座つたせ」と連呼しけり。皆々、その言葉、そのアクセント、その身振の可笑しさも兎角笑ふ隙なく、急ぎ寢臺にのぼり、衾を被ぎけるが、お巡視すみて後、申し合せし樣一齊にむく／＼起き出でゝ、どつと笑ひし聲、暫時は止まざりけり、當番の君は西國のお人、咄嗟の急に生國が出でしなり。

◎無邪氣になれよ

これもこの寄宿舍にての話なり、さるは名高き某女史直傳の瑞典式體操に・晝の授業に苦しみし君なり

けらし、一二三、右へ廻れ！の號令勇ましく、行進せしと思へば、眞逆樣に暗黒闇——千仭の谷底へ——あつと驚きしは御本人もさること、同室の皆々わけてこの室は生憎、二階の上なりければ、眞下の室にては氣の速き君達、地震なりとて室外に走り出でぬとか。眞夜中を十六貫に餘る身體の、三尺程の寢臺より落ちしなればさもありぬ可し。

かゝる類の逸話、殘したる人達、この春も一かどの教諭樣、舍監の君と仰がれて御赴任なされし筈なり、願はくば無邪氣なりし寄宿舍時代を、時折回顧し給ひて、若々しき笑窪の、豐頰に絶えざらんことを、嫁に對する姑、生徒に對する舍監氣質と時々人の申し侍るを、聞くことのあれば、我が君達よ、オールドミッスと冷たげなる名をさけて萬年娘の何時迄も、處女さび足らぬ勝なる生徒の上に、溫き御同情もて、導き給はむことを、陰ながら祈るになん。

◎夫唱婦隨

ある師團所在地なりけり、其地に在勤の軍人社會に謠曲いみじう流行して、そは旦那樣のみならず夫人連もやさしき肩怒らせ、なふなふその衣は何とて召され候ふぞと怪しげなる節、たどりますがあれば、イヤーヨーと鼓うたせらるゝもありにけらし、さる中にもお位置高き某夫人、御同僚の夫人連に似ず、少しも遊ばされず、時々夫人連のみにて催あるごとに、お子連れにて拜聽に出かけ給ふ也、ある人この夫人に向ひ、奥樣も遊ばしませ、洩れ聞きまゐらすれば長唄に御堪能のよし、御素養在しませば尚更の事、大きな御聲をお出しになりませば大層御養生になりまするさうでと、申すを夫人は輕う、ほゝゝゝと許り、宅は大勢子供が居りますので、毎日毎日叱言申しますだけでも聲をつかひすぎます位で御座んすから此上致しましたならばほゝゝゝと受け流して——さるに旦那樣時々お家庭にて遊ばす折は、そのクセがそのロンギがと御批評なかなか巧者なるに、ふと聞きたる人の、いつ御稽古と不審申せば、はい度々皆樣の遊ばすのを伺ひに出ま

すので、ほんの片聞で御座いますと答へ給ひき。

◎唄と繪の間違ひ

或年のお正月歌留多の末はくづれて、隱藝の持ちよりとなり、日頃のおたしなみ謠曲琵琶琴三味線さてはデカンシヨ、浪花節等の下卑たるもありて、多士濟々賑々しき中に、今日の花なる振袖の君、先刻より笑かたまりて聞き給ふのみなるに、皆して何か遊ばせと責めたつれば、私すこしお習ひしてましたお琴でも小謠でも長唄だつても、皆、皆樣が遊ばしましたからと逃げ給ふを、否否、私は知つてますは、媼やさんに御習ひなすつたつてお柄にも似合はない大津繪を遊ばしたことがありませう、あれを皆樣にもと云ひますと、側なる背廣の君、それは奇拔奇拔、目先が變つてゝ一段でせう、こゝに墨もありますおい君、その床の間の料紙を此方によこし給へ。この君、俗曲に大津繪あるを御存じなしと見え、吃の又兵衛の流をくみて、鬼の念佛なんど、墨繪にて畫くものと、取違へ給ひしならむ。

◎經濟的習慣の愉快

ピーテバーナム氏曰く、凡そ氣隨氣儘に己れの望みを滿足することに馴れたるものは、不必要なる費用を節減せんとするに當り、大に困難を感ずるものなり、然れども一度び節儉を實行して、或は土地を買求め、或は之を預金する經濟的習慣を得るときは、其愉快さは甚だ大なるものなり貯蓄の樂みを知る人にとりては、冷水浴は活潑なる散步は、立派なる馬車を軋らしむるよりも愉快ならん、友を集めて談り、家族團欒の裏に讀書し、草履隱し、目隱し等の遊戲を爲すことは、貯蓄の愉快を知る彼等にとりては百圓乃至千圓の宴會よりも、却て大なる愉快を感ずるならん剩りに手廣き生活を爲すため、幾千の人は貧困に陷るなり或者は幾百千圓を費して、辛うじて愉快を得るに、或る者は僅かに其二十分の一にも足らざる費用を以て、更に實のある愉快を買ふあり

裁縫の呼吸

▲現今の流行が分る

着物の色目柄合をいくら撰んでも仕立の呼吸を外しては見られたものでない、近頃何々式裁縫といふのが澤山出來て彼方此方で講習會などが開かれるが詮ずるところは規則的にも數理的にもゆかぬ十人寄つて十人共出來振りの違ふところに日本裁縫の妙味があるのであつて、某裁縫教師は次の如く語つた、

肥つた人を恰好よく見せるのには襟肩の明きを二寸五分の出來上り襟肩を三分後へ繰越すのです、普通なれば袖幅八寸五分のところを八寸八分として七寸七分の肩幅とし猶襟幅を三寸二分位がよろしからう、之と反對の痩せ形の人が襟肩の開きを出來上り二寸二三分として後に一部五厘繰越すのです、兎角乳下のだきのところに袋が出來て見苦しいから前幅が五寸三分より狹くならぬ樣にして縫目を三分縫込みます、そして襟を蒲鉾形に附けると頗る着工合がよい

△袖丈けは粹は短く上品は長いがお極りなれど普通齢に應じて一定してゐる寸法は一尺八九寸が十七八歳、二十歳から二十五歳までは一尺七寸位が適當です、角を丸くするのは現今の流行で大人は五六分の圓み、七歳から十四五歳までの子供は一寸の圓みがよい、振袖となると二寸五分から三寸の圓みが普通である△袖附けは六寸、八ツ口は三寸にする、突襟をする人は後の方を五分少くして五寸五分にして置くと着振りがいゝ、しつかりと落つく△羽織の袖丈けは着物と同じでよい大人は帶揚げで八ツ口の處を一分や二分はどうしても締上げるから從つて袖丈けも短くなるから羽織の袖口との襲なり工合も好い加減になる、子供は帶揚をせぬから袖丈を二分位長くして置のが恰好である△帶は難かしいが今の片側ものなれば八寸三分から八寸五分位、丸帶は八寸五分が普通どころである、四十歳以上となれば八寸が通例としてある、仕立方は角の處が大層難かしい、折目を普通四角につけて置いて縫ふ時に角の尖端から五分位の處で斜かけに外面へ一分位づゝ兩方から縫ふつまり角の尖端で一分位餘裕を持たせるのです、すべて折目は仕上げ八寸五分なれば八寸六分の處へ篦をつける、帶の心は極く堅いものを一枚入れて眞綿をひいたのがよろしい、併し縮緬や羽二重のやうに薄いものには二枚心を入れる、兩側の縫ひ込みを心の間に挾むやうに拵へ上げる、八寸六分の篦なれば心を八寸五分位にして置くと出來上りが誠によろしい、唐繻子は仕立上げて伸びるから篦と折目を同じやうにして置く△衽附は何人でも襟下から裾までのところ五分だけ斜にして裾四寸、合褄三寸五分とするが、それよりも合褄を三寸七分にして裾から合褄までを三分だけ斜にすると着た時に衽が捻れないでよい△ふきの少いのが現今の流行で袷なれば一分から一分五厘、綿入で二分から二分五厘稀には三分のものもある、袖口もそれに準じて少くふかせる袷なれば毛拔合せにし綿入なれば一分位ふかせるのです

◎美服を着したりとて誇ると勿れ之を誇るは愚の至なり新衣を購はんと思はゞ先づ財嚢に問へ

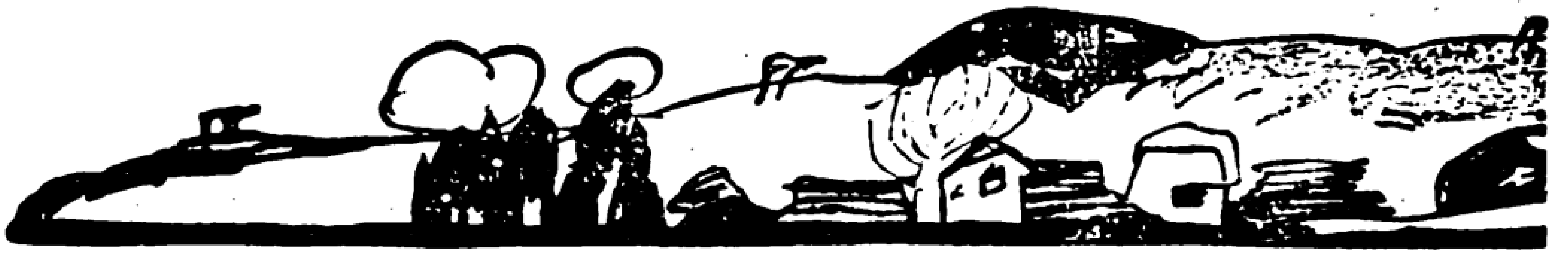
藻汐草

磯の媼

法要に招じ參らせける某大僧正とかや、いと德高くおはする聖の、此度西の京より上り給ひけり。雪と淸き御眉、鏡とうつらふ御頭、見るからにぐうつきて、いと尊く覺えけり。例の御經も末つ方になりける頃、今迄よみ給ひし我等俗人には更にわき兼るとらやあ〳〵には有らで、御佛のいと難有くおはします事人の世の常なき事、されば常住ならぬ此世のはかなき奢を捨てゝ、後の世を願ふべき事、など、今様の言葉に綴りて、節あはれに懷かしう御弟子達ともろ聲にうたひ出給へり。

さらぬだに亡き人を偲ぶに傷む心には、殊に御僧の人柄さへ打添へて、我にもあらず引入れらるゝ樣に聞き惚れつ、知らず識らぬに目と頭も下るあり。是ぞ名のみは豫て聞居ける御和讃といふ者なりとて、其歌の刷物分ちたまはりぬ。

其夜さり、親族等みな佛のお前に打集ひて、晝の程大僧正の誦し給ひし、彼の和讃唱ひて見ばやとて各々刷物押しのべつ、偖、始の處の節は如何うたひ出しけん、糸口だにほつるれば後は容易に思ひ出づべきを、といへど、誰も皆覺え居たる心地ながら、いざとあるには甲斐なかりけり。斯くやはありけんとて伯父君のうたひ給へる、あやしう謠曲のロンギのあたりによそへつべう、さりや少しも似たらずこそとて、從兄のやゝにして歌ひ出せる、是は小



學生のすなる唱歌にこそなりおほせたれとて皆々笑ふ。我にも如何にぞうたひて見給へとていはれけれど、もし琴唄のふしにや紛ふとおぼつかなくて。

香烟縷々として立ちさまよふ擅の上、蠟の灯のゆらめきに御戒名の文字うき出でゝ傍なる寫眞の御おもちよ、ほゝゑみ給ふて如何とや聞ゐ給はんものぞ。

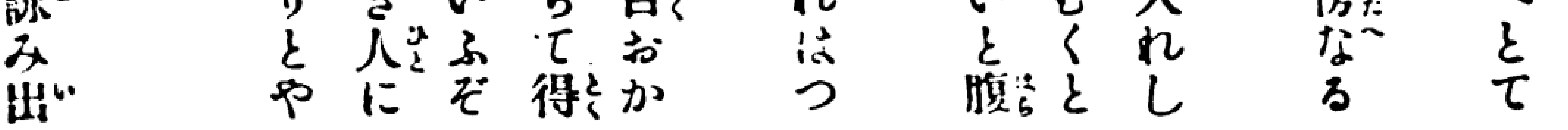
母の笊碁は我に傳へて目笊碁となしぬ。其の目よく〳〵荒ければや、兎角して手に入れしと心ゆるす程に大方はもりて影なし。我が手中に死せりと思ひし石は、いつしかむくむくと生氣出で來て、只に逃れ去るのみならず行きがけの駄賃にとて、我が石さへ殺しゆくいと腹立たし。

小の石に係らひて大の石殺したる、根も固まらぬ石を、闇雲枝葉にのばして遂に倒れはつる、常の事なり。いつも後になりてあつと氣が付く、既に遲し。

母の、たまさかに人と打ち給ふ時、大方は負け給ふ樣なり。されど我に對しては井目おかせて猶暴威を振ひ給ふ。おかしきは其の我が從妹を捕へて井目おかせ、然も多くを勝ちて得得たり、或時其從妹、又碁を知らぬ人に斯く〳〵圍みて此石を取る、四ッ目殺しとはいふぞとて敎へ居たる、いとおかしかりき、此敎へられたる人、まだ碁といふ者見し事も無き人に打向ひ、指の腹程の白黑の石數多もて相戰ひ、それで勝ちたる方が、勝ちになるのなりとや敎ふらんか。知らず

憶良等は今は罷らん子哭くらん、そのかの母も吾を待つらんぞ

此歌いつよりともなく口馴れて、我が淺學その善惡はわきまへねども、おもしろく詠み出



でゝ宴の席を罷り出給ひし、人柄優になさけ知る士ならめと思ひき。よく解らねば打捨てお
きける萬葉集、此程の徒然に取出してよみもて行く內、

その子やもむなしかるべき萬代に語りつぐべき名はもたずして

とあるを、うれしき雄心こめたる歌哉と見れば、山上憶良沈レ痾之時の歌としたり。さらば同じき君の、傍へはかゝる志もたまひけるよと、人柄なつかしくなりぬ。病へる折の自哀文といふを、返點辿りつゝ覺束なくも讀み行く、傷ましさ限りなし、中に

初め痾に沈みしより、年月稍多し云々年老へるに復斯の病を加ふ、諺に曰ふ痛瘡に鹽を灌ぎ、短材の端を截る、此の謂なり、四肢動かず、百節皆疼む云々

中風の樣にてや惱み給ひけんと、近く目に見し事の思ひ出でらるゝ、わりなし。かく老病身にせまり、疾苦に悶ゆる床裡、猶も子等を思ふ歌長短幾首、まことに愛深き人の親にてそものし給ひけめ、國守としても必ずよくおさめておはしけんなど、偲び思ふ歌の德、末の世に猶名こそとゞめ給ひけれ。

某の君は逢ひ參らす每にいよゝ瘦せにやせもて行給ふが傷ましきに、君の御肉ちと分け給はんこそよく侍れ、如何なれば御病ともなくてさは瘦せ給ふらん。といへば、是は又いとまろによく肥え給ふ友の、彼の君の瘦せ給ふは、勝れて苦勞性にて在すれば、心から身をもそぎ給ふよ、世の中は我の如く物思ひもなくて呑氣に過せば、求めずとも肥ゆる事いと容易し。などいふ御口の下より、此頃はほんとに彼の事で煩悶して〳〵、夜もいねられずと仰する。呑氣に煩悶し給はんに如何の御心地ぞ。御顏と御腰の邊りと、いや肥り給ふて、御胸のみ



骨々しう痩せ給はんは、いかに形のおぼつかなくてぞ、とぞいはまほしかりき。

幼き兒に問ひて見よ、大抵は軍人にならんといふ。勲章胸間にひらめかして肥馬に跨りたる、又は短劍つけて軍艦上に双眼鏡手にしたる、是等の繪は如何ばかり幼き眼によしと映るらん。稍長ずるに從ひて、或は研學の士たらんと願ひ、或は實業に行かんと望みぬ。赴く處は數途に別るれども、始めは皆陸軍大將 海軍大將なり。

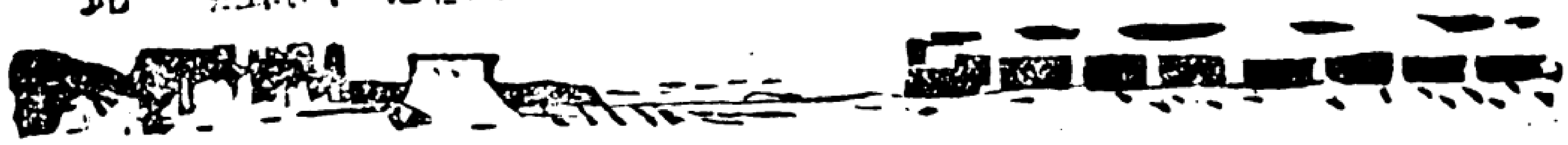
原始白色の花、種々の人工淘汰によりて遂には五彩美くしう咲き出づめり。志想も又幼兒の白色は漸く進化し來りて、世に出る頃には種々の色彩を添ふ。

かく色に傳へて申せばとて、ゆめ國家の干城として其の職に在ます人を、なみし參らすにはあらず。大禮服とやらん、金銀モールいと眩ゆう輝出給ふ雄姿、誰か尊重し參らせぬ人やはあらん。烏だに孔雀の羽を植ゆれば人めはひくものを。あなかしこ

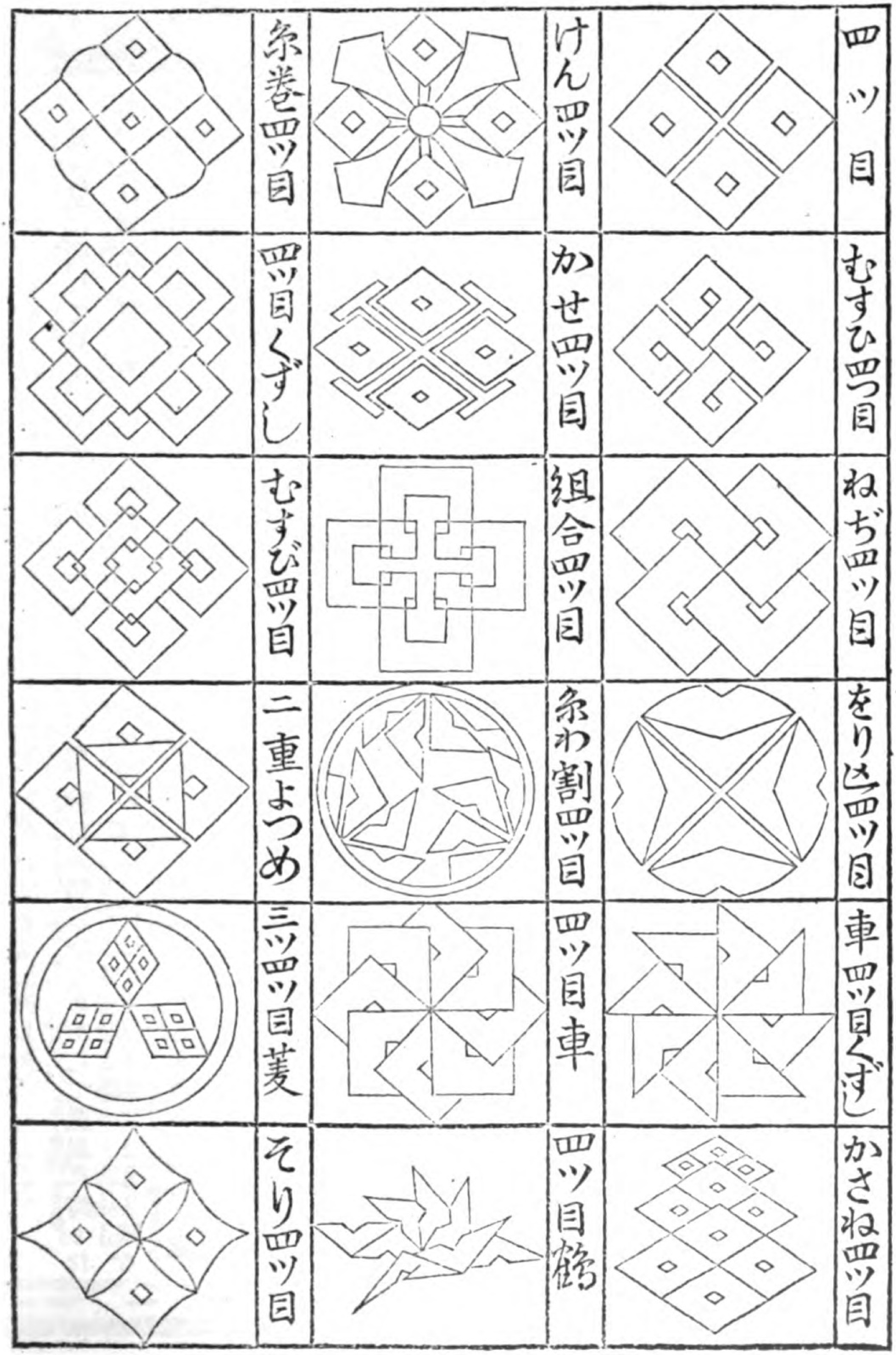
一日の内に樂しき時は、午前十一時、午後四時、又七時半より就寢までなり。

十一時と四時とは、郵便配達の來る時刻、夜間は何等拘束なき自由の時間。

天さかる鄙に住みたれば、常打語らふ友も持たず、都よりの書信何より嬉しく待佗びては時に一片の紙に向ひてほゝゑみ、或は打ひそみなどぞする。人ありて見給はゞ狂はしうも思すべし。我父、毎夜七時半に御寢ならるゝ、七時半といはゝまだ宵の口ながら、往來を遠く隔てし住居には既に人類絶えはてぬ、緩き調におとづれ來る逗子灣の濤聲、かへりては無聲に增したる寂をそふ、孤影をうつす燈下、讀書もよし、冥想もよし、遊ぶもよし此時、全く名利の念を離れ去りて、心聖し。困苦、艱難、誘惑、よし身にはせまり來るとも、我に此の「時」をもつ間は、我心みだれはてざるべし。



四つ目の意匠


四ツ目
けん四ツ目
糸巻四ツ目
むすび四つ目
かせ四ツ目
四ツ目くずし
ねぢ四ツ目
組合四ツ目
むすび四ツ目
をり込四ツ目
糸わ割四ツ目
二重よつめ
車四ツ目くずし
四ツ目車
三ツ四ツ目菱
かさね四ツ目
四ツ目鶴
そり四ツ目

東京婦人の姿勢美

貌と歩調の觀察

鐵拳禪

△調和ある女

地方から出て來た女は、市中を見物して歩いて、店飾の色彩と配合との美に打たるゝよりも、「東京の女」の美しさに眼を耀かした。家に歸つてからも「東京の女は美しう御座いますのね」と云つて、頻りに同性の美を讃へて居た。

美しい東京の女！女が觀て美しいと思ふ東京の女は幸福である。其の美しさを以て行路の人に快感を與へ自分でも自分の美に醉ふ事が出來る。而かも自分で自分を美しいと觀た時ほど、女の滿足を感ずる事は無からう。

併し、男の女を美しいと觀るのと、女の女を美しいと觀るのとは、其の氣分が自ら違ふやうである。彼女の「東京の女」を美しいと見たのは、其の顏とか、眼とかの部分美ではなくして、整うた容貌、備はつた服裝の全體美であつた。

一々詮議立をして見れば、東京の女にも美人ばかりは居ない。顏の美しいのも居れば、醜いのも居る。娉婷と脊の高い奥様もあれば、圓々と肥つた女學生もある。服裝から云つても亦然うであつて、新流行の派手に作つて居る若い女もあれば、時様には頓著せぬと云つた風の年増もある。けれども、全體を瞥見すると、「東京の女」は美しい。頭から爪先まで齊うて居る。上から下まで調和した服裝をして居る。著樣著こなしが巧みである。田舍女の盛裝した時のやうに、顏だけが白く浮き出たり、着物だけが重さうに歩くと云つた風は無い。所謂る垢拔がして居る。瀟洒してゐる。氣が利いてゐる。是れが彼女の美しいと見た「東京の女」であつた。

彼女は更に、東京の女を友禪モスリンに譬へた。瓦斯の灯に耀き、春の光に匂ふ、其の華やかさ。ちよつと見の好い、感じの好い、遠勝のするは「東京の女」

である。田舍の美人は、野の白百合のやうに、其の作らず飾らざる自然の儘を愛すべきで、眼に訴へて感じが好いと云ふには餘りに距離が遠い。

△手と職業

電車に乘つて、目に觸れるものは、膝の上に置いた手と、釣革にぶら下つた腕とであらう。

手を能く注意して覩れば、大抵其の職業がわかる。盛裝した不可解の女も、白粉を塗つた謎の女も、その生活の荒さと柔かさとが分る。

一見富豪の令孃風に著飾つて、美しい、品のある顏の、我はと思ひあがつて居る若い女も、柔かい袖口を洩れる手の痛く荒れてるのを見れば、哀れに思はれる。高等官の奥樣風の女の、節くれ立つてる指に金の指環二つ三つ耀かしたのも、何となく荒い水仕事でもして居るやうで、氣の毒な感じがする。拇指の物の色に染まつて、皮の稍厚さうに見えるお針の師匠、食指の中の關節に胼胝のある女文士、ペンを持ち馴れた女學生上りの若奥樣は中指の先の關節の邊に、有るか無きかの胼胝が固く昔の名殘を留めて居る。

△足袋の踵

盛裝した女に、一點の缺陷があつたり、又は一寸とした不調和があつたりしては、平常着の時とは違つて著しく見憎い。

小間使を連れた奥樣が、飯田町のとある家を出て、だら〳〵坂を下りて行つた。結立の丸髷も光つて居り、柔かな長い裾が圓い木履にまつはり、亮々と云ふ衣ずれの音に、彌生の空氣も仄かに匂ふかと思はれた、雪を欺く白足袋は、路上の陽炎の裡に鮮かに見えた。が足袋の踵が綻びて、折々飜る裾から左の踵が現はれる。踵の大きい女、見る眼には限なく淺間しい感じがした。

△灰色の女

日増に『灰色の女』が多くなる。

思想の如何は深く知らないが、外貌だけ見ると、この種の多くなつたのは事實である。女性の男性化せんとするのは、文明世界の趨勢であるさうだから、或は過渡時代の我が邦に、この種の女を見るのは敢へて摩迦不思議でも無いかも知れぬ。

なべての若い女は、理髪床へ往つて剃刀を當てて貰ふ所から、顏が綺麗になる。産毛が漸く剛くなる。毛深い質の女は髯さへ見えて來る。佛蘭西女のやうに髯を蓄へて居る女性は、まだ見えないが、鼻下の黒くなつてる女は往々ある。

其の男性化せんとする脂肪ぎつた顏を能く洗ひもせず、顏の毛も滅多には剃らず、髯の上に白粉を塗るの



で、毛色の惡い猫の灰色に見える。色の淺黒い女は頸筋まで灰色に見える。灰色の若い女、口語詩人はいざ知らず、普通の人達は、恐らく面を反けるで有らう。

△美望の眼

女は女を振り返つて見る。

眼はチラリと、帶に、髮飾に、著物に、而して靜かに運ぶ歩調に。

女と女とが摺れ違ふ。二三歩の處で、蛇度甲の女が振り返つて見る。乙の女が振り返つて見る。視線が若しもピタリと合へば、冷笑を浮べて足早に行く。

綺麗に著飾つた婦人には、自ら賴む所があるから、振り向かぬ。見すぼらしい扮裝をした女は、蛇度口を

開いて振り返つて見る。羨望の眼！　嫉妬の眼！

△歩調の技巧

俳優は技巧を以て舞臺を踏み、女は技巧で路上を歩く。手で大方の推察がつくやうに、其の歩き方で如何なる種類の女かゞ分る。町家の娘は、内輪に小刻みに歩き、ちよつと粋に見えるやうに前屈みにする。女學校出身の女は姿勢が正しく、輕快に歩を運ぶ。技巧の歩調に對して、無技巧の歩調と云ひたい程自然である。

その歩く時の用意に依つて見るも、良家の女は、小走りに走る時でも、風に吹かるゝ時でも、褄を抑へて裾の飜らないやうに警戒する。町家の女は、著物を生命として居るだけに、後姿を氣にして振り返つて見たり、帯の結び目に手をやつて撫でゝ見たり、色々と修飾を加へる。他に美しく見られたいからであらう。

娘達の人事占ひ

人に知らさぬ物思ひを、英吉利の田舎娘達は三日月さまに訴へる。三日月さまに願かけると必ず聴いて下さると信じてゐる迷信もかう言ふのは一寸優美なものである。こゝに日本以外の妙齢の娘達の無邪氣な愛すべき迷信を調べて見ると、先づ英吉利の未婚の處女の間に、人知れず行はれるをかしいお呪ひは、閉店する前の店で歌留多を買ふことである。さうすると必定良い婿が授かると彼等は信じてゐる。も一つはこれから結婚式に列しやうとする、花聟さんを何處でも一目見ると側目も振らず驅け戻る、そして自分の室へ人に知らさず入つてしまふと、三四月中に必定嬉しい縁談が極まるものと信じて居る。レスリー、ムールといふ有名な英吉利の印度通の説に據ると、印度では蛙を殺した娘は必ず一生涯亭主の運が惡いと信ぜられてゐる。それから印度のベルカン一帶の地方で行はれる美しい迷信がある、それは、數多き蝶がヒラ〱と家の中に舞ひ込み飛び廻ると、その家には近い中に縁談があると信ぜられてゐる、もしその舞ひ込んだ蝶が家内の年頃の若い男女の誰れかの身を廻つて飛ぶと、側のものはそーらお前は近々いよ〱良いお嫁さんが出來ると言つて囃し立て、囃された人もさう信ずるのを常とする。

小間使ひとなつた私の實驗

木村政子

△希望を捨てゝ女中奉公

私も妙齢の頃は海老茶袴に蕾の包みを提げて、高等女學校の門を潜りましたが、あお想へば、眼には絶えぬ希望の光、胸には躍る若き血潮、娘十七の花の盛りを浮き〳〵として送り度き其年の四月から、已むなき家庭の事情の爲めに、口惜しくも學びの道を捨て、人の家の召使として働かねばならぬはかない身の上となりました。

氣隨氣儘に生育ちし身の、他家へ召使はるゝやうになりましては、朝に夕に悲しき事のみ多く、臥床に入りては人知れぬ涙に枕の紙を濕すばかりでありましたが、馴れては憂き事も辛しとは思はず、それからそれへと主人を代へてつとめる様になりました。

私が初めて小間使として住み込みましたのは、帝大の教授をお務めになつてゐらつしやる某博士、奥様は由緒ある家のお孃さんとやら、お茶の水出身、さうお美しいと云ふほどではありませんが、何處やらに品のある、すつきりした方、お年は廿四とか云ひました。お子様のなかつた故でもありませうが、身だしなみの好い方で、毎朝お起きになると、大抵お髪は束髪に御自分で上げられ、お洗面の後は薄化粧までなさつて、早くお客様がありましても、取り亂した風を見せるやうな事はありませんでした。

△寛大な奥様振り

夫故私達にも始終だらしない容姿をしてはならぬと申されましたが、お勝手向などのことは極く寛大で、お友さんと云ふ仲働にお任せきり、來客に依てお手料理を差上げる時などは、御自身て白いエプロンをお掛けになつて、勝手へお出でになります、それも只材料を集めさせて、御料理なさる丈け、御使ひ殘りの品は、捨てやうと如何しやうと少しもお氣には留めない方。却つて古いものでも取つておいたのがお目に留りますと、お叱言を頂きます位、或時など御飯焚きのお仲どんが、張物の糊にすると申して、少し饐え加減になつた御飯を取つておきましたのをお見付けになり、張物をするには布海苔を使へば好い、この生暖い時に腐つた御飯など何時までも取つておくものではない、お前達は衛生の思想がないから困ると、何だか召使に出てゐるやうな者は、皆賤しい心を持つてゐるとやうに申されたことがありました。

△奥様は家附娘

賄の方も月々定めてお友さんにお渡しになり、特別の物の外は皆それで賄ふやうになつて居りましたので、餘つた月は、餅菓子を買ふのお蕎麥をとるのと云つて内々でよくお友さんに奢られました。私は初めの中は何となく怖ろしいやうな氣がして、「何故お返しないの」と申し

ますと、お友さんは、「お返しゝたつて仕方がないわ、そんな事して來月それ丈け少く渡されでもしやうものなら大變よ。」と云つて居りました。

さう云ふ風でありますから、お勝手向きの方の事は、奥様にはさう御存じないで、旦那様のお留守の時は、お裁縫をなさるとか、雜誌や新聞などを御覽になつてゐられることが多く、其他は琴ピヤノなどをお復習になるか、又は花をお活けになるかで、時には旦那様のお仕事のお手傳か、寫し物などなさつてゐられることもありました。お裁縫などは大抵他へ出して、あとは皆私達に致させます、御自分でお針をお持ちになつたのを見ましたことは、殆んどない様でした。

お客もなくお夫婦でお夜食をなさいました後は、御散歩に行らつしやいますが、さもなければよくお琴かピアノを奥様がなさいました。お子供がありませんので、お淋しくはありますものゝ、氣兼なすべき姑舅御様も小姑様もありませんので、斯う云ふ時は本當に奥様はお幸福だと思ひました。けれども奥様は時々御機嫌の悪いことがありました。私は一年中ばかり居りましたが、旦那様が奥様をお叱り遊ばしたやうなことはついぞ見たことがありませんでした。却つて奥様の御機嫌の悪い時には、旦那様は大層お優しくなさいまして、少し奥様が御病氣にでもおなりになりますと、御自分で御看病なさると云ふ風でありますから、私等は奥様の處へ行くにも臆劫なやうに思ふことがありました。

或時お友さんの話に、「家の旦那様は、書生時代から奥様のお家には厄介になつて居られたさうですよ。」と聞きましたが、さうかも知れないと思ふことが御ざいました。

△眞先に立つて働く奥様

さてその次に參りましたのは、或る官省へお勤めになつてゐる、高等官のお宅で御座いました。御主人は最早五十に近いお年であるのに奥様は當時廿六とか申すことでした。而して奥様は五つを頭に二人のお子様のあるにも拘らず。お子供は女中達に守りをさせて、御自分は尻端折になつてお洗濯もなされば、御料理もなさると云ふ風で、私は其時は仲働として參りましたが、皆奥様のお差圖で致しました。若し少し分り悪いやうな事は、大抵御自分でなさいますので、私等は餘程樂で御座いました。奥様は常に「私は他家の奥様のやうにチヤンとして坐つてばかりはゐられない性で、働きたくていけない。」と申されましたが、本當によく働く奥様で、長火鉢の前に悠然坐つてゐられるやうな事は滅多にありませんでした。而して氣さくで、なか〳〵思ひやりがありまして、女中は私と御飯焚きの二人でしたが、御主人と奉公人との懸隔は殆んどないまるでお友達のやうなお取扱ひで、時々心の中で濟まぬ事だともおもひました。

處が間もなく旦那様は御病氣にお罹りになりました。以前から知り合ひの時田と云ふ看護婦を雇つて、自宅で療治をなさいました。其の時田と申しますのは、最早四十位の婦人で、旦那様とも馴れ〳〵しく口をきいて居りました。奥様に向つても、それは隔てのない物言ひ振りで

ありましたが、時々は娘が弟の嫁にでも物言ふやうな妙な所がありましたので、私は何と云ふ人だらうと陰で思つて居りましたものゝ、さう云ふ時は氣さくな奥様も、心持の好くないやうな様子が見えましたが、然し別にお怒りにもなりませんでした。

△轉地療養先で暇乞

其中旦那様の御病氣も段々快くなりまして鎌倉へ轉地療養をなさることになりましたが、勿論あの看護婦がついて行くことゝ思つて居りましたところ、それはおつれにならず私に一緒に行けと云ふ旦那様の御命令でした。私も少少意外でしたからそれとなく奥様の御意向を窺つて見ましたら、これは又案外な御言葉「私はこの家を明けて出られもしまいからお前さんが行つてもらひたい、そして世間體もあるから着物などは私のを貸すから……それを着てお出と仰しやいました。詮方なく私もそのつもりで支度をいそぎ主命もだし難く思つて參ることに致しました。

鎌倉へ參りましてからは、御病氣も日増によくおなりで、二週間の後はもう大抵平常と變らない様になりました。

するとその頃一度お足を摩する時に薄氣味悪い串戯を仰いましたので、私はもう怖ろしうなりましたから前後の考もなく、其處を逃げ出しました。而して東京へ歸らうと致しましたが宿の者がいろ／＼言つて止めましたので其夜は離れ座敷で一夜を明しました。

其の翌日折よく奥様がお出になりましたから、私は善いほどの口實を設けてお暇を頂いて歸つて參りました。

△教育家出の奥様

三度目に上つた御家は會社の重役のお宅で旦那様は京橋の去る貿易の會社へお勤めになる方で、毎朝七時頃お出まし。奥様は、旦那様より五つ年下でも彼是四十といふお年高等師範出の方で多年女子教育を遊ばした故、よく人々の性質を御存じの上に、茶の湯も生花も琴も謡曲もお出來になる、多能な方でありました。

此の奥様は、前に御奉公申上げる内の奥様とは又異つて、初め分らない事は一度御自分で手本をお見せになり、それからは大抵私達にお命令なさいますが、お料理の時などはお附になつてゐて彼是お差圖をなさいますですから、たとひ御自分でさう手はお下しになりませんでも、何から何まで一切呑込んで居られまして、なかなか抜目が御座いません、五人の奉公人をお使ひになる御身分でも糠味噌桶の中がどうなつてゐるか位までもちやんとお氣が付かれて居ります。

而してお子供衆も十五をかしらに四人でがす、御家族の方のお召物は、皆御自分でお裁ちになり、これを女中へ縫はせて決して他へ出すと云ふことにはなさいませぬ、それでゐて至つて情深い方で、何彼に御心をつけて下さいます上にお暇の時などはお裁縫の事とかお料理の事とか、いろ／＼お教授をして戴くのでございます。お年の故かも知れませんが、平常は質素な御風姿をなさつて、お子供方の御成長を樂みにお家庭と云ふことに第一に御心を用ひて、餘り世間的の事には御關係なさいません。お芝居や音曲物がお好きで月に二三度は必らずお出かけになります私は此の家へ參つて初めて女と云ふものゝ道を知つたやうに思ひました旦那様にも實によくお仕へなさいます。誠に模範的家庭だとおもひました。

兒童の惡癖矯正法

眞葛女

習慣は第二の天性であるとは言ひ古した詞であるが兒童の性癖は成長の後に惡結果を遺すものであるから保護者の地位にある者は大に注意しなくてはならぬ。さて其性癖にも種々あるが、重なるものは我儘、高慢、强情、無作法、神經過敏、臆病、懶惰、忌避、早熟、嫉妬等である。これといふのも畢竟監督者たる親達の不明から生ずるので、或は愛憎、或は他の方面に向つて發すべき憤怒を、子供に向つて發し、自分達が一時の惡感情から或時は無情に、或時は冷淡に、また或時は兒童がよからぬ事をしても等閑にして置くといふ不注意から知らず識らずの間に、惡弊を助長して將來の成果を妨げ害ふのである。幼稚の腦髓に一度印象した事は終生拭ふことの出來ないものである。そこで此の點に就いて最も注目しなければならないのは、兒童の健全な先天的の資質を開發すると同時に、疵の多い病的資質を矯正し、併せて後天的の性格を養成する樣に仕向ける事が肝要である。さてその精神の健全か否かを知らうとするには先づ或る一つの新しい事柄に出遇つて、其をよくかみ砕いて自己が持つて居る舊知識と連絡する事の出來るやうに、沈靜で、これ等に對してよく注意して記憶する事、今一つは其の新知識を行爲に現はす事の出來る事、及び兒童の精神は常に平靜であり、活潑であり、而して一度心意に波動を起すことがあつても、すぐに以前の平靜の態度に立返る事の出來るものであれば、それが健全な精神を持つて居る確かな證據である。例へば何か一の遊戯中監督者が『お止しなさい』との一言の下に自からこれを制するだけの意志があつて、そして平靜な行爲をする事が出來るものは、皆健全な精神と見做してよろしいのである。この一例を標準として子供達の行爲を注意して、早くから良い習慣を附ける樣にするのが最要の手段である依つてこゝに兒童の性癖に就いて、若干の例を擧げて見やう。

愛情の過度より來る我儘

これは性行の善不善に係らず身體自然の活動と精神の快活とが、過度に高まつた時に、知らず識らずその行爲が粗漫となりその爲めに他に累を及ぼす樣になるのを言ふので、凡べて此の行爲は敎育の力で如何ともなるのであるから、若し右樣の行爲が目に觸れた場合には用捨なく嚴格に抑制して、物には制限があつて其れ以



上超ゆることは決して出來ないものであるといふ自制心を兒童の心に扶殖する樣に仕向るのが肝要です。よく世間にある例であるが、夫婦の中の一粒種で掌中の珠と愛でいつくしみ家内中寄つて集つて甘やかして、其の子供の言ふなり次第に育てあげられた兒童などによくさういふのがある。是等は自分の思ふ事は何でも通るものだといふことの觀念が幼ない頭腦へ深く印象されてゐるので、學齡に及んで學校へ通ふ樣になつても、自

分が一旦斯うと思つたことは、誰れのいふ事でも用ゐない、若しそれを『ならぬ』と叱れば泣き出して剛情を張り通して往々にして教師を困らせるのがある。

我儘と同じ樣な性癖高慢といふのがある、これは他人を卑み、自己を高くする、所謂生意氣で意張り散らすといふ事であるが、此の癖は上流社會や、富有な家庭の兒に多く見受ける、平常乳母や小間使などにちやほやされた結果、自然に思ひ上つて、世間の人はみんな自分の召使ひか何ぞの樣に思ふから生ずる行爲である、これを矯正するには、高慢心の昂つた時は故意と放任して置いて、一朝生意氣な風を言行に表した場合に、嚴しく窘めてやるのである、この場合には例へ目下の雇人などに對しても謝罪せしめる樣な所置を取つて、嚴しく戒愼せしむるのである、さうすると其の子供の心には平常目下とおもつて卑下してゐる奉公人にでも、謝罪まらねばならぬ樣な屈辱な、慚愧に堪へぬ程の苦痛を味はねばならぬといふほど、自分の誤謬を來した事を悟つて、一朝にして自分の迷ひを覺ますに至るのである。

欲望心の過度より來る强情

兒童の强情は世間ありふれた事で、大人や老人となつても尙なほらぬものですが、これは慾望の心にかられて前後を顧みず、無理やり自分の思ふ通りを行らうとして、長上や、他人の申すことなどは中々用ゐぬものであるけれど世間には、泣く子と地頭には勝たれぬものとして子供が剛情張り通す場合には親の方で氣根まけして、多くはその言ふがまゝにするのが例であるすると兒童は自分の慾望を充たし得たのを滿足して稍く元の機嫌に直るといふ樣な理であるから、こんな性癖は其の芽生の中に矯正しないと他日社會の人となつた時に、まけずぎらひの魂がかうじて理が非でも押し通して見たく、少しでも他人の意見に反抗して見なければ、自分の氣がすまぬと言ふ風になり、遂には圓滿な交際が結ばれないで、高慢心と同じ樣に、自我的になつて社會の凡てが氣に入らぬ爲めに、遂には厭世の

心を起すとか或は倫理にかなはぬ様な事を仕出來して其の了りを全くする事が出來なくなる様な結果にならぬとも限らないから、是等の癖は成るべく二葉の中に刈り取る工風をしなければならぬ。

無作法と神經過敏

來客の際に出しやばつてお饒舌をして、側に居る親達をはら〳〵させたり、冷汗を流させる様な事を臆面なしに言ふ子供をまゝ見受るが、一體兒童は自分の見聞した事の外に別段の考のないものであるから、周圍にある者は兒童の面前では、成るべく事實に深く立ち入つた話しはせぬ様に注意しなければならぬ、兒童には自他惡善の差別觀がないから、他の秘事を公然吹聽して思ひ設けぬ波瀾を引き起す様な事になります。ですから兒童の面前では成る可くこどもらしい無邪氣な話に止めたいものです、なほ一歩進めて來客のある席には決して子供を出さぬ習慣を作りたいものである。



次に兒童が心意に受ける刺激は極めて鋭敏なもので、そのために自他の別を失つて怒つたり、邪推をしたりするやうになる結果、他を怨むなど言ふ様な事になるから、この邊はよく愛情のやさし味を加へて、其の性向を寛ろげ、嚴酷な懲罰などは決して用ゐず物に對して忍耐力と自制心と他日同情の深い、高潔な人物を養ふて行つたならば、と爲す事が出來やう。

臆病と懶惰

尻込み、人見識り、などゝ言ふ樣な性向の兒童は、兎角物事に恐れを抱き、而して面と向つてはひどく臆して、狼狽して、羞恥んで、天眞爛漫な兒童らしい快活な動作が出來ませんから、凡べてが遲鈍に見えるのです、之には種々の原因もあらうが、多くは幼少の折に強く驚いたり、或は他から驚かされたり、或は屢々嚴罰に遇つて、全く精神が畏縮して、春の暖かい光りを受けて延び行し草木の芽が、急に嚴冬の霜雪に逢つて萎びて了ふ樣に感覺が鈍くなつたからです、斯ういふ子供は重に不具的家庭即ち繼母の手に育てられるとか、不幸な孤兒などに多い樣ですが、これを矯正するには先づ平常からつとめて恐怖心を去る工風をしなければならぬ、そして強く叱ることなどを避けて、常に春風に浴する氷雪が自然に解ける如く、專ら暖かな愛情を注ぎ、其心に安心と平和とを與へるやうにして、傍ら快活な動作を勸め、時折は優しい美しい談話を聞せたりして、事物に對して暖い同情を寄せさせる樣にして徐々に矯正して行つたならば、漸次に正しく美しく快活な兒童となす事が出來ませう。

これは勞力を厭ふ者、事に當つて緩慢なもの、性來の無頓着から物事に少しの趣味を有たぬ者、或は思想の作用が複雜に過ぎて疲れて了つた結果俗にいふ無精となつたものなどである。之等に對しては、兒童の心身の發達をよく見定め、なるべく規律的の習慣を養成すると同時に、不相當の學科の溫習や、其他の遊藝など身體に不適當な重荷を負はせぬやうにしなければなりませぬ。

それから又俗に蟲が好かぬなど申事は、大人にもままある事ですが、これは重に我儘から來るもので、殊に此の傾向は女の子に多い、何等の理由もなくつて、無暗に物を嫌ふ癖、即ち俗に毛嫌ひといふのである、これは誠によくないことで胸の狹い、偏屈者の行爲です、斯る性癖は又一方に愛憎の念の強い性癖を持つたもので、人としては決して良好の人とは申されませぬすべて子供は母親の感化を受けることが多いのですから、若の子供に、此の樣な傾向が現はれたならば母親

は萬事につけて注意をなし、自から狭隘とおもふ事が詞や動作に愛憎の差をお示しにならぬ樣願ひたい。



あつたら大に反省して度量を廣くし、物事に好惡の念を去る樣にし、と眉を顰められたりすることを愼んで。

早熟と嫉妬心

早熟とは年齢の割に大人びて、才智が優れて巧に言

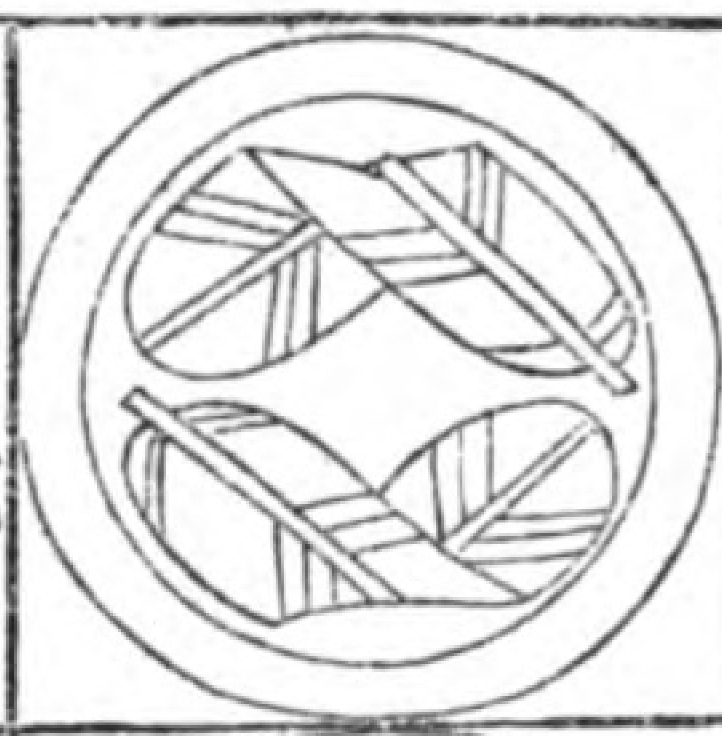
語を飾つて伶俐に見える樣な兒童を申ので、前の臆病から見ると良い傾向ではあるが、凡べて早熟と言ふ事は、已に不自然を意味して居るので、幼少から何か〻出來ると、親の慾目で、つまらぬ愛に溺れ、我が兒自慢に、賞められたさの一心から、難易の別なく、文字など習はせるのは能くあることで、心得違の甚だしいものである、これは畢竟、可愛我が子を、陷阱に導くやうなもので、古人の口ずさみにも、十歲で神童十五歲で才子、廿歲過ぐれば、唯の人といふが如く、結局不成熟に歸着するものである、此の樣な子供は室咲の花の樣で、得て夭死が多くあるから、なるべく物に刺戟させない樣にのんびりと育てなければならぬ。

猶又兒童は天性我儘で、利己的なものであるが、殊に幼稚の頃は自己といふ觀念の外、他を顧みるの念慮は少しもない、例へば自分の玩具は他に貸さないで、却つて他の物までも隨意に橫領する、そして他に與へる時は嫉妬心を起したり、また其の母が他の兒を抱く時は泣き叫び、二人一緒に抱いても承知しないといふやうに、嫉みの心を起すのであるが、この嫉妬や、猜忌やは畢竟競爭心であつて强ち惡い事でもないけれども、自分が別段勵みもしないで、漫りに他人の進步を嫉み猜むの心を催進するのは、宜しくない事です。そして此の情が向上て來ると、不平、不滿、惡意、敵視、密訴、陰險等のあらゆる惡德を發生する動機となるものであるから、此樣な傾向のある兒童に對してはなるべく愼重に取扱はねばならぬ。故にか〻る兒童との面前では他の兒童との比較をしたり、一方を貶斥して一方を賞贊し、又一方を憎んで一方を愛するやうな、偏頗の取扱を愼み、側ら他人の不幸、悲哀などに充分の同情を表さするやうに導かねばなりませぬ。

以上の癖は何れも有振れたものばかりで、親の眼には始終觸れて居る事であるが、已に其の有振れた癖が眼に馴れて多年の習慣となつてゐるから一寸した我儘や、强情や、虛言やは然程惡いこと〻思はないで、打捨て置く方が多い樣であるけれどもこれは決して等閑にならぬ事で、比喩にもある通り二葉にして剪らざれば斧を用ふるの悔をのこすものであるから、よく注意を怠つてはなりませぬ。

鷹羽の意匠

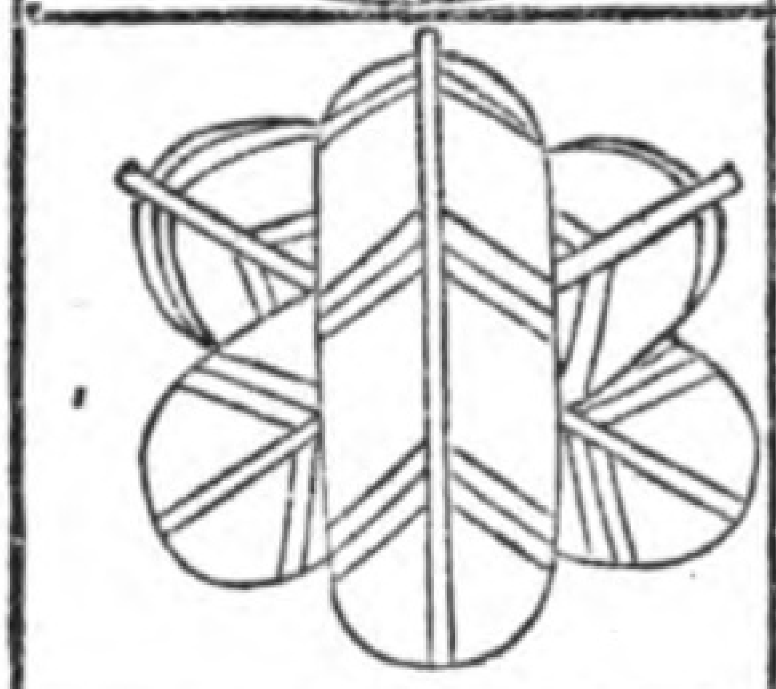

たかの羽てふ

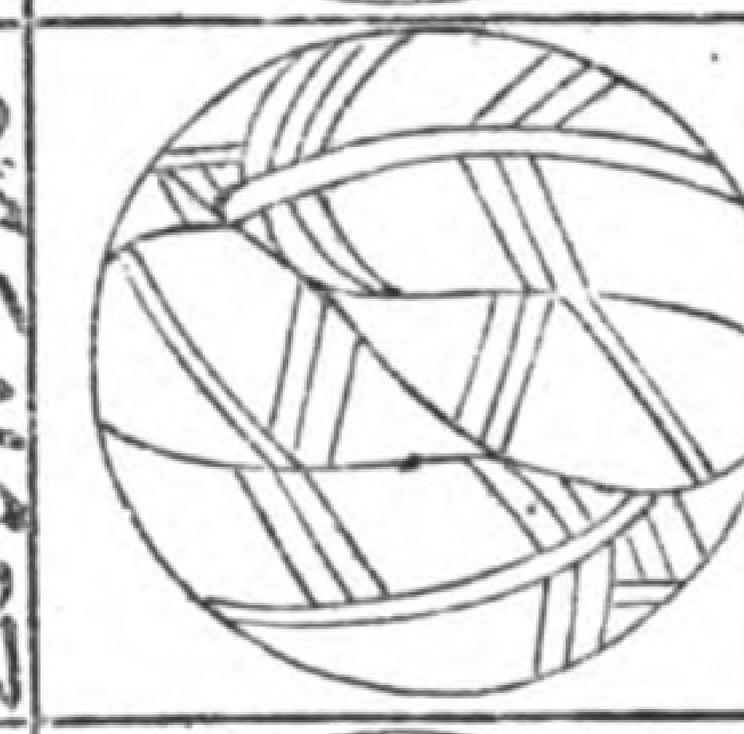

二枚折たかの羽

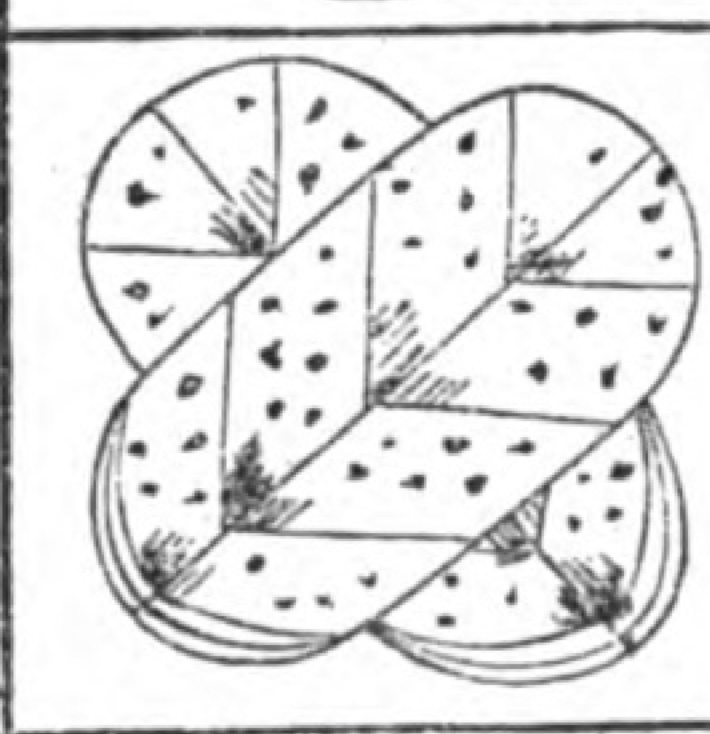

ふせんたかの羽

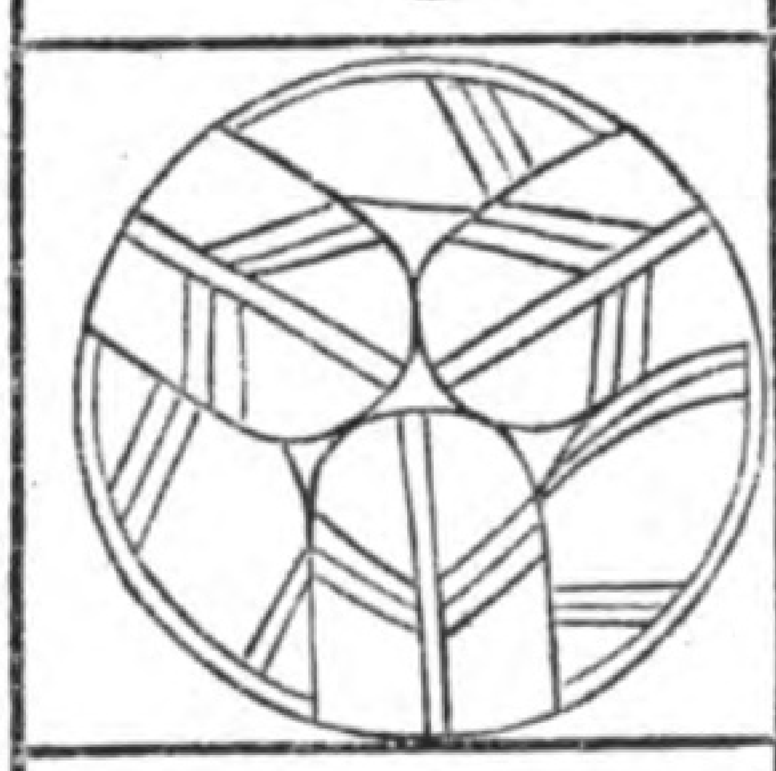

ふせんたかの羽


二夲たかの羽


重ね三枚たか

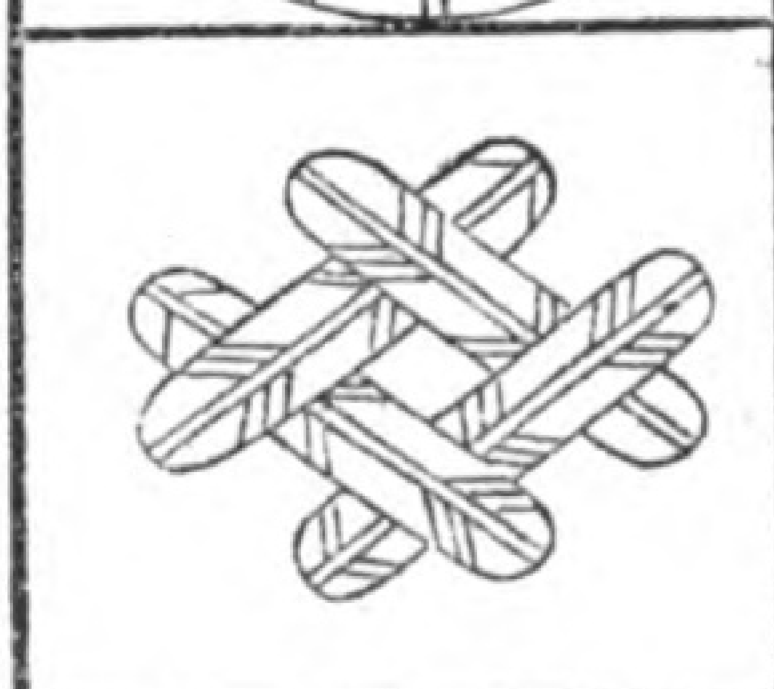

かさねたかの羽

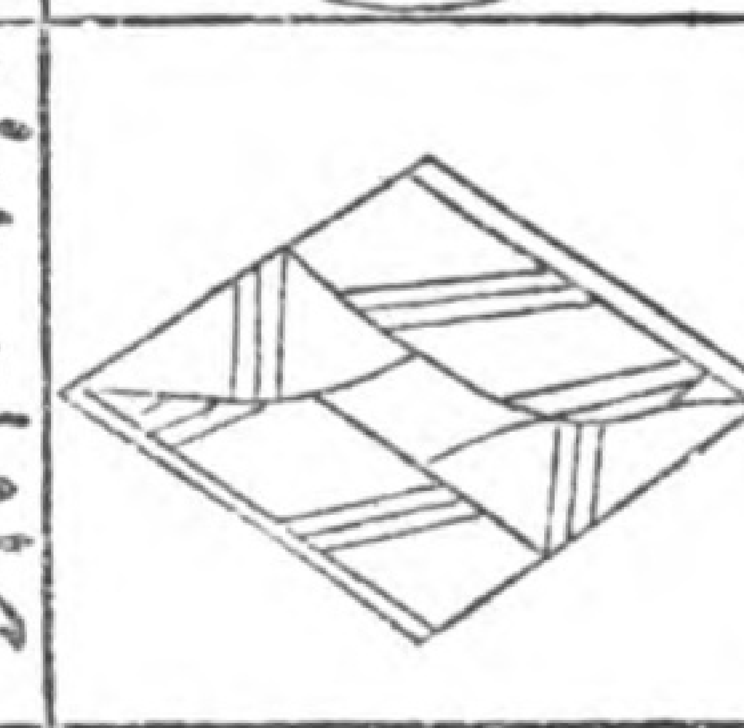

ちがひたかの羽

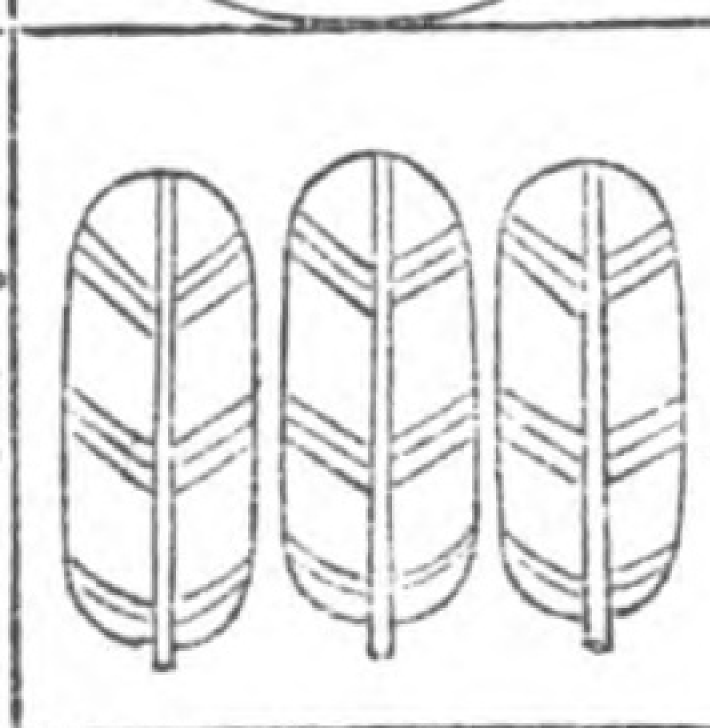

三枚くすしたか

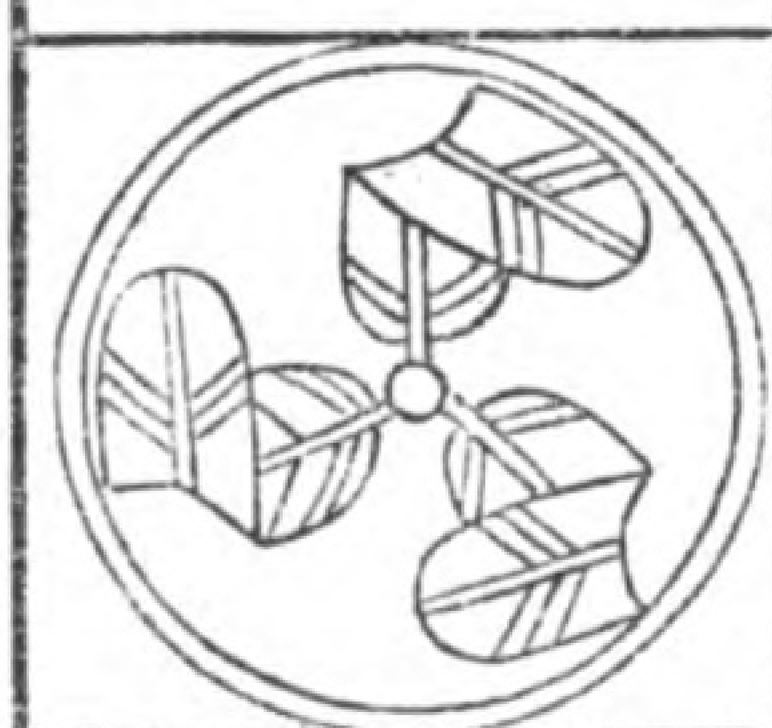

けんたかの羽

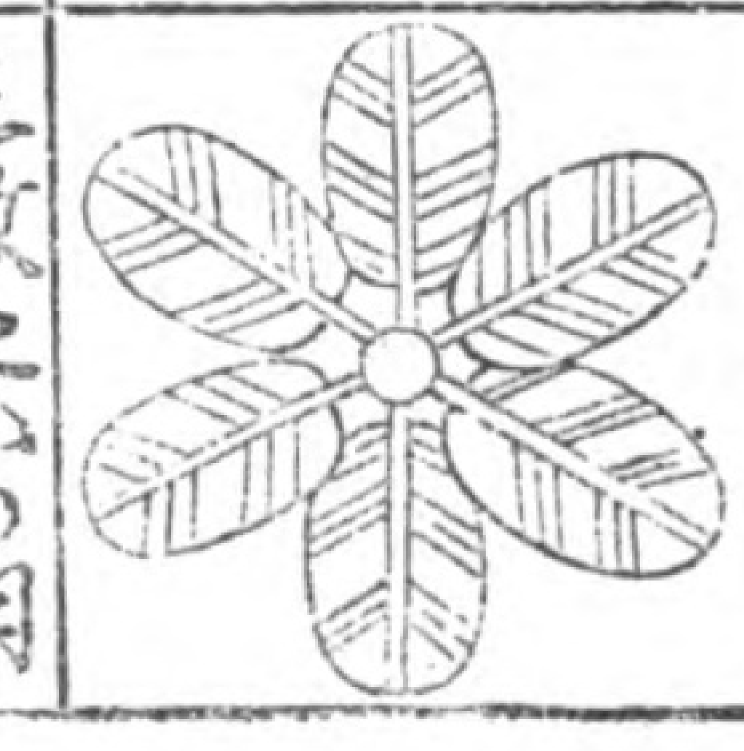

丸にちがひたか

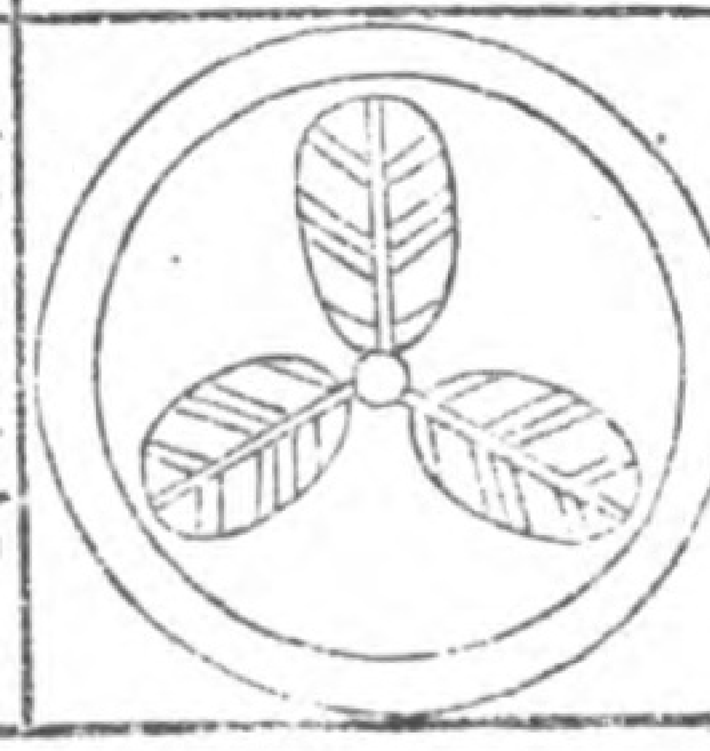

たかの羽井筒

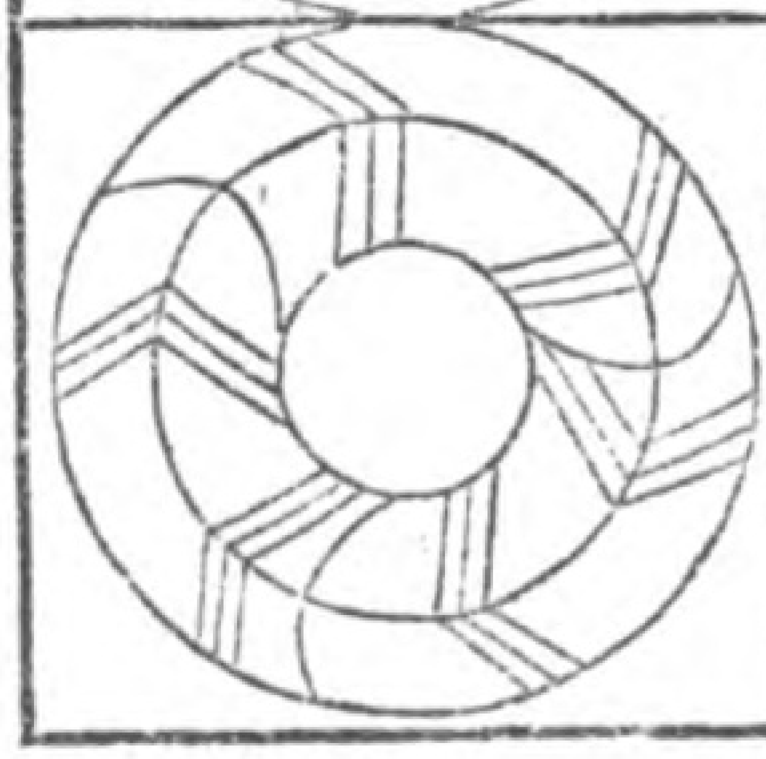

たかの羽菱


三夲立たか


三枚たかの羽


六枚たかの羽


三枚たかの羽


たかの羽蛇の目

六月の惣菜料理

お藷の小豆煮

皮をむきて、五分程の賽形に切りて水に放ち鍋引鍋に水と砂糖とを入れ、少しの鹽を加へて火にかけ、右のお藷を投れ蓋をふさずに、崩れぬやうに煮込み。別に小豆一升に砂糖百五十匁を混じて、潰し餡を拵へおき、右の甘藷と混す。

蓮根の白煮

主に五目鮓の料に供するもので、皮をむき水に放ちて灰汁をぬき、鍋に酢三勺程入れ、水中より取り出してうで。更に水で洗ひて、煠で湯を棄てたる鍋にて砂糖十五匁鹽二匁を加へ、前の蓮根を程よく煮付けて、適宜に庖刀す。

但し、煠で湯の分量は、大蓮根一本に水二升酢三勺なり、白く煠でるには、灰汁氣をぬく爲めに酢を入れ、又酸氣を嫌ふ故に、錫引き鍋にて煠でるがよし

百合の甘煮

百合根をよく／＼洗ひて、軟かに煠つたならば水を去り、水二杯砂糖一杯の分量で、蔽さる程に入れ、美濃にて蓋て烈火にかけ、百合根に小龜裂の生じたる時に弱火になし、煮汁のつまつた頃醬油をさし、おろして崩さぬやうに盛りて出す。

但し、煠でる時は百合根を上向となし、味を付ける時は下向にすればよし。

馬鈴薯粉ふき煮

一名ほいろとり

先づ小なるを擇りて、皮をむき水洗ひして、二十分間も煠で、軟かになりたれば湯を去り、直ぐに少しの鹽をまきて、火にかざしながらふり動かし、二三分間もすればよく水氣が切れて粉がふく。

小鯵の煮付

尾先のぎざ／＼及び鰓を去り、腹を出してよく洗ひ、敷笊に列べ、鍋に味淋二杯醬油一杯をさし、烈火にかけ沸えた時敷笊のまゝ魚を入れ、暫く煮ておろし、頭のとれぬやうに、盛りて出す。眼の白くなつたときは火の通つた徴候で味淋の代りに砂糖を入れてもよし。

鱚の品川煮

前の小鯵の如く煮て其れに小蝦など共に煮付けるなり。

章魚の櫻煮

新しく小なるものを、腹をぬき水にて洗ひ、よく／＼手にて粘氣を揉み洗ひて、足一本づゝに切り放ち、先の細き部分を切り去り、鐵鍋に入れ水を蔽さる程に入れ、少しの砂糖をつまみ込み、落ち蓋をなし、强き日にかけて沸騰させ十分に火の通つた頃、弱火にかけ三四十分も徐徐と煮込み煮汁の過半も煮つまつた頃、醬油をさし、すぐにおろして、更に適宜に切つて盛る

博文館創業廿五周年

今回本館が創業廿五周年を記念せんが爲に計畫せる七大叢書は咸な我が國文學の精髄と東洋文華の源泉たる不朽の名著とを網羅せるのみならず、泰西文壇の秀粋を拔き、當代に於ける碩學耆宿の愼重嚴密なる校訂、簡明懇切なる註解を加へ、又た專門大家の執筆に係る大叢書にして、第一期發行合せて六十卷、今や其計畫の大半を了して近く之を發售せんとす。若し夫れ用紙の精、印刷の鮮、內容の齊整、裝釘の瑰麗、特に其價格の至廉なるに至つては本館の特色として天下既に定評あり。本書出でて明治聖代の文運に貢献する所必ず偉大ならん。各叢書の編次書目、價格、發賣方法等の詳細は逐つて之を發表すべし。

東京 本町 博文館

校註 國文叢書	校註 漢文叢書
第一期發行	同上
拾貳册	拾貳册

內容

新鑄ポイント活字
嚴密正確の校訂
簡潔明快の註解
毎卷ふり假名附

記念出版豫告



本叢書出でて讀書家を惠被すると絶大ならむ。乞ふ刮目俟て

文藝叢書	近代西洋文藝叢書	校註和歌叢書	校註謡曲叢書	俳諧叢書
同上	同上	第一期發行		
拾貳册	拾貳册		拾貳册	

體裁

菊判總クロース
天金。金摺模様
装釘 中村不折 藤島武二 橋口五葉 意匠
紙數—八百頁乃至壹千二百頁

價格

一般讀書家の愛誦に供せんが爲め我が出版界に匹儔なき破天荒の低價を以て洽く江湖に推奨せんとす

幼年畫報第七巻第八號増刊……（六月十日發行）

オフネハギッチラコ

菊版美麗畫本
石版極彩色十六頁
活版二色刷十六頁
光澤寫眞版四頁
正價十錢 郵税五厘

○小波作 ○○○ 邦助畫○

狸の舟は、どろの舟、兎の舟は、木の舟で、海の中へと、漕ぎ出した、どろ舟沈む、其時に、兎は擢をふり上げて、狸の眉間を撲りつけ、とう〱殺してしまつたがなんで狸は殺された、なんで兎は殺したか、それには長いものがたり、さア〱一所にうたいましよ、涼しいお縁で、うたひましよ。

（附録）……●かへる車……●鯰の飛行機……

東京本町 博文館



立教中學校長 元田作之進君著

英作文の研究

世に英作文書は多いが何れも和文英譯式のもの計りで直に英作文の精髓を說いたものは一つもない。學生の英文に和臭が多くて文が延びぬ弊は實にこの和文英譯式の英作文が因を作して居る。本書は此弊を一掃する爲に編まれた作文本位の英文活法で、多年著者が實地に教授された結果の產物である。全篇章を設くる數十章、時間を言ひ現はす法、場所を言ひ現はす法、人事を云ひ現はす法、心事を云ひ現はす法等有ゆる人事の有ゆる語類と句法を多くの例文に依りて詳述し。加ふるに幾多の例題を挿んで飽く迄練習の功を積ましめんと勉めてある。滔々たる和文英譯の英作文に飽きたるものは本書の組織ある英文研究に依りて一日も早く英作文の堂に入ることが出來やう。

全一册四六判上製
紙數三百餘頁
正價六十五錢
郵稅八錢

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

文學博士 遠藤隆吉君著

學校の意味

學校の目的は性格の陶冶に在り。中學師範の學科は何れも性格を陶冶する所以にあらざるなく、何れも常識を修養する所以にあらざるなし。修身教科書は道德の概念と名稱とを與ふるに過ぎず。本書を讀む者は身學校に遊び種々の教師より各種の學科を學び以て常識を得ると同時に高尙なる性格を養ひ宇宙社會と親密なる關係を得たるが如き感あるべし。且つ教師は各自己の學科の如何に道德と關係するやを知り、父兄は子弟の學校に對する注意を聞くを得べし苟も學問に志あるもの學校に關係あるものは本書を讀むで以て圓滿の知識を養ふべきなり。

全一册四六判
總クロース上製
紙數四百五十餘頁
正價七十錢
郵稅八錢

東京日本橋本町 博文館 振替東京二四〇

女(わの七)

女(わの八)

蠑螺のかゝ煮

成るべく小さきものを、沸湯の中にて煤で、肉をぬき出し、すぐに水中に放ちて腸を去りよく洗ひ、成べく薄く切り、前の烏賊と同じやうにして煮るなり、

烏賊の旨煮

甲をはがして足をぬき、よく手にてすりながら水洗ひし、目笊にて水を切り、頭より皮をはがして適宜に切り、鍋に味淋醤油を等分に入れ火にかけ沸えたらば、烏賊を入れ、少しく鰹節をふり込み、よくかき延し、火方火の通つた時目笊に掬び上げ、殘りの汁をよく煮つめ、再び烏賊を入れてざつとかきまはしておろす、烏賊を煮るには決して蓋をせぬなり、

鰯の鹽燒

頭をもぎとり腸を出し、洗ひて目笊に上げ、水氣の斷れたる時に腹の方より手を入れて中骨をぬき、兩面に鹽をふりかけ、暫時して水で洗ひ、皮目の方を外にして中央よりおり串をさしこがさぬやうに兩面をやく、蘿蔔をおろして、ざつと水氣をしぼり、少し酢をまぜて 鰯に盛添へる、

時に皮目より脂肪がたれて、焦げる故に、團扇で向ふへ横に煽ぎながら燒なり、

伊勢蝦の鹽燒

沸湯にて伊勢蝦を煤で、よく洗ひて二つに割り鹽少しふりかけ、其まゝ醤油の中へ浸して、すぐに網にて燒き、また醤油を注ぎかけ、粉山椒をふりかけて供す、

烏賊の付燒

よく水にて洗ひ足をぬき、腹甲をさり皮をむきて醤油の中に浸し、暫して金串をさし強き火で兩面をやき、再び醤油をつけて、こげぬやうにやくなり、弱火ならば身がちぎれる故に、強き火をよしとす、

茄子のしぎやき

よく水洗ひして、前後を切り皮をむきて、五六分ほどの輪切になし、すぐ串にさし、よく煮立したる胡麻油を兩面にぬり、火に鐵架をかけ其上にのせて程よくやき、煉味噌を塗り、ざつと炙り串をぬきて、おろし柚をふりかけ皿に盛る、煉味噌の製法は、先づ味噌百匁に胡桃十粒の分量にて初め擂鉢にて、胡桃をすりつぶし味噌を入れて程よく擂り混ぜ、煮出を加へてどろりと溶め、裏漉して、ざつと火にかけてねる。

南瓜の田樂

よく笊で洗ひ、水氣をふきとり二分程の厚さに切り、細い串にさし、煮返したる胡麻油を兩面にぬり、烈火で燒き充分やけたら煉味噌をぬり、ざつとあぶりて串をぬき皿に盛る、味噌は初め、鹹味噌をよく擂り、適宜に砂糖を入れ、裏漉して一寸火にかけるなり、

胡瓜の浸し物

水洗ひして、小口よりうすく切り、鹽少しな

ふりかけて目笊にとり、暫時して水をかけ、水氣をさりて、生醤油に輪切の蕃椒を浸したものを注いで出す。

薇の浸し物

乾薇をよく水洗して、水より軟に煠で、目笊に上げ堅く水氣を絞り、煮出汁と少しの醤油にて、淡味に下煮をなし、再び目笊にとり、汁氣の斷れたる時、ときたる芥子を醤油で溶め右の薇をかきまぜて食するなり。

蓮根の更紗和

梅干を一夜水に浸け、一寸煠で種を去つて裏漉にかけ、鍋に同量の砂糖を入れて、かき廻しながらこげつかせぬやうに煉り、紫蘇の葉の鹽漬をよく洗ひて細かに切り、前の梅干の中に混ぜ、蓮根をよく下煮したるものと和へる。

鰯の鐵砲和

鐵砲和とは蕃椒味噌にて和へたるもので、鰯を三枚におとし、鹽を少しふりかけ、よく冷して鰯の汁をしぼり、適宜に切つて和へるなり、又細く刻だ蘿蔔を酢につけ、添へ合せてもよし。

むしり蝦、胡瓜もみ

何蝦にても沸立つた湯の中に入れて煠で、水に取て殻をはがして、細かにむしり、鹽を加へた酢の中につけ。後引き上げて胡瓜もみなどゝ付け合す。胡瓜もみは胡瓜の皮をむき二に割りて種を去り、うすく刻みて鹽をふりかけ、後ざつと水洗ひして堅くしぼり、酢の中に浸し、五六分間も經ればよく絞り、三杯酢をかける。

南瓜の胡麻酢かけ

五分程の賽形に切り、砂糖と鹽にて味を付け後よく冷し、どろ〳〵に胡麻油をこしらへ、少し酢を加へ、前の南瓜にかける。

このしろ甕酢

このしろを三枚におろしてよく骨を去り、細かに切りて酢の中に浸し、蓼の葉をよく洗ひて軸を去り、よく擂りそれを少しの飯粒を入れてどろ〳〵になし、裏ごしゝて右のこのしろとかきまぜて出す。

烏賊の五目蒸

何の烏賊にても甲と足とをぬき、沸湯にてざつと煠で、砂糖と醤油にて味を付け、いり豆腐を作り、其中に胡蘿蔔、蓮根、椎茸などを刻み込み、更に玉子をかきまぜ、前の烏賊の胴の中につめ込み、蒸籠に程よく列べてむして、小口より五分程の厚に切りて出す。

グリーン、ビーン

（豌ゑんどうスープ）

牛、挽き肉、四斤、水二升五合

グリーンビーン、二升五合、

豌ゑんどうを一時間煮て豌をとり出し、それより肉を入れて一時間半煮て、別鍋にこしとり、食する半時間前、ゑんどうの實を入れて煮て鹽胡椒を加へ、米粉をときまぜて之に入れ、スープ鉢に入れて出す。

ポテトー（スープ）

牛乳一升、バタ大さじ二杯、
大形芋、五個、パルスレー三茎程、
ヒージ　小さじ二杯、葱二個、
二重鍋に、ネギ、パルスレー、セージを入れて牛乳をあつくし、別に芋の皮をさり小さく切つて軟かに煮、つぶしてバタを交ぜて前に熱した乳を入れ、塩胡椒を入れてよく混ぜ、再び二重鍋に入れて熱するなり、

ロブスター、クロケツト

煠でたる蝦の肉を細末に切り、塩胡椒を入れ、量の四分の一程、パンの粉にしたものを交ぜ、バタ大さじ二杯を加へ、小さき細長の玉を作りて玉子の溶いた中に入れ、パン粉を付けて沸湯に入れ黄色に揚げる、

ゼリー、苺

よく洗ひ、水を苺のかぶさる位に入れて十分軟かに煮て、地の厚い晒木綿にて漉し下に器を置きて、液をたらさしめ、之に等分の砂糖を入て可成早く煮る、そして上に、浮いた泡をとりさり茶碗またはコップの如き物に入れて、凝固せしめ西洋紙を圓ろく切つて汁の上におき、尚、日本紙で大きな圓形を作り、玉子の白味で密閉す、

いちごジャム

蔕を去り、洗ひて鍋に入れかき廻しながら弱火で煮、よく煮えた頃、一斤に付き白砂糖百匁の割に入れ、四十分位煮てそのやゝ堅くなる頃におろす、之を罐詰にせば變味せず、

李のジャム

洗ひて水を入れてよく煮て笊でこし、皮と核を去り、之に菓肉と同量の砂糖を加へ、三四十分間煮る、

エツグ、サンドイツチ

パンを二分位の厚さに切り、湯煮せし雞卵の殻を去り、黄身と白身を別々にし、黄身のみを鉢に取りてアンチョビソースとよく〳〵混じ置きパセリの茎を去り、葉のみを取つて極めて細かにきざみ、それを布巾に包みかたく絞りてよく〳〵水氣を去り。パンの片面へ右の玉子を塗り、パセリをはら〳〵と少しふりかけたる上へパンを重ね又玉子を塗り、斯くして三四枚を重ねて、少しく壓をかけ置き後、適宜の大きさに切る。

ポーク、サンドイツチ

豚肉を大切れの儘テンパンに入れて天火にて蒸焼きにするか、又は五分位の厚さに切りてフライパンにて兩面より焼くかして、それを厚さ一分位にへぎ。次に芥子を鉢に入れ少しの水を加へてよく溶き、それにバタを入れてよくかきまはし、胡椒塩を入れて尚ほよくかきまはし置き。薄く切りたるパンを下に置き、ねりたる芥子をナイフにて塗り、其パンを二枚の間へ薄くへぎたる肉を挟み、暫らく輕き壓しをなし置きて後、周圍の堅き部分を切り捨てゝ適宜の四角形に切る。





女教師の天職

瑞枝

げに譬へば白絹の樣な、岩清水の樣な、清い美くしい物は子供の心、私は教へ子の無邪氣な擧動に言語に思はずも、お腹抱へる事や、涙落す事が度々あります。

○貧困兒童

貧困兒童には學用品の給與をして居ます。いくらなんでも「皆さんのお家は貧困だから、學用品を上げます」とは言はれないので「皆さんはよく學校に來て勉強しますから、お褒美に此品を上げます」と言つ安價い筆の一二本、半紙の二帖づゝ位を分配て遣ります。高學年は流石に給與られた理由を了解で、顔赧らめ袴の下袖の中などに隱して行きますが、一二學年になるともう大得意、友達に見せびらかして、

「よく勉強するつて先生にお褒美貰つたよ、お褒美貰つたよ、これ、これ」

鼻高々と嬉悦滿面に溢れて小躍して居る。

あゝ貧の悲慘を未だ知らぬ、彼等の心は哀れに美くしいものではありませんか。

○昔の解釋

尋常一學年の讀本に「ムカシアルトコロニ云々」と言ふのがあるのですが、

「昔とはいつの事でせう」發問ひますと、

「知つて居ます。」

勢込んで擧手たのは、一美といふ色の白い可愛らしい子、指名しますと、

それは先生の子供の頃です。」

まさか私が人魚を喰つた譯でもありますまいに、生れ來て茲に二十

年、十年を一昔とはいへ、尙々若い積りで居ますものを、まだ鮮明な記憶を存す幼時を永遠な過去の昔とは、少なからず悲觀しましたね。

○優しい心

學校から五六町南の道は、傾斜が急で每度荷車荷馬車が行き惱んで居ます。通り懸つた兒童は「それ」と皆路傍の芝生に荷物あづけて玉の樣な汗流し「えんや、〳〵」と押し上げます。此事は每朝私が目擊する處、かくてこそ修身敎授の甲斐はありと、淚の出る程嬉しく思ひます。

○用具の行衞

新入兒童の一人がシク〳〵泣きながら、廊下を彷徨いて頻りと何か搜して居る。

「貴女は何故泣くの」聞ひますと、

「わたしーわたし、荷物が紛失のですもの。」

しやくり上げた。見るとなんの事はない紫の風呂敷包は、右肩から斜に背中に負はされてあるのです。

「貴女の胸のところを御覽。」

包みの結び目に氣がつくと、

「あら！」

頓狂な聲を立てゝ、瞳をくろりとさせました。

其動作つたら今だに可笑しいのです。

○落第の詫び

○月○日成績發表のあつた日、三學年に及第りそこれた花子さんは、不合格と朱書した通信簿を抱へてすご〳〵と歸宅つて來ました。

お母さんから「花ちやん如何でしたの」ときかれて、

花さんは「わつと」泣き出し、

「母樣妾今後はなんでも母樣の仰しやる事よく服從てよ。どうか御免なさいね。」

母樣の御膝にうつ伏して、玉の樣な熱い泪を止めもなく流しました。

○先生になる法

校庭の柳の木蔭には、お下げ切り下げの五六人聚ひて會話今盛んに、

○「ねえ美いちやん、前の時間の先生の御話面白かつたわね。」

△「先生いくらでも御話知つて入らつしやるのね、ほんとに偉いわ。」

□「先生には如何してなられるのね。」

×「大きくなつて、先生になる學校に行くのですわ。」

○「あら、さうではないの妾知つて居てよ。それはね書籍喰べるのですつて、でも父樣が仰言つたは、○○の兄樣は先生になろつて、東京へいつて書籍みんな喰べなさつたのですつて」

△□×「まあ!!」

△「可笑しいわね。」

内助の龜鑑高橋東岡の妻

須藤南翠

（上）

城の馬場の月見の時分から、見るほどの人の口に、思はず甘い唾を釀させる、評判の柿の樹があつた。

それが、稻の穗が黄金色に傾いで、東の在所から、夜な〳〵樂車ばやしが聞える頃になると、珊瑚のやうに紅るんだのが、枝もたわゝに累々として熟して來るのだから、好な者には、所詮その塀外も通り切れたものではない。大小帶して一僕を供に伴れた、定番の士衆でも、前後を見廻して人目がないと思ふと、仲間に見張をさせ、塀の瓦に手をかけては、刀の鐺でたたき落して、密と袂へ潜ばせながら、突袖をして駈出すことも珍らしくはない。況て食指の動くものには、何でも手を出さずには承知の出來ぬ若衆や、自他の辨別もなく、唯だ見るものゝ欲い兒童等は、來る秋毎に人を嘲るやうな土塀の隔を睨みつけ、何れだけ劫を煮して、この一本の御所柿を呪つたであらう。

呪はれた御所柿は、萬人の垂涎を肥料として、年々に枝が張つて來る。果實の通病とする生り年、休み年は、この御所柿には見ることがなく、來る秋も〳〵、紅々と生り榮えて、その夕榮えの色の麗はしさは、迚も壽法寺の紅葉などの及ぶものではない。土地の人は、口に味はふことの出來ぬ名果を、目に賞でさせて、これを東の町の名物として珍重した。その頃高橋の御所柿といへば、森の宮の秋を飾る名樹として、大阪に聞えたものであつた。

今の主人は、名を高橋作左衛門至時といつて、御定番の同心である。父元亮の譲りを受けて、日々御城へ

詰めてはゐるが、固より小祿小身の上に天滿同心などのやうに、町方の勤務と違つて、定まつた御扶持方の外には、少しも餘祿といふものがないので、生計の苦しい事は、なか〳〵傍で觀るやうなものではない。でも、苟にも兩刀を帶して、四民の上に立つからには、當然その品性も修めねばならぬ。それだけの威儀も整へねばならぬ。假令極内で何か内職を稼ぐにしても、收入本位に何でもござれと、手を擴げる理には行かない。他日それが公けに聞えても、更に恥かしくない。條理の整然



と立つた事でなければならぬ。殊に作左衛門は自ら標致する所が高く、同僚中にも類のない學問好きで、自分は專心專意、天文曆算の道を研究して、傍目も觸らずに修業してゐるので所詮公務の餘暇を偸んで、賃仕事に氣根を凝らし、些とでも生計の助けをしやうといふ考へも浮ばず、假令また心に浮んだとしても、それが爲に天文曆算の研究を廢すやうなそんな、小身根性の作左衛門ではなかつた。

夫だけでも、高橋の臺所の裕かでない上に、新たに父を喪つた費用やら家督相續の披露の失費やらで、全く行き塞つ

たやうな窮困に陥つた。それでゐながら、作左衛門は暇さへあれば、其の師麻田剛立の許に通つて、天文學に沒頭してゐる。自分が道の爲めに食を忘れるばかりではない。妻にも子にも、饑と寒とが迫つてゐるのをも、一切忘れ果てたやうに、學業に熱中してゐた。

作左衛門が父の後を相續して、家の職を繼いだのは、寛政六年(一說に七年)の事で、作左衛門は三十一歳であつた。一家は老母と、妻のお濟と、長男の作之助とそれに下女下男の六人ぐらしで、小身には手張た家內であつたが、作之助はもう十歳になつて、老母の手がそれに引るといふ年でもないので、老母は昔から仕熟れた唐弓弦を製して、それを玉造の問屋へ遣つては、聊かの賃金に代ることを怠たらない。下女といふは名ばかりで、河內の出入の百姓から頼まれた、ほんの行儀見習の鹽踏奉公であるから、お濟はこれに臺所をうち任せて、專心に內職に就くことを許されなかつた。朝にも晚にも足手纒ひのやうな小女を相手に、食物拵へから拭掃除、据風呂の加減までも氣を配つて、僅少の時間を見付けては、內職を手傳つてゐた。夫でも家內中の洗濯やら、張物やら、裁縫やら、時々に手が引けるので、毎に老母ばかりを內職に勞らせるのを口惜んで、夜になると、自ら老母の肩腰を揉むことを、切めてもの報恩として、是ばかりは一晩も怠らなかつた。

屋敷は左まで廣い地面ではないが、建家が割合に小さいので、汁の實くらゐの青い物を作る場所はあつた。兩隣の主人達は、御番から下ると、そのまゝ直に袢纒股引に更ためて、鍬を提げて舍園を耕へすのであるが、作左衛門は、爾いふ時間があれば、有利に學問に流用するので、高橋では、舍園は一切仲間の仕事であつた。で、是れとても別に副食用の費を減ずる補けにはならなかつた。

斯いふ風に種々な事情の爲めに、他の同輩にも倍して、生計に不如意である高橋の家にも時に內職以上の收入を得て、一時の窮を濟はれる事があつた。それは森の宮の名木と持はやされる、有名な御所柹である。

この柿の木は、俸祿以外に高橋を益する無二の寶であつた。家事に冷淡な作左衛門も、この柿の花を着ける頃から、常に注意を拂つて、花落の漸く固く結實する時分には、日々の天候まで氣にしては、人の力に及ぶ限りを盡して風災雨害の豫防を講ずるのであつた。斯うして丹精を盡す爲か、他の柿の生りの惡い年でも、この柿ばかりは鈴生になる、殊に休み年は柿の價も高いので、買人は漸々に糶上げて、高橋には豫定以上の收入を増させるのである作左衛門もこの柿ばかりは、自家の生命のやうに、愛しもし、護りもして、それが紅るむ頃になると、もう作之助さへ樹の周圍へ立ち寄ることを許さない。



況て今年は他の柿の休み年であるのに高橋の御所柿は、去年にも倍して麗はしく生つてゐる。作左衛門は晝のうちこそ、仲間に番をさせて置くが、夜に入つてはもう仲間任せにはして置かぬ。秋の夜の星辰は、天文家の唯一の研究資料であるから、天體觀測も一つの課業であらうが、作左衛門は毎晩この柿を守護して居て時にはまんぢりともせずに曉を迎ふることがある。

この柿に就て強て病ひを求めると、他の同じ種類よりも熟し方が晩くつて、名月にはまだ御所柿獨特の澁味が脱けぬのである。それだ

けに永く人をけなるがらせて、造らずともの罪惡を作るのであつた。

澁の脱けかける頃になると、八百屋の出入が繁くなる。すると、柿の樹は大きな網に包まれて、烏の嘴の襲撃に備へるのであつた。是れを見ると、兒童の眼は非常に鋭敏になつて、隙を狙つては叉竿を飛して挾まうとする。其處いらの若衆は、肩車に乘つて枝毎捥がうとする。往來の商人が天秤棒を掉り廻す。智慧のないのが石礫を投げる。下から狙ふ羽のない烏が、逐つても／＼煩さく附け纏ふ。

三日のうちには、買方の價が極るといふ時であつた。作左衛門は定例の宿直に當つたので、是非一夜を城中で明さねばならぬ。玄關先で隻脚雪踏に突つかけながら、

「明日は明番だから巳刻には退下る。それまでの處、柿を確と頼んだぞ」

お清のそれを了承するのを見て、作左衛門は出勤した。網の奥から麗はしく輝やく御所柿は、朝日を浴びて紅の色が火のやうに燃えてゐる。

（中）

亥下刻の拆木が西の町の角に消えた。お清は庭へ出て柿の木を巡見つたが、何處にこれといふ異狀もない。尚ほ裏木戸から往來に出て、塀外をも一巡したが、臥待過た宵闇の空は、銀河ばかり南に流れて、何處に町の灯も映さぬのであつた。杉山あたりに遠吠する犬の聲は聞えても、人は皆な夢路に入つて、巷を辿る者もない。お清は安心して足を回した。

少時く身體を寛げるため、帶も解かずに蚊帳の裡に橫はつたが、心は更に睡つては居らぬけれども目は流石に、倦怠くなつて來た。唯だうと／＼としてゐるうちに、胸に盤石が落下たと見て、愕然として飛起きた。と、裏通りの方に當つて、頻りに吠る犬の聲が、正しく異變を報ずるやうであつた。お清は嚴と帶を締めて、戒刀を帶ながら、手逸く弓張提灯に火をうつして、急いで裏の塀外に馳け出した。而て左手に高く提灯を揭

げて、彼方の闇を照して見た時、殆ど袖の下を潜るばかりにして、身を斜めにして逋去つた人があつた。お清はそれを見究めるべく、一步踏み出すと、其處には漆をかけたやうな、紅い御所柿の果が、幾つともなく轉つてゐた。お清は提灯をさし擧げて高い柿の梢を仰いだ。柿は甚だしく荒されてゐる。只だ果實はかり落したものでなく、大きな枝をも折り取つた形跡がある。この柿は我が家の寶である。良人が第二の生命である。殊に御出勤の際までも、呉々も御賴みなされたのに、今夜に限つてこの狼藉、いかに之が申し開きが出來やうぞ。



切ては盜んだ本人でも捕へたら、また身の明りの立てやうもあらうものを、夫さへも取り遁しては、益過誤を重ねるといふもの、米藏は何うしたであらう、仲間部屋に寢て居はせまいか、二人が二人番をせずに居るとあつては全く身の懈怠の罪である。良人の怒りを畏れるよりも我が身の不覺が口惜いと、心を責めて悔んでゐた。犬の聲がまた發つて、闇の底から仲間の米藏が浮き出した。見ると、小鬢から血がたら〳〵と流れてゐる。捲り手をした二の腕にも、慥に血の浸染だ箇所がある。それにも屈せず米藏は一人の若者の小腕をひつ掴んで、無手と其處へ引据ゑるのであつた。

「奥樣、殘念でござります。盗られました。」

米藏は熱い涙をほた〳〵と垂らして、自分が廻つて來た時の光景を語つた。若衆の間には、豫々謀し合せてあつたと見えて、今夜こゝへ集まつたのは、十四五人には下るまい。梯子を準備して樹に登つて、大袋に一杯詰めた上に、西にさし出た枝を折つた處へ、米藏が巡つて來て、忽ち一大格鬪を生じたが、衆寡敵せず、米藏は散々に打擲せられて、此處に投倒されたのであつた。それにも屈せず跡を追つて遂に遁げ後れたこの男を取押へ、提灯の火光に勇氣十倍して、彼を引立て還つたのであつた。

「此野郎、旦那の御退下まで、柿の樹へ縛り着けときませう。」

米藏は忌々しさうに、腕を捻て大地へ壓倒すと、彼は細い哀れな聲を出して、

「親方、御免なすつて下さい。もう二度と致しません」と言つて泣き出した。

お清が提灯に照らして顔を見るとそれは、或花園の伜であつた。

「米藏、もうお放し、高が柿盗人ではないか、人の圃の花を折つたのと同じ事だ。もう宜しいから返してお上げなさい。」

お清は斯う言つて提灯を退けた。米藏は恐らく面を膨らしたであらう、何かぐず〳〵呟きながら、

「今度來て見ろ、活けては置かねえぞ」と、手荒く突つ放した。

顔を見られたと思つたゝめか、夫とも能く能く嬉しかつたゝめか、花造の伜はお清の前へ來て、大地に手を突いて謝罪つた。米藏は幾顆となく散亂つてゐる落柿を拾ひながら、

「百文に幾顆つて買るものを、眞個に吝嗇た奴等だ。――勿體ない〳〵」と言ひ〳〵掻き集めてゐた。

花造の伜がすご〳〵歸つて行く後姿を眺めて、お清は深く思案に沈んでゐた。米藏が一旦屋敷の内へ歸つて、籃を持て來て柿の實を取り入れるまでも、凝と默して立つてゐた。米藏は主婦の手から提灯を借りて、

落柿を剩さず收めた上で、それを運び入れやうとすると、お清は急に呼留めた。

「お前もうお寢み」

「何と仰しやります、奥様」

米藏は主婦の意を度りかねて、訝かしさうに首を傾けた。

「怪我をしてるから、夜明の風に觸つては良くない。後は私に考へがあるから、關はないで、創痍を洗つて寢ておしまひ。」

凛とした聲の奥には、慈悲の潤ひが、直に心に融け込むのであつた。米藏はこの失策を主婦に嫁して、自分の安穏を計るのは、心苦しいと思はないではなかつたが、主婦の命にも背きかねて、唯々として其處を去つた。



獨り後に留つたお清は、若衆等の報復に來るのを待つと、徐ろに其の非を諭し試みやうと考へながら、半時ばかり忍んで注意してゐたが、其のうちに生駒山の巓が天と分れて子二つの月が皓々とさし昇つたので、此上は再び彼等の襲ひ來る事はあるまいと考へて、靜かに我が臥床に就たのであつた。

（下）

巳刻のお太鼓が寥々と響きわたると、腰掛に控へてゐた米藏の胸には、八寸釘を打ち込まれたるやうに、痛く〳〵感へるのであつたが、退下つて來た作左衛門には、何處に變つた色とては見えなか

つた。

仲秋の日を天邊に受けながら、玉造口の御櫓を後に見て、森の宮西の町を右に折れると、其處らの靑い茂樹の間から、樹間の紅葉のやうに見えるのが、高橋の御所柿なのだ。作左衛門は遠く望む快感を抑へかねて、首を擧げて心あてに望み見た。蹺足ても仰ぎ見た。けれども遙かに主人を迎へ貌なる、强い紅の色はなかつた。掩ふものもない程の火のやうな柿の紅を、俄かに遮る常磐樹の栽ゑられたとも思はれぬのに、我が家の唐錦の、更にその文をも見せぬのは、いかにも心得難い現象ではないか。作左衛門は訝りながら後を振回つた。

米藏の眼がその眼と合した時、彼ははつと面を伏せて、蒼白たる顏色を覆つた。作左衛門は流石に沈着のない我が心を、仲間風情に笑はれるのが愧かしさに、そのまゝ足を速めて我が家に歸つたのである。

肅しやかに出迎へたお淸に刀を渡したまゝ、奥へ行つて老母の機嫌を伺つた。而て足を座敷の緣側に轉じて、庭前を一見するや、作左衛門の面色はさつと變つて、額に靑い脈が堆かく現はれた。光らした兩眼には血紅を彩つた。眉が吊上つてぴり〳〵と顫えると同時に、炎のやうな叫びが洩れた。

「淸、淸、淸！」

潔よい返辭とゝもに、お淸は良人の前へ來て、慇懃に手を突いた。

「お召しでございますか」

「柿は何うした？」

作左衛門の力をこめて指す方には、さしも名物の聞えの高かつた彼の御所柿は、更に影も形もなくなつてゐた。

「今朝ほど伐らせましてございます」

お淸の聲は靜肅であつた。語氣にも動作にも、更に惡びれた調子は見えなかつた。

意外な返辭を平然として聽かされたので、作左衛門はひたと呆れて、激しに激した氣を挫かれたやうに、唯だ目を瞠つて吾が妻の面を瞶めてゐた。

『お褒に與る積りで致しましたが、御意に愜ひませんでござりますか』

莞爾として見上げた妻の容子を見ると、作左衛門も怒聲を發する不謹慎に思ひ至つて、そのまゝ其處に着坐した。

『思ひ切つた英斷を行つたものぢや。孰れそれには明白な仔細があらう。併しそれを聽く前に、言て置く一義がある』

斯言つて膝を正しく向け更した。

『此柿は世間に知られてゐる通り、高橋の生計を助ける唯一の資産ぢや、夫が爲に嚴しく言付て、嚴重に警護をさせ、近所の若者や兒童等にまで、吝嗇者



と惡口されても、少しも厭はぬのかと思ふであらうが、作左衛門いかに小祿小身とはいへ、まだ夫までに微祿に致さぬ。此柿の樹は祖父上の御丹精で、大和の御所から良い種をお移しなされ、子孫の爲にと御遺し下されたのぢや。いかにも祖父上の御先見に差はず、年年美事な實を結んで、小身の竈を潤すこと、偏に祖父上御慈愛の餘慶ではあるまいか。さればこそ、家事にも疎い此方ながら、其高恩を思ふが故に、あの柿の爲には夜を寢ぬほどの苦心をも致したのである。利慾のためでない事は、是にて合點が參つたであらう。』

「御祖父様の御慈愛、承はりまして感涙に咽びます

る。其御慈愛の根を斷て、彼の通り伐採らせました私は、重々の不孝者、何卒御存分に遊して下さりませ」

お清の態度は少しも取亂した所はなかつた。作左衛門は徐ろに目を瞑りて、

「いか程大切な柿であらうとも、非情の草木のために、妻の仕置は得致さぬ。唯だ一本の柿の木ゆゑに、是まで人の怨みを買ふたのを、其方は定めし口惜く思つたであらうな」

「隣家の富貴を羨むやうな、怨言は厭ひませぬが、あの柿のあるが爲に、無用に御心をお費し遊す、所夫の將來を思ひまして、後の患ひの遺らぬやう、伐り棄てさせてござります」

「何といふ。此方の爲と申すか」

作左衛門は目を開いて、儼然なつてお清に對した。

「私の感違ひかは存じませんが、所夫はゆく／＼天文學にて、御立身遊ばすお志ではござりませぬか」

お清は靜かに面を擡げた。而て莞爾として默頭く所夫を見るや、澄みわたつた兩眼からは、水晶のやうな涙が零れた。

「差出がましい御詫もござりませうかと、差控へては居りましたが、所夫の道の師とお仰ぎなさるゝ麻田先生の處へは、長堀の質屋の主人とかで、十一屋五郎兵衛と申す者が伺ひまするか」

「五郎兵衛は性來の天文學者で、町人には稀らしい篤學な男ぢや、今年三十九歲、近代の名家大人で五郎兵衛を知らぬ者はない。」

「定めて學問も美事な出來でござりませうな。」

「麻田の高才逸足といへば、先づ五郎兵衛に續いて、桝屋小右衛門かな」

「夫が中井の孔明とか申して、渡邊筋の御用達衆でござりまするか」

「爾うさ、もはや四十四歲に相成るが自ら山片蟠桃と號して、純然たる讀書生ぢや」

「夫等は孰れも町人でござります。御所柿の夜番をせねば、生計に餘裕の出來ぬなどしがない身上ではござりますまい、所夫樣は公義お士、假令家貧しうして足

らぬがちに任せばとて、一旦志を立て學問を遊す上は、それを以て天下にお立ち遊ばさねばなりませぬ。取も直さず天文學の御修行は、所夫御一生の御勤めでございまして、金と閑とのあるに任せて、道樂にする町人の學問とは、等し並には申さません。さすれば、如何御難儀仕さうとも、一歩たりとも彼等に先へ出られては、御一分は立ちますまいに、此頃の御有樣、唯だ一本の柿の木に、秋の長夜をお費し遊ばして、何となく御志の弛緩たるやう、憚りながら見上げました。噫！　あはれ此の柿の木さへなかつたら、些少の利に御心は費えまいもの、家のためには實の樹であらうとも、所夫の爲には妨げとなるこの柿、只一思ひに根より斷ち切らば、所夫の御心は天文に專らになつて頓ては御身を興し給ふ慶びもございませうと、敢果ない女の猿智慧にてさて斯やうには致させましてござりまする。御意に違はゞ如何やうにも……」

情を盡し理を盡して、お清は諄々として懷抱を說くのであつた。

作左衛門は默して傾聽するのみであつたが、頓て身を起して刀を帶した。母にさへも告るに遑のないほ



どに、急ぎに急いで麻田の門に走るのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

萬人の目をも口をも怨ませた高橋の御所柿は、全く跡を大阪に斷つて、其の屋敷には他の同心が住む事になつた。柿を失つた大阪は、その柿の主をも併せ失つて、却つて天文學上榮譽ある芳跡を留めたのである。

作左衛門はお濟の苦諫に激勵せられて、偉大の努力を天文に費やし、翌寛政七年正月元日の日蝕を測定し得なかつた。實暦改定暦の誤算を發見するや、其の暦法の缺點を論じて、改暦の必要を建言した。萬人の目睹した日蝕の、暦面になかつた程、適切の證據はないので、幕府も遂に改暦の必要を認めて、麻田剛立を徵したのである。麻田は固くこの聘を辭して、代りに高橋作左衛門を推薦した。是に於て作左衛門は、十一屋五郎兵衛を薦めて、相携へて江戸に出發した。寛政九年の改定新暦は、實にこの兩人が努力の結晶であつた。

高橋作左衛門は、身大阪城附の定番同心から一足飛に幕府の天文方に立身した。十一屋五郎兵衛は、素町人より一躍して其の下役となり、帶刀を許されて、姓名を間大業と改めた。その出立點を顧みると、唯だお濟の至情の激發して、進んで一本の柿の木を伐らしめた。聖い方寸の勇斷であつた。

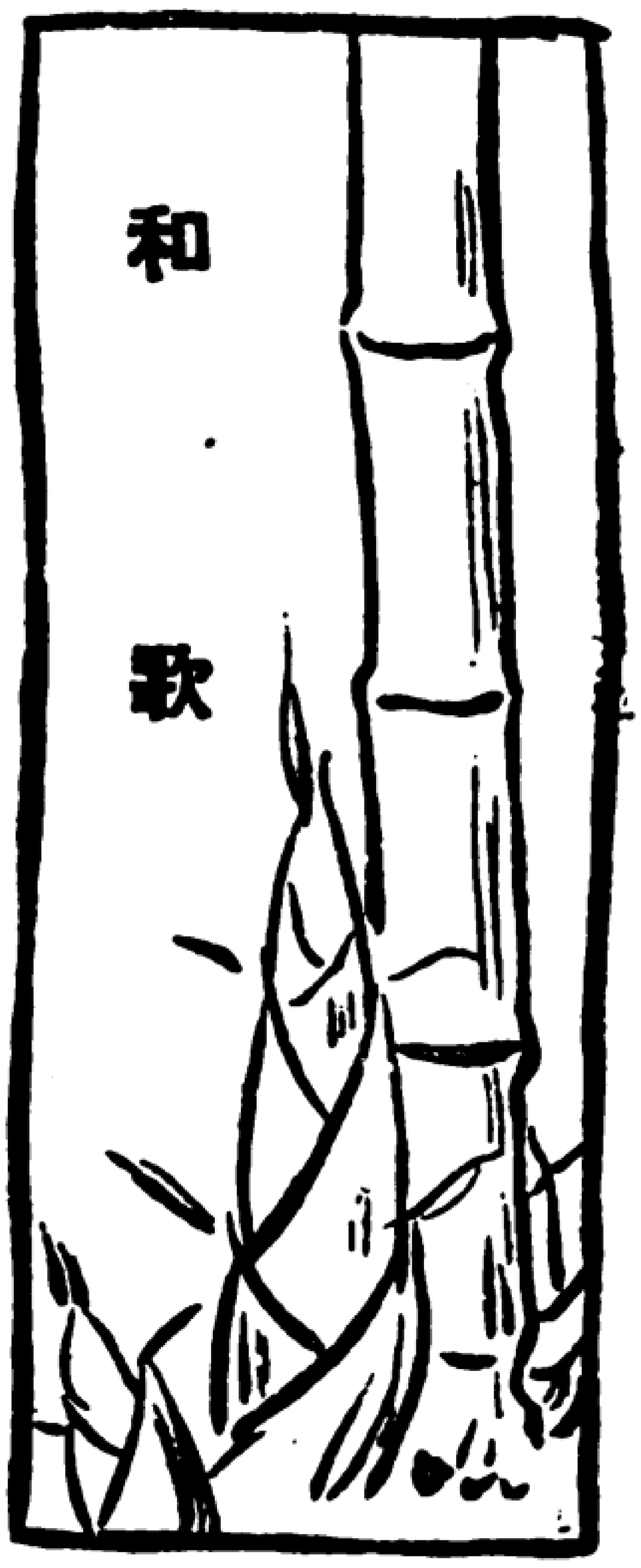
この高橋作左衛門は、後年その門より日本實測地圖の創製者伊能忠敬を出したる、東岡先生その人である。

紐育の盛觀

紐育市は凡ての交通機關を運轉して交通の便を計つてゐる。高架線は市内の有力なる線にて四線に分れ、地下線も同様である。鐵道汽車もある。自轉車は盛んである。電車は市の東西南北に蛛の巣を張つたやうにある。先年地下線を設計された時は、誰れも手を出す者がなかつたから、市が工事を起して落成と共に或る私立會社に貸し與へた。當時の考では、市の交通機關は高架線や電車があれば地下線に乘る人はなからうと思ふたのであるが、開通後は滿員々々で、以前の設計は小にして實用に不足。そこで直に地下線の各停車場を擴張して、十臺のボギー車を連絡して一分と四十五秒間毎に運轉を初むる事にした。其の上に急行車を走らして居るが、乘客は常に溢れて居る有様で、更に擴張しなければならぬといふ。

待つことのあり紫陽花の曇る頃





一等

とぼ〳〵と狂女が歩む廢驛の灯ともし頃をかはほりの飛ぶ　小石川　下山ゆき子

評　狂女、廢驛、黄昏、蝙蝠、何等暗澹の景ぞ。何等悽慘の景ぞ。

二等

ふと淡く君の在すらむ匂ひして櫻散る夜を恨みかぞへぬ　大阪　金田初子

評　君の在すらむ匂ひといふが、取分け耳新しく聞こゆ。

二等

水滑るかけひの音のとだえしは白き椿の月に落ちてか　小石川　妹尾こみね

評　筧の水のとだえしより、白椿の月に落ちたる上に想到するなど眞に詩美の掴み所を知るものと謂ふべし。作家の宜しく悟入すべき所。

三等

風もあらでうごく柳の綠見れば名にいひ知らぬ人や待つらむ　米國　しのぶ子

評　情趣共に饒。

三等

春の夜の薄月ながら小雨して上野の鐘の音も朧なり　下谷　高橋ふみ子

評　美はしき歌。

三等

蟒の息吹のごとくなまぐさき風吹く夜の南國の街　茨城　中村たけえ

評　蟒の息吹とは、形容し得て、何等の奇喩ぞ。

秀逸

伽羅こめし寄うすものゝ公達の忍び寄るごと初夏來る　大久保　夏の花

評　また形容の奇拔なるもの。

新嫁はまだ夢にありはぢらひの色のやうなる緋のてがらして　香川縣　渡邊さわ子

評　新嫁を寫して、躍如たり。

○　　　　　　　　　釧路　中島つま

吐き捨つる汽車の烟の遠引きて十勝十里の岡雨に暮る

評　壯觀。

○　　　　　　　　　久留米　有田百々代

南海の小島に去にて我れ死なむ梨の花散る春の月夜に

評　圓位上人の物ずきにも似たらむかし。

○　　　　　　　　　函館　藤本鳥羽子

散る花を袂にうけて少女子は蝶の臥床になさんとすらむ

評　蝶の臥床といふが面白し。

○　　　　　　　　　群馬縣　高橋涼風

花の上に胡蝶となりてねし夢の覺めて青葉のしげる頃かな

評　用調の流麗を取る。

○　　　　　　　　　成田町　櫻井米子

二人して摘みしすみれの花束に眠る胡蝶の何夢むらむ

評　二人しての語ありて、すなはち陳ならず。

○　　　　　　　　　大坂　紫子

鯉のぼり指さしながら笑むちごに頬ずりすなる母うら若き

評　光景亦可憐。

○　　　　　　　　　和歌山　紫烟子

うつし植ゑし庭の薫の色あせて我身に似たる春雨の晩る

評　我身に似たるの形容妙。

○　　　　　　　　　下谷　曲淵なほみ子

我とても乙女のたぐひ蜜よりも甘き涙は持ちけるを

評　たぐひの字面白し。

佳作

○　　　　　　　　　下關　倭文子

船一つこせばわが家とはしたなく心おのゝく新妻にして

○　　　　　　　　　神戸　沼本いは子

うしひきてかへるわらべの歌ほそし夕月あはき川添の道

○　　　　　　　　　大阪　涼子

吹く風にやぶられまじと胸抱きぬ千重にたゝみしわが秘ごとを

○　　　　　　　　　下關　山本芳子

高殿に白き絹裁つ君が頬を染めて薔薇の匂ふ夕ぐれ

○　　　　　　　　　神戸　大川小枝

笑もなく悲もなく其日／＼唯ならはしに生ろ身あはれ

○　　　　　　　　　下谷　大上菊子

切られたる老木の株の並びたる悲しき山に五月雨の降る

○　　　　　　　　　麹町　羽田豊子

いつまでもなとめ心はうせれともふさはす成りぬ紅の帶

○　　　　　　　　　東平　渡邊梅子

端居して五尺鉢か手にあまる髮はら〳〵と青嵐吹く
○　東京　高橋千代子

ともすれば涙こぼるゝ錦着て歸らん君を待つ身なれども
○　備後　欧姫

三日月はまだ戀知らぬ少女子のいと眉のごと山の端に入る
○　小石川　植松みき子

青色のカーテンのかげに物思ふ少女のごとく白樺さく
○　東京　野口はるみ

みとりなる夏のを草の朝露をふむやもすそのはだざはりよき
○　橫濱　加藤花丸子

いたましくふみにじられしクローバにくれゆく春の哀ぞおぼゆる
○　日本橋　小林欧子

誰を愛し誰を嫉ふにあられども若葉の庭の君が御姿
○　大阪　ゆかり

ゆく春や君と詣づる初瀬寺咲けるぼたんの紅きもうれし
○　信州　六波羅千代子

辻占の聲やおぼろにきこゆなりしと〳〵とふる春雨の夜を
○　宮城　齋藤すみれ

髮梳ける君が腕のしろ〳〵と見ゆるも悲し初夏の朝
○　府中　大野不美子

人のよをわがよとぞする世なりせばいづこを人の世とはなさまし
○　東京　矢野美香子

故知らぬあつき涙のながるゝをうれしと云ひし乙女なりしが
○　神戸　白菊

翼あらば飛びゆかましき日ごとよごと隔てゝ思ふ君があたりに
○　長崎　蔦枝子

うらむには餘りにこひし戀ふるにはまたうらめしきはつこひの人
○　美作　信子

暗き路たどり〳〵てやう〳〵にみし光明さへ消えなんとする
○　小石川　田有喜子

一と度は母の御ひざにすれし子も今は浮世の義理に泣く身か
○　下谷　大上きく子

春となり我の素振の變りぬと杵屋の子等の口陰ぞする
○　朝鮮　須美子

春雨の窓を流るゝ花の香のそれより淡く甘き悲しみ
○　群馬　飯野たか子

夕暮れの鐘なるときにオルガンの音しまじりて春の風吹く
○　福山　松下滿龜子

美しと云はれても見など薄命のさびしさもなし醜くき我は
○　札幌　西照子

青柳の糸ならなくに我がせより送るたまづさくりかへしつゝ
○　東京　美耶古

雨の音にしばしの憂さをやる熱枕にとりて春の夜を寝む
○　大坂　田中とき子

春雨につく〴〵し折れば古りにける幼思出あたらしきかな
○　深川　山內たま

日和よし婆は法話に山寺へ蝶と連れゆく菜の花の路
○　大分　齋藤惠美子

緋牡丹に白き雨降る逝く春の甘き愁をさゝやくがごと
○　豐田　せい子

旅人がつかれし目もて見つめゐる繪馬堂古し春の風ふく

○　川越　吉田とも子

今となりてかへらぬその日かなしくて聲のかぎりをわれは泣けども

○　埼玉　清水たか子

午後の日に百日紅の花あかく映ゆ若き血汐の炎ゆるにも似て

○　牛込　西村しのぶ

桃割れの花簪も憎くからず加茂の岸ゆく京の舞姫

○　横濱　山内きん

春の日を戀ふまゝ吸ひ吸ひ倦きし瞳靜かに空を見張りぬ

○　小樽　市川千代

蠟燭のほのほの如き神經をそゝれりものを忘れかねつゝも

○　茨城　岩淵登眞子

夏來れば山時鳥音によし奈良の都の跡に鳴なり

○　東京　植村千代子

春の夕春雨のしと〳〵と降るその夕べ何處ともなく琴の音ぞする

○　芝　老沼由子

コトリ〳〵牛の車のゆるやかに音たてゝ過ぎぬ暮れ行く野路を

○　仙臺　春雨

若葉吹く五月の風にひろがへるのぼりのもとの幸多き家

○　靜岡　勝美あき子

山の霧木の葉に凝りて紫に雫す朝を啼く時鳥

○　瀧の川　山田水月

青き葉に眼をなげやれば五月雨の雫わびしきたそがれの窓

○　本郷　桂子

みやしろの軒端につどふ群鳩ののどけく映るみたらしの水

○　京橋　堺和濱子

とある夜は君を思ひて涙する頰になつかしビロードの襟

○　水戸　中根雅子

戸によりてうすらおぼえの母思ひ涙し居れば夕月いでぬ

○　明石　うすみどり

思ひつかれ小窓によれば木蓮の花しづかにも雨の暮れゆく

○　下總　櫻井よれ子

笛吹きておぼろ月夜を君待てば緑の風に若葉さゆらぐ

○　深川　なでしこ

櫻草二八をとめの戀に似て恥らひて咲く姿かわゆき

○　芝　夕紅葉

遠方の山ほの見えて逝く春の黄昏る野路を牛叱り行く

○　廣島　古田美津子

紅薔薇の角なる鉢に破れたる鷄卵の殼あり五月雨そゝぐ

○　米國　村越光子

しろがねのみづうみ光りさみどりのこずゑに淡き夕月のかげ

○　久留米　橋本歌女乃

初雷に恐れて走る小羊の如く可愛ゆき君が驚き

○　靜岡　成瀨滋子

美しき君とならびて今日も又柳くゞりぬ修善寺の宿

○　秋田　大坂光子

美くしきふりの袂を捕て嫁きし姉歸る朝を鶯啼きぬ

○　伯耆　里見久子

白砂に青き松生ゆ弓濱を遠目に美保の神鳩の飛ぶ



俳句

天

夕顏や紅筆すゝぐ化粧水　京都　武田靜子

評　餘情いともなつかし

地

梨に袋冠す園生や風薫る　愛媛　中島忠子

評　陣平など着てやあらん

人

湖晴れを勢田行く粟津幟かな　深川　佐野たま江

評　伊吹に一片の雲もなし

秀逸

毒石の日いきれやそこら咲く蘇　本所　大石たか子

評　昔は鬼など出でし

山吹や白兎飼ふ草の宿　横濱　大柴幹子

評　閑寂

時鳥なくや巖の名無草　東京　石川菊香

評　幽靜水滴たる

業平か忍び車や飛ぶ螢　千葉　泰よう子

評　水外山くらし

春の夜の月うすし五位孵る籔　三河　梅田美枝

評　著想にて採る

佳作

花菜中を雨に來し名所夕明り　小樽　高橋富美子

水底に光る寶珠や時鳥　東京　渡邊梅子

水雞なく田水あり又の迎灯が　小石川　石井妻木子

橋供養も一日天氣や夏柳　麹町　河越せい子

山容を句にす勝景春の風　豐橋　高木慶子

矢窓明けて風薫るなり天主閣　豐橋　平出靜子

象に乘りて上洛の使や春長閑　肥前　隈部芳子

山の端や一木の雲に時鳥　名古屋　乘松うら子

五月雨や香傘の主の訃を傳ふ　東京　關根ミヨ子

溪川の石青き上の若葉哉　名古屋　夕がほ

藥降る日を病葉の吹き散りて　能登　向井きみ枝

葉櫻や糸を煮る香に朝晴れて　下谷　大上菊子

詩趣多き松風裡時鳥のなく　四谷　中村想子

梭走り響に落つる椿かな　大和　神田伊庭野

風そよぐ蘆の葉搖れや夕立雲　横濱　有明照香

微風わたる青葉の庭や晝閑か　福岡　葉櫻

青梅や朝月白き草の庵　廣島　新見芳子

酒肆裏の草いきれ髪洗ひけり　芝　遠山久子
山吹や女住むなる冠木門　芝　早船たけ子
絵日傘や圓山わたり知辺あり　伊豫　河野きわ
餘花散るや春日燈籠の燭明し　廣島　近藤静子
火に投げし詩餘の秘密や蚊喰鳥　高知　北村美佐夫
菖蒲咲く水際紅浮く魚のあり　東京　木村公子
遅々と行く湖心の舟や雲の峰　神戸　水野八重
夜や眺荷身きに托す文のあり　横濱　清水もん
童顔や砂塵煙巻く馬車　茨城　今泉發子
時鳥飛んで行衛の峰の松　京都　長谷川まる子
梅子の歎まゐらすやお乳の人　越後　藤原ふじ
薫風や折り〳〵柱打つ簾　相模　池田とく子
卯の花や雨に侘びしき曾我の家　京都　舟木むこう
染め替へし去年の浴衣や夏隣　北海道　中村チナ
栗の花に微雨す橋の鋼臺灯る　小樽　高橋二三子
埴輪出し蛇山や草いきれ　芝區　遠山久子
社前近く百合の花踏む鹿の子かな　淺草　淨子
埴人形にこの里名あり桐の花　長崎　紫内侍
鍋家ありし驛路桐の花咲きて　神戸　山村香枝
夏近し灯まばらの廢れ驛　長野　上條さや子
林ぬけて牛走らすや青嵐　長崎　太田れき子
浮袋の裳すそ軽げや夏の風　日本　田中なを子
力石並ぶ郷社や風薫る　四谷　中村成子
窓際の竹薫風にそよぎけり　深川　高橋桃子
旅人の足早し雲の峯の立つ　東京　山崎テイ子

松の花散り込む池や晝の月　神戸　ともゑ
寛住むてふ池いや凄し五月雨　横濱　野﨑秀子
四つ手張る闇の綾瀬や飛ぶ螢　深川　増田雪嵩
夏草に白きくちなは眠りけり　赤阪　森野茶牛
江の螢飛び〳〵雨にさかりけり　越後　藤原好子
踏めば鳴く鶯張や風薫る　越後　藤原竹子
浦の庵水鶏遠音に聞ゆ里　茨城　岩瀬登良子
薫風や棉花にも似て匂ふもの　伊豫　越智なよ子
藥日の草ひん抜ける昔あり　淺草　正子
薫風や厩に吊せる籠の魚　牛込　鈴山廣子
まへ差しの櫛落したる清水かな　京都　元生留子
藥屋の看板ふるし燕　日本橋　吉野幾代
日に幾度保養散歩や暮れる　小樽　進藤淑子
橋畔や柳に昇る月涼し　福山　東天紅
春淺し鎖さしたる背戸の口　滋賀　片山きくの
夕顔の淋しく咲くや月淡し　群馬　飯野雪子
傾城の想淡くして明け易き　金澤　安川須美子
五月雨や烏羽玉に咲く白き花　福岡　橋本操
蟬鳴くや針のはこびの覺束な　伊豆　土屋いそ子
太文字の傘干す家や五月晴　府下　和泉なほ
抱籠や國事に忍ぶ京の宿　函館　若宮菊枝
筆鶴にも似たる君にして　下谷　山本芳子
主婦病みて草の邸や春の逝く　深川　清水すゑ
田植唄月出る頃をやまである　福岡　田口いれ
明けそむる谷間の村や時鳥　麹町　松井きよ子

誌友倶樂部



▲「面影の父に似たると聞く每にそと立ちて見ぬ姿見の前」の作者樣、貴女は父樣がいらつしやいませんですか、お察し申上ます、私の母樣も一年前の春佛の里の人となられました、幼き時より母の顔によく似てると人樣からいつて下さいますが、さまで氣にもかゝりませんでしたが今は貴女のお作の通りです、父にを、母にとせば、私の身の上と常に思ひ浮べて居ます、思ひあまつてこゝにうちあけ申します(琴子)

▲「悲劇十番」にものし給ひし醉藻樣の「妙子のこゝろ」「嫌ひてわけぢやありませんけど下宿の顔……」、玆まで讀み來つた私は堪へ〳〵し溜涙の一時に堰を切つて思はず雜誌の上に俯伏しました、私は斯うした親子の情には心から泣かされます、失戀者の憂愁の惱みにも同情せぬことは有りませんが、女の春を知らずに過しました私には、經驗が有りませんから、切ないお筆の跡を見て一掬同情の涙を灑ぎつゝも、冷靜になるにつれ、何故末とげられぬ戀をするのだらう、始に今少し注意をせぬのだらうと、心の性に囁きます、然しこれは私が無理かも知れません、戀は盲目とやら、思案の外とやら申しますから……、斯して戀を味ひ給ひし人が幸福か、知らで過せし方が幸福か、皆樣何れが幸福でせう?(神戸、白菊)

▲赤坂のすみれ樣、「花電車」おかきなすつたお方をね千代子樣とお思ひなさらなくつて?、どうしても私一高崇拜のお方のお筆つきと思ひます、それからね、皆樣「釣革物語」の澄子樣と、五月號に千代子樣のおかきになつた向陵の夜月の須磨子樣は、おなじお方ぢやないでせうか、次の間にて聲細々と讚美歌歌ひなすつたところなど、似よつてますわ、そして大藏省の誰樣、その他何々樣などから推しますと、釣革物語とお筆ね、そこでかねて皆樣のお問題となつて居る千代子樣の御本體は、○○樣ぢやないかとふと思ひつきました、皆樣如何?、向陵の夜月など、女のお筆にしちやあまり亂暴すぎますもの(淸凉)

▲東京府澁谷町御料地內東京農科大學は、どのくらゐの入學資格で、卒業後は何うなりますか、(すみれ)。——高等學校を卒業して後はいる所で、卒業後は農學士になります。

▲先日の新聞で一寸拜見いたしましたが、あの女子大學の敎育部の卒業生の中に、內藤千代子樣つて方がありましたが、若しやあの誌上でお目にかゝる千代子樣ではないでせうか、記者樣私達一生のお願ひですから、御面倒でせうが、お知らせ下さいましな、いつも千代子樣の事ですと、記者樣はあいまいな事ばかりおつしやつて、お茶をにごしてお出で遊ばしますが、今度はしつかりお敎へ下さいまし。(山吹散る窓にて二葉の名無草より)——今度はお茶をにごしません。全く別の方です。

▲宅では每年お雛樣かざりを致しますが、五人雛、順序がわかりませんので困つてゐます、どうぞ記者樣、お敎へなすつて下さいまし、(新潟うた子)、——五人雛の順序は下のやうに致します、向つて右より「謠」、「笛」、「小鼓」、「大鼓」、「太鼓」

▲身の程も顧みませず、御交際を願ひまして、ほ早速お手紙やら、繪葉書など下さいまして、ほんとに嬉しく拜見致しました、大方はお返し文も致しましたが、中には御住所の判明しませぬ爲め御返事差し上げる事の出來ないのもございますので、こゝでお禮を申し上げます、畑野薫樣S. Iinuma樣、御住所を何うか日本の文字にてお知らせ下さいませんか、何にか面白い本か雜誌をお送り致し度う御座いますから、私は都合上下記の處に移りましたから、其のおつもりにて御願ひ致します、(中村きみ子 Miss K. Nakamura.F 63 N. 10th St. Portland Ore. U. S. A.)

▲「悲劇十番」に「瀬衛道」をお書きになつた松平樣、さすがは文才秀で給ふ鏡子樣ですね、お筆のすゝみ樣の旨い事、葉さんのために澄子樣の御心中は如何に悲しいでせうか、お察し申します、猶また青柳樣の「涙の玉緖」、ほんとに小夜子樣の哀れなお言葉、御同情申します、(福岡縣

後藤文子)

▲刈藻樣の「骨肉の情」拜見致しまして、私は泣きました、繼母のもとにつらき思ひに泣く姿には、外事とはどうしても思はれません、誠に御同情致します、どうぞおさしつかへなくば御住所氏名をお知せ下さい、そして同じ思ひに泣き給ふ貴女樣、互に誌上でなりお手紙でなり共に慰さめられたうございます、(奈良縣磯城郡小西村字結崎、吉仲紫子)

▲皆樣、私は磯千鳥樣、萩香樣、玉露樣、紅梅樣のお作一番すきです、萩香樣のが久々に五月號に出ましたネ・ほんとにうれしうございました、又太田先生の繪物語も毎月樂しみですワ、(芦の里玉萩)

▲眼元かる、繪物語の湖畔の戀、には少からず同情致しました、(芦の里、玉萩)

▲「向陵の夜月」、ほんとに面白く拜見致しましてよ、丹波さんの「何が何よと導れて見たら」ちやお腹を抱へました、紀念祭にはあひにく雨がふりまして、姫方はさぞお困りでしたらう、校庭は柏の新綠で美しくなりましたのれ、此の頃の一高生は大變チビに見えますが、どうしてゞせう?、私が年をとつたせいでせうか、厭の春樣、私を誰れと思召して?、ホヽあてゝ御覽遊ばせ。(埼玉、みどり)

▲雨やなぎ樣の「人知れず泣く義理の仲垣」、アア實に何んと云ふおいたはしい事で御座いませう、敬太郎樣さへ居らつしやれば、あんな御苦勞も遊ばさぬでせうに……、ホントニ〱お察し致します、實に義理と云ふものはつらひ悲しいもので御座いますれ・私も其爲めに昨年生れたばかしの松子と共に夫と生わかれの有樣で御座いますの、雨やなぎ樣以後御交際遊ばしてちやうだいな(うさぎ)

▲「兄の病中に書きたる日記」をお書遊ばした木村柳子樣、このお作を拜讀しながら悲愁の涙をとゞめ得ませんでした、妾も貴孃と同樣先頃兄に逝れましたの、やはり胸の病で……、貴孃の御兄上樣もボートのチヤンでいらしたそうですネ・妾の兄もボートのチヤンでしたの、實に鬼をもひしぎさうな體格をしてたものが、あんな病に犯されやうとは……、前途に大なる望を抱いて、數年帝都に苦鬪せしも、何の甲斐もなくして・只一の木片に變ずるとは、唯々無情の風を恨むの外ありません、あゝ七月が來れば又も悲哀をひきおこす角帽の方に面會しなくてはと思ふと、今から悲しう御座います、噫懷かしき柳子樣よ、御身御自愛專一に……(吳兩城、季枝)

▲待ちに待つた「悲劇十番」も見ました、松平樣の「湧街道」、感心しました、何だか友人の處を其のまゝ書かれた樣な氣持で拜見いたしました私の友人に澄さんと同じやうな方がいらつしやいます、鏡子樣、ます〱御ふるひ遊ばせ、御許樣は女學世界の花でございます、(莊内にて浦和)

▲四月號に「逆境の所感」お出しなすつた番だみ樣、お懐う存じます、私もやつぱり貴女と同じ思ひに苦しみつゝある一人です、「貴女のあのお作見て私はどんなにお懐う思ひましたでせう、番だみ樣、世間の幸福な人達に我身の不幸うつたへたとて、どうして同情のしてくれ手がありませう、ですもの、同じ思ひの者が、お互に慰さめあつたら・どんなに力になるでせうと思ひます、是非御交際下さいませ、(葉さくら)

▲大和吉野の蘆邊みな子樣、私も吉野河畔に育つた者です、七八年前には六田から御地の馬車の通るのや、農林學校等眺めながら、下市町へ幾度となく往復致しました、あの清い〱吉野川を朝夕眺めてお出かと思ふと、お羨ましう、且つ我が大和の方故何となくおなつかしう存じます(東京、八重子)

▲近江愛知川のホワイトローズ樣つてどなた?貴女も矢張り鏡子樣お好き、嬉しいわ、私の住所ですか、あかしませうか、いや〱言はぬが花よ、ホヽ御地の對岸とだけ申上げて置きます、春の晨に、夏の夕べに、たゞ本誌をのみ此上なき慰藉としてわびしく暮す果敢なき乙女で御座いますのよ(琵琶湖西岸にて、露の玉より)

▲磯千鳥樣の「乙女心」、私あんなのが大好きよ以後どし〱とお出し下さい、其後お葉のゆくゑは遂に知れなかつたでせうか(彦子)

▲私は今湖南のある病院に、父と兄と二人這入つて居るのた腎病に來て居るのです、先日家から送つて呉れた增刊「悲劇十番」を讀みました、いづれも皆樣の悲慘ならざるは無きお話しの中に、殊に私の目を引いたのは、木村柳子樣の「兄の病中に書きたる日記」でした、我身に引きくらべてほんとうに同情に堪へません、そして私の毎日記けて居るのと同じ節がたくさん有るのには、思はず苦笑を禁じ得ぬのでありました、一番宜かつたのは松平鏡子さんの「湧街道」、昔の土佐繪にでもありさうな背景の中に、優しいそして美しいお澄さんが插草して居るのが見え

るようです、其外のもみな面白く拜見しました
それから千代子様、野菊様、さつぱりお見えになりませんが、如何遊ばしたのでせう、憧がれて居るのは私一人でもありますまいに（千どり）

▲お茶の水ほとりの榛子様、私は活花池の坊の師匠を職業にしては居りませんが、自分の樂みに教て上げたいと思ひます、お禮の御心配などは決していりません、序に茶の湯も如何です、併しすこし遠方です、それでよろしければ御住所をお知らせ下さい、直接にお話いたします、（大久保にて、玉泉）

▲悲劇十番號の雨やなき様のお作「人知れず泣く襟環の仲垣」を拜見して思はず袖をしぼりました、妾も雨やなき様と全く同じ境遇にある悲しい身の上でございます、誠に不束な妾ですが將來書面の御交際を願つて、悲しい事は何もかも打明けてお互慰め合つて戴きたう御座います何卒御承諾下すつて御住所お知下さいまし、（長野市南縣町乙卅五、古川にしき）

▲甚だ恐れ入りますが、人事興信所長内尾直二様の御住所お知らせ下さいまし、（在北米加州櫻花女）――京橋區弓町十七地です。

▲山紫水明の詩の都、まして嵯峨野のほとりはほんとに詩的でございますよ、でも浮世を捨てたあま法師か、自然をたつとぶ詩の眸なら知らぬこと、若き血の少女十八の身には、もうさびしくて淋しくてなりません、語るべき友も無く春雨のしと／＼と降る夜など、もうたまらなくつて、ほろ／＼とあつい泪が流れます、只友とも師ともなつくのは此の女學世界ばかり、皆様どうぞ御交際遊ばして下さいませ、花のような人達よりも、片田舍でさびしく暮していらつしやるやうな方と御交際して頂きたい、私の住所は去年の新年號にあります、（こま子）

▲私は何年此の方の女學世界愛讀者ですが、諸姉様方と御交際いたした事はありません、が毎月諸友倶樂部での御交際を見まして私も一寸顔を出して見ました、何卒之れからは妹だと思し召して御交際を願ひます、あの私は先日から草花や鳥の繪葉書をあつめてをりますが、皆様方の中でお持ちの方はお送り下さいな、御禮には當地の繪葉書一と組差し上げますから、そして小説お持ちの方は交換して讀みたいと思ひます、下名の處へ送つて下さいましたら、すぐ送ります、（富山縣高岡市新横町三四九、若森千吉方、土谷静枝）

▲自分事、逆境に沈み、悲歎の一節を和歌ならぬ腰折に綴じて本紙三月號に投じましたが、撰者の君より身に餘る嬉しき評言を頂きましたのみならず、博文館よりは有益なる書籍さへ御寄贈に預りました、私は此の嬉しき評言と御寄贈とによりて、社會一般から迄も自分の辨護に同情を得たかの様に、そして逆境に屈從しつゝある自分の心に一種の力を得たかの様に、何とも言へぬ嬉しき涙に咽びました、玆に一言を投じて感謝の意を表し、併せて御館滿堂の御健康を祝し、祝福の恒久ならんことを祈ります、（佐賀はがくれ）

▲私は、皆様が春の深山の霞の中からほのめく山櫻の紅味の様な氣分でゐらつしやゝ中に、人生の最も大なる悲劇に相遇しましたのは、つひ先つ頃で、その後は涙で袖の乾くひまもありませず、何となしにその鐵埋む幼い事が戀しくて三十五日中、墓に詣でゝその配所を恨み悲んでゐます、せめての心遣りに「悲劇十番」をと發行おそしと續けば、私の此の胸をうつして下さるお作は見當らず、小さい文机に倚つて涙潤れよと泣きました、（菊香）

▲木村貞子先生は學校創立になりましたでせうか、お手數作ら倶樂部誌上で委しく御住所をお知らせ下さい、お願ひ致します、（岡山、玉重）
――木村先生は、小石川區原町百十一番地に、櫻香女塾といふのを設けて居られます。

▲お茶の水のほとりにて榛子様、活花のお稽古なさりたく思召のよし、つきましては仰せのやうなことによい先生がございますから、お知らせ申ます、池の坊龍生派で、かの有名な家元吉村卓次郎先生のお弟子です、お處は本郷區駒込神明町三二八、鴻巣様と申します、この方は營利的になさるのではなく、御自分がお好で遊ばしていらつしやるのですから、極親切で、かつ丁寧にお教へ下さいます、會などはございませず、束脩などおとりになりません、たゞ月謝さへをさめればよいのですそれもほんのわづかですし、またお稽古にあがるのも別にきものなどきかへずともよく、實に手輕です、この奥様はまことに性質のさつぱりした、ごくおもしろいお心やすいかたで、教へて頂くのにも心地がよいのです、日は毎週木曜ですが、都合でいつでもよいのです、（本郷の女）

▲私にも千代子様のお筆があつたらと、いつもいつも思つて居ります、廿年の悲しき歴史思ひ起しては泣きますのよ、親しき友は北海の空に

ますらひ、ふりわけ髪の昔から變らじ變るまじと誓ひし友は、歸らぬ國へ旅立たれました、淋しき朝な夕なの慰は、只女學世界ばかりですもの、「悲劇十番」に、「妙子の心」お書き遊ばした醉蓮樣、御同情致します、私あれ拜見して泣きましたのよ、五月號の「向陵の夜月」ほんとにうまいのね、お書ひ遊ばせ、（羽前の國の片田舍にて、佐惠子）

▲仙臺の清子さん、お懷しいわ、私も故郷は仙臺よ、戀しい仙臺を二年前に去つて、一人田舍に寂しい生活を送つてゐます、北上川の黒い烟の蒸氣を見る時、仙臺のステーションに立つ姉の顔ら見えるやうです、もう田は蛙の世界で、人はこゝを命名して蛙の御城下といふ、苗も今はのびました、一日千秋の思で田植の來るをまつてゐます、（北上のほとり、操）

▲櫻子樣の、お尋ねあそばす池之坊のお師匠さんは、貴女樣のおのぞみ通りなごく質素なる先生がありますから、是非入らつしやいな、私明辨坂の者であります、御住所をハガキにてお知せ下さいますれば、早速上つてくはしき事を申上げます、（本鄕區湯島臺ノ九、江間八重子）

▲やよひの末に、四年はた五年の朝夕、したしみし學び屋に、お別れの皆樣、其後如何にお暮しでいらつしやいますか、私は田舍に來てより鄕なつかしく、通學の女生徒見れば、過ぎし日の思はれて泣きたくなつてしまひます、先日の土曜日は高女の遠行、別府の温泉巡りでございましたつて、「リボンお對に、カンザシお對になど、さわいだ事を思ひ出し、又とめぐり來ぬ學生時代が、どんなにかこひしうございました。（別府にて、月見草）

▲私は尼にならうと思ふのですが、學問はどの位な程度で、如何いふ手つゞきをしたらよろしいでせうか、御存じの方はあはれと思召して何卒くはしくお教しへ下さいまし（枯れ小草）

▲五月號詩友倶樂部にお見えになりました歌子樣、本鄕のさくら樣、私も淑女畫報の「三春行樂」といふのに、さう／＼別邸の主とありましたのね、私もきつと紅梅樣と見とめましたの「今日ばかりは好きな首飾りも指環も出來ないつて書いてありましたのね、御文才溢るゝ紅梅樣、永久にお振ひ遊ばせ、（近江愛知川、廷澤みゑ子）

▲皆樣、「悲劇十番」如何でした？、私醉蓮樣の「妙子のこゝろ」と、雨やなぎ樣の「人知れず泣く義理の中垣」とをよんだ時は、大變泣きましたわ、涙よわいのに私あんなかなしいものがだいすきですのよ、五月號の詩友倶樂部にお出し遊ばした近藤樣どうぞ御交際を（遠江にて、なでしこ）

▲埃及國 Guido Orfanelli. Mansourah. Egypte. 君は日本の淑女方と繪葉書の交換及び通信を希望せらる、お望の方は直接英文にて申込まれよ（碧郡鹽屋、山田）

▲私は昨年から本誌を唯一の友とし、此の奥深い信濃の山里に侘しく暮す田園の乙女でございますが、和歌と俳句が大好きで、姉上樣方の御高作を拜見致す度毎に胸をとゞろかして居ります、何卒姉上樣方、妾は今後御教導の榮を給はらん事切望いたします、又草花の繪葉書、お持ちの方は、私の美人繪葉書と交換を願ます、（長野縣下伊那郡生田村百四十一、北林喜賀子）

▲四谷の西川樣、奈良の櫻本樣、深澤樣、數ならぬ身にお情あふるゝお言葉賜はり、誠に／＼嬉しくお禮申上げます、春とは申しても、淋しき身には、花の色愛でるよりは、此の女學世界を見て諸姉樣方のお筆のあとやお情あるお方のお言葉を拜見致す方がどんなにうれしくございますか知れません、何卒みな樣お心あらばお交り下さいませ、神戸の白菊樣、血に鳴く思ひに悶え給ふは君ばかりではございません、お氣を靜め遊ばせ、私も神戸鹽屋に二年餘り居りましたもの、なつかしい御地に參つて淋しき一生を送り度いと思つて居ります、お差支なくば御住所を、（園世）

▲先年暮に草花の種子お惠み下さいました貴女樣、私あれから病氣にかゝつたり、又色々の事情のため、草花もまき得ず雜誌も手にしませんで過しました、其後上書が見えなくなりまして、お手紙差上げる事が出來ませんで失禮致して居ます、どうぞ誌上でお知らせ下さい、何かお送り致し度う存じます、種子は先達てまきましたから大きくなつて花の咲くのを待つて居ます、其節はお知らせ申します、（吳二川町四本通にて あやめ）

▲光子樣、私ほんとうに赤面致しましたの、ただ下手の横ずきなのですわ、戯寫のホーホケキョウもかたことまじりよ、でも以後はお心安くね、お遊びにいらして頂戴（倭文子）

▲野の露樣、おたづれの山下花子樣は、只今東京麻布區森元町二ノ二九に居らつしやいます、私妙な事から親しくなりましたのよ、野の露樣以後御交際下さいまし、（京都、露野）

新刊紹介

○日本お宮物語（巖谷小波著）由來日本は神國なれば、何を措きてもまづ神事を先きにすべきこと、是れ我國の風俗なり。されど八百萬の神々、それを齋きまつれる社祠の數いと多ければ、一々これを知ること難かりしに巖谷小波氏新たに筆を執りて、祭神の由來、社祠の模樣など、極めて平易に且つ精しく記し更に卷末に祭神別傳を添へたり。國民教育上疾くに出づべくして出でざりし書の特に氏の筆に依りて出でしは大に感謝すべし。敢て教育に志ある人士及び良家の家庭に薦む。（定價壹圓．文昌閣發行）

○俗謠集朝霧（太田三郎著）近頃江戸趣味の頻りに勃興せる折柄、謀れて傳說俗謠に造詣深き太田三郎氏新しき思想と新しき手腕とを以てよくこれを描寫せり。裝釘の意匠また頗る美しければ．趣味の養成として及び机邊の裝飾として、これを良家の家庭に薦む。（定價上下壹圓、博文館發行）

○リヤ王（文學博士坪內逍遙譯述）リヤ王は沙翁傑作の一にして、また最も日本趣味を帶びたる悲劇なり。坪內博士はこれを譯さる、是れ亦た沙翁研究に造詣深きこと世人の知悉する所なれば、今更喋々しく評するに及ばざらむ。殊に此度は筆致を一新して純然たる現代語を用ゐられたり。（定價壹圓參拾五錢．富山房發兌）

○新譯伊勢物語（太田水穗著）伊勢物語を現代語にて譯したるものなり。和歌國文を學ばんとするものには便宜なるべし。卷末に原文を添へたり。（定價五拾五錢、博信堂發行）

○こども聖書（童谷重常編）本書は世の少年少女をしてキリストの生涯及びその教訓を知らしめんが爲めに編述したるものなり。文體平易にして解し易く、且つ數葉の美しき寫眞銅版を挿入せり。（定價六拾錢、文華堂書房發行）

○普通裁縫學教科書（渡邊滋著）本書は專ら裁縫學校及び補習學校の教科書として著述せられたるものなるが、圖解も多く親切に細く記したれば、家庭用としても甚だ便利多かるべし。（定價上卷五拾錢、下卷五拾錢、東京裁縫女學校出版部發行）

○新體女子書翰文（內海月杖著）先づ女子の書くべき書翰文の作法を述べたり。次に候文及び言文一致の文例を出したれば、一般の女子の爲めに頗る便利なり。（定價九拾錢、文成社發兌）

○庭園の造り方　田中收吉編）本書は日本式の庭の造り方よりも寧ろ歐米流ガーデンの造り方を說きたるものにて、學理なども可なり加味したるは大に嬉し。（定價八拾錢、寶文館發兌）

○理相の生活、靜子の卷（羽仁もと子著）雜誌『婦人の友』に載せたるを、此度まとめて單行本としたるものなり。さまざまの婦人が樣々の境遇に遇ひたることを記す傍ら理想生活の教訓を含めたり。（定價三拾錢、婦人之友社發行）

○小說若草影　少女　植松美佐男著）讀んで面白き少女小說なり、綠蔭に此書を繙きたまへと諸嬢に薦む。（定價四拾錢、本誓院發行）

○草花の作り方（島谷直方著）四六版の小册子にして四季の草花の培養法より其趣味に至るまでその概略を記し、且つ數葉の寫眞版を添へたり。（定價四拾錢、子文社發行）

募集（六月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
（定刊數………十二册
内増刊四回…一、五、九、十一月價格同一）

郵税 一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（廾二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十五年五月廿三日印刷納本　第拾貳卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話 本局・
三百三番 二千六百二十番
千十八番 三千二百二十九番

湧くが如き喝采を得たり

演藝倶樂部

第壹卷第三號　((六月一日發行))　四六倍判二百八頁　正價卅錢郵税三錢

((脚本))

□老後……中村吉藏

□女滿仲……幸堂得知

□國境……田口掬汀

□新作所作事 鬼爭ひ……中村秋湖

市村座六月狂言中幕臺帳

・極彩色木版口繪・

木の音……武内桂舟筆

・コロタイプ版・

河合武雄の愛妾お珊……

・原色版・

五代目菊五郎の辨天小僧……

攝津大椽……

寫眞版

帝劇、自由劇場、文藝協會、土曜劇場、新富、明治、宮戸、蓬萊、三崎、東京、演伎、小團次、柳盛、舞踊研究會、米藏家庭、其他關西各劇場

□自由劇場印象記……國枝史郎

□文藝協會印象記……本間文雄

□表情の下手な俳優……桝本清

□ヂオゲネスの舞臺……川村花菱

□歌舞伎座革新論　杉贋阿彌

□再び老女物を論ず……坂元雪鳥

□續今昔色物語……岡鬼太郎

□活動寫眞の子役……吉山旭光

□俳神樂……田中煙亭

□落語 寢床……柳家小さん

□新富座評……小山内薫

□帝劇扼腕評……閑太郎

□五月の土曜劇場……一日生

□明治座劇評……吉井勇

□樂天會評判記……森曉紅

□長唄研究……中内蝶二

□新派劇の沿革……瀨戸半眠

□近松座見物……岡田翠雨

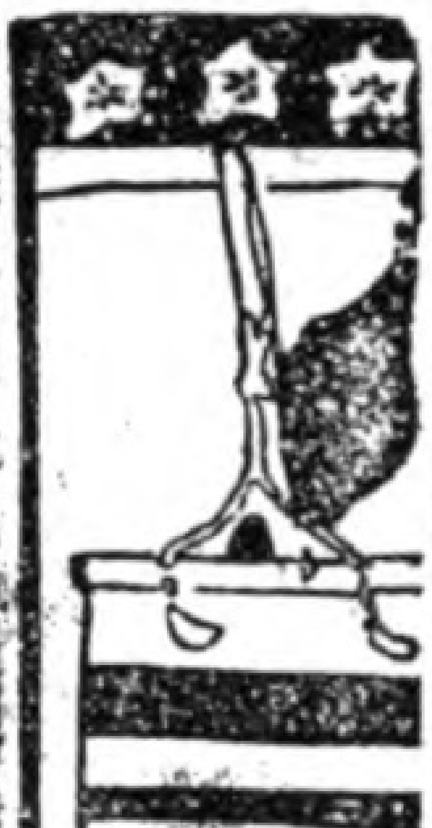
□湖畔の家見物記……九牛生

(東京日本橋本町三丁目)　博文館　(振替口座東京二四〇)

女（後付の一）

少年世界 第十八卷第九號 增刊

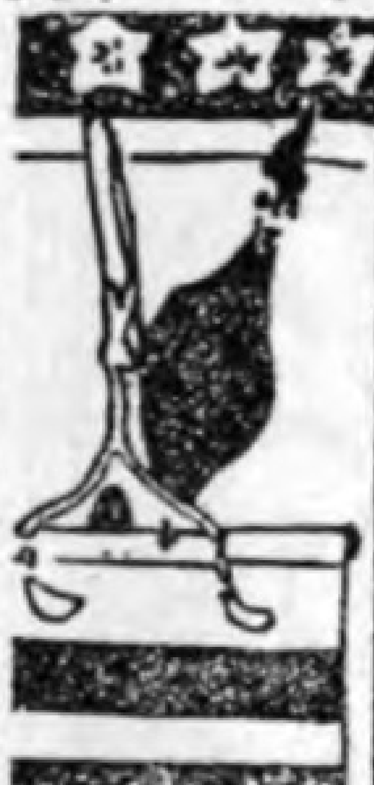
紙數いつもの二倍 六月十五日發行





創立廿五週年

日本一





紀念增刊豫告

菊判紙數二百五十八頁 口繪石版寫眞版豐富 ■本號限り 正價二十錢 郵税二錢

▽口繪△

日本五大噺 桃太郎(尾竹國觀)●花咲爺(尾竹竹波)●カチカチ山(中澤弘光)●猿蟹合戰(渡邊審也)●舌切雀(鏑木清方)

□神武天皇(平福百穗) □富士と少年(太田三郎) 日吉丸(杉浦非水)

〔油繪〕……乃木大將……岡野榮畫

- ●日本一(お伽劇)……巖谷小波
- ●少年の覺悟……長谷場文部大臣
- ●日本は農業國……横井博士
- ●歐行日記……菊地男爵
- ●天賦の才……辻男爵

□□十日に十里(題詠)桂公爵

□□日本一(題字)東郷大將

- ●眞の大畫家……中村不折
- ●日本語の連發……坪井博士
- ●英國の少年軍……乃木大將
- ●樺太の歷史……上田博士
- ●家庭の教訓……後藤男爵
- ●勉强時代……澁澤男爵
- ●健全なる身體……加藤博士
- ●太陽の出る國……大隈伯爵
- ●日本の神社……伊藤博士
- ●讀んだ本……坪内博士
- ●廢藩置縣……井上侯爵
- ●少年時代……森博士
- ●初めは法律……黒田清輝
- ●捕鳥部萬……萩野博士
- ●ハイカラ桃太郎……竹貫佳水
- ●古戰場……坪谷水哉
- ●賣らぬ寶……江見水蔭
- ●魔の海……木村小舟

東京 博文館 本町

女(後付の二)

岡田八千代女史編

閨秀小説十二篇

源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小説に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き盛観はあらず本書は現時の傑出せる作家より特に十二篇を撰びたるもの鋭敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つの感覺て紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし

（發兌元　東京本町　博文館）

洋裝四六判三百餘頁
裝幀瀟洒優美
定價金四拾五錢
郵税金六錢

故樋口一葉女史遺稿
幸田露伴君序

一葉全集

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四拾四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也。人生に對する僞らざる觀察誌也。亂調なりし當時の文壇裏面史也。增訂一葉全集は、從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此比類無き祕書と、女史が小說及隨筆の未だ公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩篇合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾無からん敢て薦む。

全二冊菊判上製總布美本

前編（日記及書簡文範）
紙數八百五十餘頁
正價壹圓七拾錢
小包料十二錢

後編（小說及隨筆）
紙數五百九十餘頁
正價壹圓貳拾錢
小包料十二錢

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

文學博士 箕作元八先生著

西洋史新話

全部凡拾册（隔月發行）

洋裝菊判美裝上製

地圖及密畫挿入

第一册 四版

ギリシアの撥亂

紙數二百餘頁 密畫挿入

地圖二枚コロタイプ版挿入

定價金五十五錢

郵稅八錢

第二册 三版

テーベの勃興

紙數二百三十八頁 密畫挿入

ギリシャ全圖一枚挿入

定價金五十五錢

郵稅八錢

スパルタ武威に驕り、ギリシャの天地は一時スパルタ人にあらざれば人にあらざる觀を呈せし事あり。此の時に於いて蹶然崛起し、其の制壓より脫却せるのみならず、進んで之と覇を爭はんとせるテーベの勃興史は、波瀾幾重、奇變續出、學ぶべき多くのものを示すと共に又小說的興味の横溢せるを見る。往來讀書界を騒がせし彼の「經國美談」は此の事實を小說にしくめるものにして、此の篇は又彼の經國美談の實錄とも稱し得べし。請ふ目次を一瞥せよ。而して、博士が懇到にして流暢なる叙述は、此の興味ある史實を、如何に愉快に讀者の前に描出し來れるかを思へ。特にその戰章に至りては、讀者期せずして、感興油然、血湧き肉躍りて、事實眞に小說よりも奇なるの歎あらずんばあらざるべし。

一、怨は深き親子塚の由來。
二、跛なる王となるスパルタの禍。
三、矮軀の王は大志の人。
四、將軍大膳頭となる遠征の途。
五、側面の海上威壓背後の離間。
六、ボイオチアの風土テーベ人の氣質。
七、驕王の梟梁を挫く密事の妨害。
八、亂槍一將を倒し舌鋒一將を葬る。

九、遠征の將を召還する本國の近愛。
十、會稽の恥を雪ぐクニドスの血の波。
十一、堅陣を突破るテーベ人の猛勇。
十二、スパルタ兵を悩ます半月の陣。
十三、兵戰の疲弊に乘ずる口舌の才。
十四、弱邦を蹂躙する强國の横車。
十五、晴天の霹靂議事堂を騒す。
十六、元兇免ぜられて名士戮せらる。

十七、祖國の悲運を慨く異境の邂逅、
十八、風雪を冒して故國に入る男士の一團
十九、陰謀將に成らんとして同志數に愕かさる
二十、形勢一夜に變ず劍の舞。
二十一、一將の妄擧大事を釀す。
二十二、偉傑エパミノンダス。（上）
二十三、偉傑エパミノンダス。（下）

發兌元 東京日本橋本町

新刊 第三册

國士の經綸

紙數四百七十餘頁 密畫挿入
彩色地圖（大判）壹枚挿入

定價 金八十錢
郵税 十錢

國士とは如何なるものか、抑も眞に邦國の爲めに計つて忠なる國士の經綸とは如何なるもの乎。之を學び聽かんと欲するものは、請ふ速に來りて此の書を繙け！
ギリシア史上に於いて、一大光輝を放てるテーベの國士エパミノンダスが、新興の國運を導いて、中原に覇を爭へる其の大業偉績は、此の書に於いて最も鮮明に最も詳細に、又最も壯快に記述せられたり。當時エパミノンダスの敵手として、スパルタに王アゲシラオスあり。一は純潔偉大の英雄、一は多智巧謀の梟雄、一は經綸をもつて功を成さんとし、一は權謀をもつて力を角せんとす。兩々對比、龍虎相爭ふて風雲天地を包むの觀あり。知らず、此の英雄は如何に此の梟雄と戰へる乎。其の經綸は如何に其の權謀と勝を競へる乎。兩雄卓上の白兵戰たるスパルタ會議は如何。戰史に一新紀元を開けるレウクトラの會戰は如何。壯烈なるスパルタ攻入は如何。
此の書は、苟も經世經國の志ある人士の必讀書たると同時に、特に、青年者のためには其の人格を磨くべき最も興味ある修養書として、必らず机上に備へざるべからざるものなり。

目次

振替東京二〇四〇番　博文館

博文館創業廿五週年記念發行

中學世界第十五卷第八號夏期增刊

世界一づくし

（六月十五日發行）

菊判紙數二百〇八頁
口繪石版寫眞版十數頁
正價廿錢
郵稅二錢

執筆者各專門博士十數
名。口繪挿畫寫
眞等頗る
豐富

いろ〱の文明の利器は、吾人の生存する地球の上に、かず〱の幸福を投げて吳れる。近來無線電信が發明されて、日本と亞米利加とが三一分間で談話を交換したと云ふことであるが、この『世界一づくし』には、凡そ世界一と名付けられるものゝすべてを一册に集めて輕便に御覽に入れるのであるから、これは蓋し無線電信以上である。世界を漫遊するには少くとも六ケ月の日數と數個の千兩箱とは要するのに、この一册さへあれば、世界の珍書と不思議の偉大とは座ながらにして見られるのである。即ち世界一の高山の話もあれば、大金持の話もある。大男も出れば、一寸法師も出る。動物園や植物園は無論のこと、何丁と云ふ程枝を擴げし最大木の記事もあれば、人間が五六人も乘れやうと云ふ世界の最大花も紹介する其外、大沙漠、最低地、最古の遺跡、最大の河等、枚擧すれば切りがない。

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇

東京眼科病院長 ドクトルメディチーネ 井上豐太郎君著

トラホーム豫防法

全一册

洋裝四六判 紙數二百二十頁

口繪（石版彩色刷 三葉）

正價三十錢 郵稅六錢

トラホームは一種の恐るべき傳染病で、若し其治療を誤る時は、思はぬ大事を惹起さぬとも限らぬ。それには何よりも早期の診斷が肝要である。處が素人は勿論假令醫師でも經驗が乏しいと、往々誤診を下す場合がある。本書の著者は斯界の大家で、よく懇切なる用意を以て、本病の豫防法を說き、且つ特に本病經過に伴ふ眼瞼變化の狀を、一々精巧比なき圖面を以て示すもの新工夫を加味し、素人と雖も容易に其診斷が出來る。決して誇張でも何でもない。少しく衛生思想のある家庭は、恐らくは此書を繼子扱ひせぬことであらう。

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替…東京二百四十番

女（後付の七）

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.

女學世界 第拾貳卷第八號 (毎月一回廿三日印刷納本)

明治四十五年五月廿三日印刷納本

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版92
明治45年5月(第12巻第7号)、6月(第12巻第8号)

2011年7月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4005-3　C3321